岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第512集

山の神遺跡・宮沢原下遺跡第２次
発掘調査報告書

国営いさわ南部農地整備事業関連遺跡発掘調査

２００８

農林水産省東北農政局
いさわ南部農地整備事業所

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

山の神遺跡・宮沢原下遺跡第２次
発掘調査報告書

国営いさわ南部農地整備事業関連遺跡発掘調査

胆沢扇状地

山の神遺跡全景

2 遺跡周辺の遠景

宮沢原下遺跡全景

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、国営いさわ南部農地整備事業に関連して、平成18年度に発掘調査を実施した山の神遺跡と宮沢原下遺跡の調査成果をまとめたものです。調査の結果、いずれも縄文時代の狩り場を主体とする遺跡であることが確認され、往時の社会状況を考える上での貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年２月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　武田牧雄

例　　言

1　本報告書は、岩手県奥州市胆沢区若柳字山の神地内に所在する山の神遺跡の発掘調査及び岩手県奥州市胆沢区若柳字宮沢原地内に所在する宮沢原下遺跡の第２次発掘調査の結果を収録したものである。

2　岩手県遺跡登録台帳における遺跡番号・調査略号は次のとおりである。

山の神遺跡　　遺跡番号：ＮＥ24－2137／遺跡略号：ＹＫ－06

宮沢原下遺跡　遺跡番号：ＮＥ23－2347／遺跡略号：ＭＨＳ－06

3　本遺跡の発掘調査は、国営いさわ南部農地整備事業に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

4　野外調査及び室内整理期間、調査面積、担当者は次のとおりである。

山の神遺跡

野外調査　平成18年４月７日～６月12日　39,169㎡　濱田　宏・吉田泰治・八木勝枝・菊池昌彦・藤原大輔

室内整理　平成19年１月４日～３月31日　吉田泰治

宮沢原下遺跡　第２次調査

野外調査　平成18年５月24日～８月24日　36,855㎡　濱田　宏・吉田泰治・八木勝枝・菊池昌彦・藤原大輔

室内整理　平成18年11月１日～平成19年３月31日　濱田　宏・吉田泰治・菊池昌彦

5　基準点測量は、山の神遺跡が興国設計株式会社、宮沢原下遺跡が株式会社南部測量設計、航空写真は両遺跡とも東邦航空株式会社に委託した。

6　本報告書は室内整理担当者が下記の分担で執筆した。Ⅱ・Ⅳ章については各文末に執筆者を明示した。

Ⅰ－農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所、Ⅱ・Ⅳ－濱田・吉田・菊池、Ⅲ－吉田

7　分析鑑定は次の機関に委託した。

火山灰分析 …… 株式会社京都フィッショントラック（宮沢原下遺跡）

石質鑑定 …… 花崗岩研究会（山の神遺跡・宮沢原下遺跡）

金属製品保存処理 … 岩手県立博物館文化財科学（宮沢原下遺跡）

8　発掘調査では、農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所・奥州市教育委員会ならびに遺跡周辺住民の方々より多大なるご協力を得た。

9　発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の方々のご指導･ご協力をいただいた。（順不同･敬称略）

佐々木いく子・朴沢志津江（奥州市教育委員会）、依田恵美子

神原雄一郎（盛岡市教育委員会文化課）

10　野外調査では奥州市・平泉町の作業員の方々にご協力をいただいた。

11　土層の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）に準拠した。

12　本報告書で使用した地形図は国土地理院発行のもので、図毎に図幅名を記している。

13　本遺跡本調査の結果は、先に『宮沢原下遺跡第２次調査現地公開資料』（平成18年６月４日）、『平成18年度発掘調査報告書』第505集（平成18年３月31日）において発表しているが、本書の内容が優先するものである。

14　本遺跡の出土遺物及び諸記録類は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2

1　遺跡の位置 …… 2
（1）山の神遺跡 …… 2
（2）宮沢原下遺跡 …… 2

2　地形・地質 …… 4

3　周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　山の神遺跡 …… 11

1　基本層序 …… 11

2　野外調査と室内整理 …… 11
（1）野外調査 …… 11
（2）室内整理 …… 15

3　検出遺構と出土遺物 …… 16
（1）陥し穴状遺構 …… 16
（2）土　　坑 …… 27
（3）焼土遺構 …… 31
（4）出土遺物 …… 31

4　ま　と　め …… 34

Ⅳ　宮沢原下遺跡第2次調査 …… 51

1　基本層序 …… 51

2　野外調査と室内整理 …… 51
（1）野外調査 …… 51
（2）室内整理 …… 54

3　検出遺構と出土遺物 …… 54
（1）調査の概要 …… 54
（2）土　　坑 …… 55
（3）掘立柱建物跡 …… 90
（4）溝　　跡 …… 92
（5）柱穴群 …… 92
（6）出土遺物 …… 92

4　自然科学分析 …… 99

5　ま　と　め …… 107
（1）土坑について …… 107
（2）その他の遺構について …… 111

報告書抄録 …… 137

表 目 次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 7

＜山の神遺跡＞
第２表　基準杭・区画割付杭一覧表 …… 12
第３表　遺構名変更表 …… 12
第４表　陥し穴状遺構一覧表 …… 33
第５表　土坑一覧表 …… 34
第６表　縄文土器観察表 …… 34
第７表　石器観察表 …… 34

＜宮沢原下遺跡第２次調査＞
第８表　遺物観察表 …… 99
第９表　土坑観察表 ……108

図版目次

第１図　岩手県全図と遺跡位置 …… 3
第２図　２遺跡の位置 …… 3
第３図　地形図 …… 4
第４図　周辺の遺跡分布図 …… 6

＜山の神遺跡＞
第５図　基本層序 …… 11
第６図　グリッド配置図・調査区図 …… 13
第７図　遺構配置図 …… 14
第８図　１～４号陥し穴状遺構 …… 17
第９図　５～８号陥し穴状遺構 …… 19
第10図　９～13号陥し穴状遺構 …… 21
第11図　14～18号陥し穴状遺構 …… 24
第12図　19～21号陥し穴状遺構 …… 26
第13図　１～６号土坑 …… 28
第14図　７～９号土坑 …… 30
第15図　１号焼土遺構 …… 31
第16図　出土遺物 …… 32
第17図　陥し穴状遺構の軸方向と長径 …… 35

＜宮沢原下遺跡第２次調査＞
第18図　基本層序 …… 51
第19図　調査範囲と周辺の地形 …… 52
第20図　遺構配置図 …… 55
第21図　１～５号土坑 …… 57
第22図　６～９号土坑 …… 59
第23図　10～14号土坑 …… 61
第24図　15～20号土坑 …… 64
第25図　21～24号土坑 …… 67
第26図　25～28号土坑 …… 69
第27図　29～33号土坑 …… 71
第28図　34～38号土坑 …… 73
第29図　39～43号土坑 …… 76
第30図　44～48号土坑 …… 79
第31図　49～52号土坑 …… 81
第32図　53～57号土坑 …… 85
第33図　58～62号土坑 …… 87
第34図　63～66号土坑 …… 89
第35図　１・２号掘立柱建物跡 …… 91
第36図　１～３号溝跡 …… 93
第37図　４号溝跡 …… 94
第38図　柱穴群 …… 95
第39図　出土遺物（１） …… 97
第40図　出土遺物（２） …… 98
第41図　土坑分布図 ……110

写真図版目次

＜山の神遺跡＞

写真図版１　Ａ・Ｂ区調査前の状況 …… 39
写真図版２　Ｃ区調査前の状況・土層観察地点 … 40
写真図版３　１～４号陥し穴状遺構 …… 41
写真図版４　５・６・10号陥し穴状遺構ほか …… 42
写真図版５　７～９・11号陥し穴状遺構 …… 43
写真図版６　12～15号陥し穴状遺構 …… 44
写真図版７　16～19号陥し穴状遺構 …… 45
写真図版８　20・21号陥し穴状遺構･1･2号土坑 … 46
写真図版９　３～６号土坑 …… 47
写真図版10　７～９号土坑・１号焼土遺構 …… 48
写真図版11　出土遺物 …… 49

＜宮沢原下遺跡第２次調査＞

写真図版12　調査前の状況と基本層序 ……113
写真図版13　１～４号土坑 ……114
写真図版14　５～８号土坑 ……115
写真図版15　９～12号土坑 ……116
写真図版16　13～16号土坑 ……117
写真図版17　17～20号土坑 ……118
写真図版18　21～24号土坑 ……119
写真図版19　25～28号土坑 ……120
写真図版20　29～32号土坑 ……121
写真図版21　33～36号土坑 ……122
写真図版22　37～40号土坑 ……123
写真図版23　41～44号土坑 ……124
写真図版24　45～48号土坑 ……125
写真図版25　49～52号土坑 ……126
写真図版26　53～56号土坑 ……127
写真図版27　57～60号土坑 ……128
写真図版28　61～64号土坑 ……129
写真図版29　65・66号土坑・１号掘立柱建物跡 …130
写真図版30　２号掘立柱建物跡・１号溝跡 ……131
写真図版31　２～４号溝跡 ……132
写真図版32　出土遺物（１） ……133
写真図版33　出土遺物（２） ……134

Ⅰ　発掘調査に至る経過

国営いさわ南部農地整備事業実施地区は、岩手県の西南部に位置し、胆沢川から北上川にかけての扇状地の右辺部にあり、標高110～210mの段丘地形を呈している。

この地区の農業は、水田を主体とした経営により発展してきたものの、所有耕地が分散し区画形状は未整備もしくは昭和30年代に整備された10ａ区画がほとんどで、かんがい用水不足に加え用排水路も未整備なことから、農業の近代化が図れないまま生産性の低い農業経営を余儀なくされている。

このため、農用地の効率的利用と労働生産性の高い農業経営の展開が可能な生産基盤を形成するため、国営かんがい排水事業により基幹的な用排水施設を整備し、本事業では既耕地を整備再編する区画整理1,089haと地目変換による農地造成11haの地域を一体的に施工し、併せて担い手への農地利用の集積による経営規模の拡大と経営の合理化を図るとともに、土地利用の整序化を通し農業の振興を基幹として本地域の活性化に資することを目的に、事業を進めてきた。

事業実施にあたっては、埋蔵文化財包蔵地の所在等の事前調査が必要なことから、岩手県教育委員会に分布調査を依頼したところであるが、当事業地区は当初事業計画からの南部地域に、平成16年度の事業計画変更により西部地域が取り込まれたことから、二度分布調査を実施し平成８年度に実施した南部地域より「上中沢Ⅰ遺跡」ほか29遺跡が確認され、その後、平成15年度に実施した西部地域より「山の神遺跡」ほか６遺跡が確認された。

その結果に基づいて岩手県教育委員会は東北農政局いさわ南部農地整備事業所及び財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと協議を行い、宮沢原下ほか３遺跡の発掘調査について、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの平成18年度の受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会教育長及び東北農政局いさわ南部農地整備事業所長並び財団法人岩手県文化振興事業団理事長は平成18年度事業について、平成18年３月17日付けにて「平成18年度埋蔵文化財包蔵地発掘調査基本協定」を締結した。

上記評定に基づき、東北農政局いさわ南部農地整備事業所長と財団法人岩手県文化振興事業団理事長は平成18年４月３日付けにて「委託契約」を締結のうえ宮沢原下ほか２遺跡について発掘調査をすることとなったものである。

（農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の位置

山の神遺跡、宮沢原下遺跡ともに奥州市胆沢区に位置し、奥羽山脈の裾野を要として広がる胆沢扇状地の中にある。遺跡のある奥州市胆沢区は、岩手県の南西部に位置し、もともとは胆沢町であったが、平成18年に周辺の江刺市、水沢市、前沢町、衣川村と合併し奥州市胆沢区となった。胆沢区の西方には奥羽山脈が広がり、北西には焼石岳（1,547m）、西から南西にかけては笹森山（1,085m）、桑原山（1,126m）、大薊山（1,165 m）が望まれ、東方には胆沢川によって形成された胆沢扇状地と呼ばれる扇状の河成段丘が広がる。

胆沢扇状地は県内有数の米作地帯である。元和３（1617）年には寿安堰や、茂井羅堰などの灌漑事業により水田への水の供給が進んだが、農民による水争いはその後も絶えなかった。そこで昭和28（1953）年には石淵ダムが建設され、大規模な貯水が可能になり、昭和34（1959）年には若柳地区に円筒分水工が作られ、寿安幹線用水路と茂井羅幹線用水路の両方に公平に水を分配できるようになった。平成18年現在は、農業用水や生活用水のさらなる確保を目指し、現在の石淵ダムの地点に胆沢ダムを建設中である。

胆沢扇状地にはエグネと呼ばれる屋敷林を持つ家屋が点在し、典型的な散村の景観が見られる。また西方には温泉施設やコテージ、スキー場も整備され、リゾート地としての観光開発も行われている。

（1）山の神遺跡

山の神遺跡は、北緯39度６分58秒、東経141度１分56秒、ＪＲ東北本線陸中折居駅の西方約８㎞に位置し、胆沢扇状地の中央付近に東西に広がる堀切段丘と呼ばれる部分にある。調査以前の状況は水田、畑地、牧草地、山林であった。

調査区の標高は約144～151ｍで東方にゆるやかに下がっていて、段丘面に沿うようにほぼ東西に横長に延びている。調査区の総面積は36,369ｍである。調査区南部には東西方向に小規模な段丘崖が走る。その北側には用水路が存在するが、これに沿うように旧沢跡が確認された。さらに調査区北側には大規模な段丘崖が存在している。

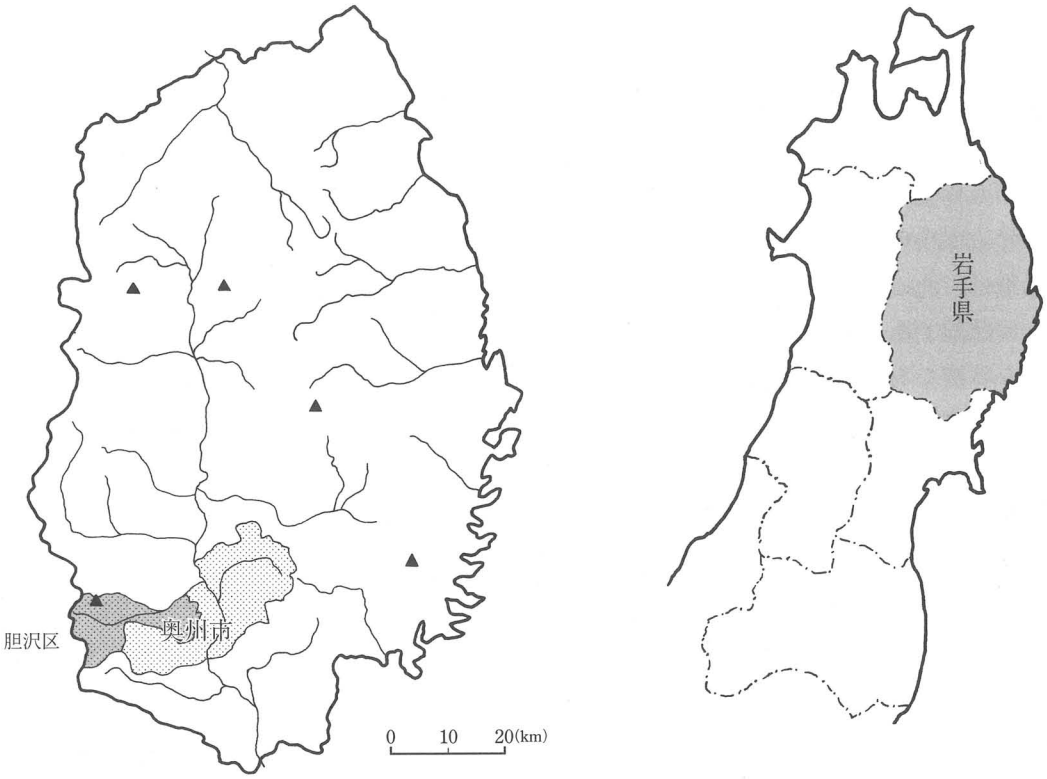
なお調査区の中心部には「与四郎溜池」とよばれる灌漑用の溜め池がある。この溜め池は江戸時代初期にはすでに使われていたという記録が残っており、現在も使われているものである。天水の他に、穴山堰という水路からの流水も入っている。「与四郎」という人名の由来は定かではない。

（2）宮沢原下遺跡

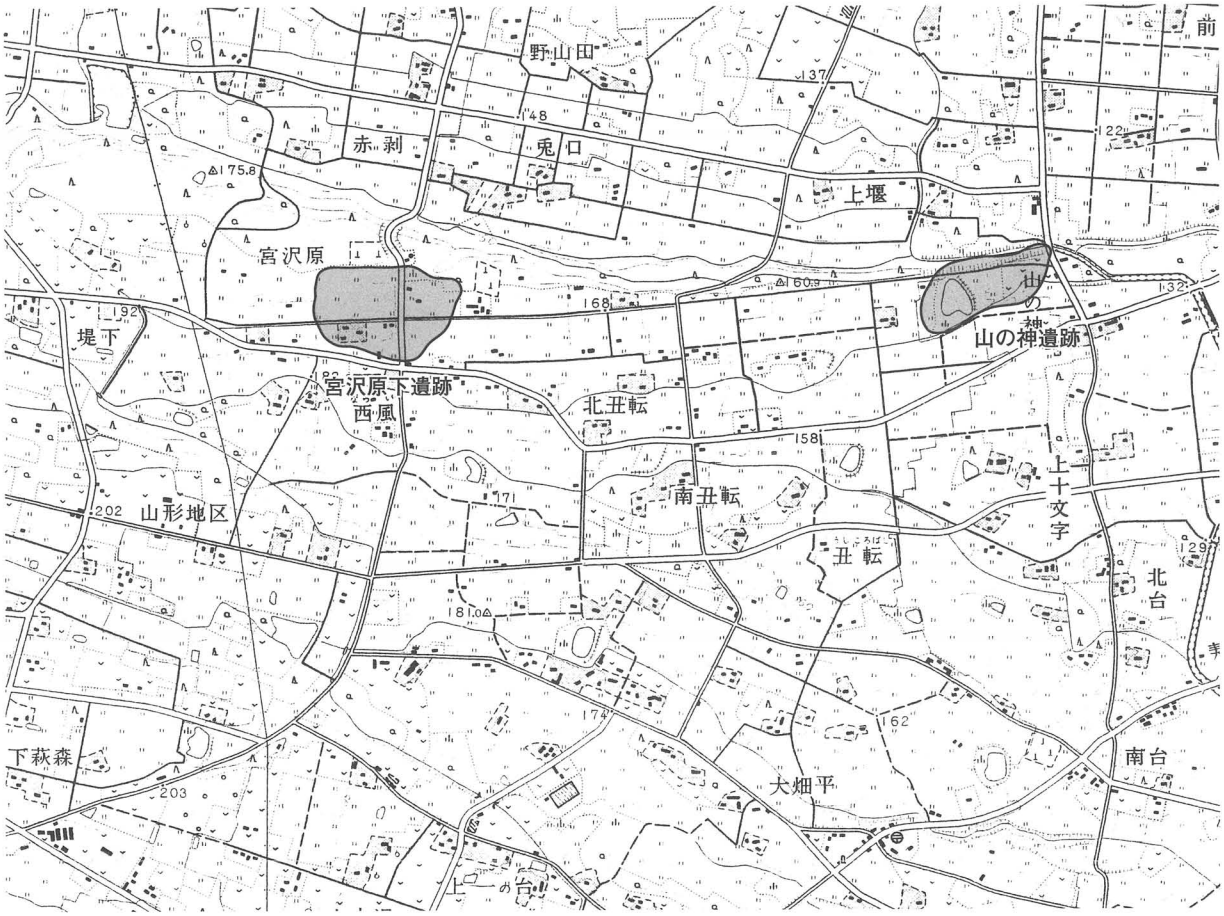
山の神遺跡は、北緯39度６分54秒、東経141度０分45秒、ＪＲ東北本線陸中折居駅の西方約10㎞に位置し、山の神遺跡と同様、堀切段丘と呼ばれる部分に段丘面に沿うように位置している。本遺跡は山の神遺跡より２㎞ほど西方で、扇状地の上流に位置する。調査以前の状況は水田、畑地、牧草地であった。

調査区の標高は約175～180ｍで東方にゆるやかに下っている。ここも調査区の北側に、山の神遺跡と同じ面の段丘崖が存在する。

平成17年度は町道の西側を調査し、陥し穴208基、焼土１基、性格不明遺構２基を確認した。18年度は第２次調査にあたり、町道の東側 34,855㎡を調査した。



第１図　岩手県全図と遺跡位置



第２図　２遺跡の位置（1：25,000　供養塚）

2　地形・地質

東北地方を縦断する奥羽山脈は、中新生以降のグリーンタフ変動によって形成され、新第三系中新統及び火山岩類を主体としている。形成期が比較的新しく、河川は急流が多いため、この山脈に源を持つ北上川の西側支流には多量の土砂が供給された。したがって中流域西岸においては、胆沢扇状地をはじめとする大小の堆積地形が発達し、広く平野部を形成している。

胆沢扇状地は、北は胆沢川、南は北股川、衣川に挟まれ、西の胆沢川上流、市野々付近を頂点とする典型的な扇状地である。また、南から北に向かって新期の河岸段丘が配列する、傾斜扇状地であることが大きな特徴である。

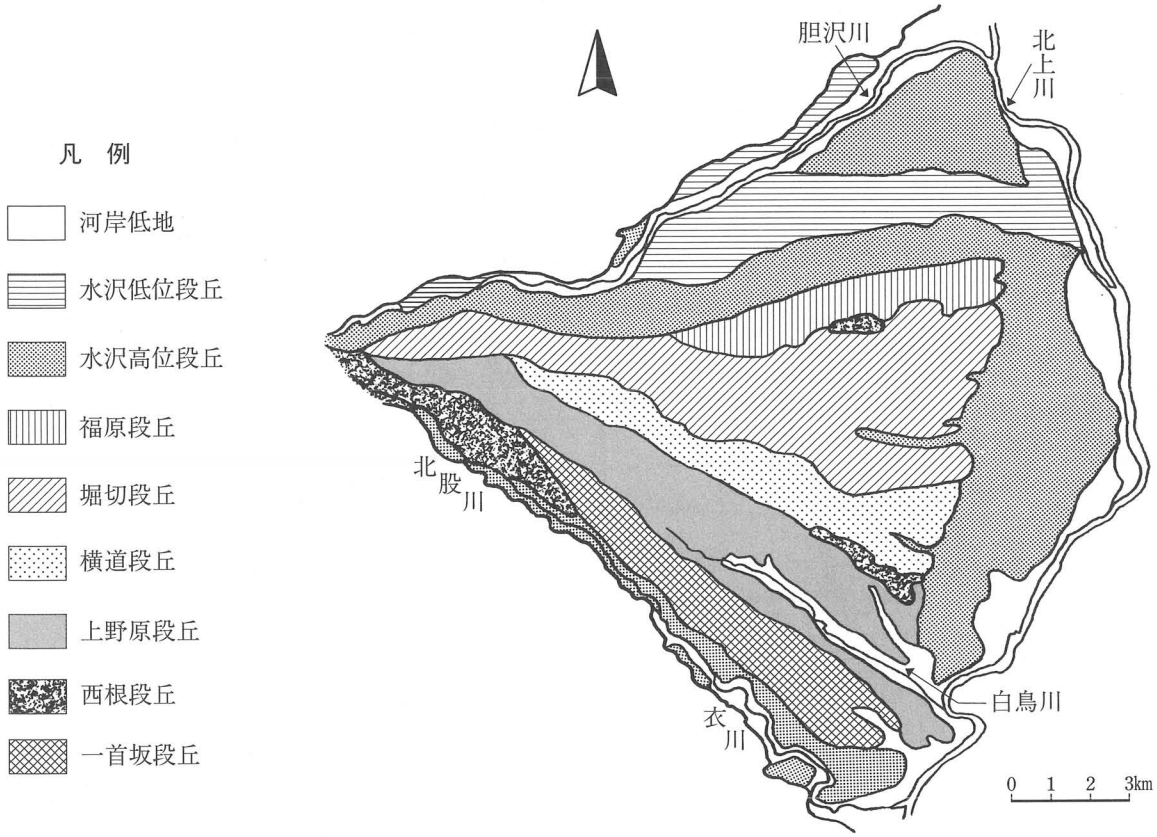
河岸段丘は、高位から一首坂段丘、西根段丘、胆沢段丘、水沢段丘、河岸低地に大別される。

一首坂段丘は扇状地南端に発達し、南東方向に標高を減じ、ゆるやかに傾斜している。

西根段丘は一首坂段丘よりも北股川上流に位置するが、浸食を受けているため一首坂段丘よりも新期のものである。低位段丘の中に残丘として分布している所もある。

胆沢段丘は高位から上野原段丘（250～80m）、横道段丘（200～80m）、堀切段丘（240～70m）、福原段丘（130～60m）に区分される。これらの段丘は南から北に向かって配列し、いずれもほぼ北東方向に標高を減じている。これらの段丘の中では堀切段丘が特に発達し、最も広く分布している。山の神遺跡、宮沢原下遺跡はともに堀切段丘の縁辺部にあり、宮沢原下遺跡が山の神遺跡よりも段丘面の高い標高（段丘の上部）に位置する。

水沢段丘は扇状地北端及び北上川周辺に分布し、水沢高位段丘（190～40m）、水沢低位段丘（120～38m）に区分される。水沢高位段丘は胆沢川、北股川、北上川の各河川に沿うように分布するが、特



第3図　地形図

に扇状地の扇端部に広く分布している。これは北上川の氾濫により扇端部が序々に削り取られたためである。水沢低位段丘は胆沢川の中流～下流の両岸に分布する。河岸低地は胆沢川の下流の両岸、北上川の両岸に分布する。

また、胆沢扇状地の地質を見ると、奥羽山脈をなす新第三系中新統よりも新しい、新第三鮮新統の大平層が段丘面の堆積物基盤として広く分布している。堆積土には奥羽山脈にある焼石岳や栗駒山付近から供給された火山灰層が厚く堆積し、段丘を成している。（菊池）

3　周辺の遺跡

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の平成18年３月31日現在のまとめによると、奥州市には1,069ヶ所の遺跡があり、このうち胆沢区は第４図、第１表の185ヶ所の遺跡が登録されている。この登録をもとに当遺跡周辺の遺跡について概観することとする。

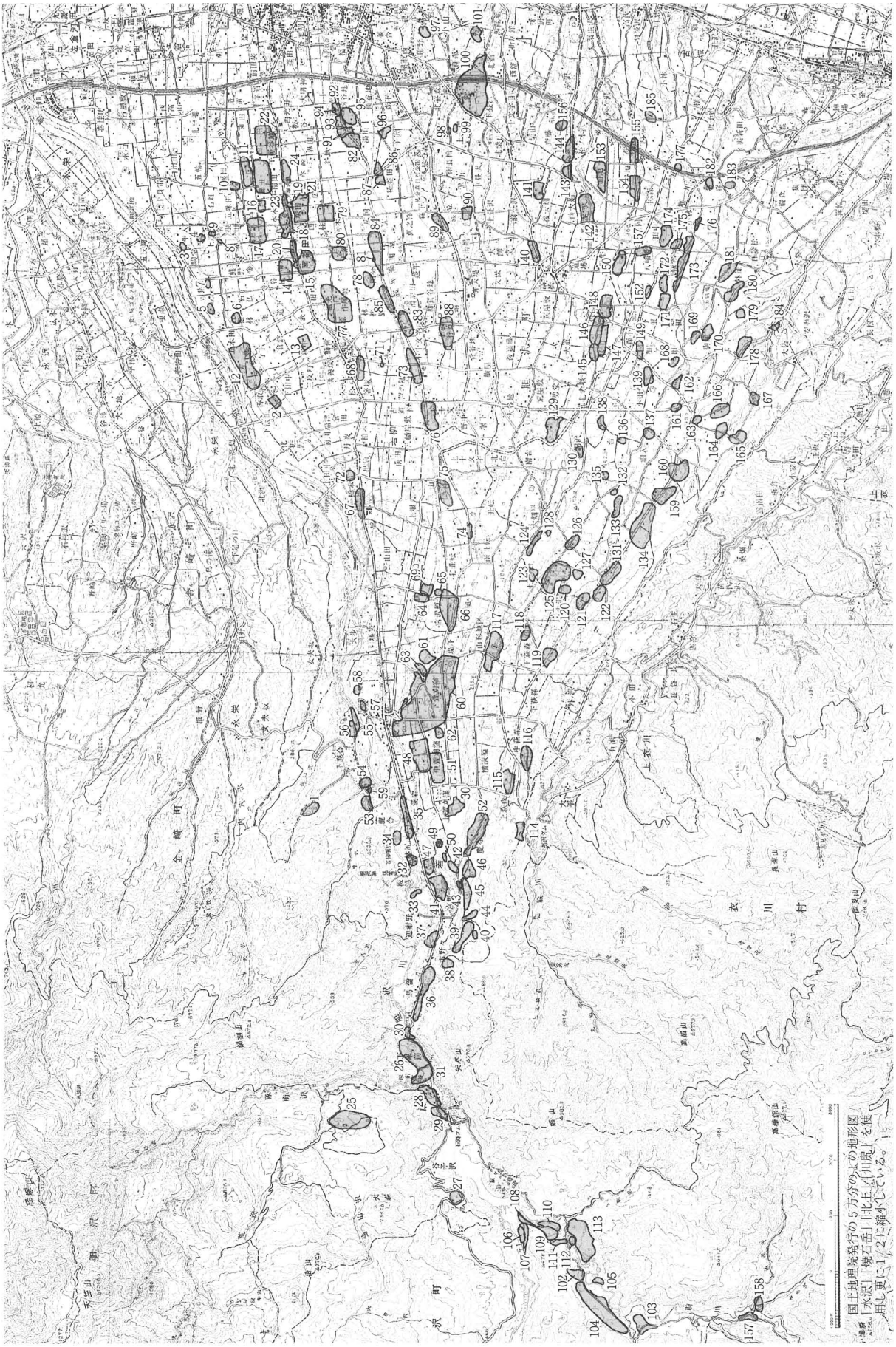
胆沢区において旧石器時代の遺跡は上萩森遺跡の１ヶ所で、石刃技法のⅡａ層とそれ以前の２万7000年前に営まれたとされるⅡｂ層の２枚の文化層が確認された。このほか、当センターが平成15年度に調査した二の台長根遺跡からも上萩森遺跡のⅡｂ層と同じと考えられる層から石器が出土している。また、山の神遺跡からは1965年に石刃が１点表面採集されている。

縄文早期の土器が出土するとされている遺跡は７ヶ所であり、主に胆沢扇状地の扇頂付近、若柳、南都田地区に分布する。前半の土器は山の神、宮沢原下遺跡からそれぞれ大寺式、貝殻文土器が出土している。中葉は尼坂遺跡から素山上層式規木上層式、梨木畑式併行、吹切沢式の土器が、後半は大清水上、山の神、宮沢原下遺跡から表裏の貝殻条痕文土器が、最末期は山の神、宮沢原下遺跡から繊維が少なく器表のみ単一縄文の土器が出土している。

縄文前期の遺跡は25ヶ所であり、早期の分布地域の他、小山地区にも分布する。東側の南笹森、小田切遺跡からは前葉の大木１式土器が出土している。若柳地区から南都田地区に連なる地域に位置する尼坂遺跡からは上川名Ⅱ式土器と大木４～５式、宮沢原遺跡からは大木２・４・６式、浅野遺跡からは大木１・５・６式、萱刈窪遺跡からは大木４～６式が出土しており、この地域の集落間の交流が窺える。

縄文中期の遺跡は23ヶ所である。胆沢扇状地の扇央及び扇頂より西の地域にも分布するのが特徴的である。若柳地区の浅野遺跡は大木７ｂ式を中心とするが８ａ式で途絶えており、８ａ式は小山地区堀切面の念仏塚、恩俗長根、船戸遺跡などから出土する。扇頂に近い宮沢原遺跡は大木８式から後半の９・10式まで出土し、付近の十三軒遺跡からは大木10式が出土する。扇央の堀切面に乗る北赤堰遺跡からは他に例のない穴のある土器が出土している。

縄文後期の遺跡は９ヶ所、晩期の遺跡は12ヶ所であり、どちらも扇頂付近に集中している。後期の赤剥、南中沢遺跡からは後期前半の称名寺～堀内Ⅰ・Ⅱ式、中ごろの加曾利Ｂ式併行期、後半の安行Ⅰ・Ⅱ式併行期の土器が出土する。後期に続いて赤剥遺跡は晩期前半の大洞Ｂ、ＢＣ、Ｃ１、Ｃ２までの出土が主であるがその後の遺物は少なく、反対に南中沢遺跡は晩期後半の大洞Ａ式からの遺物が多い。これは集落の中心が移動したことを示すとも考えられている。大清水上遺跡からは後半以降の大洞Ａ、Ａ′式の土器、扇頂より西側の下嵐江Ⅰ遺跡からは晩期中ごろの独鈷石が出土している。また、現宮沢原遺跡内の旧宮沢原Ｃ遺跡において、環状列石及び後期の門前式土器が確認されたという記録があるが（胆沢町1971）、これは配石遺構及び門前二類土器併行の土器であり、遺跡については中期末～後期初頭に営まれたとする論考がある（佐々木1987）。



第4図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡一覧

No.	遺　跡　名	種　　別	時　代	遺構・遺物	所　在　地
1	岳山	散布地	縄文・古代	縄文土器（後・晩期）、土師器	胆沢区若柳字下鹿合
2	香取根館	城館跡	中世	土塁、堀	胆沢区若柳字新里
3	蝦夷塚古墳	古墳	奈良	土師器、須恵器、マウンド	胆沢区南都田字駒堂
4	小姓堂	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字駒堂
5	河原田	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字猪川
6	寺屋敷	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字五松林
7	新屋敷	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字猪川
8	外記Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区南都田字外記
9	外記Ⅱ	散布地	縄文、平安	縄文土器、土師器	胆沢区南都田字外記
10	堰田	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字堰田
11	机地	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢区南都田字机地
12	中井	散布地	平安	須恵器	胆沢区南都田字中井
13	新里館（若柳方八丁）	城館跡	平安	土師器、須恵器、堀	胆沢区若柳字鳥塚
14	清水下	散布地	弥生・平安	弥生土器、縄文早期土器片、石包丁、土師器	胆沢区南都田字清水下
15	漆町	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、縄文早期土器片	胆沢区南都田字漆町
16	机地館（盛興館）	城館跡	中世	水堀	胆沢区南都田字古城
17	銭倉	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢区南都田字銭倉
18	要害（止々井館）	散布地・城館跡	平安・近世	土師器、須恵器、土塁	胆沢区南都田字本木
19	角塚古墳	古墳	古墳時代	埴輪	胆沢区南都田字塚田
20	二本木	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器	胆沢区南都田字清水下
21	塚田	散布地	平安	土師器、須恵器	胆沢区南都田字塚田
22	石田Ⅰ・Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	胆沢区南都田字石田
23	沢田	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢区南都田字沢田
24	宇南田	集落跡	平安	土師器	胆沢区南都田字宇南田
25	蜂谷	散布地	縄文	縄文土器、石器	胆沢区若柳字蜂谷
26	下尿前Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、石器	胆沢区若柳字下尿前
27	谷子沢	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字谷子沢
28	尿前Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、石器	胆沢区若柳字尿前
29	尿前Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字尿前
30	旧穴山堰跡	生産遺跡	中世～現代	ずい道、取水口	胆沢区若柳字馬留ほか
31	下尿前Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字下尿前
32	林尻	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字林尻
33	猪の鼻館（栄の華館）	城館跡	近世	二郭、空堀、土塁	胆沢区若柳字市野々
34	萩袋	散布地	縄文・弥生	縄文土器（晩期）、土偶、土師器、弥生土器	胆沢区若柳字上愛宕
35	上愛宕原	散布地	縄文・弥生	縄文土器（後・晩期）、弥生土器、石匙、石鏃	胆沢区若柳字上愛宕
36	馬留	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字馬留
37	市野々	散布地	縄文	縄文土器、須恵器	胆沢区若柳字市野々
38	なめだけⅢ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字慶存
39	なめだけⅡ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字慶存
40	大清水上Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字慶存
41	宮坂	散布地	縄文	縄文土器（後期）、石鏃	胆沢区若柳字宮坂
42	横沢原Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字横沢原
43	横沢原	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字横沢原
44	なめだけⅠ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字慶存
45	大清水上	集落跡	縄文・弥生	縄文土器（早・前・後・晩期）石鏃、槍、ほか	胆沢区若柳字慶存
46	大清水	散布地	縄文	縄文土器（早・前・後・晩期）石鏃、槍、ほか	胆沢区若柳字慶存
47	三本柳	散布地	縄文	縄文土器（後・晩期）、土偶	胆沢区若柳字林尻
48	宮沢原Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字横沢原
49	横沢原Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字横沢原
50	横沢原Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字横沢原
51	萱刈窪Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字萱刈窪
52	上横沢原	散布地	縄文	縄文土器（後・晩期）、土偶	胆沢区若柳字上横沢原
53	鹿合館（山居館）	城館跡	中世末期	空堀、鉄鏃、小札、陶器	胆沢区若柳字上鹿合
54	南中沢	散布地	縄文	縄文土器（後・晩期）、石鏃、石匙、石斧、石棒	胆沢区若柳字下鹿合
55	下鹿合東Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字下鹿合
56	下鹿合東	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	胆沢区若柳字下鹿合
57	かどっしょ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	胆沢区若柳字愛宕
58	門ケ城	城館跡	中世	三郭	胆沢区若柳字愛宕
59	上鹿合	集落跡	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字上鹿合
60	宮沢原	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）、石匙、石斧	胆沢区若柳字宮沢原
61	成沢東	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）、石匙、石斧	胆沢区若柳字宮沢原
62	萱刈窪	散布地	縄文前期	縄文土器（前期）、石匙、石斧、石鏃、槍、剣、他	胆沢区若柳字萱刈窪
63	宮沢原成沢	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）、石匙、石斧	胆沢区若柳字宮沢原
64	赤剥	散布地	縄文	縄文土器（後・晩期）、石匙、石鏃	胆沢区若柳字赤剥
65	八幡館（兎口館）	城館跡	近世	空濠	胆沢区若柳字宮沢原
66	**宮沢原下**	**散布地**	**縄文**	**縄文土器（早期）、石匙、石鏃、石斧**	**胆沢区若柳字宮沢原**
67	明神下	散布地	平安	土師器、須恵器	胆沢区若柳字土橋
68	箸塚	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	胆沢区若柳字箸塚
69	赤剥東	散布地	縄文	縄文土器、石匙、石鏃	胆沢区若柳字赤剥
70	土橋	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字土橋
71	若柳要害館	城館跡	中近世	土師器	胆沢区南都田字害館
72	山田城（山田屋敷）	城館跡	中世	土塁、堀	胆沢区若柳字明神下
73	芦の随	散布地	縄文・平安	縄文土器（前・中）、石器、土師器	胆沢区若柳字芦の森
74	北丑転				胆沢区若柳字北丑転
75	**山の神**	**散布地**	**縄文・古代**	**縄文土器（早・前期）、弥生土器、土師器、石斧**	**胆沢区若柳字山の神**
76	十文字	散布地	縄文・古代	縄文土器（早期）、土師器、石匙、石鏃	胆沢区小山字上十文字
77	作屋敷	祭祀跡・集落跡	古代	土師合甕、土師器、須恵器	胆沢区南都田字作屋敷
78	牡丹野	散布地	古代・縄文	縄文土器、土師器、須恵器	胆沢区南都田字牡丹野
79	堤	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字四ツ柱
80	川端	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字大道
81	広岡館（飯坂館）	城館跡	中世	二重堀、土塁	胆沢区南都田字国分
82	浅野	散布地	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、土師器、須恵器、土偶、弥生土器	胆沢区南都田字浅野
83	小十文字	集落跡	縄文・古代	縄文土器（前期）、土師器（平安）	胆沢区南都田字小十文字
84	国分	散布地	古代・近世	縄文土器、土師器、須恵器、石鏃、石斧	胆沢区南都田字国分
85	尼坂	散布地・集落跡	縄文・古代	縄文土器（早・前期）、石器、装飾具、土師器	胆沢区南都田字尼坂
86	片子沢	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	胆沢区南都田字片子沢
87	糀谷田	散布地	縄文・古代	縄文土器（前期）、土師器	胆沢区南都田字糀谷田
88	石行	散布地	縄文・古代	土師器、須恵器	胆沢区南都田字石行
89	森下	散布地	縄文・古代	土師器	胆沢区南都田字森下
90	南蛸の手	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字南蛸の手

91	浅野前	集落跡	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、須恵器、土師器	胆沢区南都田字浅野
92	鶴田Ⅰ	散布地	平安	土師器	胆沢区南都田字鶴田
93	鶴田Ⅱ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	胆沢区南都田字鶴田
94	鶴田古墳群	古墳群	古代		胆沢区南都田字鶴田
95	濁川	集落跡	縄文・平安	縄文土器（前・晩期）、土師器、須恵器	胆沢区南都田字濁川
96	合野	散布地	縄文・古代	縄文土器（前・晩期）、石鏃	胆沢区南都田字合野
97	附野森	散布地	縄文・中世	縄文土器、陶磁器	胆沢区小山字附野森
98	森Ⅰ	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字森
99	森Ⅱ	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字上長根
100	中島	散布地	縄文・古代	縄文土器（前・中期）、石器、装飾具、土師器	胆沢区小山字大深沢
101	南笹森	散布地	縄文	縄文土器（前期）、石鏃、石匙	胆沢区小山字南笹森、昼沢
102	大平野Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字大平野
103	大寒沢遺跡				胆沢区若柳字前川前山国有林内
104	大平野Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字大平野
105	迎大平野				胆沢区若柳字前川前山国有林内
106	下嵐江Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字下嵐江
107	下嵐江Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（晩期）、錐、獨古石	胆沢区若柳字下嵐江
108	下嵐江Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字下嵐江
109	坪渕Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（中期）	胆沢区若柳字坪渕
110	坪渕Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字坪渕
111	坪渕Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字坪渕
112	平根原Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字平根原
113	平根原Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区若柳字平根原
114	上萩森	散布地	旧石器・弥生	ナイフ形石器、スクレーパー、石核、弥生土器	胆沢区若柳字上萩森
115	萩森北	散布地	縄文・弥生	縄文土器（前・中期）、石斧、石鏃、飾具、弥生土器	胆沢区若柳字上萩森
116	前萩森	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）、石斧、石鏃、飾具	胆沢区若柳字中萩森
117	十三軒	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石器	胆沢区若柳字横沢原
118	野中	散布地	平安	土師器	胆沢区若柳字下横沢原
119	小山萩森	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山字萩森
120	一の台Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字上中沢
121	上中沢Ⅲ	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山字上中沢
122	上中沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、フレーク	胆沢区小山字萩森、上中沢
123	上大畑平Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字上大畑平
124	上大畑平Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（中期）	胆沢区小山字上大畑平
125	一の台	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期）、石器、土師器	胆沢区小山字一ノ台
126	一の台Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字上中沢、上一の台
127	一の台Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字上中沢、上一の台
128	上大畑平Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字上大畑平
129	北赤堰	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期）、土師器	胆沢区小山字北赤堰
130	岩洞堤				胆沢区小山字岩洞沢
131	上中沢Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、フレーク、須恵器	胆沢区小山字中沢、上中沢
132	下中沢Ⅰ	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山字下中沢
133	下中沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字下中沢
134	下中沢Ⅲ	散布地	縄文	陥し穴状遺構、土坑	胆沢区小山字下中沢
135	台Ⅲ				胆沢区小山字台
136	台Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、フレーク	胆沢区小山字台、小田切
137	稔橋	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字駒籠、小田切
138	台Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字台
139	小田切	散布地	縄文	縄文土器（前期）、弥生土器、石斧	胆沢区小山字小田切
140	峠	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字北峠
141	小山方八丁館	城館跡	中世・近世	空濠、三郭	胆沢区小山字方八丁
142	大畑	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）、石器	胆沢区小山字前大畑
143	後大畑	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石器	胆沢区小山字後大畑
144	船戸	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石斧、石鏃、石匙	胆沢区小山字斉藤
145	念仏塚	散布地	縄文	縄文土器（中期）	胆沢区小山字北赤堰
146	恩俗長根	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石鏃	胆沢区小山字恩俗長根
147	明山	散布地	縄文	縄文土器、石器	胆沢区小山字明山
148	上恩俗	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）	胆沢区小山字上恩俗
149	上狼ヶ志田	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山上狼ヶ志田
150	長根	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字長根
151	八幡堂	散布地	古代	土師器	胆沢区小山字八幡堂
152	狐森	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器	胆沢区小山字狐森
153	油地	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期）、石斧、土師器	胆沢区小山字西油地
154	中谷地	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字上中谷地
155	四ツ屋	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字下中谷地
156	壇山	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	胆沢区小山字斉藤
157	渋民沢	散布地	縄文	縄文土器（中期）	胆沢区若柳字渋民
158	渋民沢Ⅱ	鉱山跡	近世	寺跡、鉱道跡等	胆沢区若柳字渋民沢
159	五反町	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字二ノ台、五反町
160	二の台	散布地	縄文・奈良	縄文土器（中期）、石器、土師器	胆沢区小山字二ノ台
161	細入	散布地	縄文・奈良	縄文土器、土師器	胆沢区小山字細入
162	駒込三堤	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山字駒籠
163	鶴供養	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字二ノ台
164	屋敷	散布地	縄文	フレーク、石器	胆沢区小山字屋敷
165	西風	散布地	縄文	縄文土器（前期）、石鏃、石匙、石斧	胆沢区小山字西風
166	二の台長根	散布地	縄文	石器	胆沢区小山字屋敷、二の台長根
167	浪入	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山字二ノ台長根
168	主計谷地	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字主計谷地
169	竹地子	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字竹地子、駒込
170	駒込	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字新田
171	上鞍骨	散布地	古代	土師器	胆沢区小山字上鞍骨
172	後鞍骨	散布地	古代？	縄文土器、石器	胆沢区小山字後鞍骨
173	鞍骨	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字上鞍骨
174	田中	散布地	縄文・古代	縄文土器（前期）、石ベラ、土師器	胆沢区小山字田中
175	佐布	散布地	縄文	縄文土器	胆沢区小山字佐布
176	大橋	散布地	古代	土師器	胆沢区小山字小林
177	中の森	城館跡	近世	土塁、空濠	胆沢区小山字中ノ森
178	二の沢	散布地	縄文	縄文土器（早・前期）	胆沢区小山字二の沢
179	二の沢Ⅱ	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山字二の沢
180	休場	散布地	縄文	縄文土器、石器	胆沢区小山字外浦
181	外浦	散布地	縄文	縄文土器、石斧、石匙、磨石	胆沢区小山字外浦
182	板子沢	近世			胆沢区小山字養ケ森
183	小山沢田	散布地	平安	土師器	胆沢区小山字沢田
184	二の沢Ⅲ	散布地	縄文	フレーク	胆沢区小山字二の沢
185	高日向北		縄文？	土坑３基、陥し穴状遺構１基	胆沢区小山字前四ツ屋

弥生時代の遺跡７ヶ所もまた扇頂付近が主である。上愛宕原遺跡からは桜井式の土器片が、上萩森、大清水上遺跡からは後期末の土器片が出土している。水沢低位面東部に位置する清水下遺跡からは石包丁が出土している。

古墳時代の遺跡は１ヶ所で、本州最北の前方後円墳として国指定史跡となっている角塚古墳がある。また、蝦夷塚古墳と一連の遺跡である中半入遺跡（水沢区）も角塚古墳と同時期の大規模な集落遺跡であることが確認されている。

古代の遺跡は63ヶ所である。主に扇端に位置し、堀切面中央部を挟んで南北に分かれて分布する。このうち水沢低位面には８～11世紀に属する要害遺跡、９世紀～10世紀に属する沢田遺跡を含む15遺跡が位置する。水沢高位面には７～９世紀に属する漆町遺跡、平安前・中期の宇南田遺跡を含む13遺跡が、福原面には10世紀の石行遺跡を含む８遺跡が位置する。福原面に乗る小十文字遺跡は奈良時代と平安時代の住居が検出された集落跡であり、また古代製鉄に関わる遺物が出土する生産遺跡でもある。堀切面には７遺跡、横道面には７遺跡、上野原面には４遺跡が位置する。

中世の遺跡は10ヶ所、近世の遺跡は９ヶ所で、どちらも扇頂付近と南都田地区を結ぶ東西に連なって点在する。多くは城館跡で堀や土塁が確認された。旧穴山堰跡は、中世末から昭和36年まで使用されていた農業用水路の跡で、ずい道や取水口が確認されている。

引用・参考文献

安倍庄吉　1981『小十文字遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第11集　胆沢町教育委員会
安倍庄吉　1983『尼坂遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第12集　胆沢町教育委員会
安倍庄吉ほか　1991『国分・芦の随遺跡緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第21集　胆沢町教育委員会
安倍庄吉ほか　1994『尼坂遺跡第四次緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第25集　胆沢町教育委員会
伊藤鉄夫ほか　1977『漆町遺跡調査報告書』　胆沢町教育委員会
胆沢町　1971『胆沢町史Ⅰ　原始古代編』
胆沢町　1972『胆沢町史Ⅱ　古代中世編』
胆沢町　1972『胆沢町史Ⅲ　古代中世編』
小原正治ほか　1984『二本木遺跡緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第13集　胆沢町教育委員会
小原正治ほか　1985『大清水上遺跡調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第15集　胆沢町教育委員会
小原眞一ほか　2000『尿前２遺跡Ｂ地区発掘調査報告書』岩文振報告書第343集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
菊池強一ほか　1978『上萩森遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第10集　胆沢町教育委員会
菊池強一ほか　1988『上萩森遺跡調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第19集　胆沢町教育委員会
国生　尚ほか　2004『鶴田古墳群発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第29集　胆沢町教育委員会
酒井宗孝ほか　1999『尿前２遺跡Ａ地区発掘調査報告書』岩文振報告書第288集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
佐々木彰　1987『岩手県宮沢原Ｃ遺跡の復元』『古代』第84号　早稲田大学考古学会
佐々木いく子ほか　1995『要害遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第26集　胆沢町教育委員会
佐々木いく子ほか　1996『石行遺跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第27集　胆沢町教育委員会
佐藤淳一ほか　2001『大清水遺跡発掘調査報告書』岩文振報告書第373集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
佐藤淳一ほか　2006『大清水上遺跡発掘調査報告書』岩文振報告書第475集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
佐藤美枝子ほか　1986『宇南田遺跡緊急調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第16集　胆沢町教育委員会
佐藤美枝子ほか　1988『浅野遺跡調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第17集　胆沢町教育委員会
杉沢昭太郎ほか　1997『下尿前２遺跡発掘調査報告書』岩文振報告書第252集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
鈴木明美ほか　1985『塚田遺跡緊急調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第14集　胆沢町教育委員会
鈴木明美ほか　1988『沢田遺跡調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第18集　胆沢町教育委員会
鈴木明美ほか　1990『鹿合館跡』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第20集　胆沢町教育委員会
高木　晃ほか　2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』岩文振報告書第380集　(財)岩文振埋蔵文化財センター

中村直美ほか　1998 『下尿前４遺跡発掘調査報告書』岩文振報告書第269集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
中村直美ほか　2000 『休場遺跡発掘調査報告書』岩文振調査報告書第331集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
朴沢志津江ほか　2002 『角塚古墳』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第28集　胆沢町教育委員会
村上　拓ほか　1999 『板子沢遺跡発掘調査報告書』岩文振報告書第305集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
山口興典ほか　1992 『尼坂遺跡第二次緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第22集　胆沢町教育委員会
山口興典ほか　1993a『尼坂遺跡第３次(東)緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第23集　胆沢町教育委員会
山口興典ほか　1993b『尼坂遺跡第３次(西)緊急発掘調査報告書』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第24集　胆沢町教育委員会
吉田　充　2006 『二の台長根遺跡発掘調査報告書』岩文振報告書第476集　(財)岩文振埋蔵文化財センター
国土交通省東北地方整備局　胆沢ダム工事事務所　2002 『いさわの大地』 胆沢ダム工事事務所発行パンフレット

Ⅲ　山の神遺跡

1　基本層序（第５図）

本調査区の基本層序は、試掘調査や本調査の成果から次のように考えられる。

Ⅰ層

Ⅰａ　黒褐色～灰黄褐色。層厚15～20cm。現在の水田等の耕作土。

Ⅰｂ　Ⅱ層～Ⅴ層と思われる黒色土～褐色土の混土。層厚０～50cm。現在またはかつての水田整備時の盛土。

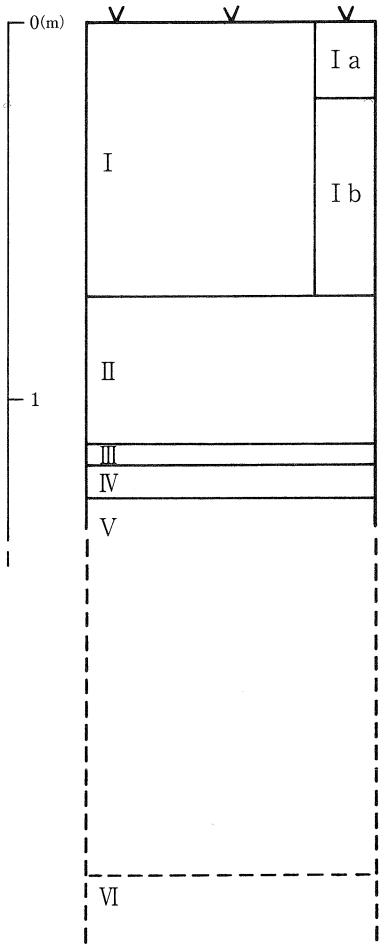
Ⅱ層　黒色。層厚０～40cm。開墾前の旧表土。

Ⅲ層　明黄褐色の火山灰。層厚０～５cm。旧沢跡などの一部地点に堆積。遺構埋土内にも観察されない。

Ⅳ層　灰黄褐色。層厚０～10cm。Ⅴ層の漸移層。

Ⅴ層　褐色～黄褐色。層厚15～100cm 以上。遺構検出面。黒沢尻火山灰の地山層で最下位は山形軽石層。

Ⅵ層　層厚不明。前沢火山灰層。



第５図　基本層序（1/20）

Ａ区ではⅠ層～Ⅴ層が観察された。Ⅲ層は旧河道の堆積土中でのみ観察された。

Ｂ区ではⅠ層またはⅠ～Ⅱ層が確認されたが、旧河道付近の１地点を除いてⅢ層は確認できなかった。Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層が確認できる地点でも、開墾時に削られているため層厚は非常に薄く、その下位はすぐ段丘礫層と思われる礫層であった。唯一Ⅲ層が確認できた地点では、その下位にⅣ・Ⅴ・Ⅵ層は確認されず、段丘礫層の上に層厚20～60cmの黒褐色・暗褐色土が観察された。この黒褐色・暗褐色土は旧河道に関係するこの地点特有の堆積土であると考えられる。

小段丘上のＣ区ではⅡ～Ⅳ層は確認されず、Ⅰ層の直下はⅤ層でその下位にⅥ層を確認した。Ｃ区のⅤ層は削られており、自然堆積の層厚を確認することはできなかったが、比較的低くなっているＣ区の東側では地山検出面から山形軽石層の上位までの層厚が１ｍを超える地点もあった。逆に高いＣ区の西側は残存するⅤ層が薄く、特に東西の田面の境目にはⅤ層を深く削って段差がつけられているため、その付近にはⅠ層の直下に山形軽石層が露出する地点もあった。

2　野外調査と室内整理

（1）野　外　調　査

調 査 区

岩手県遺跡情報検索システムに登録されている山の神遺跡の範囲は、南北約280m・東西約470m、面積約7.8万m^2である。今回調査対象になったのは、このうち国営いさわ南部農地整備事業のほ場整備で切り土になる範囲とその西側に延びる隣接地計39,169m^2で、調査前の状況は水田、畑地、牧草地である。

グリッド設定と基準点（第６図、第２表）

検出される遺構・遺物の座標値を記録し図化するために、平面直角座標（第Ｘ系）に合わせて原点を北西隅のＸ＝－97,850ｍ、Ｙ＝17,000ｍとし、これを基準として基準点２点、補点５点を設けグリッド設定を行った。設定に際しては、50×50ｍの大グリッドに区割りし、さらにそれを５×５ｍの100小グリッドに細分した。大グリッドには北から南へローマ数字でⅠ、Ⅱ、Ⅲ・・・東から西へアルファベット大文字でＡ、Ｂ、Ｃ・・・、小グリッドには北から南へアラビア数字で１～０東から西へアルファベット大文字でａ～ｊと付し、各小グリッドはこれらの組み合わせで、ＩＡ１ａやⅦＭ０ｊなどと呼称することとした。同時にこれは各グリッドの北西隅の杭の呼称も兼ねている。

第２表　基準杭・区画割付杭一覧表

	Ｘ（世界測地系）(m)	Ｙ（世界測地系）(m)	Ｈ（標高）　(m)	グリッド
基　1	－98,100.000	17,200.000	149.532	ＶＥ１ａ
基　2	－98,100.000	17,450.000	146.559	ＶＪ１ａ
補　1	－98,200.000	17,050.000	151.936	ⅦＢ１ａ
補　2	－98,200.000	17,200.000	149.642	ⅦＥ１ａ
補　3	－98,000.000	17,400.000	145.017	ⅢＩ１ａ
補　4	－98,000.000	17,450.000	144.024	ⅢＪ１ａ
補　5	－98,100.000	17,550.000	142.894	ＶＬ１ａ

粗掘り・遺構検出

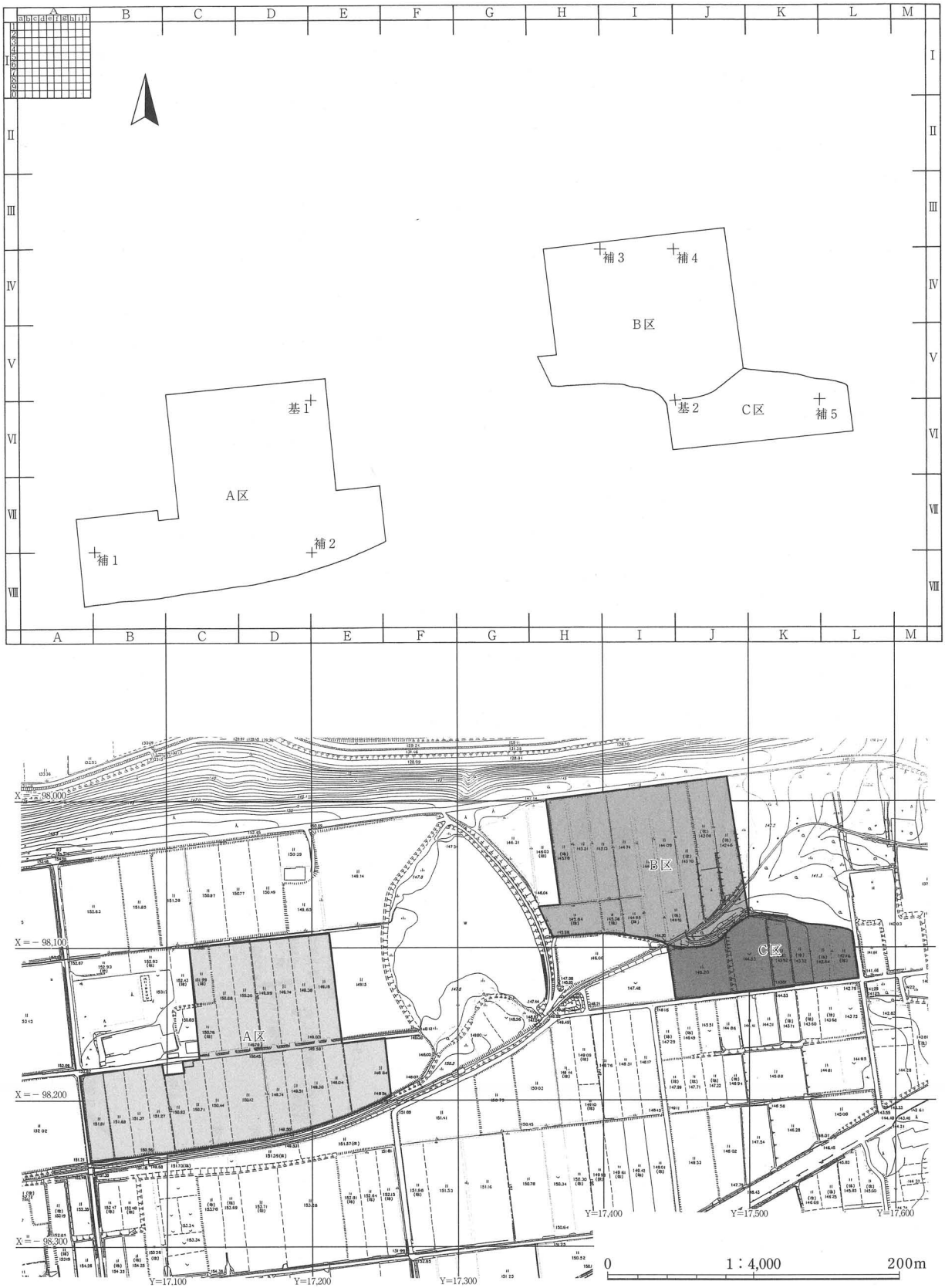
調査面積が広大であること、本調査に先立つ試掘調査で遺構配置がある程度把握されていたことから、表土除去と粗掘りは重機を使用することとし、その後に人力で鋤簾、両刃鎌、移植鏝を用いて遺構検出作業を行った。

遺構の名称（第７図、第３表）

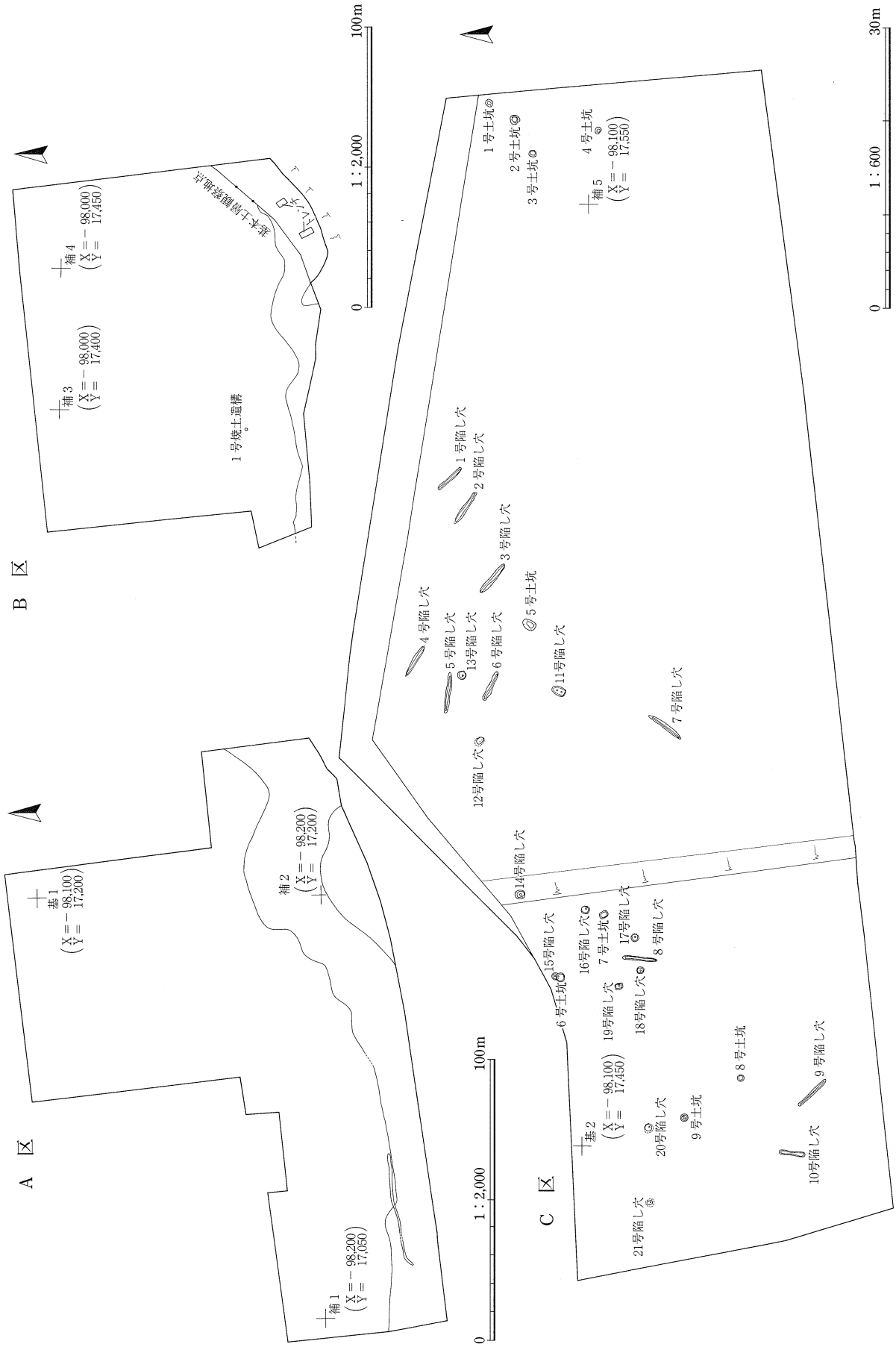
検出された遺構の名称は、溝状の土坑のみを「陥し穴」として区別し、他の土坑は「土坑」として遺構と確認された順に番号を付した。他の遺構としては焼土がある。なお、報告に際しては、溝状の「陥し穴」と「土坑」のうち杭穴と考えられる副穴が設けられている遺構は「陥し穴状遺構」と名称を改めた。また、「陥し穴状遺構」と「土坑」については、遺構の分類ごとに調査区東側に位置する遺構からそれぞれ連番となるよう番号も改めている。旧遺構名と本報告での遺構名の対応関係は第３表の通りである。

第３表　遺構名変更表

No	新遺構名	旧遺構名	No	新遺構名	旧遺構名
1	１号陥し穴状遺構	Ｃ区１号陥し穴	16	16号陥し穴状遺構	Ｃ区15号土坑
2	２号陥し穴状遺構	Ｃ区２号陥し穴	17	17号陥し穴状遺構	Ｃ区17号土坑
3	３号陥し穴状遺構	Ｃ区３号陥し穴	18	18号陥し穴状遺構	Ｃ区16号土坑
4	４号陥し穴状遺構	Ｃ区４号陥し穴	19	19号陥し穴状遺構	Ｃ区14号土坑
5	５号陥し穴状遺構	Ｃ区５号陥し穴	20	20号陥し穴状遺構	Ｃ区11号土坑
6	６号陥し穴状遺構	Ｃ区６号陥し穴	21	21号陥し穴状遺構	Ｃ区12号土坑
7	７号陥し穴状遺構	Ｃ区７号陥し穴	22	１号土坑	Ｃ区２号土坑
8	８号陥し穴状遺構	Ｃ区10号陥し穴	23	２号土坑	Ｃ区７号土坑
9	９号陥し穴状遺構	Ｃ区８号陥し穴	24	３号土坑	Ｃ区１号土坑
10	10号陥し穴状遺構	Ｃ区９号陥し穴	25	４号土坑	Ｃ区４号土坑
11	11号陥し穴状遺構	Ｃ区６号土坑	26	５号土坑	Ｃ区８号土坑
12	12号陥し穴状遺構	Ｃ区３号土坑	27	６号土坑	Ｃ区13号土坑
13	13号陥し穴状遺構	Ｃ区５号土坑	28	７号土坑	Ｃ区19号土坑
14	14号陥し穴状遺構	Ｃ区20号土坑	29	８号土坑	Ｃ区10号土坑
15	15号陥し穴状遺構	Ｃ区18号土坑	30	９号土坑	Ｃ区９号土坑



第６図　グリット配置図・調査区図


A 区
B 区
C 区
1：2,000
100m
1：600
30m
基1 (X＝－98,100 Y＝17,200)
補1 (X＝－98,200 Y＝17,050)
補2 (X＝－98,200 Y＝17,200)
補3 (X＝－98,000 Y＝17,400)
補4 (X＝－98,000 Y＝17,450)
1号焼土遺構
基2 (X＝－98,100 Y＝17,450)
補5 (X＝－98,100 Y＝17,550)
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
1号陥し穴
2号陥し穴
3号陥し穴
4号陥し穴
5号陥し穴
6号陥し穴
7号陥し穴
8号陥し穴
9号陥し穴
10号陥し穴
11号陥し穴
12号陥し穴
13号陥し穴
14号陥し穴
15号陥し穴
16号陥し穴
17号陥し穴
18号陥し穴
19号陥し穴
20号陥し穴
21号陥し穴

第７図　遺構配置図

遺構精査と遺物の取り上げ

遺構精査は陥し穴状遺構、土坑ともに２分法で行った。遺物は極めて少なく、ほとんどが遺構外からの出土で、遺構内からの出土はわずかに土器、石器各１点であった。現場ではおおまかに出土地点・層位を記録して取り上げ、室内整理の際にグリットに合わせて出土地点を確認した。遺物番号は室内整理の際に付したものである。

実測・写真撮影

遺構の記録は実測図作成と写真撮影を主とし、野帳への記録でこれを補った。図面は遺構の平面図、土質・土性を付した埋土の断面図・焼土の断ち割り図、陥し穴状遺構の空断面図を作成した。平面実測は簡易遣り方測量と光波トランシットによる。実測図の縮尺は原則として1/20としたが、焼土遺構のみ1/10とした。レベルは設置した基準点をもとに絶対高で測量した。写真撮影は埋土堆積状況、完掘状況を主とし、35㎜判のモノクロームとリバーサル各１台、６×７㎝判モノクローム１台、デジタルカメラ１台を使用して行った。また、調査終了全景は空中写真撮影により記録した。

野外調査の経過

調査期間は平成18年４月７日～６月12日である。以下に調査経過を簡単に記す。

４月７日（金）　午後資材搬入、現場設営。作業員登録48名。
４月11日（火）　粗堀・検出開始。重機導入（パワーショベル１台・キャリアダンプ１台）。
４月13日（木）　重機導入（パワーショベル１台・キャリアダンプ１台）。
４月17日（月）　キャリアダンプ１台増。
４月21日（月）　基準点打設（興国設計株式会社）。
４月27日（木）　登録作業員３名減。
５月１日（月）　高日向遺跡の作業員９名が合流し作業員登録54名。パワーショベル１台増。
５月12日（金）　キャリアダンプ１台搬出。
５月16日（火）　パワーショベル１台搬出。
５月23日（火）　重機による作業終了。
５月29日（月）　遺構精査開始。
５月31日（水）　作業員23名大平野Ⅰ遺跡へ。登録作業員31名。
６月１日（木）　空中写真撮影（東邦航空株式会社）。
６月５日（月）　作業員９名宮沢原下遺跡へ。登録作業員22名。
６月８日（木）　終了確認。
６月12日（月）　調査終了。

（２）室　内　整　理

室内整理の期間は、平成19年１月４日～３月31日で、従事した作業員は平成19年１月16日～２月15日に１名である。

遺構に関わる記録

実測図は、必要に応じて第二原図を作成しトレースを行った。撮影したフィルムは密着写真と一組にしてネガアルバムに、カラースライドフィルムはスライドファイルに収納した。

遺物の整理

遺物は当センターで水洗した後、遺跡略号・出土地点・層位等を注記した。遺物は土器片、石器、陶磁器片であり、接合・復元を要するものはなかったため、続けて仕分け、選別、登録を行った。石

材の鑑定は外部機関に委託し、写真撮影は当センターの専門技師が行った。実測図は原寸で作成し、土器1/3、石器2/3の縮尺で掲載した。

遺物の選別・図化の基準

報告書に掲載された遺物は出土した全てではなく、整理の中で設定した基準を基に選別した部分的な資料である。不掲載資料については、数的処理をし出土資料全体の傾向を把握するためのデータとした。選別の基準は下記の通りである。

土器　口縁部、底部、胴部だが文様が確認できるものを掲載した。

石器　製品、使用痕又は調整痕のある剥片、石核を掲載した。

陶磁器　近現代のものであるため全て不掲載とした。

3　検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、陥し穴状遺構21基（うち平面形が溝状のもの10基、楕円形のもの２基、円形・方形のもの９基）、土坑９基、焼土遺構１基であった。焼土遺構はＢ区から検出されたが、他はＣ区に集中している。以下遺構の分類に沿って詳細を記す。

（1）陥し穴状遺構

１号陥し穴状遺構（第８図、写真図版３）

（位置、検出状況）Ｃ区ⅣＫ７ｄ、７ｅ、８ｅグリッドにまたがり、黒褐色の溝状に検出された。

（平面形、規模）細長い溝状。開口部が3.48×0.37m、底部が3.37×0.14m、深さ53㎝。

（長軸方向）Ｎ－41°－Ｗ

（堆積土状況）上層は黒色土を含む黒褐色土、その下に褐色土を含む黒褐色土が堆積しており、部分的に地山崩落土と思われる褐色土層を含む。

（壁）長軸方向はほぼ垂直、短軸方向はやや外傾して立ち上がる。

（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層直上である。約20㎝北西側に低く傾斜する。南東側には円礫がある。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

２号陥し穴状遺構（第８図、写真図版３）

（位置、検出状況）Ｃ区ⅣＫ８ｄグリッドにて、黒い溝状に検出された。

（平面形、規模）細長い溝状。開口部が3.63×0.32m、底部が3.61×0.11m、深さ93㎝。

（長軸方向）Ｎ－53°－Ｗ

（堆積土状況）上層は黒色土、中層・下層は褐色土を含む黒褐色土で、部分的に地山崩落土と思われる黄褐色土層を含む。

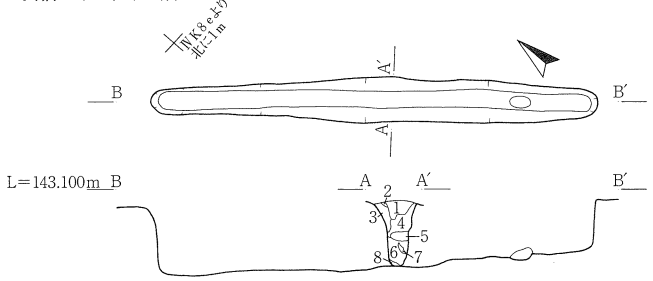
（壁）わずかに外傾するが、北西側のみわずかにオーバーハングする。

（底面）Ｖ層の最下位に近く、山形軽石を多く含む。中央が高く、長軸の両端に低く傾斜する。北西側が10㎝ほど低い。

（遺物、重複等特記事項）特になし

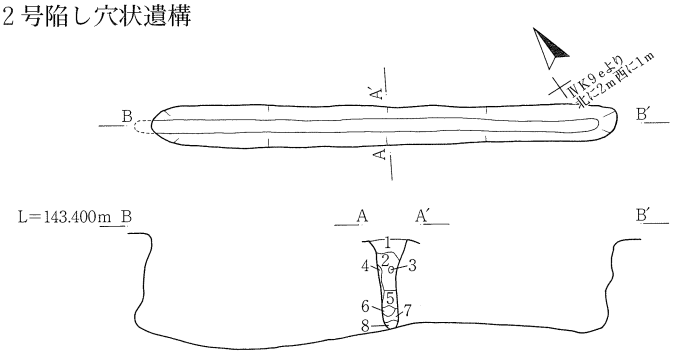
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

1号陥し穴状遺構



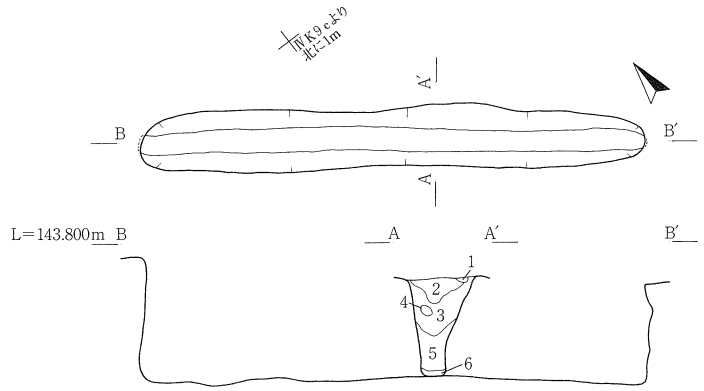
1号陥し穴状遺構
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黒色土を40%含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黒色土を30%含む
3　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒色土を30%及び黒色土ブロックを含む
4　10YR2/2　褐色粘土質シルト　褐色土を30%含む
5　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を15%含む地山崩落土
6　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土を10%含む。
7　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を10%含む地山崩落土
8　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を25%含む地山崩落土

2号陥し穴状遺構



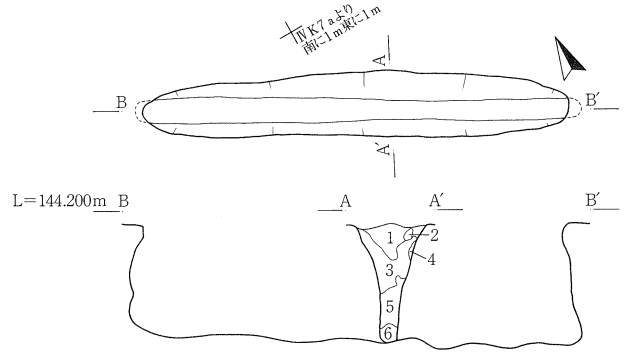
2号陥し穴状遺構
1　10YR1.7/2 黒色シルト　黒褐色土を15%含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土を40%含む
3　10YR4/4　褐色粘土質シルト　ブロック状
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
5　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土を10%含む
6　10YR2/3　黒褐色シルト　褐色土を40%含む
7　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土を30%含む
8　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　黒褐色土を25%含む

3号陥し穴状遺構



3号陥し穴状遺構
1　10YR4/6　褐色シルト　暗褐色土を７%含む
2　10YR1.7/1 黒色シルト　暗褐色土を40%含む
3　10YR3/3　暗褐色シルト　褐色土を25%含む
4　10YR2/3　黒褐色シルト　褐色土を40%含む
5　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土
6　10YR3/4　暗褐色シルト　褐色土を30%含む

4号陥し穴状遺構



4号陥し穴状遺構
1　10YR1.7/1 黒色シルト　褐色土を２%、南側下位を中心に黒褐色土を25%含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土を15%含む
3　10YR2/3　黒褐色シルト　黒色土と褐色土を10%ずつ含む
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
5　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土
6　10YR3/4　暗褐色シルト　黒褐色土を10%と黒色土のブロックを含む

0　1：60　3m

第８図　１～４号陥し穴状遺構

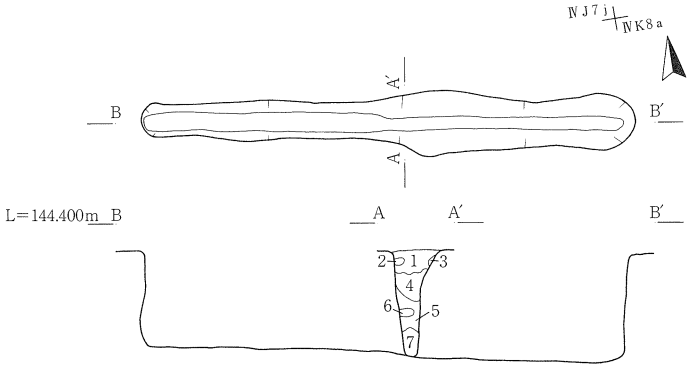
3号陥し穴状遺構（第8図、写真図版3）
（位置、検出状況）C区ⅣK8b、9cグリッド他にまたがり、黒い溝状に検出された。
（平面形、規模）細長い溝状。開口部が3.94×0.47m、底部が3.97×0.19m、深さ100cm。
（長軸方向）N－52°－W
（堆積土状況）上層に黒色土、中層と最下層に褐色土を含む黒褐色・暗褐色土、下層に褐色土が堆積する。
（壁）長軸方向はほぼ垂直に、短軸方向はわずかに外傾するように立ち上がる。
（底面）V層最下位の山形軽石層直上である。ほぼ平坦だが、中央が高く、長軸方向の両端に向かってわずかに低く傾斜する。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

4号陥し穴状遺構（第8図、写真図版3）
（位置、検出状況）C区ⅣK7aグリッドにて、黒い溝状に検出された。
（平面形、規模）細長い溝状。開口部が3.33×0.53m、底部が3.50×0.21m、深さ101cm。
（長軸方向）N－64°－W
（堆積土状況）上層に黒色土、中層に黒褐色土、下層に褐色・黄褐色土を堆積するが、互いの土粒を混入しあう。
（壁）長軸方向はややオーバーハング、短軸方向は外傾して立ち上がる。
（底面）V層最下位の山形軽石層直上である。ほぼ平坦だが、長軸の南東側はわずかに波打ち、低い。
（遺物、重複等特記事項）埋土最上位より使用痕又は加工痕のある縄文時代の剥片を出土している。
（時期）遺物より縄文時代に属すると思われる。

5号陥し穴状遺構（第9図、写真図版4）
（位置、検出状況）C区ⅣJ8jグリッドにて、黒く溝状に検出された。
（平面形、規模）細長い溝状。開口部が3.85×0.52m、底部が3.74×0.14m、深さ88cm。
（長軸方向）N－82°－W
（堆積土状況）上層は黒色土、中層は黒褐色土が堆積し、黄褐色土粒を含む。下層は黄褐色土が堆積する。
（壁）長軸方向はほぼ垂直、短軸方向は外反する。
（底面）V層の黒沢尻火山灰層である。ほぼ平坦だが、中央から長軸方向の東側にやや低く傾斜する。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

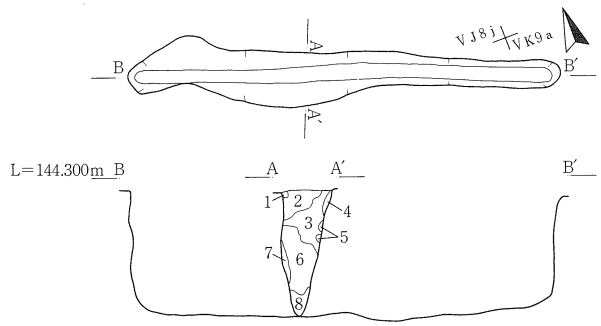
6号陥し穴状遺構（第9図、写真図版4）
（位置、検出状況）C区VJ8j、9jグリッドにて、黒く溝状に検出された。
（平面形、規模）細長い溝状。開口部が3.33×0.43m、底部が3.26×0.13m、深さ103cm。
（長軸方向）N－70°－W
（堆積土状況）上層より最下層に黒色土、褐色土、褐色土粒を含む黒褐色土、褐色土の順に堆積する。
（壁）長軸方向はほぼ垂直に、短軸方向は外傾する様子が見られる。

5号陥し穴状遺構



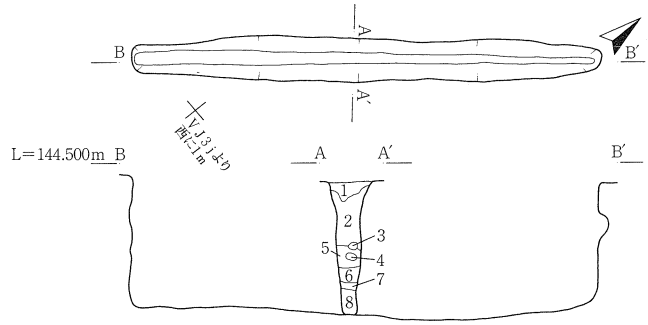
5号陥し穴状遺構
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を１％、黒褐色土を25％含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土25％含む
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト
4　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土を30％含む
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を20％含む
7　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　しまり弱い

6号陥し穴状遺構



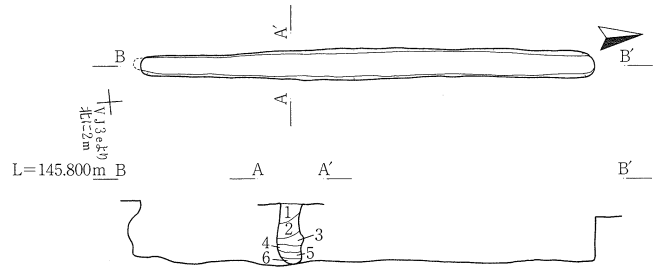
6号陥し穴状遺構
1　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土
2　10YR2/1　黒色シルト　褐色土を１％含む
3　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土
4　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土でしまり強い
5　10YR2/3　黒褐色シルト　褐色土を７％含む
6　10YR2/2　黒褐色シルト　上位に褐色土粒を１％、下位に褐色土を５％含む
7　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を50％含む
8　10YR4/6　褐色粘土質シルト

7号陥し穴状遺構



7号陥し穴状遺構
1　10YR1.7/1　黒色シルト
2　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を10％含む
3　10YR3/3　暗褐色シルト
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土を５％含む
5　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を７％含む
6　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を20％含む
7　10YR4/6　褐色粘土質シルト
8　10YR1.7/1　黒色シルト　褐色土を10％含む

8号陥し穴状遺構



8号陥し穴状遺構
1　10YR5/2　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
2　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　褐色土粒及びその小ブロックを含む
3　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒をわずかに含む
4　10YR3/3　暗褐色シルト　褐色土粒を全体に含む
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
6　10YR3/3　暗褐色シルト　最下部にある腐食土

0　1：60　3m

第９図　５～８号陥し穴状遺構

（底面）Ｖ層の黒沢尻火山灰層で、ほぼ平坦である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

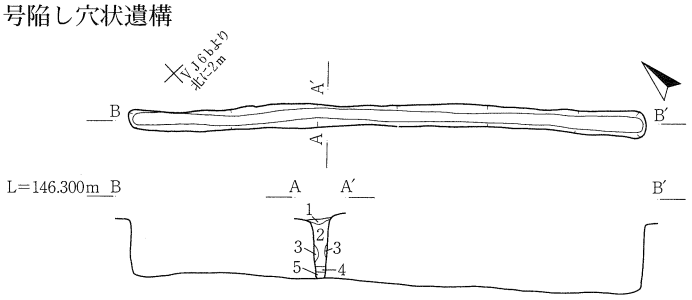
7号陥し穴状遺構（第９図、写真図版５）
（位置、検出状況）Ｃ区ＶＪ３ｊ、ＶＫ３ａグリッド他にまたがり、黒い溝状に検出された。
（平面形、規模）細長い溝状。開口部が3.68×0.35m、底部が3.61×0.11m、深さ110cm。
（長軸方向）Ｎ－40°－Ｅ
（堆積土状況）上層は黒色土、下層は褐色･黄褐色土と黒色土が交互に堆積し、最下層は黒色土である。
（壁）長軸方向はほぼ垂直に、短軸方向はやや外傾する様子が見られる。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層直上で、ほぼ平坦である。
（遺物、重複等特記事項）埋土上位から土器片が出土している。
（時期）遺物から縄文時代に属すると思われる。

8号陥し穴状遺構（第９図、写真図版５）
（位置、検出状況）Ｃ区ＶＪ２ｄグリッドにて、溝状に実際より短く検出された。
（平面形、規模）細長い溝状。開口部が3.56×0.25m、底部が3.61×0.18m、深さ52cm。
（長軸方向）Ｎ－４°－Ｗ
（堆積土状況）地山崩落土と思われる黄褐色土に挟まれ、黄褐色土粒を含む黒色～暗褐色土が主に堆積する。最下層は暗褐色の腐植土である。
（壁）半球状に底部から立ち上がる。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。やや東側に低く傾斜する。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

9号陥し穴状遺構（第10図、写真図版５）
（位置、検出状況）Ｃ区ＶＪ５ａ、５ｂグリッドにまたがり、黄褐色土粒を含む黒褐色の溝状に実際より短く検出された。
（平面形、規模）細長い溝状。開口部が4.03×0.19m、底部が3.97×0.11m、深さ48cm。
（長軸方向）Ｎ－45°－Ｗ
（堆積土状況）埋土は主に黒褐色土だが、黄褐色土粒を多く含み、上下にも黄褐色土層が堆積している。
（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。約15cm南東方向に低く傾斜する。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

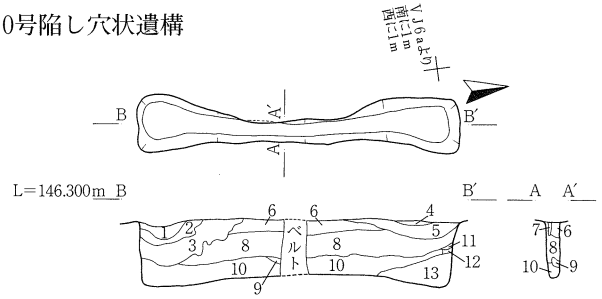
10号陥し穴状遺構（第10図、写真図版４）
（位置、検出状況）Ｃ区ＶＩ５ｊグリッドにて、両端の幅が広がる溝状に検出された。
（平面形、規模）細長い溝状。規模は開口部が2.52×0.47m、底部が2.37×0.32m、深さ55cm。
（長軸方向）Ｎ－５°－Ｗ

9号陥し穴状遺構



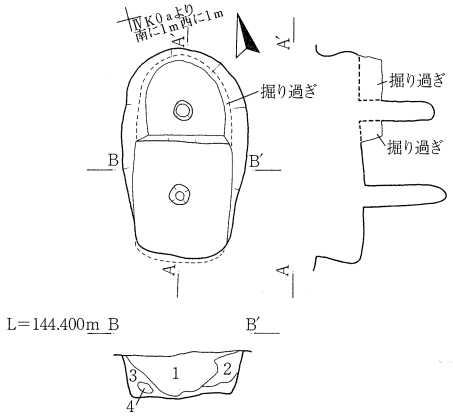
9号陥し穴状遺構
1　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土を10%含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土を30%含む
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト
5　10YR4/4　褐色粘土質シルト

10号陥し穴状遺構



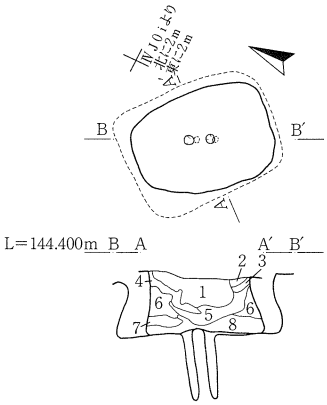
10号陥し穴状遺構
1　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　褐色土を40%南側を中心に含む
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を40%上位を中心に含む
3　10YR1.7/1　黒色シルト　褐色土粒を20%とそのブロックを含む
4　10YR3/2　黒褐色シルト　褐色土を40%南側下位を中心に含む
5　10YR1.7/1　黒色シルト　褐色土を25%含む
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土
7　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土を３%含む
8　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土の小ブロックを15%含む
9　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土を10%含む
10　10YR4/6　褐色シルト
11　10YR3/1　黒褐色シルト　黄褐色土の小ブロックを含む
12　10YR4/4　褐色粘土質シルト
13　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト

11号陥し穴状遺構



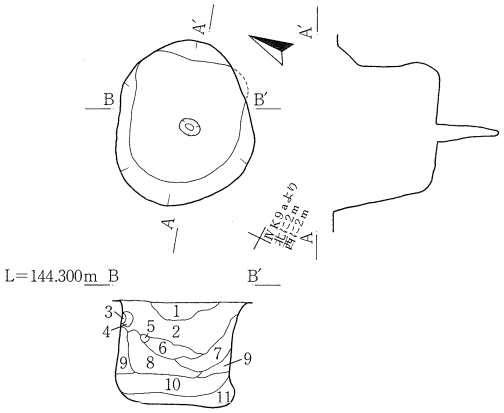
11号陥し穴状遺構
1　10YR2/1　黒色シルト　黒褐色土を40%含む
2　10YR2/3　黒褐色シルト　黒色土を25%含む
3　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　褐色土を15%含む
4　10YR4/6　褐色シルト　地山崩落土

12号陥し穴状遺構



12号陥し穴状遺構
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒をわずかに含む
2　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土粒を３%含む
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土を15%含む
4　10YR4/6　褐色粘土質シルト　暗褐色土を15%含む
5　10YR4/6　褐色粘土質シルト　暗褐色土を40%含む
6　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
7　10YR5/6　褐色粘土質シルト　西側はややしまり弱
8　10YR5/6　褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を２%含む
9　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土を10%含む

13号陥し穴状遺構



13号陥し穴状遺構
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を１%含む
2　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒を１%含む
3　10YR2/2　黒褐色シルト
4　10YR4/6　褐色シルト　黒褐色土を20%含む
5　10YR2/3　黒褐色シルト
6　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒を２%含む
7　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土を40%含む
8　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土を30%含む
9　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
10　10YR4/6　褐色粘土質シルト
11　10YR4/6　褐色砂質シルト

0　1：60　3m

第10図　9～13号陥し穴状遺構

（堆積土状況）黒色・黒褐色土と褐色・黄褐色土が互いの土粒を混入しながら交互に堆積する。
（壁）わずかに外傾する。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。中央部がやや高く、長軸両端へなだらかに傾斜する。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

11号陥し穴状遺構（第10図、写真図版５）
（位置、検出状況）　Ｃ区ⅣＪ９ｊグリッドにて、黒く楕円形に検出された。
（平面形、規模）楕円形状。開口部が0.99×1.67m、底部が0.78×1.66m、深さ39㎝。
（長軸方向）Ｎ－75°－Ｗ
（堆積土状況）互いの土粒を含む黒色土と黒褐色土を主とし、下層に褐色土粒及びブロックを含む暗褐色土が堆積する。
（壁）長軸はオーバーハング、短軸は外傾する様子がやや見られる。
（底面）Ｖ層の黒沢尻火山灰層である。ほぼ平坦で、２個の逆茂木痕と思われる副穴があり、直上に向かって開口している。底面からの副穴の深さは、南側が62㎝、北側は底面に掘り過ぎがあったため下層の底面からの深さとなるが57㎝である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

12号陥し穴状遺構（第10図、写真図版６）
（位置、検出状況）Ｃ区ⅣＪ８ｉグリッドにて、黒褐色の楕円形に検出された。
（平面形、規模）楕円形状。開口部が1.12×0.78m、底部が1.20×0.93m、深さ49㎝。
（長軸方向）Ｎ－25°－Ｗ
（堆積土状況）上層のみ黒褐色で、中層以下は地山崩落土・暗褐色土粒を含む黄褐色～褐色土が堆積する。
（壁）オーバーハングする。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層直上である。ほぼ平坦な長方形で、その中央に比較的小さな逆茂木痕と思われる副穴があり、やや北西方向に傾くもののほぼ直上に向かって開口している。底面からの副穴の深さは北西側が53㎝、南東側が52㎝である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

13号陥し穴状遺構（第10図、写真図版６）
（位置、検出状況）Ｃ区ⅣＪ８ｊ～ⅣＫ８ａグリッドにまたがり、黒褐色の円形に近い形で検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が1.11×1.33m、底部が0.87×0.98m、深さ87㎝。
（堆積土状況）上層は明黄褐色土を含む黒褐色土、中層は黒褐色土を多く含む黄褐色土、下層は褐色土が堆積する。
（壁）ほぼ垂直だが、南側のみやや外反する様子が見られる。
（底面）Ｖ層の黒沢尻火山灰層で、ほぼ平坦である。中央に逆茂木痕と思われる副穴があり、直上に

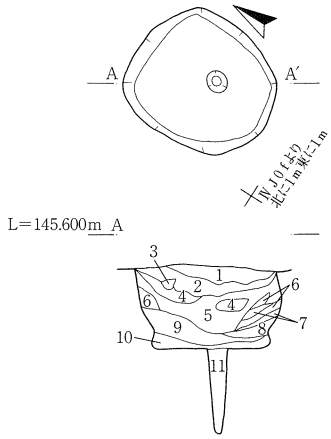
向かって開口している。底面からの副穴の深さは49cmである。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

14号陥し穴状遺構（第11図、写真図版６）
（位置、検出状況）Ｃ区Ⅳ Ｊ ９ ｆグリッドにて、黒く円形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が1.19×1.18m、底部が1.17×1.01m、深さ65cm。
（堆積土状況）上層は黒色・黒褐色・暗褐色土が堆積する。中層は褐色土、最下層は濃く褐色土だが、南側壁に沿った褐色土の間に、黄褐色と黒褐色土による縞状の交互の堆積が見られる。
（壁）Ｖ層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。底面付近で一度狭まった後、中位に向かって広がり、開口部に向かって再び狭まる。
（底面）ほぼ平坦で、中央に逆茂木痕と思われる副穴があり、直上に向かって開口している。底面からの副穴の深さは68cmである。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

15号陥し穴状遺構（第11図、写真図版６）
（位置、検出状況）　Ｃ区Ⅳ Ｉ ０ ｃグリッドにて、大部分が６号土坑に切られて検出され、６号土坑完掘後、全景が円形であることがわかった。
（平面形、規模）一部が切られた円形状。開口部が1.00×0.95m、底部が1.06×1.01m、深さ32cm。
（堆積土状況）切られているため、一部しか確認できないが、最下層は暗褐色土で、その上には黒色土を多く含む褐色土及び暗褐色土が堆積していたようである。
（壁）北側しか残っていないが、わずかに外反する様子が見られる。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。ほぼ平坦で、中央に逆茂木痕と思われる副穴があり、直上に向かって開口している。底面からの副穴の深さは61cmである。
（遺物、重複等特記事項）６号土坑と重複し、断面観察から新旧関係は15号陥し穴状遺構→６号土坑であると考えられる。
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

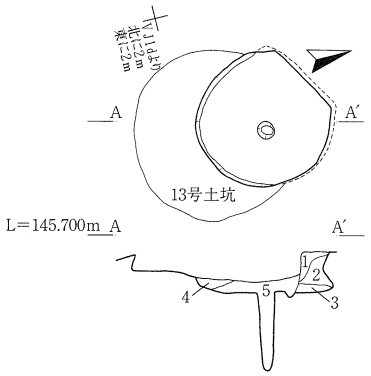
16号陥し穴状遺構（第11図、写真図版７）
（位置、検出状況）Ｃ区Ⅳ Ｊ ０ ｆグリッドにて、黒く円形に検出された。
（平面形、規模）平面形は円形状。規模は開口部が0.85×0.96m、底部が0.81×0.92m、深さ54cm。
（堆積土状況）上層中央に黒褐色土が堆積し、以下は黒褐色土・褐色土の混土と褐色または黄褐色土が交互に堆積する。最下層は暗褐色土である。
（壁）わずかに外傾した後、中位から開口部に向かって狭まる。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。中央部のやや南東に逆茂木痕と思われる副穴があり、ほぼ直上に向かって開口している。副穴に向かって周囲からわずかに低く傾斜する。底面からの副穴の深さは53cmである。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

14号陥し穴状遺構



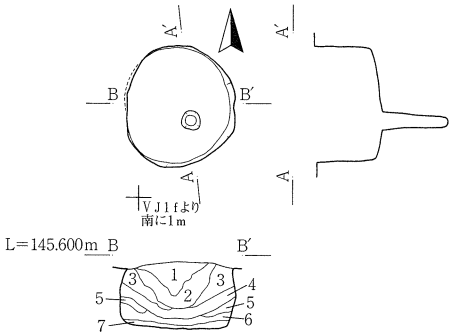
14号陥し穴状遺構
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土の細粒含む
2　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　1層のブロックを含む
3　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
4　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土粒をわずかに含む
5　10YR4/4　褐色粘土質シルト　黄褐色土粒、浮石粒をわずかに含む
6　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
7　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土との混土で帯状に堆積する
8　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒をわずかに含む
9　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土
10　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト
11　10YR3/3　暗褐色シルト　逆茂木の痕跡で他より深め

15号陥し穴状遺構



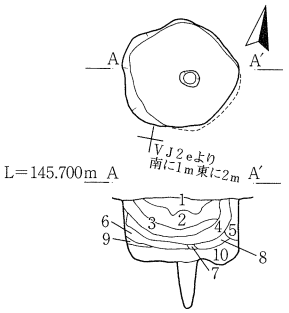
15号陥し穴状遺構
1　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒色土ブロックを20%含む
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト
3　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　褐色土を30%北東側を中心に含む
4　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒色土ブロックを含む
5　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト

16号陥し穴状遺構



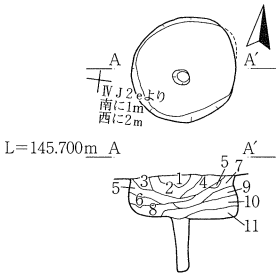
16号陥し穴状遺構
1　10YR1.7/1　黒色シルト　黄褐色土粒を5%含む
2　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　褐色土を20%含む
3　10YR4/6　褐色シルト　暗褐色土を7%含む地山崩落土
4　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　褐色土を25%西側を中心に含む
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト
6　10YR4/4　褐色粘土質シルト　黄褐色土を10%上位を中心に含む
7　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト

17号陥し穴状遺構



17号陥し穴状遺構
1　10YR1.7/1　黒色シルト　黄褐色土粒を5%含む
2　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土を30%西側を中心に含む
3　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土を10%含む
4　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土を30%上位を中心に含む
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　暗褐色土を10%含む
7　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土を10%含む
8　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土を5%含む
9　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　褐色土を10%含む
10　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　褐色土を15%含む

18号陥し穴状遺構



18号陥し穴状遺構
1　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土細粒を7%含む
2　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土細粒を40%含む
3　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土を2%含む
5　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土を40%含む
6　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土の小ブロックを7%含む
7　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土を40%含む
8　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土を5%含む
9　10YR5/8　黄褐色シルト　黒褐色土を15%西側を中心に含む
10　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土細粒を15%含む
11　10YR4/4　褐色粘土質シルト　黄褐色土を30%東側・西側を中心に含む

0　1：60　3m

第11図　14～18号陥し穴状遺構

17号陥し穴状遺構（第11図、写真図版７）
（位置、検出状況）Ｃ区Ⅳ Ｊ ０ ｄグリッドにて、黒色の円形に近い不定形で検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が0.92×0.85m、底部が0.86×0.83m、深さ53㎝。
（堆積土状況）最下層に暗褐色土が堆積し、下層に褐色土・黄褐色土を薄くはさんだ後、上層から中層に黒色・黒褐色・暗褐色の黒っぽい土層が黄褐色土を含んで堆積している。
（壁）ほぼに立ち上がる垂直に立ち上がる。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。ほぼ平坦だが、東側がわずかに低い。中央に逆茂木痕と思われる副穴があり、直上に向かって開口している。底面からの副穴の深さは37㎝である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

18号陥し穴状遺構（第11図、写真図版７）
（位置、検出状況）Ｃ区Ⅳ Ｊ ２ ｄグリッドにて、黒色土と黄褐色土の混土を覆土とする円形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が0.82×0.84m、底部が0.77×0.74m、深さ35㎝。
（堆積土状況）黒褐色・暗褐色土と褐色・黄褐色土が互いの土粒を含みながら交互にレンズ状に堆積する。
（壁）やや外傾した後、開口部に向かってわずかに狭まる。東側は更に外反する。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層をわずかに掘り込んでいる。ほぼ平坦で、中央に逆茂木痕と思われる副穴があり、ほぼ直上に向かって開口している。底面からの副穴の深さは42㎝である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

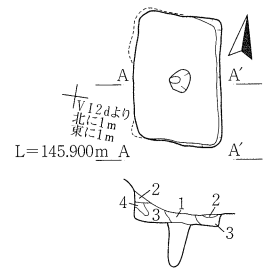
19号陥し穴状遺構（第12図、写真図版７）
（位置、検出状況）Ｃ区Ｖ Ｉ １ ｃ～１ ｄグリッドにまたがり、黄褐色の方形に検出された。
（平面形、規模）長方形状。開口部が0.68×1.11m、底部が0.65×1.09m、深さ50㎝。
（長軸方向）Ｎ－81°－Ｅ
（堆積土状況）中央は明黄褐色、周囲は黄褐色の地山崩落ブロックを含むにぶい黄褐色土である。
（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。平坦である。中央に逆茂木痕と思われる副穴があり、やや東に向いているもののほぼ直上に向かって開口している。底面からの副穴の深さは35㎝である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

20号陥し穴状遺構（第12図、写真図版８）
（位置、検出状況）Ｃ区Ｖ Ｊ ２ ａグリッドにて、暗褐色の楕円形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が1.14×1.03m、底部が0.98×0.89m、深さ66㎝。
（堆積土状況）最上層中央に黒色土、以下暗褐色と褐色・黄褐色土が交互に堆積し、最下層は黒褐色土が堆積する。

（壁）わずかにオーバーハングする。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層直上である。ほぼ平坦で、中央に逆茂木痕と思われる副穴があり、ほぼ直上に向かって開口している。底面からの副穴の深さは32cmである。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

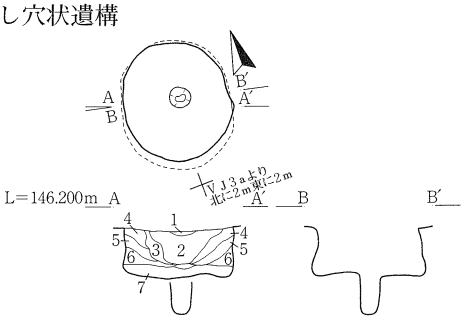
21号陥し穴状遺構（第12図、写真図版８）
（位置、検出状況）Ｃ区ＶＩ２ｉグリッドにて、暗褐色の円形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が0.69×0.82m、底部が0.91×0.94m、深さ29cm。
（堆積土状況）最上層中央に黒色土が堆積し、以下は黄褐色土を挟んで黒褐色・暗褐色土が堆積する。下層の黒褐色・暗褐色土には黄褐色の浮石を含む。
（壁）オーバーハングする。
（底面）Ｖ層最下位の山形軽石層直上で、ほぼ平坦である。中央に逆茂木痕と思われる副穴があり、直上に向かって開口しており、開口部付近で西側に広がる。底面からの副穴の深さは40cmである。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

19号陥し穴状遺構



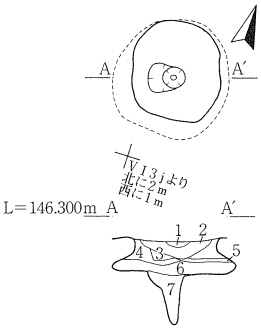
19号陥し穴状遺構
1　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト
2　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
3　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト

20号陥し穴状遺構



20号陥し穴状遺構
1　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒を全体に含む
2　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　黒褐色土粒と黄褐色土粒の混土
3　10YR4/6　褐色粘土質シルト　明黄褐色土粒及びその小ブロックを含む
4　10YR5/6　黄褐色シルト　地山崩落土
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　褐色土粒をまばらに含む
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落ブロックか
7　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　最下部に堆積する黒褐色土層

21号陥し穴状遺構



21号陥し穴状遺構
1　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒を全体に含む
2　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土粒及び黒褐色土粒との混土
3　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒とその小ブロックを含む
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
5　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黒褐色土と黄褐色土との混土
6　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒、浮石を含む
7　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　黄褐色の浮石をまばらに含む

0　1：60　3m

第12図　19～21号陥し穴状遺構

（２）土　　坑

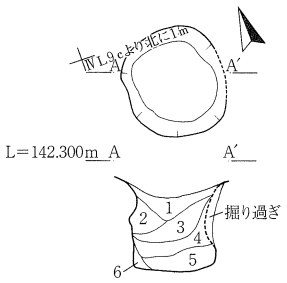
1号土坑（第13図、写真図版８）
（位置、検出状況）Ｃ区ⅣＬ８ｃグリッドにて、撹乱を除去した後、黒く不定形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が0.83×0.65m、底部が0.89×0.64m、深さ71cm。
（堆積土状況）上層は黒色土、中層以下は互いの土粒を含む黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積する。
（壁）西側は上位で、東側は中位で一度狭まった後、開口部に向かって外傾する。
（底面）Ｖ層の黒沢尻火山灰層である。ほぼ平坦である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

2号土坑（第13図、写真図版８）
（位置、検出状況）Ｃ区ⅣＬ９ｂグリッドにて、黒褐色の円形に近い不定形で検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が1.24×1.28m、底部が0.70×0.68m、深さ73cm。
（堆積土状況）南東側壁沿いには褐色土が堆積するが、他は黄褐色土・褐色土粒を含む黒褐色土・暗褐色土を主に堆積する。最下層は褐色土を含む暗褐色土である。
（壁）垂直に立ち上がった後、中位から大きく外反する。
（底面）Ｖ層の黒沢尻火山灰層で、ほぼ平坦である。北側の底部周囲に円礫が複数位置していた。
（遺物、重複等特記事項）人為的に底面に円礫を置いた墓壙である可能性があるが詳細は不明である。
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

3号土坑（第13図、写真図版９）
（位置、検出状況）Ｃ区ⅣＬ９ｂグリッドにて、黒く円形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が0.80×0.51m、底部が0.75×0.52m、深さ52cm。
（堆積土状況）上層中央の黒色土のほかは地山崩落ブロックを挟むにぶい黄褐色土を主とする。暗褐色土粒・黄褐色土粒を共に含む。
（壁）やや外傾する。
（底面）Ｖ層の黒沢尻火山灰層である。中央が低く、球状に周囲に高まる。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

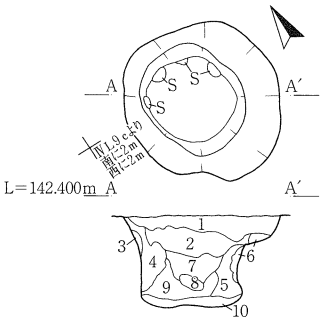
4号土坑（第13図、写真図版９）
（位置、検出状況）Ｃ区ＶＬ１ｂグリッドにて、不定形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が0.83×0.90m、底部が0.54×0.67m、深さ41cm。
（堆積土状況）黒色土や黄褐色粒を含む黒褐色土を主とする。最下層には褐色土が堆積している。
（壁）底面より球状に立ち上がる。
（底面）Ｖ層の黒沢尻火山灰層である。中央部より周囲に向かって球状に高まる。中央に粒径30cm以下の複数の礫が埋まっていた。
（遺物、重複等特記事項）人為的に円礫を埋めた墓壙の可能性があるが不明である。
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

1号土坑



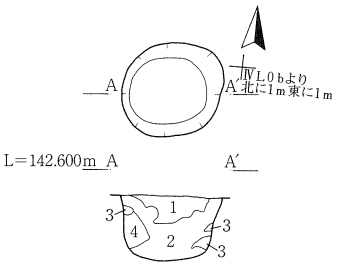
1号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　暗褐色土ブロック、黄褐色土粒をまばらに含む
2　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　黄褐色土や褐色土、暗褐色土を全体に含む
3　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒をまばらに含む
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土ブロックを含む
5　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を全体にわずかに含む
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土

2号土坑



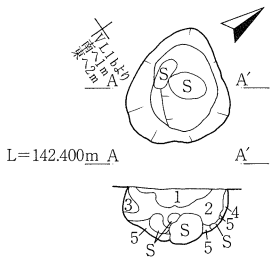
2号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土を30%南東側を中心に含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黒色土を40%含む
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
4　10YR3/3　暗褐色シルト　黒褐色土を２%、黄褐色土ブロックを15%含む
5　10YR4/6　褐色粘土質シルト　暗褐色土粒を５%含む
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土
7　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土粒を斑状に含む
8　10YR3/4　暗褐色シルト　黒褐色粒を５%、褐色土を７%含む
9　10YR3/4　暗褐色シルト
10　10YR3/4　暗褐色シルト　褐色土を10%中央部を中心に含む

3号土坑



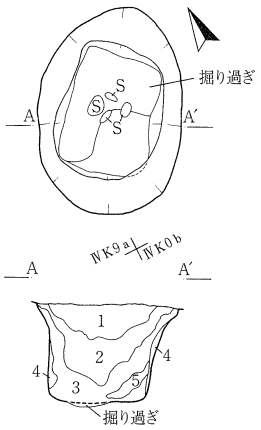
3号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　暗褐色土ブロック、黄褐色土粒をまばらに含む
2　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　黄褐色土や褐色土、暗褐色土を全体に含む
3　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
4　10YR4/4　褐色シルト　地山崩落ブロック含む

4号土坑



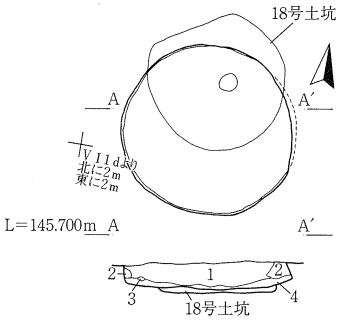
4号土坑
1　10YR4/3　黒褐色シルト　黒色土を25%と黄褐色土の小ブロックを含む
2　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土の小ブロックを10%含む
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
4　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黄褐色土を50%含む
5　10YR4/6　褐色粘土質シルト

5号土坑



5号土坑
1　10YR1.7/1　黒色シルト　褐色土ブロックを含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土を３%下位を中心に含む
3　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を３%、黄褐色土を15%含む
4　10YR4/6　褐色粘土質シルト
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土

6号土坑



6号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　暗褐色土小ブロック、黄褐色土粒をまばらに含む
2　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を霜降状に含む
3　10YR2/1　黒色シルト　１層のブロックか
4　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土粒、暗褐色土粒を全体に含む

0　1：60　3m

第13図　１～６号土坑

5号土坑（第13図、写真図版9）
（位置、検出状況）C区ⅣK9a～9bグリッドにまたがり、黒く楕円形に検出された。
（平面形、規模）長方形状。開口部が1.12×1.63m、底部が0.62×0.95m、深さ79㎝。
（長軸方向）N－62°－W
（堆積土状況）壁と底面に沿って黒褐色土・黄褐色土を含む褐色土が堆積し、その内側や上層に褐色土を含む黒色土・黒褐色土が堆積する。
（壁）やや外反する。
（底面）V層の黒沢尻火山灰層である。ほぼ平坦である。中央に4個の円礫が位置する。
（遺物、重複等特記事項）人為により底面に円礫を配置した墓壙の可能性があるが詳細は不明である。
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

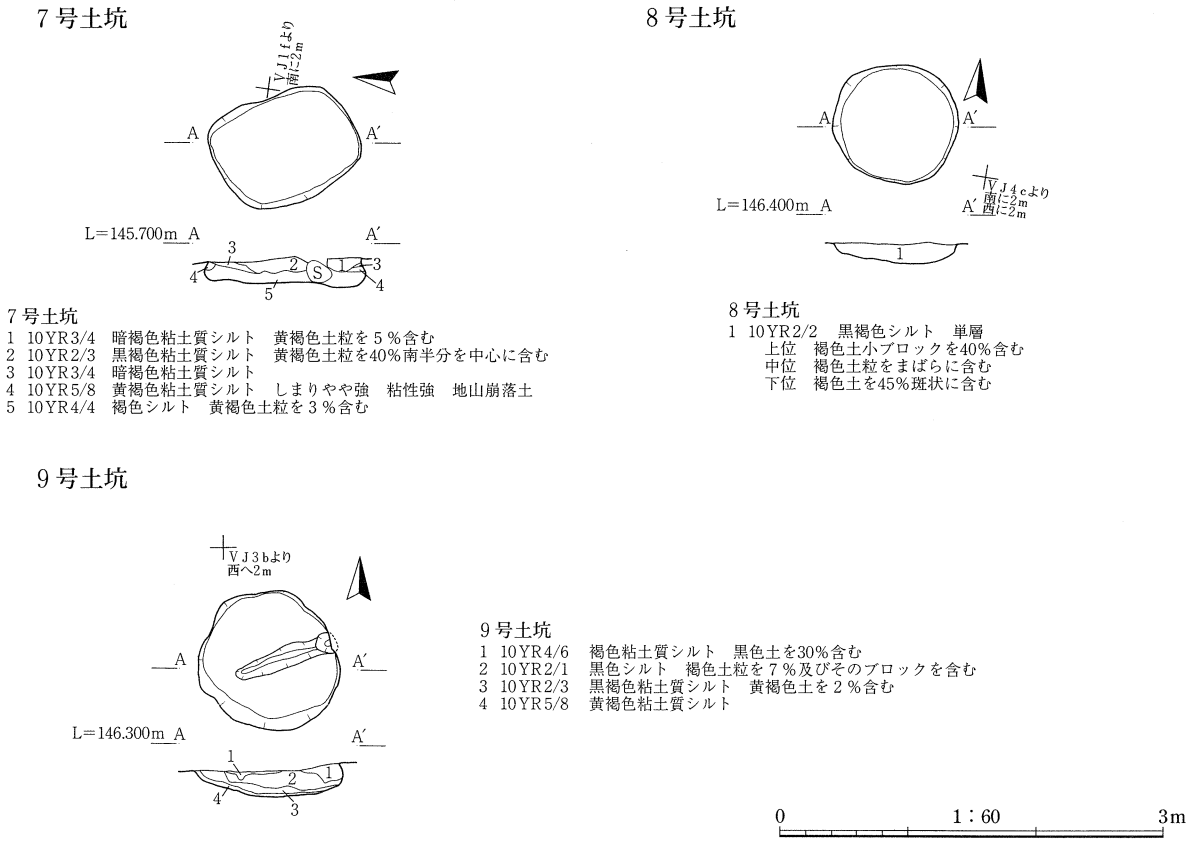
6号土坑（第13図、写真図版9）
（位置、検出状況）C区ⅣI0dグリッドにて、黒く円形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が1.34×1.34m、底部が1.36×1.32m、深さ21㎝。
（堆積土状況）暗褐色土ブロック・黄褐色土粒を含む黒色土を主に堆積する。最下層は黄褐色土粒を全体に含む暗褐色土である。
（壁）オーバーハングする。
（底面）V層最下位の山形軽石層を掘り込んでいる。中央部はほぼ平坦で、周辺部が壁に向かってややなだらかに高まる。
（遺物、重複等特記事項）15号陥し穴状遺構と重複し、断面観察から新旧関係は15号陥し穴状遺構→6号土坑であると考えられる。
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

7号土坑（第14図、写真図版10）
（位置、検出状況）C区VJ1eグリッドにて、黒褐色及び暗褐色の長方形に検出された。
（平面形、規模）長方形状。開口部が1.10×0.92m、底部が1.04×0.78m、深さ27㎝。
（堆積土状況）上層は黒褐色・暗褐色土、下層は褐色・黄褐色土が堆積する。上層中央の礫付近は黄褐色土粒を多く含む。
（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）V層の黒沢尻火山灰層である。北側から南側へわずかに低く傾斜する。中央のやや南側に粒径約20㎝の礫がある。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

8号土坑（第14図、写真図版10）
（位置、検出状況）C区VJ4bグリッドにて、黒褐色の円形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が0.97×0.96m、底部が0.86×0.92m、深さ15㎝。
（堆積土状況）黒褐色土の単層の堆積であるが、褐色土を、上層にはブロックで多く、中層にはブロックでわずかに、下層には斑状に多く含む。
（壁）わずかに外傾する。

（底面）Ⅴ層の黒沢尻火山灰層である。中央部がわずかに高く、長軸両端へなだらかに傾斜する。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。

9号土坑（第14図、写真図版10）
（位置、検出状況）C区ＶＪ３ａグリッドにて、部分的に褐色土を含み黒く円形に検出された。
（平面形、規模）円形状。開口部が1.10×1.12m、底部が1.04×0.99m、深さ29cm。
（堆積土状況）主に黒色土・黒褐色土、上層には部分的に褐色土、最下層には黄褐色土が堆積する。
（壁）Ⅴ層の黒沢尻火山灰層である。底面から半球状に高まるが、東側のみオーバーハングしている。
（底面）周辺から中央に向かって低くなり、ほぼ東西の直径上に通る溝状の構造へと続く。これは西から東へわずかに低く傾斜し、なだらかに続く東側壁ぎわの浅い副穴が最低部となる。
（遺物、重複等特記事項）上記の構造及び副穴の用途は不明である。
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。



7号土坑
1　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を５％含む
2　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を40％南半分を中心に含む
3　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　しまりやや強　粘性強　地山崩落土
5　10YR4/4　褐色シルト　黄褐色土粒を３％含む

8号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　単層
　上位　褐色土小ブロックを40％含む
　中位　褐色土粒をまばらに含む
　下位　褐色土を45％斑状に含む

9号土坑
1　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒色土を30％含む
2　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒を７％及びそのブロックを含む
3　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土を２％含む
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト

第14図　７～９号土坑

（3）焼土遺構

1号焼土遺構（第15図、写真図版10）

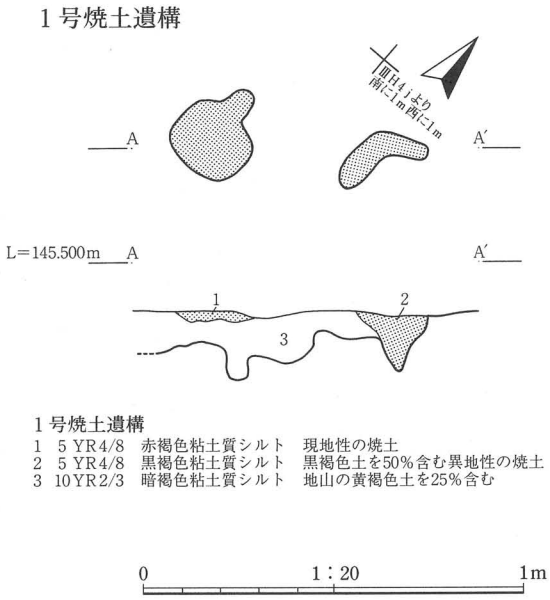
（位置、検出状況）Ｂ区ⅢＨ４ｊグリッドにて、地山面直上で検出された。

（平面形、規模）北東・南西の２箇所に分かれて位置する。南西側は北側に突起部分を持つ円形状で規模は21×25cm、厚さは３cmである。北東側は北西にふくらむ三日月形で長さ25cm、幅が最大で７cm、厚さは15cmである。

（埋土状況）２箇所とも、地山の黄褐色土を含む黒褐色土の撹乱に接しており、赤褐色をしているが、南西側が撹乱の上にあって混入物が少ないのに対し、北東側は撹乱と左右に並び黒褐色土を多く含んでいるため、南西側は現地性、北東側は異地性の焼土と考えられる。

（遺物）出土していない。

（時期）不明である。



第15図　1号焼土遺構

（4）出土遺物（第16図、写真図版11）

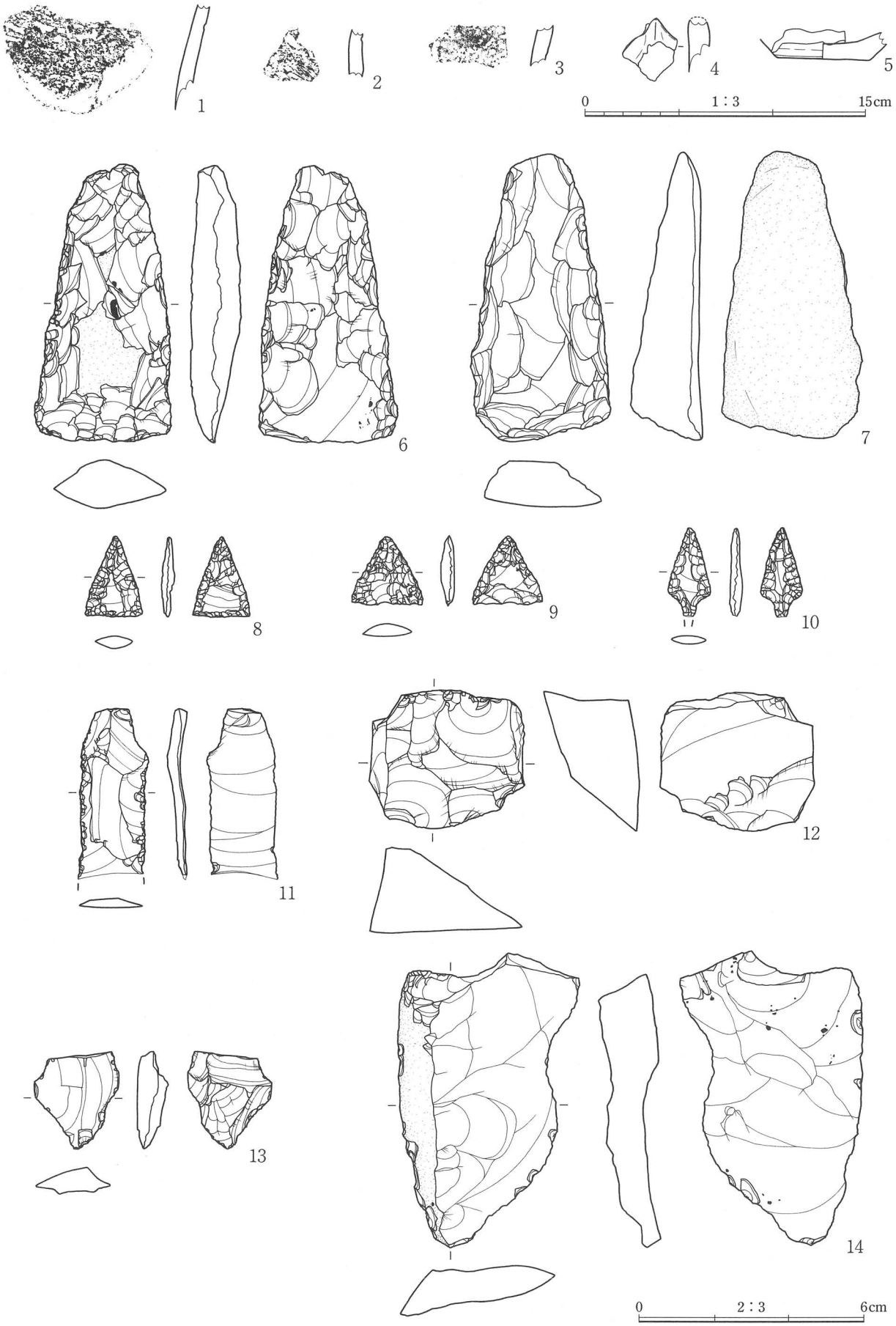
出土遺物は極めて少なく、土器片が７点（総重量89.8ｇ）、石器17点（377.7ｇ）、近現代の陶磁器片２点（156.1ｇ）で全てである。前述の基準に沿ってそのうち土器片５点、石器９点を掲載した。遺構内から出土した遺物は土器片１点、石器剥片１点で、他は試掘時または検出時に遺構外から出土したものである。

縄文土器

いずれも破片で、磨耗が激しく文様もはっきりとしない。１～３は胴部である。１には節のないＳ字連鎖沈文が見られ、大木２式など縄文時代の前期に属するものと思われる。２は７号陥し穴状遺構の埋土上位から出土し、円形の沈文の一部が２ヶ所に見られる。沈文中には細かな筋状の凹凸が見られるため、竹管等による刺突によるものではなく、縄を環状にして押し付けたループ文のようである。厳密に同一とはならないが、同様の文様は上川名Ⅱ式や大木１式に見られるため、この土器片は縄文時代の前期に属すると思われる。また、割り箸状のものによる刻目文のような文様も見られる。ループ文と刻目文を併せ持つ土器片の出土例が宮古市千鶏遺跡にあり、やはり縄文時代の前期に属すると考えられている。３には原体の回転によってつけられたと思われる文様があり、部分的にＲＬ縦回転に見えるが明確ではない。４は口縁部で、粘土を貼ってつけられた突起状の装飾の一部が見られる。５は底部で底面の直径は4.7cmと推定される。文様は見られない。いずれの胎土も繊維は含まれておらず雲母のような光沢のある粒子が含まれている点が共通している。

石　　器

６は石箆で、両面からの加工がなされている。刃部は直刃で、頭部は尖らずやや幅がある。７は片面加工による片刃の打製石器である。先端の刃部が激しく損傷しているため打製石斧であると判断した。８～10は石鏃であり、８は二等辺三角形の無茎、９は正三角形の無茎で基部が浅い凹型、10は有



第16図　出土遺物

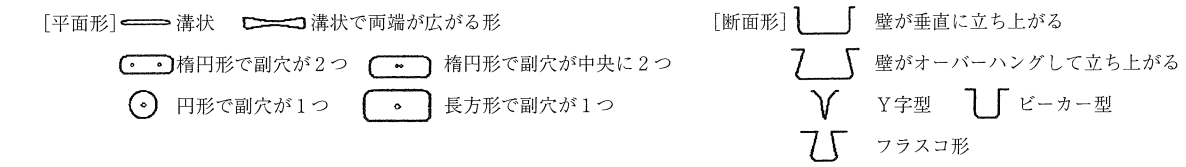
茎だが茎部の先端が欠損している。11は縦型の石匙である。片面からの加撃によって刃部が作られている点では一般的な石匙と共通しているが、薄手の剥片を材料としており、そのせいか側縁のみの加工となっている。また、つまみ部分の頭部は加工されているものの頸部は未加工で、刃部の先端は欠損している。製作途中に放棄されたのかもしれない。12は石核で、２つの打面からの加撃が認められる。13・14は加工痕または使用痕のある剥片で、13は４号陥し穴状遺構の埋土最上位から出土した。石材は、ホルンフェルスの７、赤色頁岩の10以外は頁岩で、全て奥羽山脈を産地としている。

第４表　陥し穴状遺構一覧表

遺構名	図版	写真	位置（グリット）	長軸方向	規模（cm）			平面形	断面形		副穴の深さ（遺構底面より）	重複・出土遺物
					開口部	深さ	底　部		長軸	短軸		
１号陥し穴状遺構	8	3	ⅣＫ７ｅ他	N41°-W	348× 37	53	337× 14				副穴なし	なし
２号陥し穴状遺構	8	3	ⅣＫ８ｄ	N53°-W	363× 32	93	361× 11				副穴なし	なし
３号陥し穴状遺構	8	3	ⅣＫ８ｂ他	N52°-W	394× 47	100	397× 19				副穴なし	なし
４号陥し穴状遺構	8	3	ⅣＫ７ａ	N64°-W	333× 53	101	350× 21				副穴なし	剥片
５号陥し穴状遺構	9	4	ⅣＪ８ｊ	N82°-W	385× 52	88	374× 14				副穴なし	なし
６号陥し穴状遺構	9	4	ⅣＪ８ｊ他	N70°-W	333× 43	103	326× 13				副穴なし	なし
７号陥し穴状遺構	9	5	ＶＪ３ｊ他	N40°-E	368× 35	110	361× 11				副穴なし	土器片
８号陥し穴状遺構	9	5	ＶＪ２ｄ	N 4°-W	356× 25	52	361× 18				副穴なし	なし
９号陥し穴状遺構	10	5	ＶＪ５ａ	N45°-W	403× 19	48	397× 11				副穴なし	なし
10号陥し穴状遺構	10	4	ＶＩ５ｊ	N 5°-E	252× 47	55	237× 32				副穴なし	なし
11号陥し穴状遺構	10	5	ⅣＪ９ｊ	N75°-W	167× 99	39	166× 78				62cm、57cm	なし
12号陥し穴状遺構	10	6	ⅣＪ８ｉ	N25°-W	112× 78	49	120× 93				53cm、52cm	なし
13号陥し穴状遺構	10	6	ⅣＪ８ｊ	—	133×111	87	98× 87				49cm	なし
14号陥し穴状遺構	11	6	ⅣＪ９ｆ	—	119×118	65	117×101			?	68cm	なし
15号陥し穴状遺構	11	6	ⅣＩ０ｃ	—	100× 95	32	106×101				61cm	６号土坑
16号陥し穴状遺構	11	7	ⅣＪ０ｆ	—	96× 85	54	92× 81				53cm	なし
17号陥し穴状遺構	11	7	ⅣＪ０ｄ	—	92× 85	53	86× 83				37cm	なし
18号陥し穴状遺構	11	7	ⅣＪ２ｄ	—	84× 82	35	77× 74				42cm	なし
19号陥し穴状遺構	12	7	ＶＩ１ａ他	N81°-W	111× 68	50	109× 65				35cm	なし
20号陥し穴状遺構	12	8	ＶＪ２ａ	—	114×103	66	98× 89				32cm	なし
21号陥し穴状遺構	12	8	ＶＩ２ｉ	—	82× 69	29	94× 91				40cm	なし

※副穴の深さのうち、11号土坑の「57cm」は掘り過ぎがあったため仮想の底面からの深さである。

※表中「平面形」「断面形」欄に記した図は遺構の形状を下記のように模式化したものである。



第５表　土坑一覧表

遺構名	図版	写真	位置（グリット）	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	底部	平面形	断面形	重複・出土遺物等
１号土坑	13	8	ⅣＬ８ｃ	83	65	71	89× 64	○	U	なし
２号土坑	13	8	ⅣＬ９ｂ	128	124	73	70× 68	○	U	底面に円礫
３号土坑	13	9	ⅣＬ９ｂ	80	51	52	75× 52	○	U	なし
４号土坑	13	9	ＶＬ１ｂ	90	83	41	67× 54	○	∪	底面に円礫
５号土坑	13	9	ⅣＫ９ａ他	163	112	79	95× 62	▢	U	底面に円礫
６号土坑	13	9	ⅣＩ０ｄ	134	134	21	136×132	○	底部のみのため不明	15号陥し穴
７号土坑	14	10	ＶＪ１ｅ	110	92	27	104× 78	○	底部のみのため不明	なし
８号土坑	14	10	ＶＪ４ｂ	97	96	15	92× 86	○	底部のみのため不明	なし
９号土坑	14	10	ＶＪ３ａ	112	110	29	104× 99	○	U ？	底面に溝状構造と副穴

※表中「平面形」「断面形」欄に記した図は遺構の形状を下記のように模式化したものである。

［平面形］○円形　▢方形　　［断面形］U ビーカー型　∪ 半球型　U フラスコ型

第６表　縄文土器観察表

掲載番号	出土地点	層位	部位	文様等	胎土
1	ＶＫ４ａ	Ⅴ層直上	胴部	Ｓ字状連鎖沈文	繊維を含まない。光沢のある粒子を含む。
2	７号陥し穴状遺構	埋土上位	胴部	ループ文・刻目文	
3	ⅥＡ南東	Ⅰ層	胴部	ＲＬ縦回転か	
4	ⅦＢ北西	不明	口縁部	装飾の突起	
5	ⅥＢ南西	不明	底部	なし	

第７表　石器観察表（第16図、写真図版11）

掲載番号	出土地点	層位	種類	石質・産地	長さ(cm)	幅(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
6	ⅥＤ０ｊ	Ⅰ層	石篦	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三期	7.5	3.6	1.3	34.1	両面加工
7	不明	不明	打製石斧	ホルンフェルス・奥羽山脈基盤・中生代白亜紀に変成	7.8	3.8	1.9	50.6	片面加工・先端部損傷
8	ⅦＥ１ａ	Ⅰ層	石鏃	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三期	2.2	1.5	0.4	0.8	無茎
9	ⅢＨ南西	撹乱	石鏃	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三期	1.9	1.9	0.4	1.1	無茎
10	Ａ区旧河道トレンチ	黒色土層（撹乱）	石鏃	赤色頁岩・奥羽山脈・新生代新第三期	(2.4)	1.1	0.3	0.6	有茎、茎部欠損
11	ⅣＪ北東側	撹乱	石匙	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三期	(4.6)	1.9	0.5	3.2	縦型。先端部折れ
12	ⅦＤ１ｊ	Ⅰ層	石核	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三期	3.8	4.1	2.6	35.4	
13	４号陥し穴状遺構	埋土最上部	剥片	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三期	(2.6)	2.3	0.8	3.1	加工痕又は使用痕あり
14	ⅦＢ南西	盛土	剥片	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三期	7.9	4.9	1.7	48.8	加工痕又は使用痕あり

4　ま　と　め

今回の調査では、陥し穴状遺構が21基検出されたことから、本遺跡が縄文時代の狩り場であったことが確認できた。また、その形態が溝状10基、楕円形２基、円形・方形９基と分類されることから、時期を異にして繰り返して狩り場となったこと、陥し穴状遺構とは形状や埋土の状況が異なる９基の土坑も検出されたことから、狩り場以外の生活の場であったことも明らかになった。

では、本遺跡はそれぞれの時期にどのような生活の場であったのであろうか。

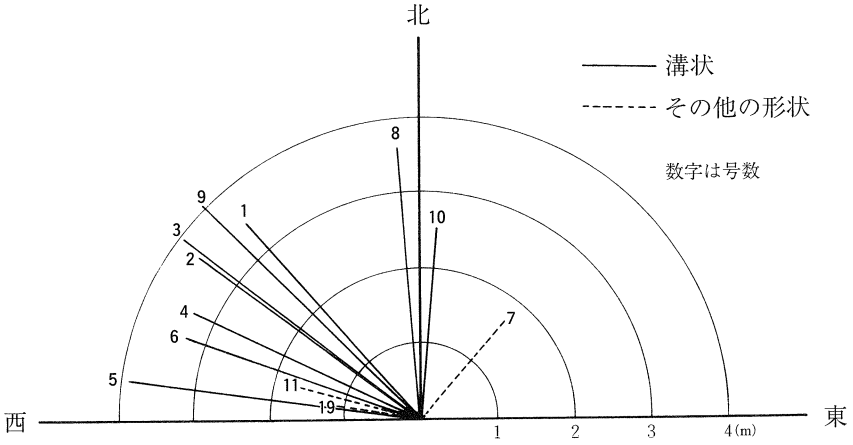
本遺跡から検出された溝状の陥し穴状遺構10基のうち、８基の長径は333～403cmの間に集中し形状もほぼ同様である。このうち、１号～３号陥し穴状遺構は位置が近く規模、長軸方向等に類似性があるため一連の遺構である可能性がある。８号・10号陥し穴状遺構は他と長軸方向が異なり、10号陥し穴状遺構は252cmと特に短く、形状も他とは異なって長軸の両端が広がる平面形であるため、溝状の陥し穴状遺構の中でも構築時期が異なるのではないかと思われる。

長経と短径に明確な差のある陥し穴状遺構13基のうち11基は、長径が北－南または南西－北東方向の軸を直行するようにつくられている。これらの遺構の検出されたＣ区は、北あるいは北東方向に低くなっており、その先には旧河道が検出されて現在も水路となっている。このことから、これらの陥し穴状遺構は、当時も北あるいは北東側に流れていたであろう沢へと行き来する動物を捕獲するためにつくられたものではないかと考えられる。

本遺跡の陥し穴状遺構は大きく溝状、楕円形、円形または方形に類別されるが、田村壮一氏はその研究（田村　1987）の中で、陥し穴状遺構のうち平面形が溝状のものは縄文中期末～後期初頭、円形～方形のものは中掫浮石降下以前（縄文前期初頭以前。ただし円形～方形は県北地方に見られるタイプに限定）、楕円形のものについては、全体を同一と見ると「おおむね楕円形の陥し穴状遺構は溝形より新しいと見ることができる。」としている。これに本遺跡の遺構を当てはめてみると、円形～方形の13号～21号陥し穴状遺構、溝状の１号～10号陥し穴状遺構、楕円形の11・12号陥し穴状遺構の順で使用され、その時期は縄文時代の各時期にわたることとなる。しかし、田村氏の研究は岩手県北地方を中心としたものであること、本遺跡の溝状の７号陥し穴状遺構から縄文時代前期と思われる土器片が出土し遺構の存在時期はそれ以前と推測できることから（註１）、陥し穴遺構の形態と時期の関係は、本遺跡と県北地方では異なるという可能性も考えられる（註２）。

陥し穴状遺構の他に、９基の土坑が検出されているが、その形態や状況は、円形のもの、方形のもの、底部に溝状構造をもつもの、円礫が埋められているものなどと少数ながら多様である。過去の調査成果から食糧の貯蔵や墓壙などが想定されるものの、明確な手がかりはなく遺構及び遺跡の性格及び詳細な時期を特定することは難しい。

今回の調査で出土した遺物は少なく、時期を特定できたものもごく僅かである。



第17図　陥し穴状遺構の軸方向と長径

遺構の重複が１例（６号土坑と円形の15号陥し穴状遺構。６号土坑のほうが新しい）あるが、他の遺構や遺跡全体を知る手がかりとはなっていない。

山の神遺跡は、縄文時代及び古代に属するとされる遺跡で、かつては旧石器時代の遺物も表面採取されたが、開墾時に大規模な工事が行われているらしく、今回の調査で確認されたのは縄文時代に関するもののみであった。今回の調査記録が周辺遺跡の調査成果とともに今後の研究の中で比較検討され、新たな位置付けをされていくことに期待したい。

註（１）田村氏は埋土上位からの遺物の出土は「通常その遺物以前の構築と考え、下限の設定に使われるべきであるが、陥し穴状遺構の場合は掘り込み土層中の遺物が流入する可能性があり即断はできない。」としており、そのため上位からの出土例は除外し中位～下位の例を挙げている。その中にも縄文早期～中期の出土例はあるものの構築時期を特定する重要な手がかりとはしていない。

（２）奥州市における過去の調査成果によると、溝状の陥し穴状遺構の埋土から、駈上遺跡（水沢区）では縄文時代早期後半～末葉、大清水上遺跡（胆沢区）では縄文時代前期の大木５式の土器片が出土している。さらに、中島遺跡（胆沢区）において埋土中の炭化物を分析したところ縄文時代前期末～中期という結果が得られている。

引用・参考文献

岩手県立博物館　1982『岩手の土器』岩手県立博物館

小林達雄ほか　1989『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』小学館

興野義一　1967～1970「大木式土器理解のために」（Ⅰ）～（Ⅵ）『考古学ジャーナル』ニュー・サイエンス社

佐藤淳一ほか　2006『大清水上遺跡発掘調査報告書』岩文振報告書第475集　（財）岩文振埋蔵文化財センター

鈴木明美ほか　1982『駈上遺跡』水沢市文化財報告書第７集　県土木部、水沢市教育委員会

鈴木道之助　1991『図録　石器入門事典　縄文』柏書房

高橋憲太郎ほか　1989『宮古市埋蔵文化財調査報告書16　千鶏遺跡―昭和62年度発掘調査報告書』宮古市教育委員会

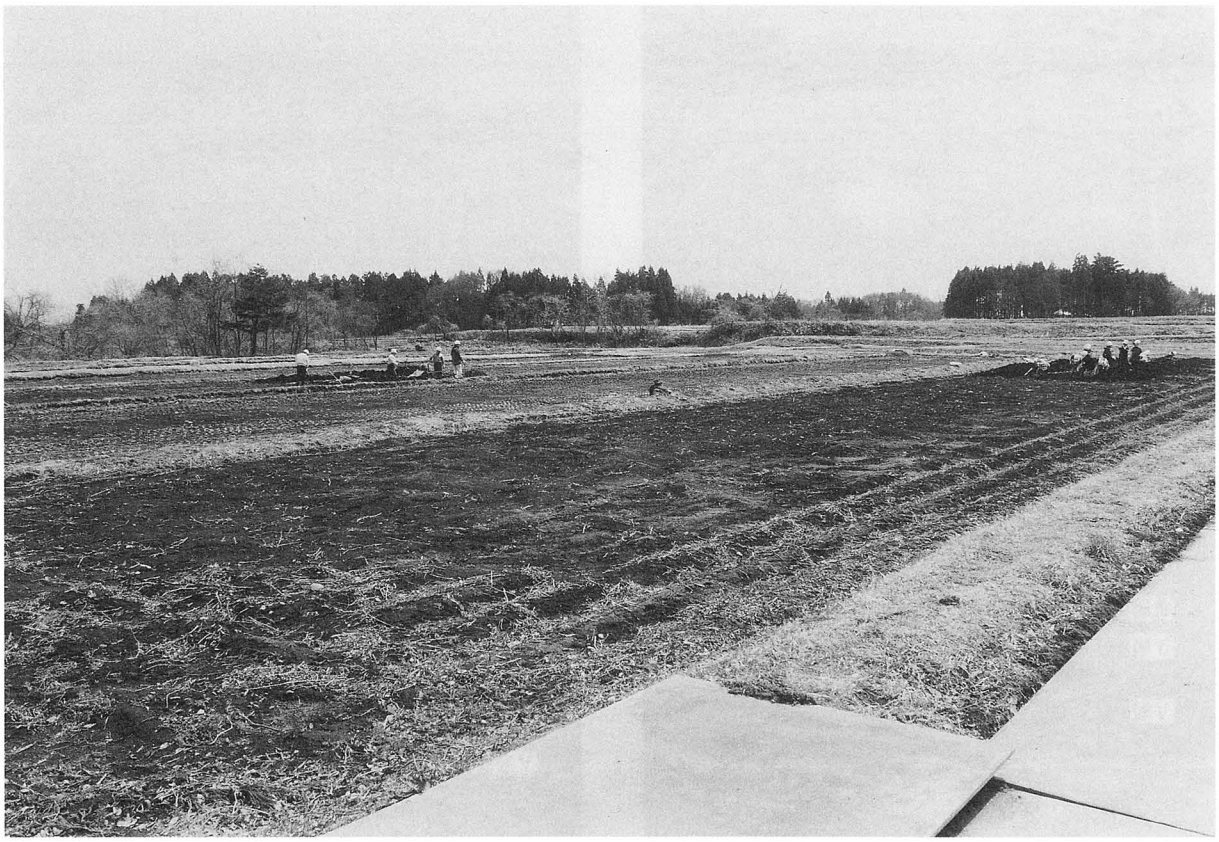
田村壮一　1987「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要Ⅶ』（財）岩埋文埋蔵文化財センター　25－44頁

窓岩伸吾ほか　2004『平成16年度発掘調査報告書』「宮沢原下ほか２遺跡」岩文振報告書第469集
（財）岩文振埋蔵文化財センター

山内清男　1979『日本先史土器の縄文』先史考古学会

写　真　図　版

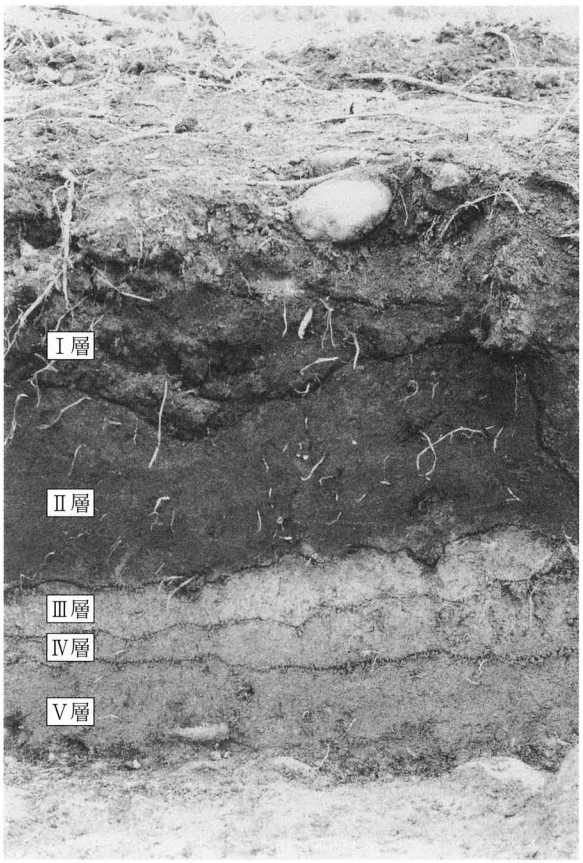
A区調査前状況（南→）

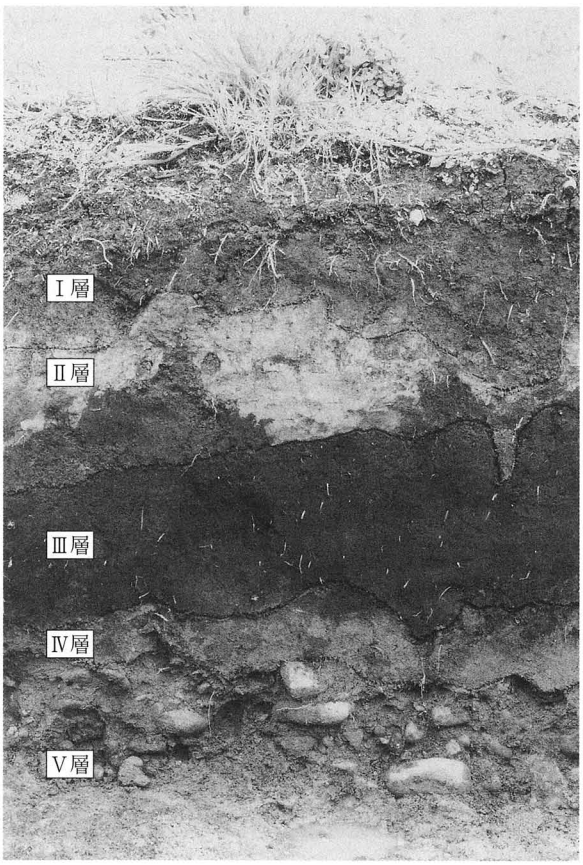


B区調査前状況（北西→）

写真図版１　A・B区調査前状況

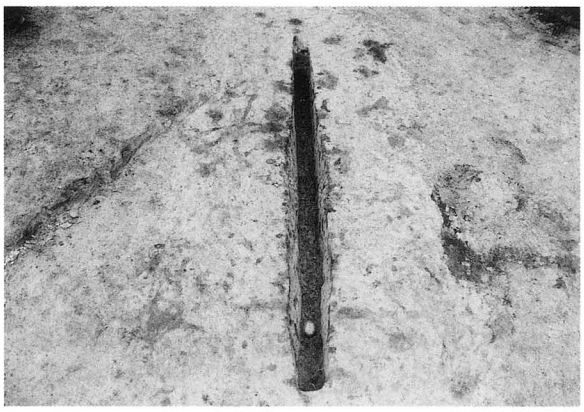
C区調査前状況（北西→）



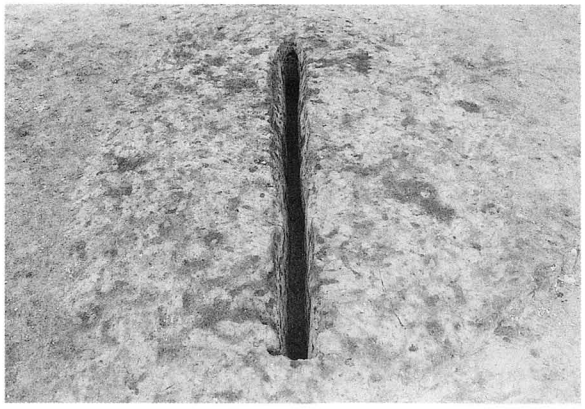


土層観察地点（B区）

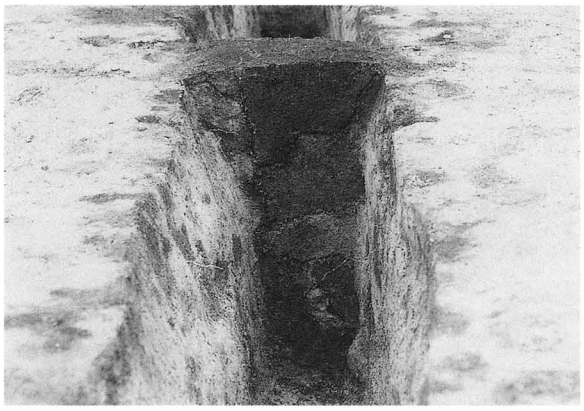
写真図版２　C区調査前状況、土層観察地点



1号陥し穴状遺構

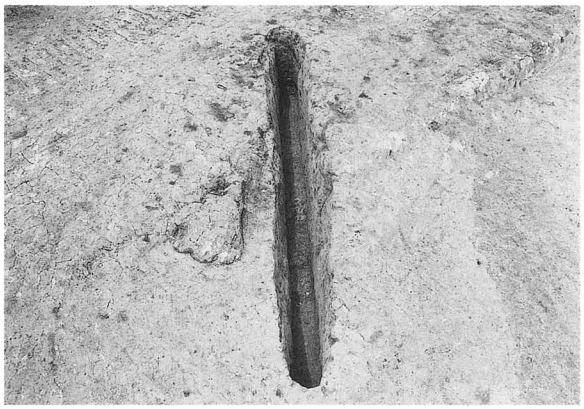


2号陥し穴状遺構

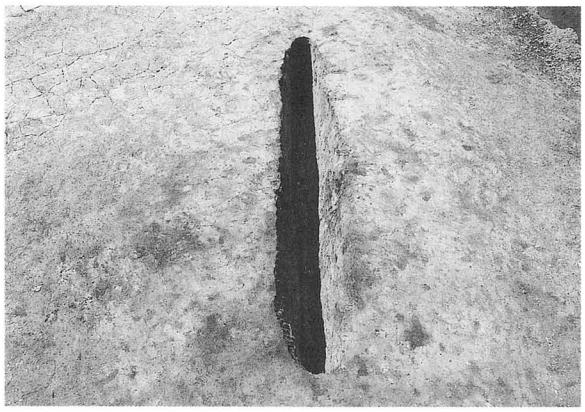


断　面

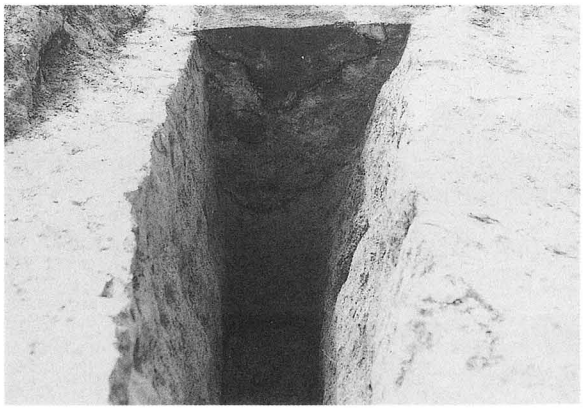
断　面



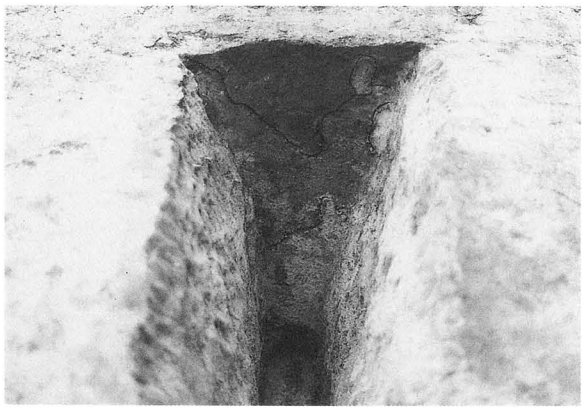
3号陥し穴状遺構



4号陥し穴状遺構



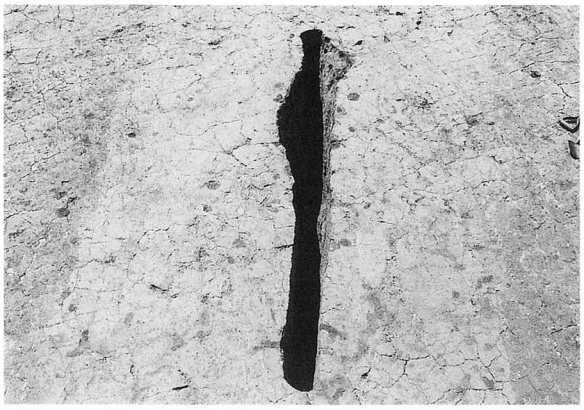
断　面



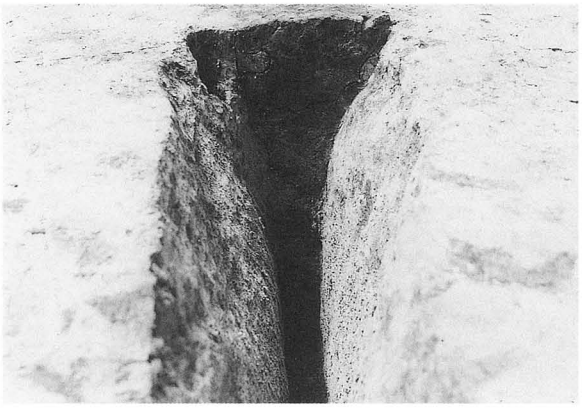
断　面

写真図版3　1～4号陥し穴状遺構

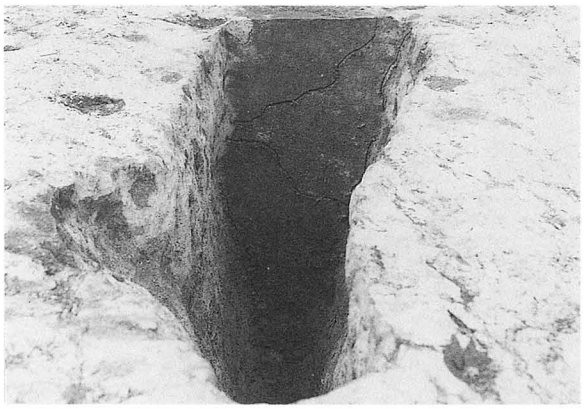
5号陥し穴状遺構



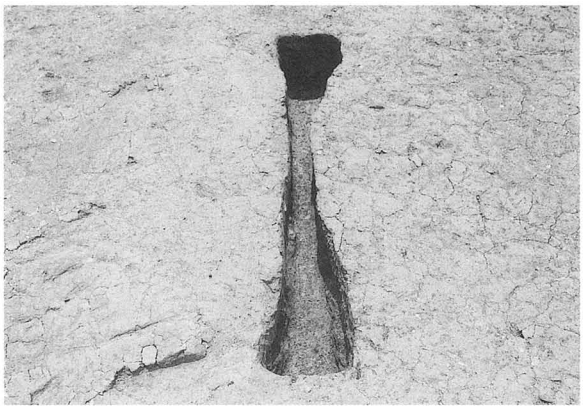
6号陥し穴状遺構



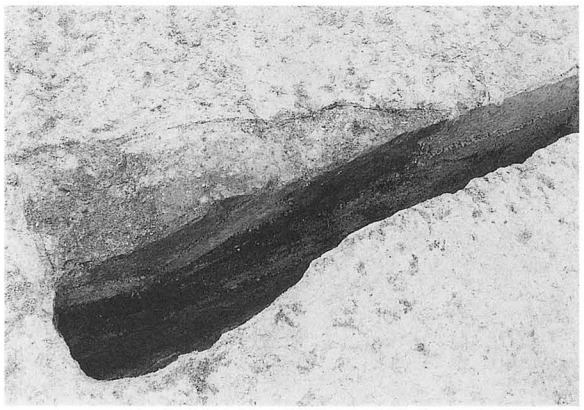
断　　面



断　　面



10号陥し穴状遺構

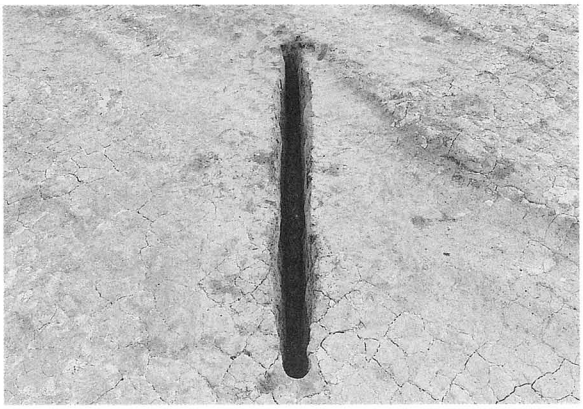


断面（長軸方向）

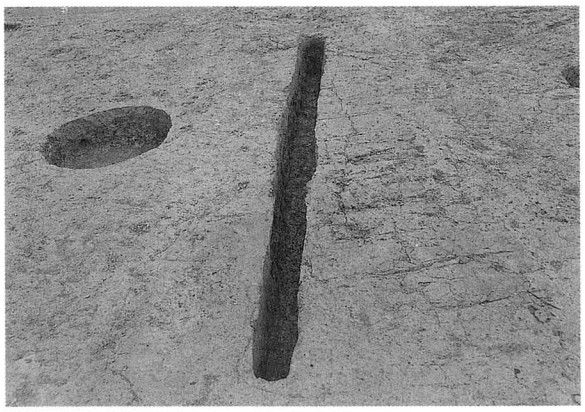
断面（短軸方向）

調査風景

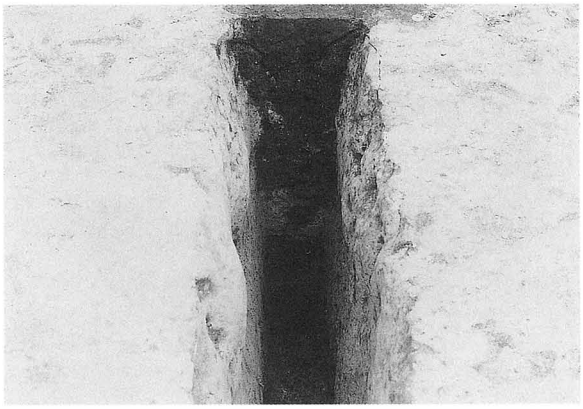
写真図版4　5・6・10号陥し穴状遺構ほか



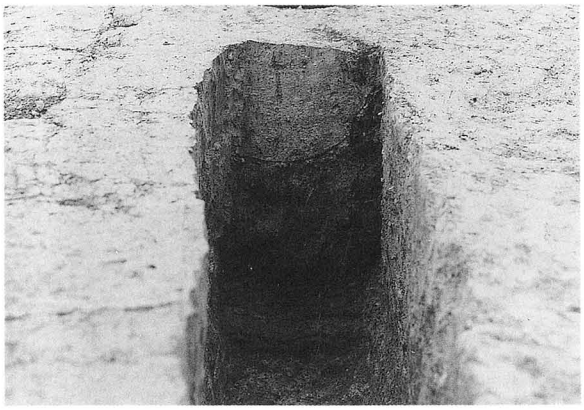
7号陥し穴状遺構



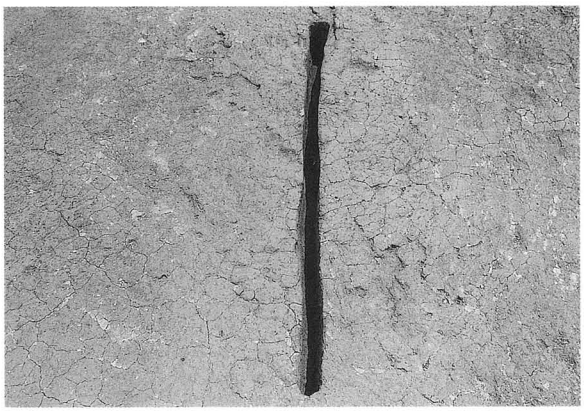
8号陥し穴状遺構



断　面

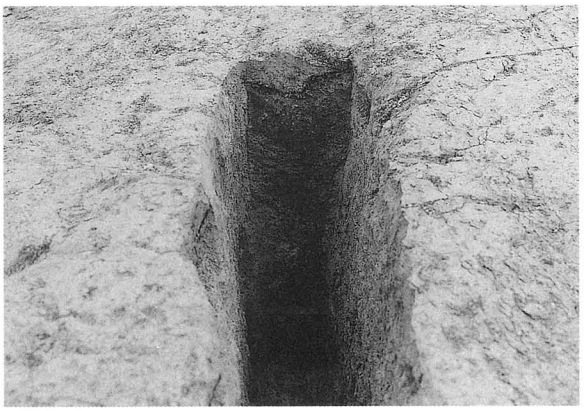


断　面

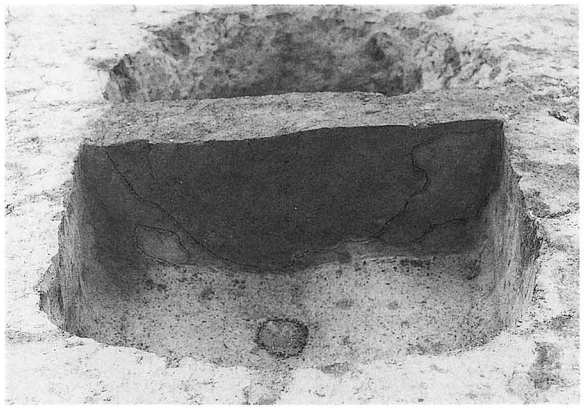


9号陥し穴状遺構

11号陥し穴状遺構

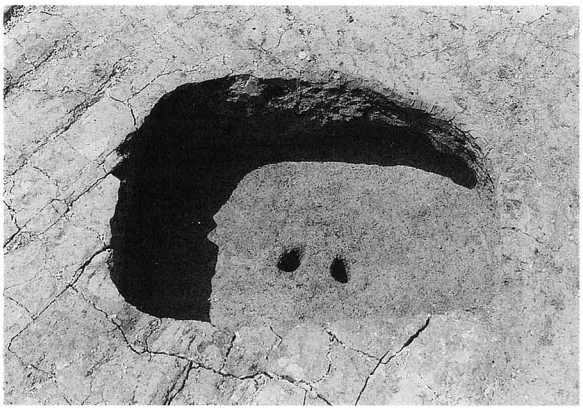


断　面

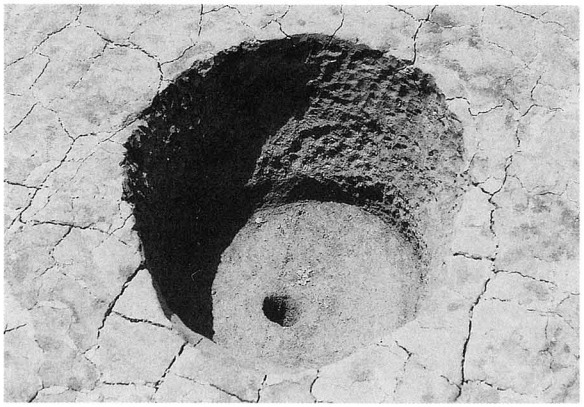


断　面

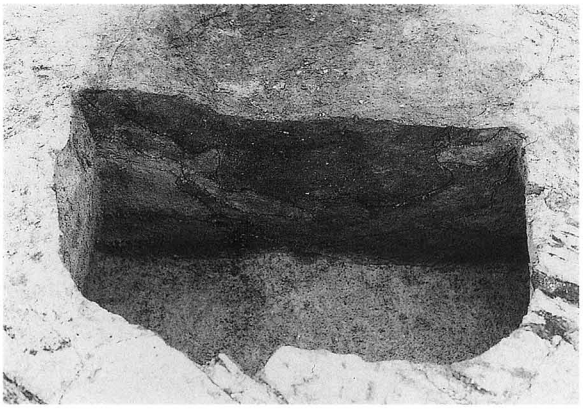
写真図版5　7～9・11号陥し穴状遺構



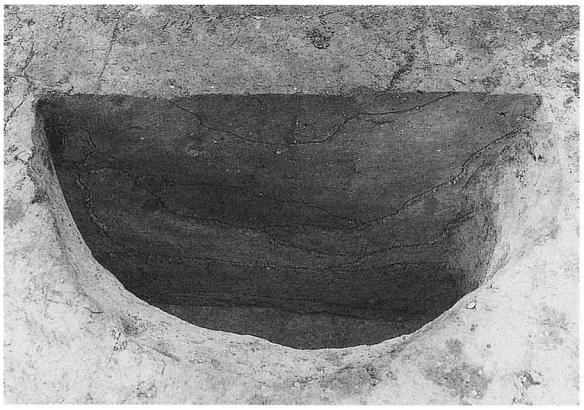
12号陥し穴状遺構



13号陥し穴状遺構



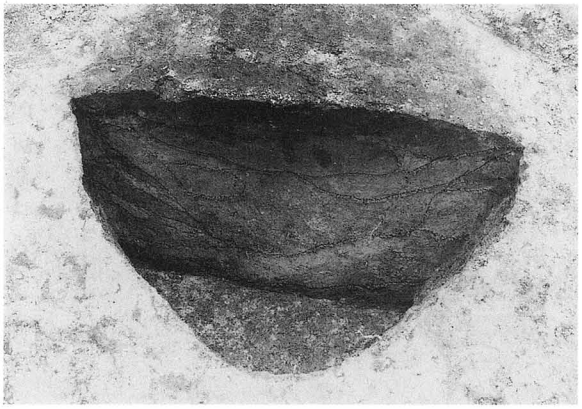
断　面



断　面

14号陥し穴状遺構

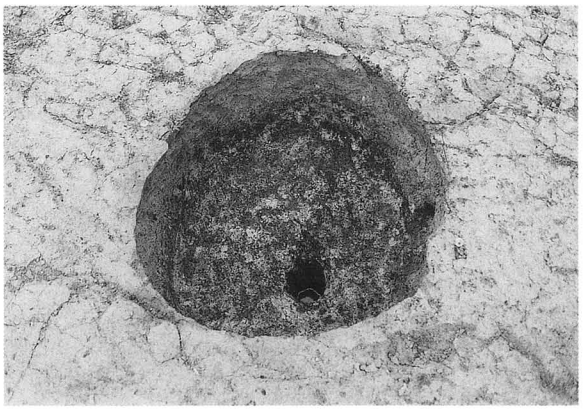
15号陥し穴状遺構



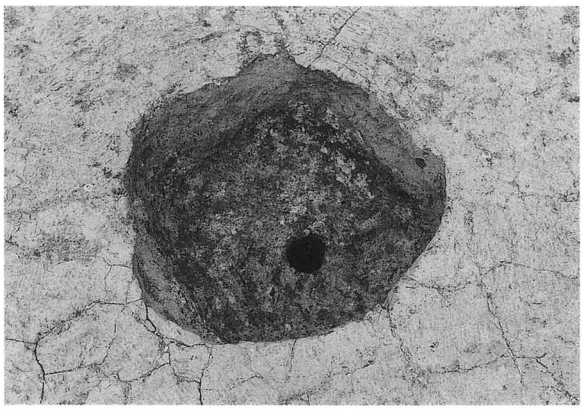
断　面

断　面

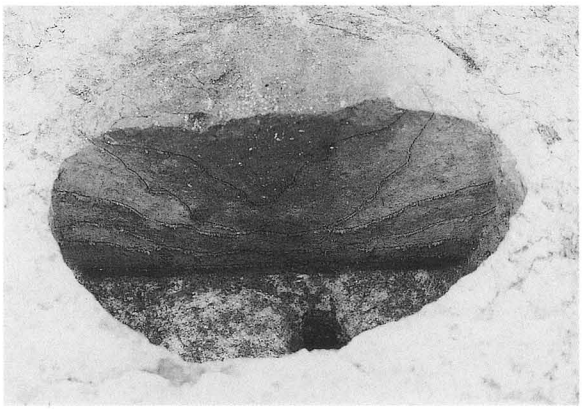
写真図版６　12～15号陥し穴状遺構



16号陥し穴状遺構

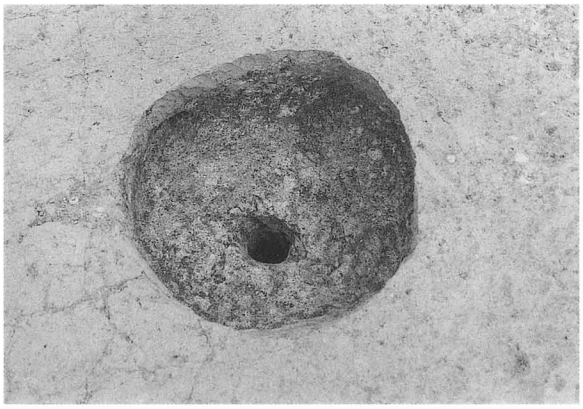


17号陥し穴状遺構

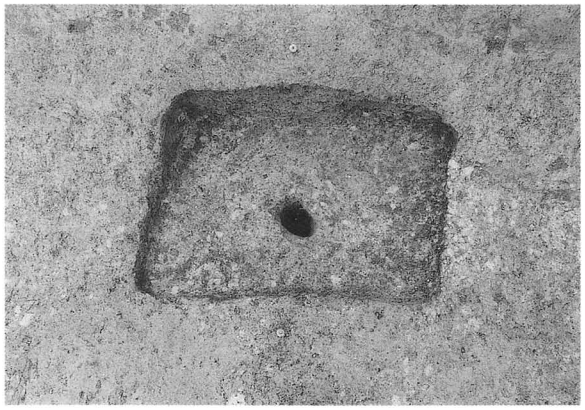


断　面

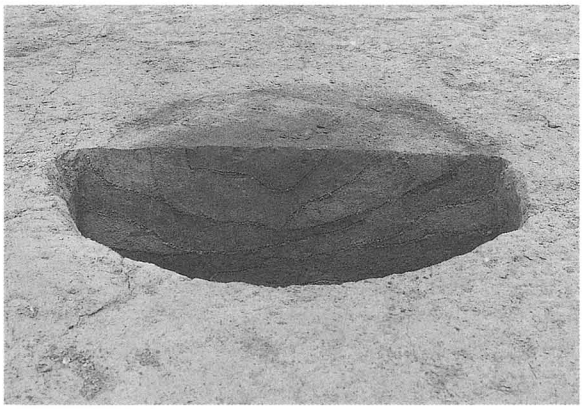
断　面



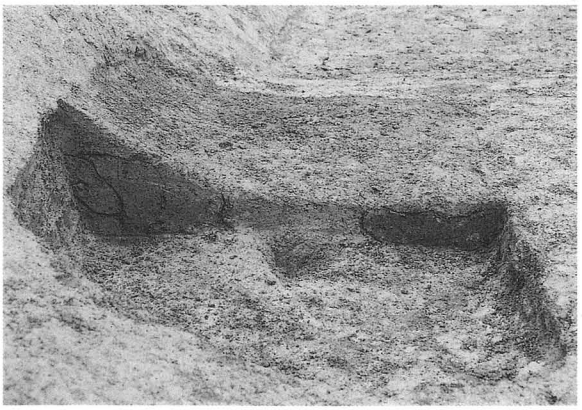
18号陥し穴状遺構



19号陥し穴状遺構



断　面

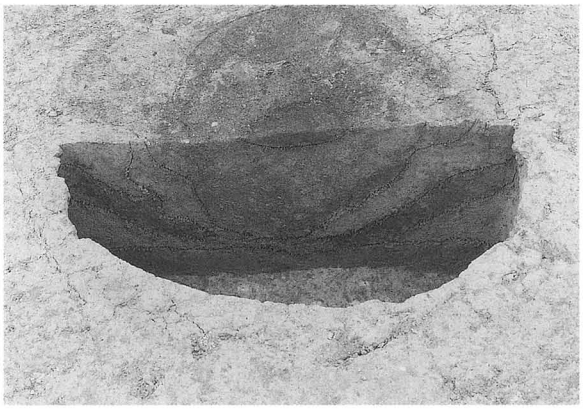


断　面

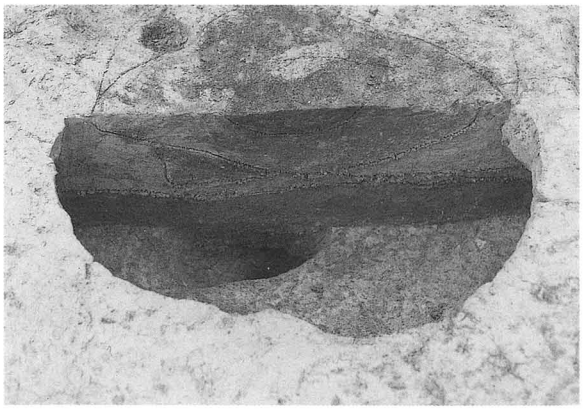
写真図版７　16～19号陥し穴状遺構

20号陥し穴状遺構

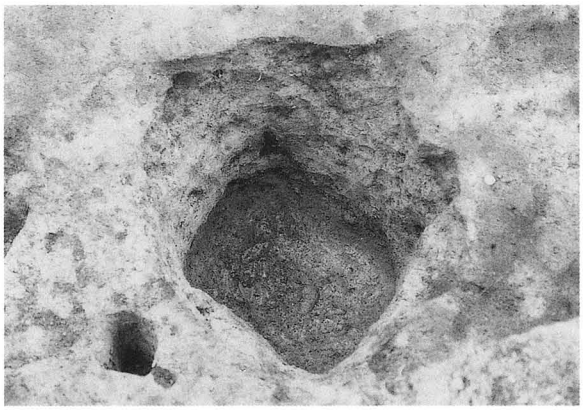
21号陥し穴状遺構



断　面



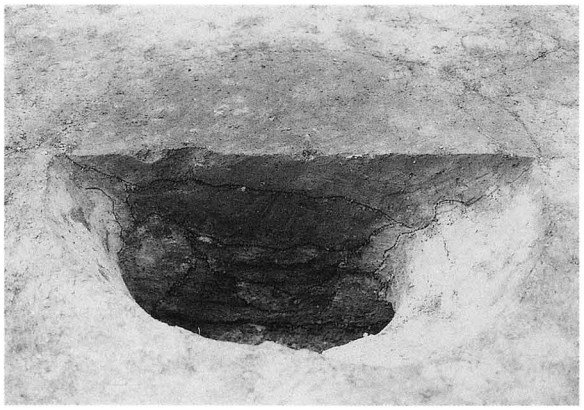
断　面



1号土坑

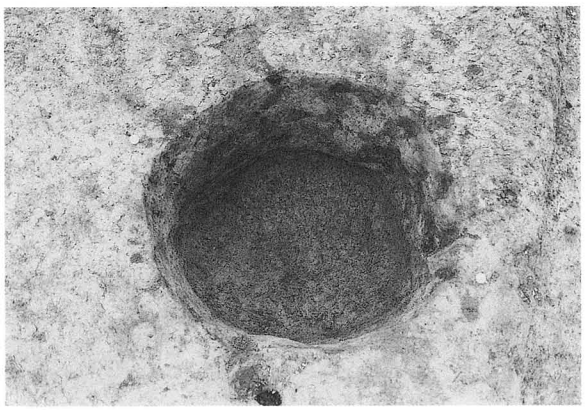
2号土坑

断　面

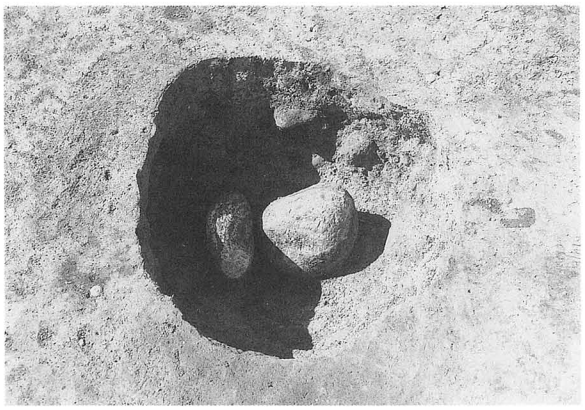


断　面

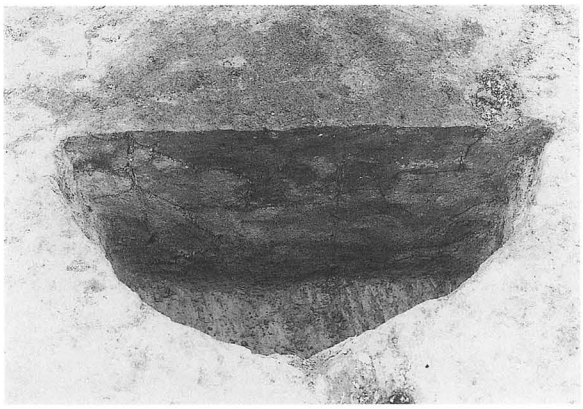
写真図版8　20・21号陥し穴状遺構、1・2号土坑



3号土坑



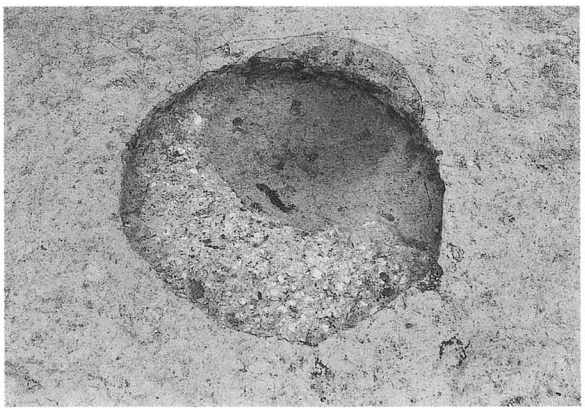
4号土坑



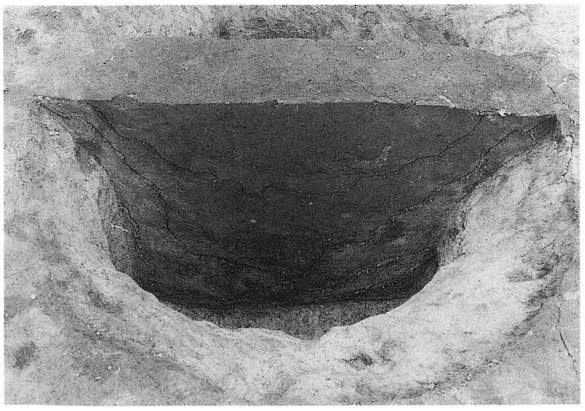
断　面

断　面

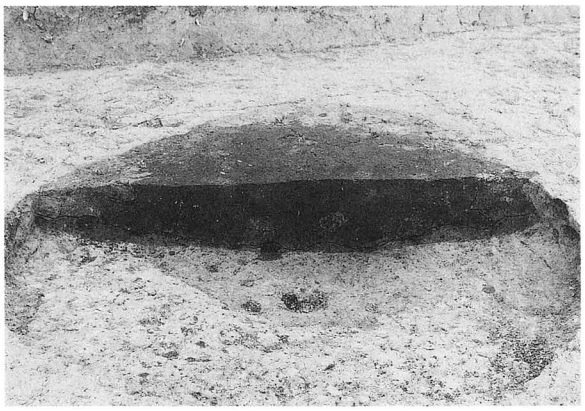
5号土坑



6号土坑

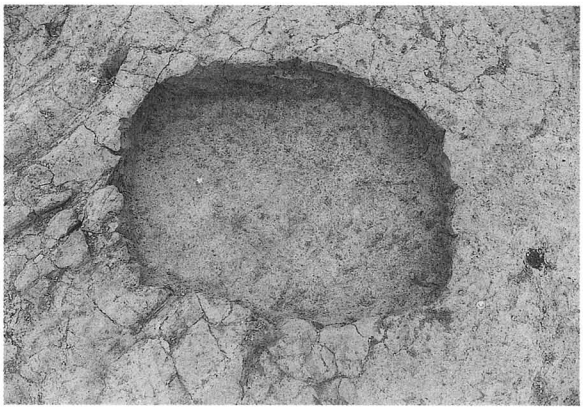


断　面

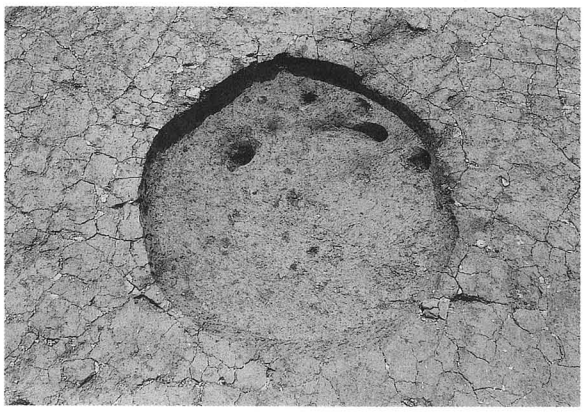


断　面

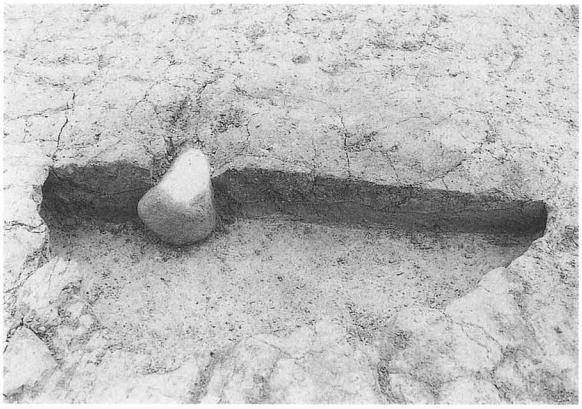
写真図版9　3～6号土坑



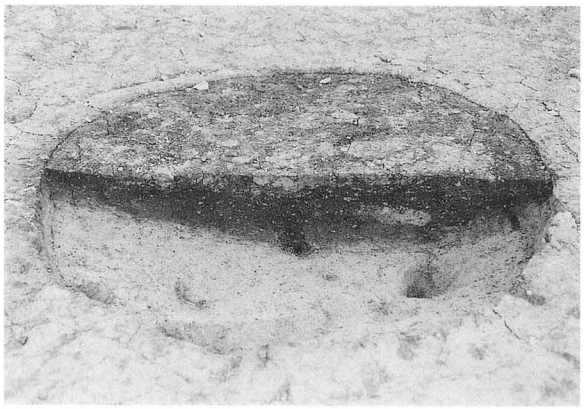
7号土坑



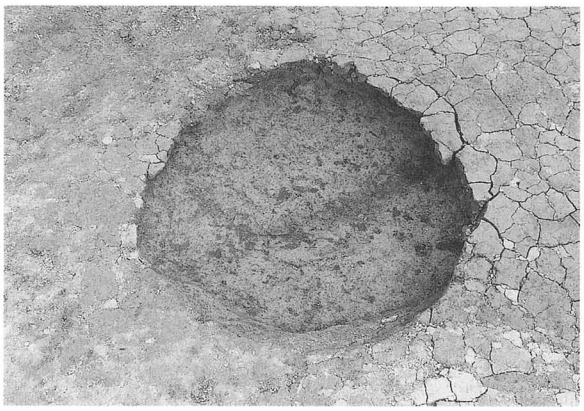
8号土坑



断　面

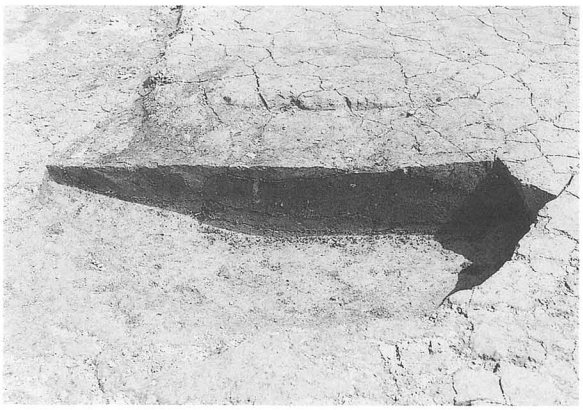


断　面



9号土坑

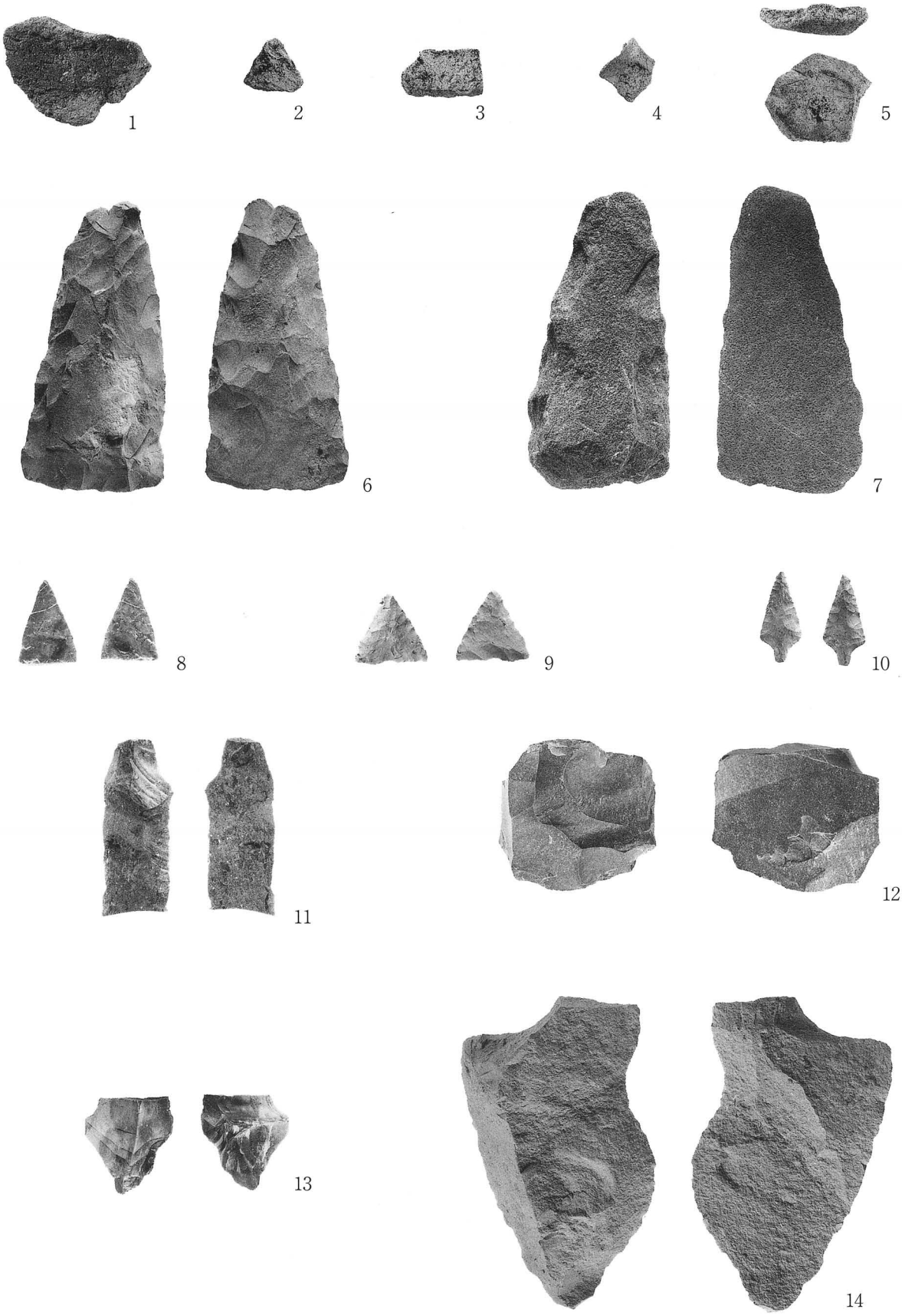
1号焼土遺構



断　面

断ち割り

写真図版10　7～9号土坑、1号焼土遺構



写真図版11　出土遺物

Ⅳ　宮沢原下遺跡第２次調査

１　基　本　層　序

今回の調査区における層序は、中央区の東端部に深掘りを入れて確認した。重機により深さ約１ｍ、山形軽石層と思われる層の上面まで掘削した。

ほぼ全域で以下に示した層序をなすと思われる。

第Ⅰ層　10ＹＲ３/３　暗褐色シルト質土

現表土や水田耕作土（Ⅰａ）、かつてのほ場整備の盛土（Ⅰｂ）である。層厚10～20㎝。

第Ⅱ層　10ＹＲ４/３　にぶい暗褐色シルト質土

漸移層で部分的に観察される。層厚10㎝前後。

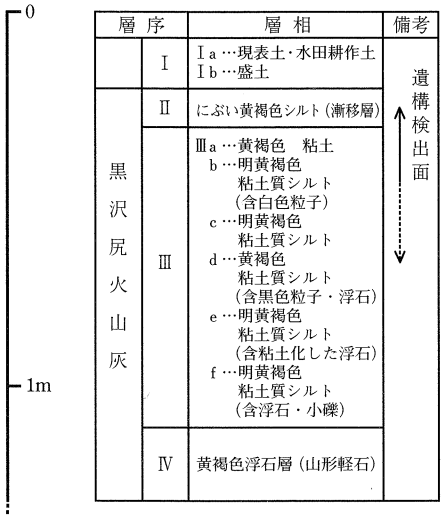
第Ⅲ層　10ＹＲ５/６～６/６　黄褐色～明黄褐色粘土質土

地山である黒沢尻火山灰層。層厚80～145㎝。白色の粒子を含むなどの特徴があり、６枚に分層される（Ⅲａ～Ⅲｆ）。このいずれかが遺構検出面となる。Ⅲｂ層がＡＴ下の淡黄褐色ガラス質火山灰かと思われる。

第Ⅳ層　10ＹＲ５/６　黄褐色浮石

黒沢尻火山灰最下部の山形軽石と思われる層で幾分粘土化している。陥し穴の底面となることが多い。

層厚20㎝前後か。



第18図　基本層序

なお、本層序の第Ⅱ層は第１次調査のⅣ層、第Ⅲ層はＶａ層、第Ⅳ層はＶｂ層である。今回の調査では、第１次調査のⅢ層（十和田ａテフラを含む）は観察されず、またＶｂ層面で確認される遺構も皆無であった。

（濱田）

２　野外調査と室内整理

（１）野　外　調　査

調査区（第19図）

便宜上、調査区を道路や水田の区画によって北区、中央区、南区の３カ所に分け、さらに北区に関しては、住宅を挟んで西、東とし区別した。調査面積は34,855㎡で、調査区は縦横それぞれがほぼ東西南北に沿って位置し、その幅は南北におよそ200ｍ、東西におよそ180ｍであった。

グリッドの設定（第20図参照）

グリッドの設定は、平面直角座標第Ｘ系（世界測地系）を用い、基準点２点、補点４点を外部業者に委託し調査区内に打設した。

これらを基準として50ｍの大グリットを組み、北から南へアラビア数字でⅠ、Ⅱ…西から東へアルファベットの大文字でＡ、Ｂ、…と表した。また、それぞれの大グリッドに５ｍ区画のグリッドを組み、北から南へ算用数字で１、２、…西から東へアルファベットの小文字でａ、ｂ、…と表した。それぞれのグリッドは、その組み合わせを用いて「ＩＡ１ａ」といった表記で示した。

粗掘り、遺構検出

一般的には、初めに試掘トレンチを設定して人力掘削を行い、土層の堆積状況と遺構検出面を確認するところだが、試掘調査や第１次調査の段階でそのような確認はできていたので、今回は最初から重機を用いて表土である耕作土や盛土を除去した。

遺構検出面は黒沢尻火山灰相当の褐色～明黄褐色土で、表土を除去すればその褐色土が見えたことも、重機での掘削で対応できた理由である。

表土除去の後は、鋤簾や両刃鎌等を用いて遺構検出作業を行った。南区については、湧水が激しく全域が浅い旧河道となっており、遺構等がある可能性が低いということから、重機によるトレンチ調査を行うだけで調査を終了している。

遺構精査について

遺構については、検出された順に「○号土坑」「○号溝」という表記で、遺構別に通し番号で表した。土坑には平面形状が数種類あったが、その分類は室内作業の時点で行うこととした。

遺構は陥し穴状遺構を含む土坑が65基検出された。楕円形状のものは半裁し堆積土の調査、実測をした後完掘作業を行った。半裁では数基の土坑で長軸側の半裁をして、断面から多くの情報を得ようと試みた。溝状のものはベルトを残して両側を掘り、堆積土の調査等を行った。

第19図　調査範囲と周辺の地形

遺物の取り上げについては、出土地点の記録や出土状況の写真撮影を心がけたが、土坑の掘削作業の中で出土地点がわからなくなり、作業員におおまかな出土地点を確認して、そのまま取り上げたものもある。

なお、土坑を掘削すると水が湧いてくる所が多く、人力で水くみをしたり、エンジンポンプをフル稼働するなどして対処した。堆積土の下部が湧水でもろくなったため、崩落した土坑が２基あった。またそれにより、下層の土層注記にも困難が多かった。

実測及び写真撮影

遺構の実測は、断面図及び平面図の作成を行った。円形の土坑以外はエレベーション図（カラ断面）の作成も行った。平面実測は、簡易遣り方測量と光波測距儀によるものを併用した。現場での図面縮尺は、土坑の平・断面図、溝跡・柱穴の断面図についてはすべて1/20、溝跡の平面図は1/100、掘立柱建物跡は1/50とした。

写真撮影は、35㎜判のモノクロームとカラーリバーサル各１台、モノクローム６×７判１台、デジタルカメラの計４台を使用した。それぞれの遺構について堆積土断面、完堀後の全景の２回の撮影を行い、状況に応じて他の撮影も行った。

なお、夏期の調査ということで、写真撮影はコントラストが強くなる日光の強い時間帯は避けるよう配慮をした。それでも陰影が強く出た写真もあることを付記する。

調査の経過

５月24日（水）　重機による表土掘削を開始。
６月５日（月）　北区西側から作業員（７名）による検出作業開始。
12日（月）　作業員増員（23名）中央区の検出作業開始。
数カ所で火山灰を含む土坑を確認。検出と並行して精査も進める。
23日（金）　北区東側、検出面直上より黒曜石出土。
28日（水）　基準点打設。
29日（木）　重機による表土掘削終了。
７月３日（月）　作業員増員（44名）。
18日（火）　１号溝東側から鉄製品出土。
25日（火）　衛生委員会巡回。
８月１日（火）　11名の作業員が他遺跡に移る。
３日（水）　岩手日報社の取材。
４日（金）　現地公開　13時～15時。
７日（月）　55号土坑より紡錘車出土。
８日（火）　(株)東邦航空による調査区の空中写真撮影を行う。
最終的に土坑66基、溝４条、掘立柱建物跡２基、柱穴46個、井戸跡８基などを確認した。
９日（水）　終了確認。
10日（木）～16日（水）　夏期休業に伴う現場閉鎖。
24日（木）　調査用具の搬出、調査終了。

（2）室　内　整　理

室内整理の期間は、平成18年11月１日～平成19年３月31日であった。整理に従事した調査員は平成18年11・12月に２名、平成19年１～３月に１名であった。作業員が平成18年の11月前半から平成19年の１月前半まで１名配属された。

報告書作成に関わって、野外調査で得られた各種資料や遺物は、次の手順で整理及び処理した。

遺構に関わる資料

実測図は平・断面図のポイントなどを点検した上で第二原図を作成し、トレースを行った。第二原図は報告書での体裁を考慮し、図版上で真北が上を向くように統一した。また、円形の土坑以外はエレベーション図の中に横断面図を組み入れるようにした。

写真はネガフィルムと一組にして、アルバムに撮影順に収納した。カラーリバーサルフィルムもスライドファイルに撮影順に収納した。

遺物の整理

遺物の水洗は、野外調査時と室内整理時に行った。その後、土器、陶磁器については復元作業を行い、実測・トレースの順に進めた。石器は種類別に選別し、実測・トレースを行った。金属製品の保存処理については、実測後岩手県立博物館に委託した。遺物の写真撮影は当センターの写場で行った。

遺物の選別、図化の基準

（土器）出土数が少ない中で選別した結果、縄文土器片１点と土師器片１点を掲載することとした。その他は破片が小さいため掲載しなかった。

（石器）個々に仕分け、登録、計測、分類を行い、一部の製品については図化を行った。

（陶磁器）復元できたものだけでなく、時代特定の資料としての価値を考慮し、破片も数点掲載した。

（金属製品）２点登録、図化し掲載した。　（菊池）

3　検出遺構と出土遺物

（1）調 査 の 概 要

発掘調査は平成17年度の試掘調査の結果を受け、約３ヶ月の間行われた。

前年度は町道の西側で第１次調査が行われ、200基以上の土坑が確認されたため、第２次調査も多くの遺構が検出されることが予想されたが、第１次調査区ほど遺構は密集していなかった。

ただし、①形状や堆積土が異なる土坑が検出されたこと②わずかではあるが金属製品（２点）や黒曜石（１点）が出土したことは貴重な成果であった。特に、十和田ａテフラと呼ばれる西暦915年に降ったとされる火山灰が堆積している土坑を数基確認できたことから、その火山灰が堆積土に含まれない土坑と時代が異なることが確認できた。また、十和田中掫テフラと呼ばれる約5,500～6,000年前に降ったとされる火山灰が堆積している土坑を４基確認した。

なお、これらの土坑や出土遺物によってこの周辺で人が生活している痕跡は確認されたが、竪穴住居跡は確認できなかった。

土坑の形状や堆積土から判断した、時代別、種類別の遺構とその数は次のとおりである。

縄文時代　土坑41基（陥し穴と思われるもの36基、性格不明土坑５基）

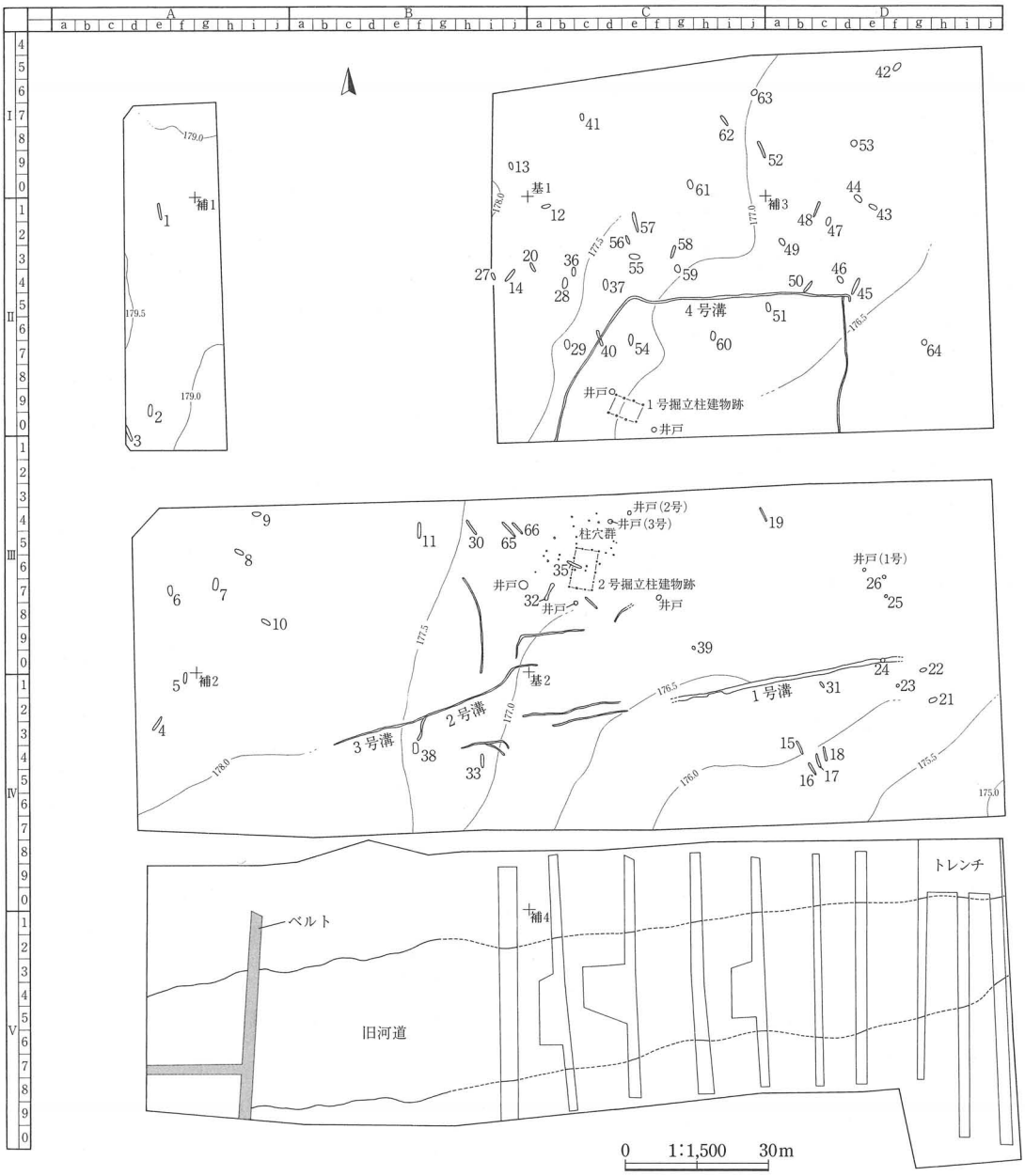
平安時代　土坑23基（陥し穴と思われるもの23基）副穴の有無に関係なく形状から陥し穴と判断した。なお、時代も平安時代より多少古い可能性がある。

近世　掘立柱建物跡２棟　　現代　溝跡１条
時代不明　土坑２基（時代が特定できなかったもの）　溝跡３条
　以下、検出遺構の詳細について、種類別に記述する。

（２）土　　坑

　調査の便宜上、穴状の遺構はすべて「土坑」としたが、陥し穴状遺構と思われるものには（　）で追記した。

１号土坑（陥し穴）（第21図、写真図版13）
（位置、検出状況）北区西側ⅡＡ１ｅグリッドで、溝状の黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部4.20×0.42m、底部4.48×0.12m、深さ110㎝。
（長軸方位）Ｎ－10°－Ｗ



第20図　遺構配置図

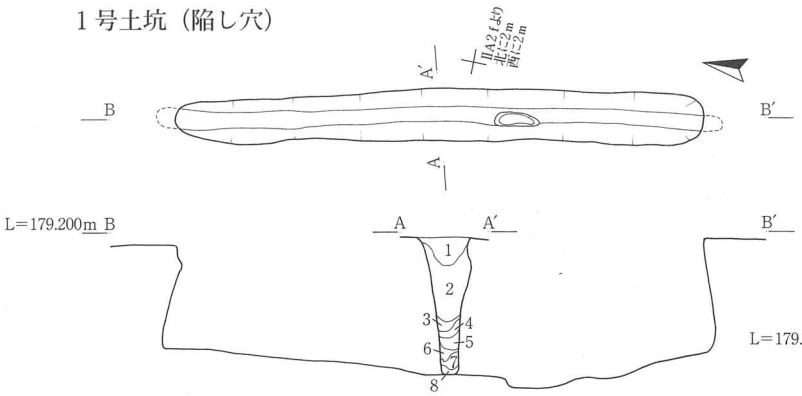
（堆積土状況）黒褐色土を中心に堆積するが、中位に黄褐色土が堆積する。全体に褐色土または褐色土粒を含み、８層に分層できる。自然堆積と思われる。
（壁）長軸の壁が開口部に向かってわずかに外反する。
（底面）中央部がわずかに下がる。長軸方向でオーバーハングする。１カ所浅いくぼみがある。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく特定はできないが、形状から縄文時代の遺構と推測される。（藤原・菊池）

２号土坑（陥し穴）（第21図、写真図版13）
（位置、検出状況）北区西側ⅡＡ０ｅなどのグリッドで、攪乱の周りに楕円形の黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部2.22×1.28m、底部2.00×0.52m、深さ106㎝。
（長軸方位）Ｎ－９°－Ｗ
（堆積土状況）下層に灰白色の火山灰を含む層が入る。黒褐色土～暗褐色土を中心に堆積し、７層に分層できる。全体に褐色土または褐色土粒を含んでいる。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かって広がるように、ゆるやかに外反する。
（底面）平坦に続く。５カ所副穴がある。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田ａテフラと思われる火山灰を下層に含んでいることから、平安時代には開口した状態であったことがわかる。したがって平安時代に作られた可能性が高いと思われる。（藤原・菊池）

３号土坑（陥し穴）（第21図、写真図版13）
（位置、検出状況）北区西側ⅡＡ０ｄグリッド付近に位置し、一部は調査区外に延びる。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は調査区で確認できる範囲で、開口部3.36×0.32m、底部3.22×0.22m、深さ100㎝。
（長軸方位）Ｎ－27°－Ｗ
（堆積土状況）上層に黒褐色土、中層に黄褐色土が堆積する。７層に分層できる。全体に褐色土または褐色土粒を含んでいる。自然堆積と思われる。
（壁）長軸、短軸いずれの壁もほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）ほぼ平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく特定はできないが、形状から縄文時代のものと推測される。（藤原・菊池）

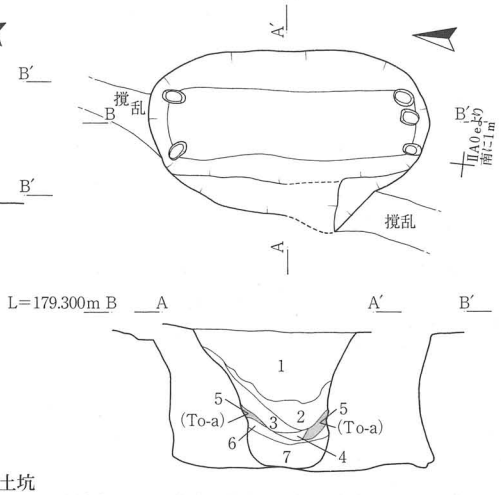
４号土坑（陥し穴）（第21図、写真図版13）
（位置、検出状況）中央区ⅣＡ３ｅグリッドで、溝状の黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部3.78×0.46m、底部3.74×0.20m、深さ98㎝。
（長軸方位）Ｎ－25°－Ｅ
（堆積土状況）黒色土、黒褐色土を中心に堆積するが、中層と最下層に黄褐色土が堆積する。自然堆積と思われる。
（壁）溝の両端の壁はほぼ垂直に、長軸の壁はやや外傾しながら立ち上がる。
（底面）平坦に続く。

１号土坑（陥し穴）



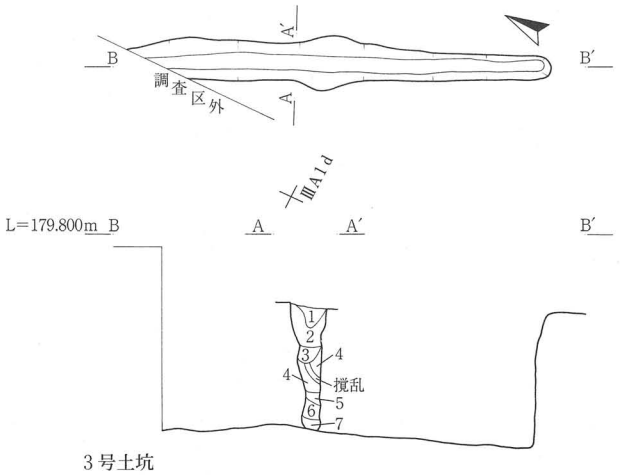
１号土坑
1　10YR3/2　黒褐色シルト　褐色土粒を７％、暗褐色土を30％斑状に含む
2　10YR4/4　褐色シルト　明褐色土を20％斑状に含む
3　10YR3/2　黒褐色シルト　褐色土粒を10％まばらに含む
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土ブロックを20％含む
5　10YR2/3　黒褐色シルト　褐色土ブロックを10％含む
6　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土粒をまばらに含む
7　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　褐色土を30％斑状に含む
8　10YR3/4　暗褐色シルト　褐色土粒を10％まばらに含む

２号土坑（陥し穴）



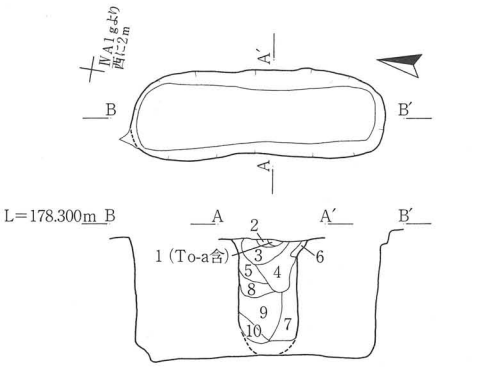
２号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土粒を３％含む　褐色土ブロックを３％まばらに含む　暗褐色土15％、極暗褐色土15％を斑状に含む
2　10YR3/3　暗褐色シルト　褐色土粒を７％、褐色土ブロックを３％、暗褐色土を10％含む
3　10YR3/4　暗褐色シルト　褐色土ブロックを10％まばらに含む　暗褐色土10％を含む
4　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒を３％含む　一部ラミナ状
5　10YR8/2　黄褐色シルト　黒褐色土を10％含む　粗粒子の十和田ａテフラをラミナ状に含む
6　10YR5/6　明褐色シルト　暗褐色土を15％斑状に含む
7　10YR3/3　暗褐色シルト　褐色土粒を７％まばらに含む

３号土坑（陥し穴）



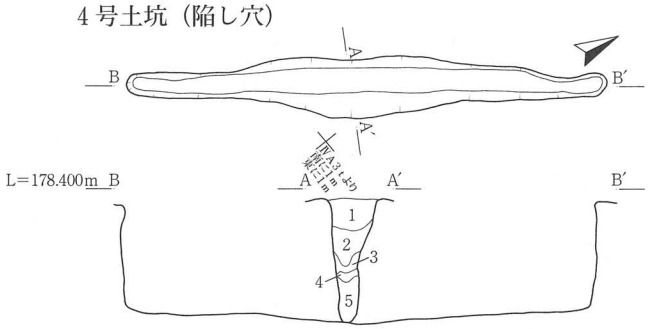
３号土坑
1　10YR1.7/1 黒色シルト
2　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒を20％まばらに含む
3　10YR2/3　黒褐色シルト　褐色土粒を７％、暗褐色土を20％斑状に含む
4　10YR5/6　黄褐色シルト　褐色土ブロックを７％まだらに含む
5　10YR4/6　黒褐色シルト　明褐色土粒を40％含む
6　10YR1.7/1 黒色シルト　明褐色土粒を７％含む
7　10YR2/3　極暗褐色シルト　褐色土粒を20％含む

５号土坑（陥し穴）



５号土坑
1　10YR3/3　暗褐色シルト　十和田ａテフラを30％含む
2　10YR3/2　黒褐色シルト
3　10YR3/2　黒褐色シルト　明褐色土粒を５％含む
4　10YR3/3　暗褐色シルト　明褐色土粒を15％含む
5　10YR2/1　黒色シルト
6　10YR2/2　黒褐色シルト
7　10YR2/3　黒褐色シルト　明褐色土粒を５％含む
8　10YR3/2　黒褐色シルト　明褐色土粒を５％含む
9　10YR2/2　黒褐色シルト　明褐色土粒を５％含む
10　10YR2/1　黒色シルト　明褐色土ブロックを10％含む

４号土坑（陥し穴）



４号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR2/1　黒褐色シルト
3　10YR4/4　褐色シルト
4　10YR3/2　黒褐色シルト
5　10YR4/4　褐色シルト

0　1：60　3m

第21図　１～５号土坑

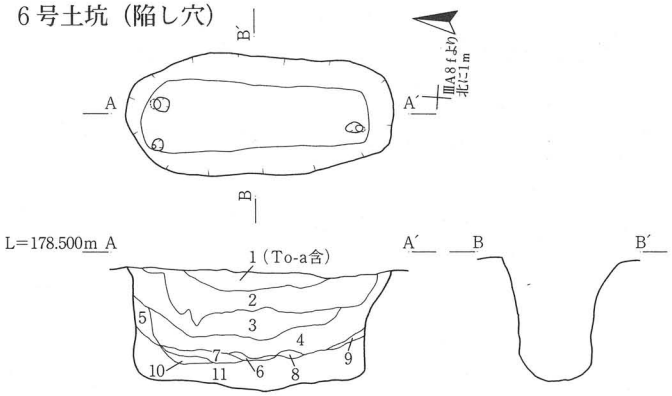
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないので特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（菊池）

5号土坑（陥し穴）（第21図、写真図版14）
（位置、検出状況）中央区ⅣＡ１ｆグリッドで、黒色土の中に灰白色の輪郭で検出された。
（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部2.00×0.68m、底部1.86×0.42m、深さ92cm。
（長軸方位）Ｎ－９°－Ｗ
（堆積土状況）最上部の層に灰白色の火山灰を含む。その下層は黒褐色土が中心だが、どの層にも明黄褐色土粒またはブロックを含んでいる。自然堆積と思われる。
（壁）西側はほぼ垂直に立ち上がる。東側もほぼ垂直だが、上部15cm程度の部分が開口部を広げるように傾く。
（底面）平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田ａテフラと思われる火山灰を検出面および上層に含んでいることから、平安時代または平安時代に近い時期に作られたものと思われる。　（菊池）

6号土坑（陥し穴）（第22図、写真図版14）
（位置、検出状況）中央区ⅢＡ７ｆグリッドで、黒色土の中に灰白色火山灰を含んで検出された。
（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部2.10×0.94m、底部1.78×0.50m、深さ94cm。
（長軸方位）Ｎ－５°－Ｗ
（堆積土状況）最上部に灰白色火山灰を含む。その下層は黒褐色土が中心だが、どの層にも黄褐色土を含んでいる。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かって広がるように、ゆるやかに外反する。
（底面）平坦に続く。また、３カ所の副穴がある。逆茂木を刺していた跡と思われる。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田ａテフラと思われる火山灰を検出面及び上層に含んでいることから、平安時代または平安時代に近い時期に作られたと思われる。　（菊池）

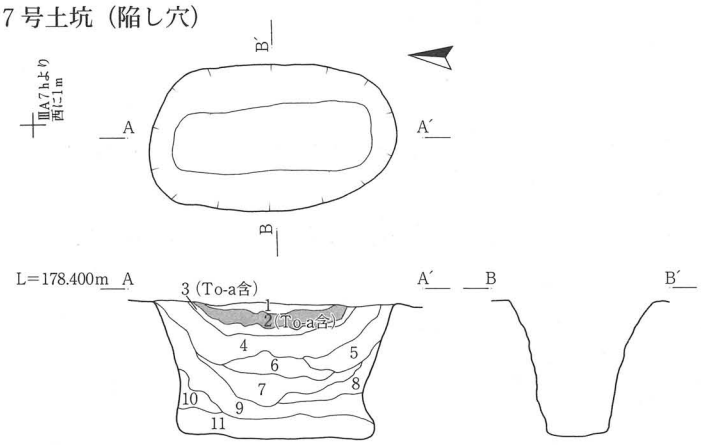
7号土坑（陥し穴）（第22図、写真図版14）
（位置、検出状況）中央区ⅢＡ７ｇグリッドで、黒色土の中に灰白色火山灰を含んで検出された。
（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部1.94×1.16m、底部1.56×0.52m、深さ108cm。
（長軸方位）Ｎ－５°－Ｗ
（堆積土状況）２層は灰白色火山灰層である。その下層に黒色土や暗褐色土が堆積するが、そのほとんどに明黄褐色土を含んでいる。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かって広がるように、ゆるやかに外反する。
（底面）平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田ａテフラと思われる火山灰を検出面及び上層に含んでいることから、平安時代または平安時代に近い時期に作られたと思われる。　（菊池）

６号土坑（陥し穴）



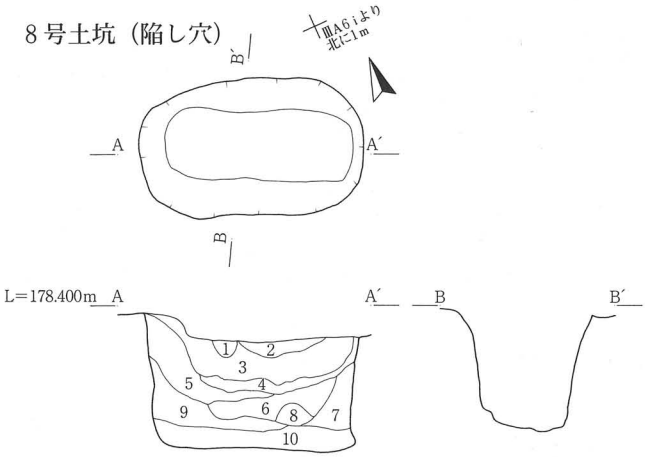
６号土坑
1　10YR3/4　暗褐色シルト　十和田ａテフラを20％含む
2　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土粒を５％含む
3　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を５％含む
4　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を20％含む
5　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土を縞状に50％含む
6　10YR2/2　黒褐色シルト　明褐色土粒を斑状に５％含む
7　10YR4/4　褐色シルト　明褐色土をまだらに40％含む
8　10YR2/1　黒色シルト
9　10YR2/1　黒色シルト　明褐色土を20％含む
10　10YR2/3　黒褐色シルト　明褐色土を縞状に30％含む
11　10YR2/3　黒褐色シルト　明褐色土粒を斑状に20％含む

７号土坑（陥し穴）



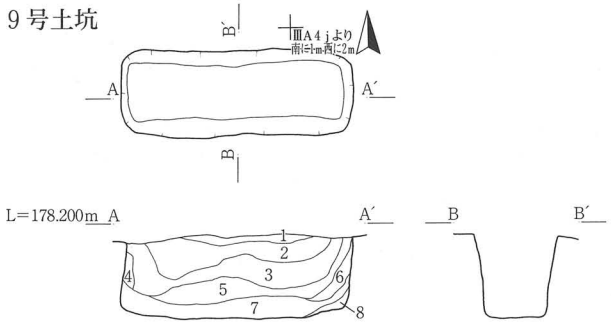
７号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR5/2　灰黄褐色火山灰　十和田ａテフラ
3　10YR2/1　黒色シルト　十和田ａテフラを５％含む
4　10YR3/3　暗褐色シルト
5　10YR2/3　黒褐色シルト　明褐色土粒を30％含む
6　10YR3/3　暗褐色シルト　明褐色土粒を10％含む
7　10YR2/3　黒褐色シルト　明褐色土粒を10％含む
8　10YR3/2　黒褐色シルト　明褐色土粒を５％含む
9　10YR3/2　黒褐色シルト　明褐色土粒を斑状に20％含む
10　10YR2/3　黒褐色シルト　明褐色土を縞状に30％含む
11　10YR2/3　黒褐色シルト　明褐色土粒を40％含む

８号土坑（陥し穴）



８号土坑
1　10YR3/2　黒褐色シルト　暗渠の堆積土
2　10YR2/2　黒褐色シルト
3　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒を斑状に約５％含む
4　10YR2/1　黒色シルト
5　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を斑状に５％含む
6　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土をまばらに10％含む
7　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土をまばらに40％含む
8　10YR2/1　黒色シルト
9　10YR2/1　黒色シルト　明黄褐色土を縞状に30％含む
10　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト

９号土坑



９号土坑
1　10YR3/4　暗褐色シルト
2　10YR4/6　褐色シルト　明褐色土粒を10％含む
3　10YR3/3　暗褐色シルト　明褐色土粒を10％含む
4　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　明褐色土を縞状に60％含む
5　10YR2/2　黒褐色シルト　明褐色土粒を５％含む
6　10YR3/2　黒褐色シルト　明褐色土を縞状に20％含む
7　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト　黒色土粒を20％含む
8　10YR2/2　黒褐色シルト

0　1：60　3m

第22図　６～９号土坑

8号土坑（陥し穴）（第22図、写真図版14）

（位置、検出状況）中央区ⅢＡ５ｈグリッドで、現代の暗渠跡と重複し、楕円形状の黒色のしみとして検出された。東側の上面が削られていた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部1.76×1.08m、底部1.46×0.52m、深さ105cm。

（長軸方位）Ｎ－68°－Ｗ

（堆積土状況）黒色土、黒褐色土を堆積する。多くの層に褐色土粒を含む。

（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。

（底面）平坦に続く。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がないので特定はできないが、形状から平安時代または平安に近い時期のものと推測される。（菊池）

9号土坑（第22図、写真図版15）

（位置、検出状況）中央区ⅢＡ４ｊグリッドで、周囲が暗褐色土、中心部が褐色土の長方形のような形で検出された。

（平面形、規模）平面形は長方形に近い。規模は開口部1.84×0.66m、底部1.70×0.42m、深さ62cm。

（長軸方位）Ｎ－88°－Ｗ

（堆積土状況）上層に暗褐色、褐色土、中層は黒褐色土、下層は明黄褐色土となっている。上層、中層には明黄褐色土粒を斑状に含む層と、明黄褐色土を縞状に含む層が見られる。

（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。

（底面）平坦に続く。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）平安時代と思われる楕円形のものと比較すると、形状・規模ともに異なる。同じ形状の12号土坑から縄文土器が出土したので、これも縄文時代に属する可能性がある。（菊池）

10号土坑（陥し穴）（第23図、写真図版15）

（位置、検出状況）中央区ⅢＡ８ｊグリッドで、黒色土の中に灰白色火山灰を含んで検出された。

（平面形、規模）平面は楕円形状。規模は開口部1.94×0.92m、底部1.76×0.36m、深さ118cm。

（長軸方位）Ｎ－61°－Ｗ

（堆積土状況）２層に灰白色火山灰を含む。その下層は黒褐色土が中心だが、どの層にも黄褐色土を含んでいる。

（壁）開口部に向かって広がるように、ゆるやかに外反する。

（底面）平坦に続く。

（遺物、重複等特記事項）特になし

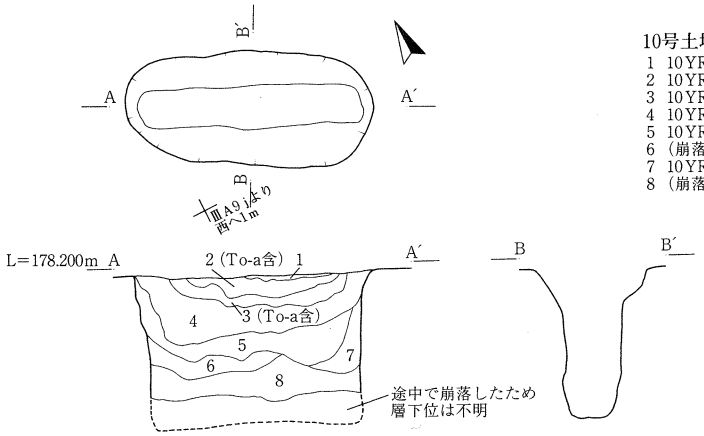
（時期）十和田ａテフラと思われる火山灰を検出面及び上層に含んでいることから、平安時代または平安時代に近い時期に作られたと思われる。（菊池）

11号土坑（陥し穴）（第23図、写真図版15）

（位置、検出状況）中央区ⅢＢ４ｆ～ⅢＢ５ｆグリッドに跨り、溝状の黒色土のしみとして検出された。

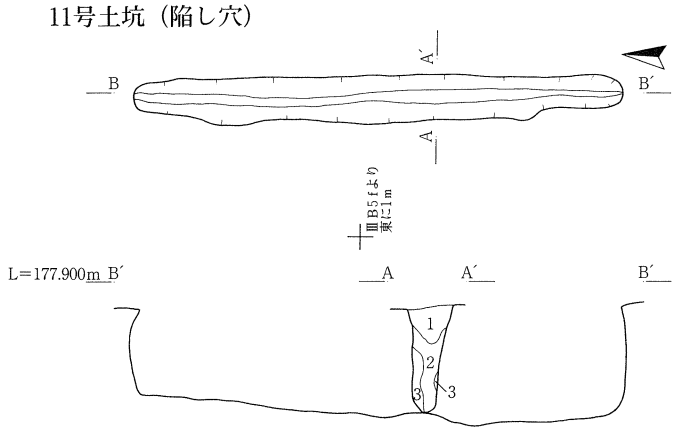
（平面形、規模）平面は楕円形状。規模は開口部3.92×0.40m、底部3.92×0.10m、深さ84cm。

10号土坑（陥し穴）



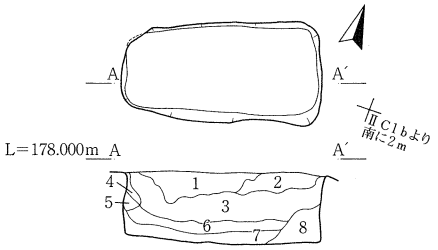
10号土坑
1　10YR3/2　黒褐色シルト
2　10YR5/4　にぶい黄褐色　十和田ａテフラでブロック状に黒色土を含む
3　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒と十和田ａテフラの極小ブロックを含む
4　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色の浮石を含む
5　10YR2/1　黒色シルト　浮石をわずかに含む
6（崩落のため不明）
7　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土の極小ブロックをまばらに含む
8（崩落のため不明）

11号土坑（陥し穴）



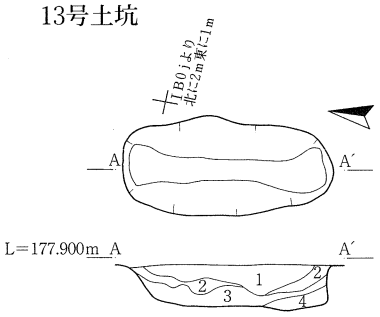
11号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土ブロックを含む
2　10YR3/2　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土と黒褐色土の混土
3　10YR6/6　明黄褐色土シルト　崩落土

12号土坑



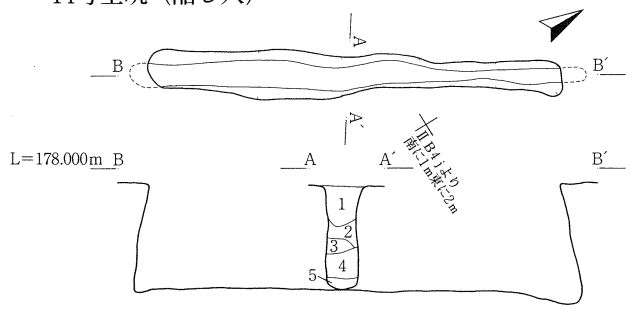
12号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト
2　10YR3/4　暗褐色シルト　褐色土を斑状に含む
3　10YR3/2　黒褐色シルト　褐色土粒を３％含む
4　10YR4/4　褐色シルト
5　10YR3/2　黒褐色シルト　褐色土ブロックを20％斑状に含む
6　10YR2/1　黒色シルト
7　10YR3/2　黒褐色シルト

13号土坑



13号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR3/3　暗褐色シルト
3　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
4　10YR3/3　暗褐色シルト

14号土坑（陥し穴）



14号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR3/2　黒褐色シルト　褐色土ブロックを20％含み斑状をなす
3　10YR2/1　黒色シルト
4　10YR4/4　褐色シルト
5　10YR4/3　にぶい黒褐色シルト

0　1：60　3m

第23図　10～14号土坑

（長軸方位）N－4°－W
（堆積土状況）上層は黒色土、その下に暗褐色土が堆積している。自然堆積である。
（壁）溝の両端はややオーバーハング気味に、長軸の壁はわずかに外傾して立ち上がる。
（底面）一部やや盛り上がっているが、ほぼ平坦である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないので特定はできないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（菊池）

12号土坑（第23図、写真図版15）
（位置、検出状況）北区東側ⅡＣ１ａグリッドで、黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は長方形状。規模は開口部1.58×0.80m、底部1.52×0.70m、深さ58cm。
（長軸方位）N－70°－E
（堆積土状況）黒褐色土、褐色土が堆積。黒褐色土の層には褐色土が混入する。自然堆積と思われる。
（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）中心部に向けてわずかに下がる。
（遺物、重複等特記事項）３層から縄文土器片が出土した。
（時期）縄文土器の様相から、縄文時代後期以降に属するものと思われる。　（八木・菊池）

13号土坑（第23図、写真図版16）
（位置、検出状況）北区東側ⅠＢ９ｊグリッドで、黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は楕円形状。規模は開口部1.57×0.72m、底部1.54×0.16m、深さ32cm。
（長軸方位）N－8°－W
（堆積土状況）上層の黒色土、中層の暗褐色土、下層のにぶい黄褐色土に分けられる。下層には褐色土粒が混入する。自然堆積と思われる。
（壁）北側はゆるやかに外傾し、南側はほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）平面形は両端が膨らむ形状である。南側に浅いくぼみがある。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく、また形状からも不明である。　（八木・菊池）

14号土坑（陥し穴）（第23図、写真図版16）
（位置、検出状況）北区東側ⅡＢ４ｊグリッドで、溝状の黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は溝状。規模は開口部3.22×0.30m、底部3.56×0.18m、深さ80cm。
（長軸方位）N－31°－E
（堆積土状況）上層に黒色、黒褐色土、下層に褐色やにぶい黄褐色土が自然堆積している。
（壁）長軸の壁はほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）ほぼ平坦に続き、長軸にオーバーハングしている。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく特定はできないが、形状から縄文時代のものと推測される。（八木・菊池）

15号土坑（陥し穴）（第24図、写真図版16）
（位置、検出状況）中央区南東側のⅣＤ３ｂ・ⅣＤ４ｂグリッドに位置し、16号～18号土坑とともに検出した。黒褐色土の溝状の輪郭で検出した。

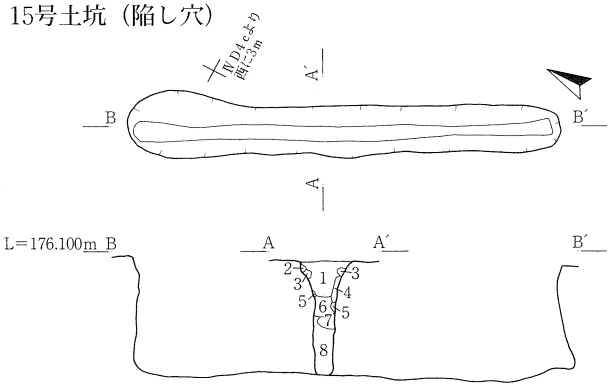
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が0.43～0.56×3.35m、底部が0.07～0.16×3.25m、深さが80cm。
（長軸方位）N－29°－W
（堆積土状況）上層から中層にかけては明黄褐色土を含む黒褐色土、それ以下に褐色土が堆積する。自然堆積と思われる。
（壁）北側の壁は直立気味に、南側はオーバーハングしている。短軸方向の壁はいずれも中間点付近から外反気味に開く。
（底面）ほぼ平坦であるが、湧水により精査が思わしくなく、この凹凸は本来のものではない。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

16号土坑（陥し穴）（第24図、写真図版16）
（位置、検出状況）中央区南東側ⅣＤ５ｃグリッド杭付近、16～18号土坑の最も西側に位置する。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が0.44×3.12m、底部が0.06×2.75m、深さが107cm。
（長軸方位）N－32°－W
（堆積土状況）上層は黒色土、以下ににぶい黄褐色土、灰黄褐色土などが堆積する。自然堆積である。
（壁）北壁は直立気味に、南壁は緩く開きながら立ち上がる。短軸の壁は開口部付近で大きく開く。
（底面）大きく波打つがこれも湧水が著しく本来の底面を残していないと思われる。
（遺物、重複等特記事項）　特になし
（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

17号土坑（陥し穴）（第24図、写真図版17）
（位置、検出状況）中央区南東側ⅣＤ４ｃグリッドに位置する。16～18号土坑の間にある。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が0.36×3.37m、底部が0.06×3.09m、深さが112cm。
（長軸方位）N－26°－W
（堆積土状況）上層～中層は黒色土と黒褐色土、それ以下は暗褐色土が堆積する自然堆積である。
（壁）長軸方向の壁は外反気味に、短軸の壁は開口部付近で開く。
（底面）緩やかに波打つが湧水が著しく、本来の底面の状況はわからない。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

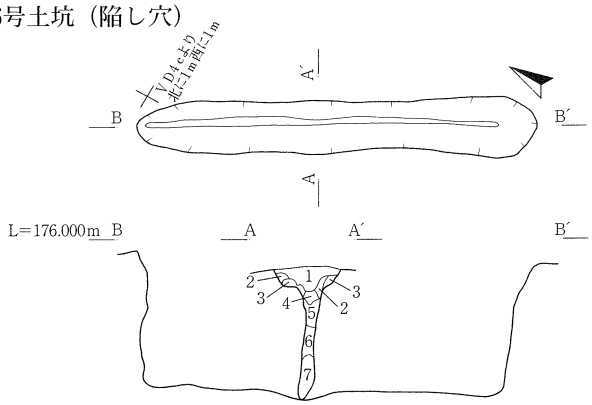
18号土坑（陥し穴）（第24図、写真図版17）
（位置、検出状況）中央区南東側ⅣＤ４ｃグリッド、16～18号土坑の最も東側にある。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が0.53×3.37m、底部が0.12～0.25×3.23m、深さが74cm。
（長軸方位）N－18°－W
（堆積土状況）上層は黒色土、それ以下は褐色土・黄褐色土・暗褐色土の自然堆積層である。
（壁）長軸方向の壁は直立し、短軸の壁は開口部近くで外反する。
（底面）細かい凹凸はあるが、ほぼ平坦である。これも本来の底面の状況ではないと思われる。

15号土坑（陥し穴）



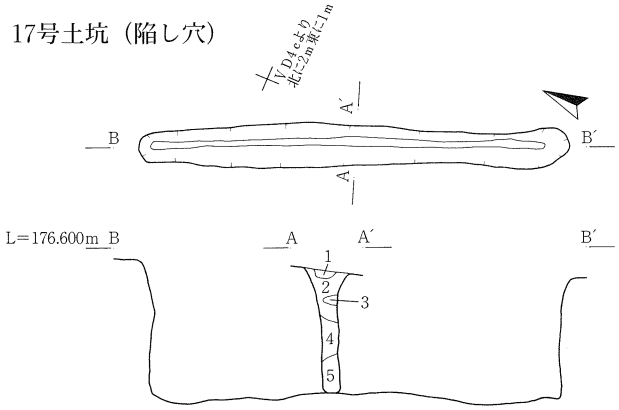
15号土坑
1　10YR1.7/1　黒褐色シルト　明黄褐色土を１％含む
2　10YR2/3　黒褐色シルト
3　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト　崩落土
4　10YR2/1　黒色粘土質シルト
5　10YR8/8　黄橙色粘土質シルト　崩落土
6　10YR2/3　黒褐色シルト
7　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
8　10YR4/6　褐色シルト

16号土坑（陥し穴）



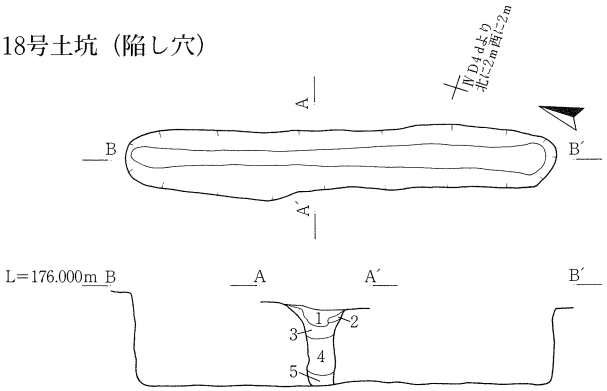
16号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　明黄褐色土を３％含む
2　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト
3　10YR7/6　明暗褐色粘土質シルト　崩落土
4　10YR5/4　にぶい暗褐色粘土質シルト　３層のブロック含む
5　10YR4/2　灰黄褐色シルト　黒色土を20％斑状に含む
6　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　黒色土を50％斑状に含む
7　10YR4/2　黄褐色シルト

17号土坑（陥し穴）



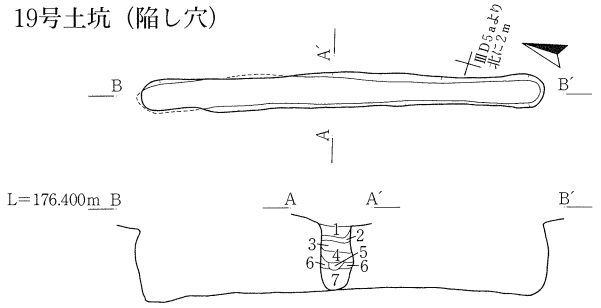
17号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土ブロックを含む
3　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト　２層との混合土
4　10YR3/2　黒褐色砂質シルト　黄褐色土粒を全体に含む
5　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土でこれ以下は湧水のため不明

18号土坑（陥し穴）



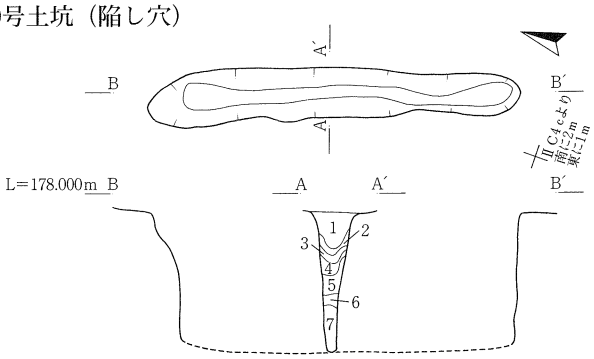
18号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土ブロックをまばらに７％含む
2　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　崩落土
3　10YR4/6　褐色粘土質シルト
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　褐色土をまばらに10％含む
5　10YR3/3　暗褐色シルト

19号土坑（陥し穴）



19号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土をまばらに30％含む
2　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒色土粒を斑状に10％含む
3　10YR1.7/1 黒色シルト　黄褐色土をまばらに15％含む
4　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト
5　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト　黒色土との混合土
6　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト　明黄褐色土を斑状に20％含む
7　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト　明黄褐色土を斑状に30％含む

20号土坑（陥し穴）



20号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR4/4　褐色シルト
3　10YR2/1　黒色シルト　褐色土ブロックを一部含む
4　10YR4/4　褐色シルト　黒色土ブロックを一部含む
5　10YR4/4　褐色シルト
6　10YR2/1　黒色シルト
7　10YR3/2　黒褐色シルト

0　1：60　3m

第24図　15～20号土坑

（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）形状等から縄文時代の遺構と推測される。規模や堆積土、軸方向などから判断して16号土坑から18号土坑までは、３基が同時にセットで使われた陥し穴と思われる。（濱田）

19号土坑（陥し穴）（第24図、写真図版17）
（位置、検出状況）中央区北東寄りⅢＣ４ｊグリッドに位置する。ここは雨水が貯まりやすかったため検出に手間取ったが、帯状の黒色土の輪郭で確認できた。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が0.28×3.17m、底部が0.14～0.24×3.17m、深さは60cm。
（長軸方位）Ｎ－16°－Ｗ
（堆積土状況）上層から黒色土、黄褐色土、黒色土がほぼ水平に堆積する。地山崩落土を含むにぶい黄褐色土が堆積する。自然堆積層である。
（壁）長軸の壁はわずかにオーバーハングする。短軸の壁は直立し立ち上がる。
（底面）長軸の両端が下がっている。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

20号土坑（陥し穴）（第24図、写真図版17）
（位置、検出状況）北区東側ⅡＣ３ａ～ⅡＣ４ａグリットに跨り、溝状の黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は溝状。規模は開口部2.99×0.40m、底部2.52×0.10m、深さ110cm。
（長軸方位）Ｎ－18°－Ｗ
（堆積土状況）黒色土の層の間に褐色土の層が堆積している。自然堆積と思われる。
（壁）溝の北側はゆるやかに外傾し、南側はほぼ垂直に立ち上がる。長軸の壁はわずかに外傾する。
（底面）ほぼ平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）１層中位から縄文施文の土器が31片508g出土した。破片同士が接合するものがある。最小個体数は３個体でうち１点は口縁部資料（遺物番号１）である。
（時期）口縁の断面形態から縄文時代後期後葉初頭の土器か。縄文後期に帰属しよう。（八木・菊池）

21号土坑（陥し穴）（第25図、写真図版18）
（位置、検出状況）中央区ⅣＤ２ｇ～ⅣＤ２ｈグリッドに跨る位置で、黒褐色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は楕円形状。規模は開口部2.10×0.90m、底部1.78×0.48m、深さ96cm。
（長軸方位）Ｎ－71°－Ｅ
（堆積土状況）上層に黒色、黒褐色土、中層から下層にかけて褐色土が堆積している。自然堆積と思われる。
（壁）ほぼ垂直だが、ゆるやかに外反する。東側が多少ハオーバーハングしている。
（底面）西側が多少くぼんでいるが、ほぼ平坦である。小さなくぼみが７カ所に見られる。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）楕円形の形状は平安時代と思われるものに近いが、堆積土の様相が異なっている。詳細な時期は不明である。（菊池）

22号土坑（陥し穴）（第25図、写真図版18）

（位置、検出状況）中央区ⅢＤ０ｇグリッドで、黒褐色土のしみとして検出された。

（平面形、規模）平面は長方形状。規模は開口部1.48×0.62m、底部1.38×0.54m、深さ56cm。

（長軸方位）Ｎ－71°－Ｅ

（堆積土状況）１層に黒色土、その下層は褐色土が堆積している。自然堆積と思われる。

（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。

（底面）ほぼ平坦である。中央からやや東よりに副穴が１カ所ある。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）平安時代のものと思われる楕円形の土坑と比較すると、堆積土が異なることから、縄文時代に属する可能性もある。（菊池）

23号土坑（陥し穴）（第25図、写真図版18）

（位置、検出状況）中央区ⅣＤ１ｆグリットで、褐色土のしみとして検出された。23～26号土坑は位置が近く形状や埋土も似ているため、同時またはそれに近い時期に使われたものと思われる。

（平面形、規模）平面は円形状。規模は開口部1.06×1.08m、底部0.86×1.00m、深さ78cm。

（堆積土状況）上層に黒色土が堆積し、その下層に褐色土が堆積している。８層に明黄褐色の火山灰（分析により十和田中掫テフラと判明）を含む。自然堆積と思われる。

（壁）北側は上部がオーバーハング気味に立ち上がる。南側はゆるやかに外傾しながら立ち上がる。

（底面）ほぼ平坦に続く。副穴が２カ所並ぶ。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）十和田中掫テフラを検出面及び下層に含んでいることから、縄文時代前期ごろに作られたと思われる。（菊池）

24号土坑（陥し穴）（第25図、写真図版18）

（位置、検出状況）中央区ⅢＤ０ｅグリットで、１号溝と重複して検出された。

（平面形、規模）平面は円形状。規模は開口部0.98×1.00m、底部0.86×0.78m、深さ68cm。

（堆積土状況）上層に黒色土が堆積し、その下層に褐色土が堆積している。８層に明黄褐色の火山灰を含む。自然堆積と思われる。

（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。

（底面）概ね平坦に続く。副穴が２カ所並ぶ。南東側にオーバーハングしている部分がある。

（遺物、重複等特記事項）１号溝と重複する。本遺構が旧い。

（時期）堆積土に十和田中掫テフラを含んでおり、縄文時代前期に属すると思われる。（菊池）

25号土坑（陥し穴）（第26図、写真図版19）

（位置、検出状況）中央区ⅢＤ７ｅ～ⅢＤ７ｆグリットに跨る位置で、褐色土のしみとして検出された。

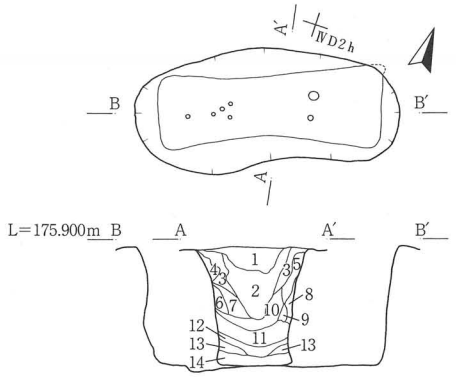
（平面形、規模）平面は円形状。規模は開口部1.06×0.94m、底部0.80×0.66m、深さ90cm。

（堆積土状況）上層に黒色土が堆積し、その下層に褐色土が堆積している。６層に明黄褐色の火山灰を含む。自然堆積と思われる。

（壁）東側はほぼ垂直に立ち上がる。西側はゆるやかに外傾しながら立ち上がる。

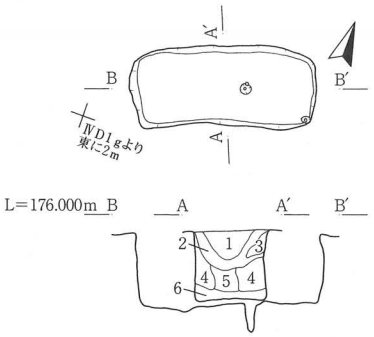
（底面）ほぼ平坦に続く。副穴が２カ所並ぶ。

21号土坑（陥し穴）



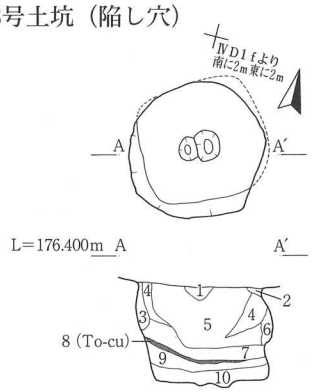
21号土坑
1　10YR1.7/1　黒色シルト　　黄褐色土粒を３％含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を３％含む
3　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土を３％含む
4　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　黄褐色土を斑状に20％含む
5　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト　にぶい黄褐色土を50％含む
6　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土を２％含む
7　10YR4/6　褐色粘土質シルト　北側を中心に黒褐色土を７％含む
8　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト　崩落土
9　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト　黒褐色土をまばらに30％含む
10　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　上方を中心に黒褐色土を50％含む
11　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト
12　10YR4/4　褐色粘土質シルト
13　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト
14　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト

22号土坑（陥し穴）



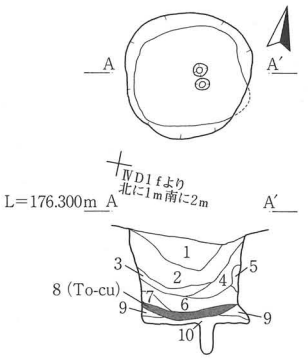
22号土坑
1　10YR1.7/1　黒色シルト　暗褐色土のブロックを斑状に７％含む
2　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト
3　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　崩落土
4　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト　崩落土
5　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　中央を中心に褐色土を10％含む
6　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト

23号土坑（陥し穴）



23号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黒色土を上部を中心に20％含む
2　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　崩落土
3　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト　崩落土
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　明黄褐色土粒を３％、暗褐色土を25％含む
5　10YR2/1　黒色シルト　明黄褐色土粒を３％、暗褐色土を25％含む
6　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　明黄褐色土粒を３％含む　暗褐色土ブロックを含む
7　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト
8　10YR6/8　明黄褐色火山灰　十和田中掫テフラ
9　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト
10　10YR2/3　黒褐色シルト　にぶい黄褐色土を25％、明黄褐色の浮石を７％含む

24号土坑（陥し穴）



24号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒を50％、褐色土ブロックを15％含む
2　10YR4/4　褐色シルト　褐色土粒を15％、褐色土ブロックを15％含む
3　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土ブロックを20％含む
4　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　褐色土を斑状に15％含む
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　崩落土
6　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　褐色土を15％含む
7　10YR4/6　褐色シルト
8　10YR6/8　明黄褐色火山灰　十和田中掫テフラ
9　10YR4/6　褐色粘土質シルト　崩落土
10　10YR3/1　黒褐色シルト

0　1：60　3m

第25図　21～24号土坑

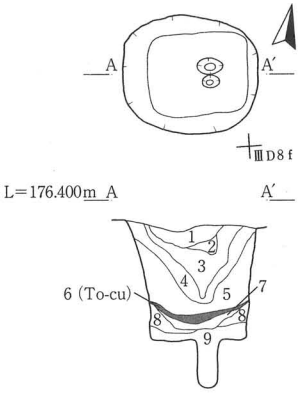
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田中掫テフラを下層に含んでいることから、縄文時代前期に属すると思われる。（菊池）

26号土坑（陥し穴）（第26図、写真図版19）
（位置、検出状況）中央区ⅢＤ７ｆなど４つのグリットに跨る位置で、褐色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は円形状。規模は開口部0.86×0.92m、底部0.62×0.72m、深さ82㎝。
（堆積土状況）上層に黒色土が、その下層に褐色土が堆積している。８層に明黄褐色の火山灰を含む。自然堆積と思われる。
（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）概ね平坦に続き、副穴が１カ所ある。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田中掫テフラを堆積土の下層に含んでおり、縄文時代前期以前に開口していたと考えられる。縄文時代前期に属すると思われる。（菊池）

27号土坑（陥し穴）（第26図、写真図版19）
（位置、検出状況）北区東側ⅢＢ４ｉグリッドで、調査区の境界線上に黒色土の中に灰白色火山灰を含んで検出された。
（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部1.70×0.84m、底部1.58×0.50m、深さ106㎝。
（長軸方位）Ｎ－30°－Ｗ
（堆積土状況）１層に灰白色の火山灰を含む。その下層は黒褐色土と褐色土が堆積している。黒褐色土には、褐色土を含む層が見られる。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かって広がるように、ゆるやかに外反する。長軸の両端はほぼ垂直に立ち上がる。
（底面）平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田ａテフラと思われる火山灰を検出面及び上層に含んでいることから、平安時代または平安時代に近い時期に作られた遺構と思われる。（菊池）

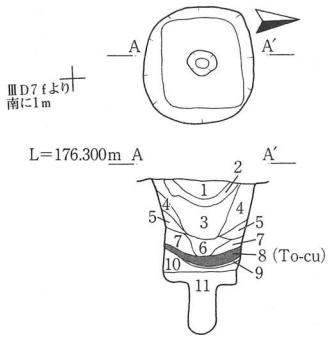
28号土坑（陥し穴）（第26図、写真図版19）
（位置、検出状況）北区東側ⅡＣ４ｂグリッドで、黒色土のしみのような形で検出された。
（平面形、規模）平面は楕円形状。規模は開口部2.34×1.22m、底部2.26×0.60m、深さ100㎝。
（長軸方位）Ｎ－１°－Ｗ
（堆積土状況）黒色、黒褐色土層の間に暗褐色や褐色土が入る。上層の黒色土には炭粒が混入している。下層には灰白色火山灰が堆積する。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かって広がるように緩やかに外反している。長軸の両端はわずかにオーバーハングしている。
（底面）平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田ａテフラを下層に含んでいることから、平安時代には開口した状態であったことがわかる。従って、平安時代に作られた可能性が高いと思われる。（菊池）

25号土坑（陥し穴）



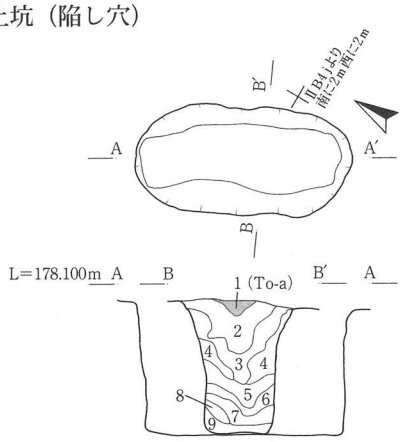
25号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を20%含む
2　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土粒を50%含む
3　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を10%含む
4　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　下方東側を中心に黄褐色土を30%斑状に含む
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　崩落土
6　10YR6/8　明黄褐色火山灰　十和田中掫テフラ
7　10YR4/4　褐色砂質シルト
8　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　崩落土
9　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト

26号土坑（陥し穴）



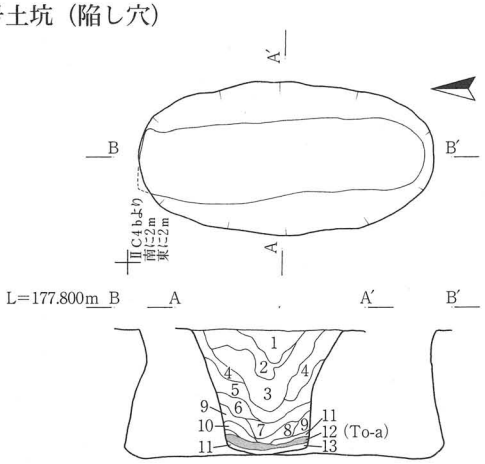
26号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　下部を中心に黄褐色土粒を30%含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を10%含む
3　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土ブロックを15%含む
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　褐色土を50%含む
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　崩落土
6　10YR5/8　黄褐色シルト　褐色土を50%含む
7　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　崩落土
8　10YR6/8　明黄褐色火山灰　十和田中掫テフラ
9　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒を25%含む
10　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　崩落土
11　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土粒を25%含む

27号土坑（陥し穴）



27号土坑
1　火山灰　十和田ａテフラ
2　10YR3/3　暗褐色シルト　褐色土粒を５%含む
3　10YR2/1　黒色シルト
4　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
5　10YR2/3　黒褐色シルト　褐色土をマーブル状に含む
6　10YR4/4　褐色シルト
7　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土をマーブル状に含む
8　10YR4/4　褐色シルト
9　10YR2/2　黒褐色シルト

28号土坑（陥し穴）



28号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒を５%、炭粒３%以下含む
2　10YR3/2　黒褐色シルト　褐色土粒を10%、炭粒３%以下含む
3　10YR3/3　暗褐色シルト　褐色土粒を40%含む
4　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土粒を５%含む
5　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土ブロックを20%含み斑状をなす
6　10YR4/4　褐色シルト
7　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土が縞状に混入
8　10YR2/1　黒色シルト
9　10YR4/4　褐色シルト
10　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土が縞状に混入
11　10YR2/1　黒色シルト
12　火山灰　十和田ａテフラ
13　10YR2/2　黒褐色シルト

0　1：60　3m

第26図　25～28号土坑

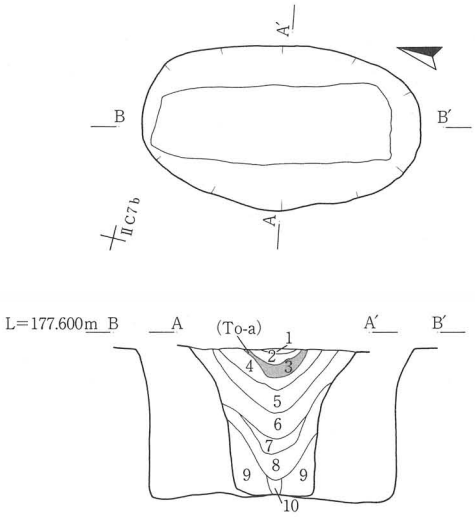
29号土坑（陥し穴）（第27図、写真図版20）
（位置、検出状況）北区東側ⅡＣ７ｂグリッドで、黒色土の中に灰白色火山灰を含んで検出された。
（平面形、規模）平面は楕円形状。規模は開口部2.18×1.32m、底部1.86×0.62m、深さ116cm。
（長軸方位）Ｎ－13°－Ｗ
（堆積土状況）黒色土～暗褐色土が堆積している。２層の黒色土には炭粒を含む。３層に灰白色火山灰の層が入る。その下層には褐色土粒が混入する。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かって広がるように緩やかに外反する。
（底面）ほぼ平坦である。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）十和田ａテフラを検出面及び上層に含んでいることから、平安時代または平安時代に近い時期に作られたと思われる。（菊池）

30号土坑（陥し穴）（第27図、写真図版20）
（位置、検出状況）中央区ⅢＢ４ｈ～ⅢＢ５ｈグリッドに跨り、溝状の黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は溝状。規模は開口部4.06×0.36m、底部4.26×0.18m、深さ82cm。
（長軸方位）Ｎ－36°－Ｗ
（堆積土状況）黒褐色～暗褐色の層の間に、黄褐色の層が入る。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かってゆるやかに外傾する。
（底面）平坦に続く。長軸は両側ともオーバーハングしている。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく特定はできないが、形状から縄文時代のものと推測される。（菊池）

31号土坑（陥し穴）（第27図、写真図版20）
（位置、検出状況）中央区ⅣＤ１ｃグリッドで、黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は長方形状。規模は開口部1.68×0.98m、底部1.36×0.50m、深さ86cm。
（長軸方位）Ｎ－40°－Ｗ
（堆積土状況）１層の黒色土の下に黄褐色土の層が入る。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かってゆるやかに外傾する。
（底面）平坦に続く。副穴が３カ所ある。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）堆積土は平安時代と思われる土坑よりも褐色系の土が多く、それとは異なることから、縄文時代の可能性もある。（菊池）

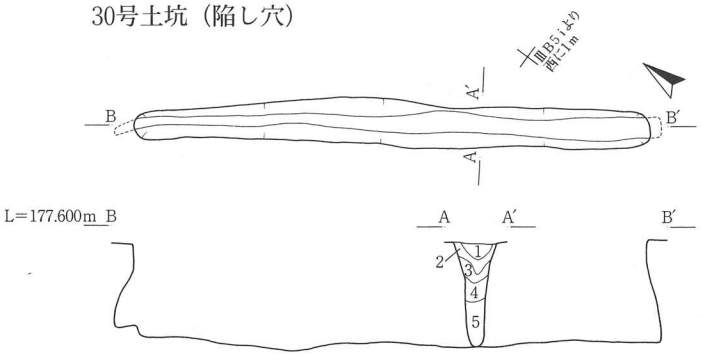
32号土坑（陥し穴）（第27図、写真図版20）
（位置、検出状況）中央区中央部やや北側のⅢＣ７ａ・ⅢＣ７ｂグリッドに跨る。黄褐色土粒を含む黒褐色土の輪郭で確認した。その際は両端が膨らんで見えた。
（平面形、規模）平面形は細長い鉄アレー状。規模は開口部が0.33～0.84×3.95m、底部が0.11～0.63×3.82m、深さが72cm。
（長軸方位）Ｎ－24°－Ｅ
（堆積土状況）上層は黒褐色土、それ以下は褐色土、明黄褐色土が堆積する自然堆積層である。

29号土坑（陥し穴）



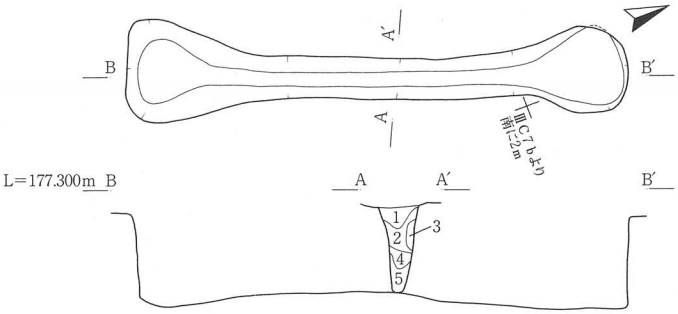
29号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR3/3　暗褐色シルト
3　火山灰　十和田ａテフラ
4　10YR2/3　黒褐色シルト　褐色土粒を２％含む
5　10YR3/2　黒褐色シルト　褐色土粒を３％含む
6　10YR3/1　黒褐色シルト　褐色土粒を５％含む
7　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒を２％含む
8　10YR3/3　暗褐色シルト　褐色土粒を10％含む
9　10YR3/4　暗褐色シルト　褐色土が縞状に50％入る

30号土坑（陥し穴）



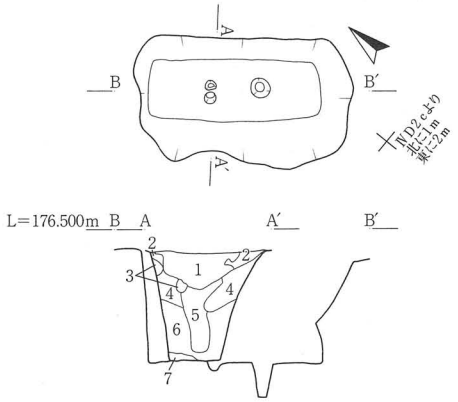
30号土坑
1　10YR2/3　黒褐色シルト
2　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト
3　10YR5/8　黄褐色シルト
4　10YR4/6　褐色シルト
5　10YR3/4　暗褐色シルト

32号土坑（陥し穴）



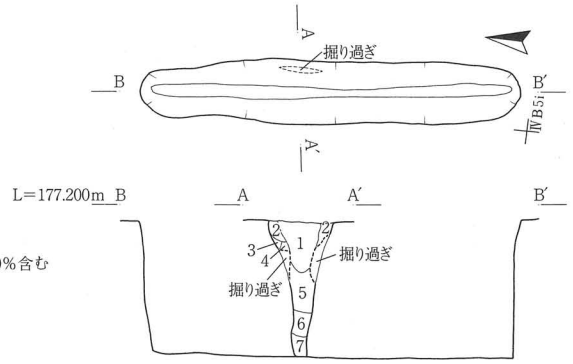
32号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を５％ほど含む
2　10YR4/4　褐色シルト
3　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト
4　10YR3/3　暗褐色シルト
5　10YR6/8　明黄褐色シルト

31号土坑（陥し穴）



31号土坑
1　10YR1.7/1　黒色シルト　黄褐色土粒を10％含む　灰黄褐色土を斑状に10％含む
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　黄褐色土をまだらに20％含む
3　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　崩落土
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　灰黄褐色土を30％含む
5　10YR4/2　灰黄褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を20％含む
6　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　灰黄褐色土を斑状に15％含む
7　10YR4/6　褐色粘土質シルト

33号土坑（陥し穴）



33号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR3/2　黒褐色シルト　崩落土
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト
4　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土ブロックを10％含む
5　10YR5/8　黄褐色シルト
6　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト
7　10YR3/2　黒褐色シルト

0　1：60　3m

第27図　29～33号土坑

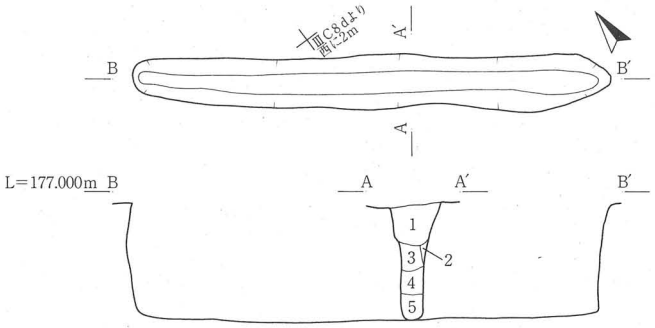
（壁）長軸方向の壁は直立して、短軸の壁はわずかに外形して立ち上がる。
（底面）中央部で浅く北側で深さを増し大きく波打つ。底面は把握しにくかった。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

33号土坑（陥し穴）（第27図、写真図版21）
（位置、検出状況）中央区ⅣＢ４ｉグリッドで、溝状の黒色土のしみとして検出された。
（平面形、規模）平面は溝状。規模は開口部2.98×0.52m、底部2.90×0.10m、深さ108㎝。
（長軸方位）Ｎ－６°－Ｗ
（堆積土状況）黒褐色～暗褐色の層の間に黄褐色の層が入る。自然堆積と思われる。
（壁）開口部に向かって緩やかに外反する。
（底面）平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないので特定はできないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（菊池）

34号土坑（陥し穴）（第28図、写真図版21）
（位置、検出状況）中央区中央部北側のⅢＣ７ｃ・ⅢＣ８ｃグリッドに跨る。黄褐色土粒などをまだらに含む黒褐色土の輪郭で検出した。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が0.34～0.44×3.78m、底部が0.09～0.17×3.77m、深さが95㎝。
（長軸方位）Ｎ－54°－Ｗ
（堆積土状況）上層から黒褐色土、黄褐色土、地山崩落土を含む黒褐色土が堆積する自然堆積層。
（壁）長軸の壁は西側が緩やかに内湾、東側は直立気味、短軸の壁はわずかに外傾する。
（底面）ほぼ平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

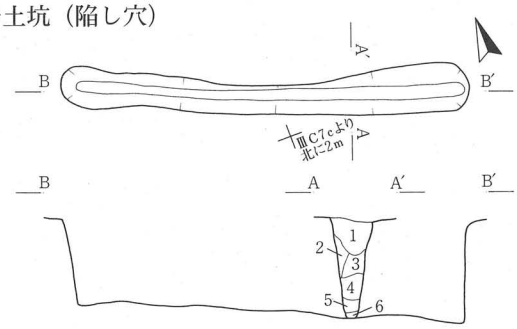
35号土坑（陥し穴）（第28図、写真図版21）
（位置、検出状況）中央区中央部北側のⅢＣ６ｂ・ⅢＣ６ｃグリッドに跨る。黄褐色土粒を含む黒褐色土の輪郭で検出した。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が0.23～0.39×3.22m、底部が0.08×3.06m、深さが79㎝。
（長軸方位）Ｎ－69°－Ｗ
（堆積土状況）上層から黒褐色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土が順に堆積する。最下部には５㎝あまりの黒色土が見られる。自然堆積層である。
（壁）長軸の壁は直立気味、短軸のそれは緩やかに外傾している。
（底面）東側に凹凸をもって下がる。
（遺物、重複等特記事項）２号掘立柱建物跡を構成する柱穴と重複するが、本遺構の方が旧い。
（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

34号土坑（陥し穴）



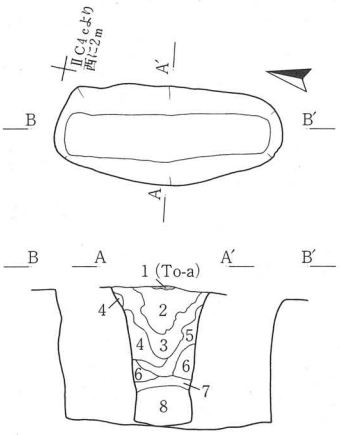
34号土坑
1　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を５％、にぶい黄褐色土を10％含む
2　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト
3　10YR5/8　黄褐色シルト　暗褐色土を斑状に30％含む
4　10YR2/3　黒褐色シルト
5　10YR3/3　黒褐色シルト　黄褐色土ブロックを10％含む

35号土坑（陥し穴）



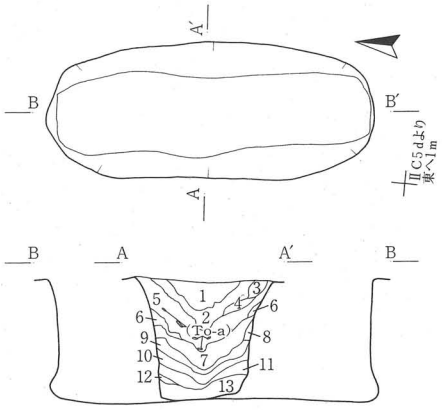
35号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を５％、褐色土を10％含む
2　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土を斑状に５％含む
4　10YR2/3　黒褐色シルト　にぶい黄褐色シルトを40％含む
5　10YR5/4　にぶい黄褐色シルト
6　10YR2/1　黒色シルト

36号土坑（陥し穴）



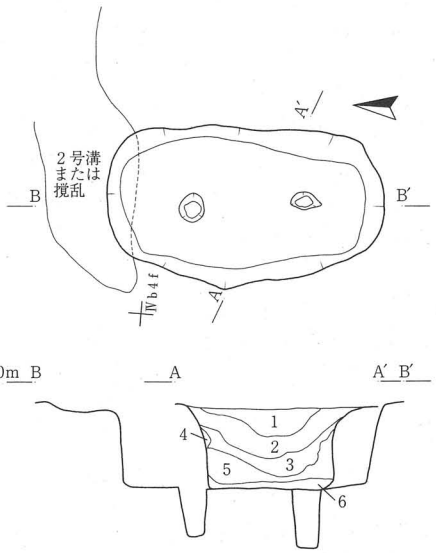
36号土坑
1　10YR6/6　明黄褐色火山灰　十和田ａテフラ
2　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色の浮石粒を含む
3　10YR2/1　黒色シルト　　黄褐色の土粒を含む
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土を含んだ崩落土
5　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土のブロックを含む
6　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　４層と５層の中間の色調
7　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土の小ブロックを含む
8　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色のブロックを10％含む

37号土坑（陥し穴）



37号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を含む
2　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　浮石粒を含む
3　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色の粒子を含む
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土粒を含む
5　10YR2/1　黒色シルト　十和田ａテフラを部分的に含む
6　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を10％含む
7　10YR3/1　黒褐色シルト　黄褐色土粒および暗褐色土粒を数％ずつ含む
8　10YR3/2　黒褐色粘土　粘土ブロック
9　10YR5/6　黄褐色粘土　地山崩落土
10　7.5YR2/1　黒色粘土質シルト　黄褐色土粒を１％前後含む
11　7.5YR5/6　明褐色シルト　黄褐色土と黒褐色土の混合土
12　7.5YR5/6　明褐色粘土　地山崩落ブロック
13　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土との混合土

38号土坑（陥し穴）



38号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR3/2　黒褐色シルト
3　10YR5/4　にぶい黄暗褐色粘土質シルト
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト
5　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト
6　10YR4/4　褐色粘土質シルト

0　1：60　3m

第28図　34～38号土坑

36号土坑（陥し穴）（第28図、写真図版21）

（位置、検出状況）ⅡＣ４ｂ～ⅡＣ４ｃグリッドに跨る位置で、黒色土の中に灰白色の火山灰らしきものを含んで検出された。

（平面形、規模）平面は楕円形状。規模は開口部1.90×0.78m、底部1.62×0.38m、深さ112cm。

（長軸方位）Ｎ－17°－Ｗ

（堆積土状況）黒色土、黒褐色土の層の間に黄褐色土が入る。それぞれに黄褐色土、黒色土が混入する。１層には灰白色の火山灰らしきものが薄く堆積する。自然堆積と思われる。

（壁）ほぼ垂直だが緩やかに外反する。

（底面）概ね平坦である。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）十和田ａテフラを検出面及び上層に含んでいることから、平安時代または平安時代に近い時期に作られたと思われる。（菊池）

37号土坑（陥し穴）（第28図、写真図版22）

（位置、検出状況）北区東の西寄りⅡＣ４ｄグリッドに位置する。黄褐色の粒子を含む黒色土の溝状の輪郭で検出した。

（平面形、規模）平面形は長楕円形。規模は開口部が1.08×2.60m、底部が0.63×2.47m、深さが96cm。

（長軸方位）Ｎ－７°－Ｗ

（堆積土状況）上層は黒褐色土と暗褐色土、中層にかけては黒色土と黒褐色土が堆積し、黒色土中には灰白色火山灰の小ブロックを含む。下層は黄褐色土や黒色土の互層となり、地山崩落土である明褐色土なども混入している。自然堆積層である。

（壁）長軸の壁は南北とも底部近くがわずかにオーバーハングする。短軸の壁は外反気味である。

（底面）ほぼ平坦に続くが、中央部がわずかに高い。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）堆積した火山灰が十和田ａテフラと考えられることから、平安時代もしくはそれ以前の遺構と推測される。（濱田）

38号土坑（陥し穴）（第28図、写真図版22）

（位置、検出状況）中央区中央部南西寄りのⅣＢ４ｆグリッド杭付近に位置する。黒色土の不整な円形の輪郭で確認できた。当初は長方形になるものとは思わなかった。

（平面形、規模）平面形は隅丸の長方形状。規模は開口部が1.24×2.18m、底部が0.74～1.01×1.94m、深さが67cm。

（長軸方位）Ｎ－69°－Ｗ

（堆積土状況）上層から黒色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土の順に堆積。最下部にはかたく締まる褐色土が水平に堆積する。自然堆積層と思われる。

（壁）長軸の壁は直立気味、短軸の開口部に近づき外反している。

（底面）ほぼ平坦である。逆茂木の杭跡と思われる穴が２個確認された。深さは37cmと46cm。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。これまで溝状としてきたものとは形態が異なり、副穴を２個有する長方形タイプの陥し穴である。（濱田）

39号土坑（陥し穴）（第29図、写真図版22）

（位置、検出状況）中央区ⅢＣ８ｇ・ⅢＣ９ｇグリッドに跨り、黒く円形に検出された。

（平面形、規模）平面形は円形状。規模は開口部が0.69×0.45m、底部が0.74×0.45m、深さ55cm。

（堆積土状況）上層は黒色土、その下に黒褐色・暗褐色土が堆積しており、部分的に褐色の地山崩落土を含む。自然堆積と思われる。

（壁）概ね垂直に立ち上がる。

（底面）ほぼ平坦。中央付近に逆茂木痕と思われる２個の副穴があり、直上方向に開口している。底面は部分的にオーバーハングしている。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（吉田）

40号土坑（陥し穴）（第29図、写真図版22）

（位置、検出状況）北区東側ⅡＣ６ｄ～ⅡＣ７ｄグリッドに跨り、８号溝と重複する。黒色土の溝状のしみとして検出された。検出した時点で溝の堆積土が土坑を切っていたので、この土坑の方が旧いものと確認できた。

（平面形、規模）平面は溝状。規模は開口部3.50×0.26m、底部3.36×0.14m、深さ80cm。

（長軸方位）Ｎ－19°－Ｗ

（堆積土状況）黒色土層中に褐色土の層が縞状に入る部分がある。自然堆積と思われる。

（壁）いずれの壁もほぼ垂直に立ち上がる。

（底面）ほぼ平坦に続く。

（遺物、重複等特記事項）８号溝と重複している。溝跡のほうが新しい。

（時期）出土遺物がないので特定はできないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（菊池）

41号土坑（陥し穴）（第29図、写真図版23）

（位置、検出状況）北区東側ⅠＣ７ｃグリッドで、黒色土のしみとして検出された。

（平面形、規模）平面は長方形。規模は開口部1.80×0.76m、底部1.74×0.70m、深さ36cm。

（長軸方位）Ｎ－６°－Ｗ

（堆積土状況）上層が黒色土で、その下に褐色土の層が入る。自然堆積と思われる。

（壁）ほぼ垂直に立ち上がる。

（底面）ほぼ平坦に続く。副穴が２カ所ある。

（遺物、重複等特記事項）堆積土上位から頁岩製の石篦（３）が出土した。

（時期）平安時代のものと思われる楕円形の土坑と比較すると、堆積土に褐色系が多くそれとは異なることから、縄文時代の可能性もある。　（菊池）

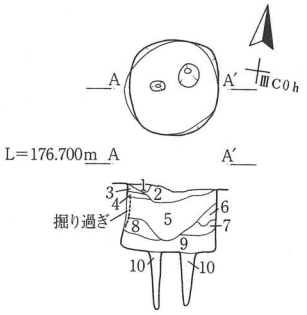
42号土坑（陥し穴）（第29図、写真図版23）

（位置、検出状況）北区東ⅠＤ５ｆグリッドにて、暗褐色の楕円形として検出され、中央部には十和田ａテフラの堆積が見られた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が1.57×0.88m、底部が1.70×0.57m、深さが114cm。

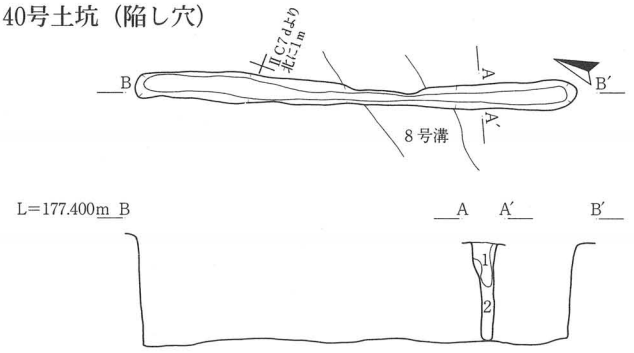
（長軸方向）Ｎ－43°－Ｅ

39号土坑（陥し穴）



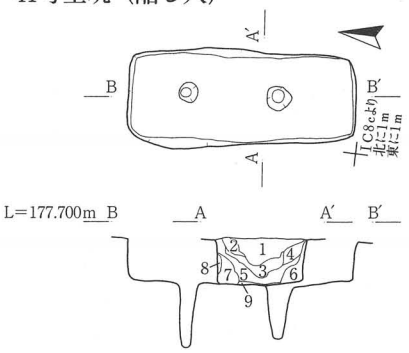
39号土坑
1　10YR3/3　暗褐色シルト
2　10YR2/1　黒色粘土質シルト　黒褐色ブロックを含む
3　10YR4/6　褐色粘土質シルト
4　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト
5　10YR3/2　暗褐色シルト　黒色土を上位に15%、黄褐色土を20%含む
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を10%含む
7　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土を30%東側下部を中心に含む
8　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土を15%上部中心に含む
9　10YR3/3　暗褐色シルト
10　10YR3/3　暗褐色シルト　逆茂木（副穴）埋土　黄褐色土粒を全体に含む

40号土坑（陥し穴）



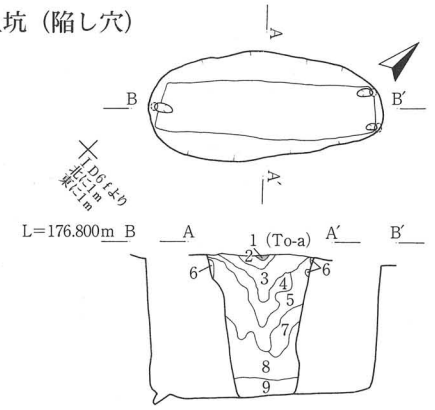
40号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　褐色土を縞状に10%含む
2　10YR1.7/1　黒色シルト

41号土坑（陥し穴）



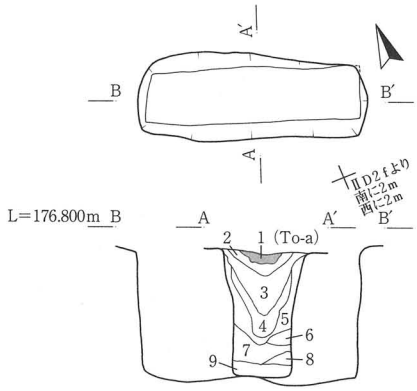
41号土坑
1　10YR2/2　黒色シルト
2　10YR3/4　暗褐色シルト
3　10YR3/2　黒色シルト　黄褐色土粒を５%含む
4　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト
5　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土粒を５%含む
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　崩落土
7　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒褐色土を縞状に10%含む
8　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト
9　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト

42号土坑（陥し穴）



42号土坑
1　10YR6/4　にぶい黄燈色火山灰　十和田ａテフラ
2　10YR4/4　暗褐色シルト
3　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土粒を10%含む
4　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土粒を５%含む
5　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土を40%斑状に含む
6　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山の崩落ブロック
7　10YR5/8　黄褐色シルト　黒褐色土を５%斑状に含む
8　10YR6/8　明黄褐色シルト
9　10YR5/8　黄褐色シルト

43号土坑（陥し穴）



43号土坑
1　10YR7/4　にぶい黄燈色火山灰　十和田ａテフラ
2　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒及びそのブロックを含む
3　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を全体に含む
4　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を３%含む
5　10YR2/1　黒色シルト　地山崩落ブロックを含む
6　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
7　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土との混合土
8　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
9　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を10%含む

0　1：60　3m

第29図　39～43号土坑

（堆積土状況）検出面に灰白色火山灰の堆積が見られる。上層は黄褐色土を含む暗褐色土で下層は地山崩落土と思われる黄褐色土である。自然堆積と思われる。
（壁）長軸方向はわずかに外傾する。短軸方向は一度垂直に立ち上がった後、南東側は開口部付近で、北西側は底部付近でわずかに外反する。
（底面）ほぼ平坦。長軸の南西端中央に１個、北東端の左右に離れて２個、計３個の逆茂木痕と思われる副穴があり、どれも上部中央に向かって開口している。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれに近い時期に属すると思われる。（吉田）

43号土坑（陥し穴）（第29図、写真図版23）
（位置、検出状況）北区東ⅡＤ２ｅグリッドにて、黒褐色の楕円形として検出され、中央部には火山灰の堆積が見られた。
（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が1.82×0.72m、底部が1.68×0.46m、深さは100cm。
（長軸方向）Ｎ－18°－Ｅ
（堆積土状況）検出面中央部に灰白色火山灰が厚さ10cm前後堆積する。黄褐色土粒及びブロックを含む黒色～黒褐色土を主体とし、部分的に地山崩落土と思われる黄褐色土が堆積する。自然堆積と思われる。
（壁）長軸方向はほぼ垂直に、短軸方向はわずかに外傾するように立ち上がる。
（底面）ほぼ平坦だが、W状にわずかな起伏がある。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれに近い時期に属すると思われる。（吉田）

44号土坑（陥し穴）（第30図、写真図版23）
（位置、検出状況）北区東の北東寄りⅡＤ１ｄグリッドほかに位置する。黒色土と暗褐色の同心円状の輪郭で検出した。遺構上部が削れられているため、このように見えるものと思われる
（平面形、規模）平面形は楕円形で寸詰まりの形状。規模は開口部 1.20×1.65m、底部 0.64×1.31m、深さ116cm。
（長軸方位）Ｎ－31°－Ｗ
（堆積土状況）上層～中層にかけては黒色土、暗褐色土、黒褐色土が堆積し、中ほどに灰白色火山灰のブロックを含む。それ以下は黒褐色土や暗褐色土、黄褐色土などの互層となる。自然堆積である。
（壁）長軸の壁はわずかに外傾し、短軸側は外反して立ち上がる。
（底面）ほぼ平坦に続く。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）堆積した火山灰が十和田ａテフラと考えられることから、平安時代もしくはそれ以前の遺構と推測される。（濱田）

45号土坑（陥し穴）（第30図、写真図版24）

（位置、検出状況）北区東の中央から南東寄りのⅡＤ４ｄ・ⅡＤ５ｄグリッドに跨ってある。黒っぽく細長い溝状のプランで検出した。

（平面形、規模）平面形は溝状。規模は開口部0.26～0.47×4.59m、底部0.15×5.10m、深さ97㎝。

（長軸方位）Ｎ－18°－Ｅ

（堆積土状況）上層は黒色土、黒褐色土、中層は黒褐色土が、それ以下は地山崩落土の暗褐色土や黄褐色土が堆積する。自然堆積と思われる。

（壁）長軸方向の壁はいずれもオーバーハングする。短軸のそれは直立して立ち上がり中ほど過ぎて外傾する。

（底面）南側に向かい徐々に高くなる。それ以外はほぼ平坦である。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

46号土坑（陥し穴）（第30図、写真図版24）

（位置、検出状況）北区東の中央からやや東寄りⅡＤ４ｄグリッドに位置する。黒褐色の楕円形のプランで検出した。

（平面形、規模）平面形は楕円形で44号土坑のひとまわり大きいサイズ。規模は開口部1.42×2.22m、底部0.38～0.46×1.64m、深さ139㎝。

（長軸方位）Ｎ－27°－Ｗ

（堆積土状況）遺構を縦方向に半裁したところ、湧水もあって断面実測を行うことなく壁が自重で崩れ落ちた。掲載した断面図は、作成箇所の位置を変えエレベーション図と合成したものである。上層は黄褐色土を含む黒褐色土が堆積する。灰白色火山灰は中層にレンズ状に堆積していた。

（壁）長軸の壁は外反している。短軸側は途中段を持ちながら立ち上がっている。

（底面）大きく波打つ。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）混入した火山灰が十和田ａテフラと考えられることから、平安時代もしくはそれ以前の遺構と推測される。（濱田）

47号土坑（陥し穴）（第30図、写真図版24）

（位置、検出状況）北区東、中央からわずかに東寄りのⅡＤ１ｃ・ⅡＤ２ｃグリッドに跨ってある。外側から黒色土と灰白色火山灰、暗褐色土が同心円状に確認できた。これは、開田の際に遺構の上部が削られ、堆積土が上から輪切りの状態になったためと思われる。

（平面形、規模）平面形は長楕円形。規模は開口部0.98×2.06m、底部0.55×1.94m、深さ122㎝。

（長軸方位）ほぼ南北に沿っている。

（堆積土状況）上層から中層は黒色土、灰白色火山灰、黒褐色土が、それ以下は黒色土や暗褐色土と崩落土である黄褐色土などが互層となっている。最下部は黒色土が水平に堆積している。

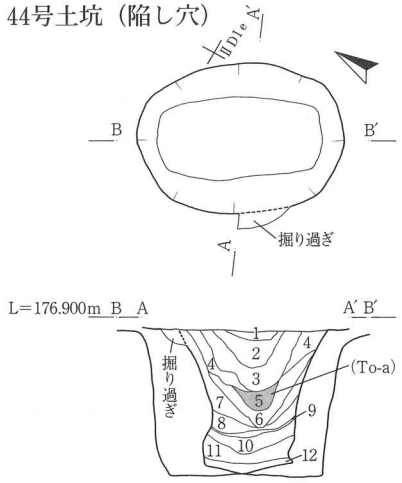
（壁）長軸の壁はほぼ直立し、短軸側は中ほどから外反気味に立ち上がる。

（底面）ほぼ平坦であるが、南側で下がる。40×80㎝ほどの凹みがある。

（遺物、重複等特記事項）特になし

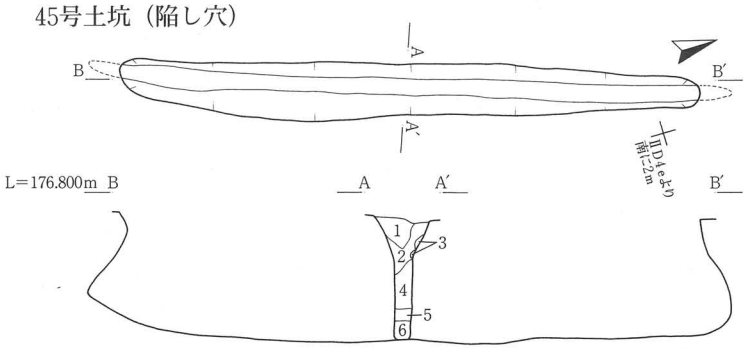
（時期）十和田ａテフラが堆積することから、平安時代或いはそれ以前の遺構と推測される。（濱田）

44号土坑（陥し穴）



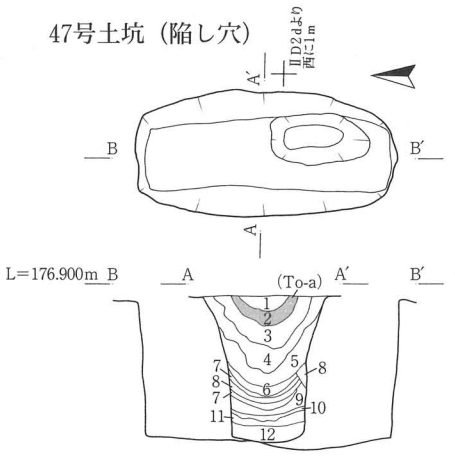
44号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒含む
2　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土の浮石粒を全体に含む
3　10YR3/3　暗褐色シルト　浮石粒をまばらに含む
4　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土ブロック含む
5　10YR7/4　にぶい黄橙色火山灰　十和田ａテフラ
6　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土ブロックを含む
7　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土との混合土
8　10YR2/2　黒褐色粘土　地山崩落ブロックとの混合土
9　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
10　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土ブロックを含む
11　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
12　10YR2/1　黒色シルト

45号土坑（陥し穴）



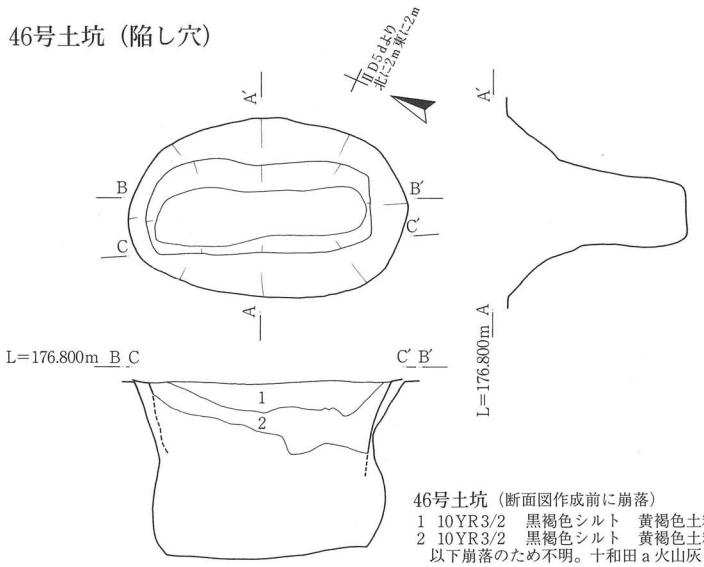
45号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を１～３％含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト
3　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土と黒褐色土の混合土
4　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を全体に含む
5　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　褐色土粒をまばらに含む
6　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土

47号土坑（陥し穴）



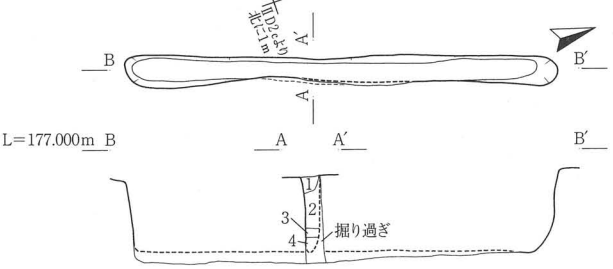
47号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　褐色土粒含む
2　10YR7/4　にぶい黄橙色　十和田ａテフラ
3　10YR3/3　暗褐色シルト　褐色土粒と炭化物を全体に含む
4　10YR3/1　黒褐色シルト　褐色土粒を全体に含む
5　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を全体に含む
6　10YR4/6　褐色粘土質シルト　地山崩落土
7　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を含む
8　10YR3/3　暗褐色シルト　崩落土
9　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
10　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土との混合土
11　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
12　10YR2/1　黒色シルト

46号土坑（陥し穴）



46号土坑（断面図作成前に崩落）
1　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を３～５％含む
2　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を５～10％含む
以下崩落のため不明。十和田ａ火山灰は最大10㎝程度の厚さで堆積。

48号土坑（陥し穴）



48号土坑
1　10ＹＲ３/２　黒褐色シルト　黄褐色土粒をまばらに含む
2　10ＹＲ２/１　黒色シルト　黄褐色土粒を含む
3　10ＹＲ３/３　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土との混合土
4　10ＹＲ５/６　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土粒をまばらに含む

0　1：60　3m

第30図　44～48号土坑

48号土坑（陥し穴）（第30図、写真図版24）

（位置、検出状況）北区東、中央からわずかに東寄りのⅡＤ１ｃグリッドに位置する。47号土坑と長軸方向を同じくして隣り合う。黒っぽい溝状の輪郭で確認できた。

（平面形、規模）平面形は溝状。規模は開口部が0.24×3.43m、底部が？×3.18m、深さは60cm前後と思われる。

（長軸方位）Ｎ－17°－Ｅ

（堆積土状況）上層から黒褐色土、黒色土、地山崩落土の黄褐色土などが堆積する。

（壁）長軸の壁は緩く外傾して立ち上がる。短軸側の壁は掘りすぎたため不明瞭である。

（底面）底面も大きく掘りすぎており、本来の状況は不明である。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

49号土坑（陥し穴）（第31図、写真図版25）

（位置、検出状況）北区東ⅡＤ２ａ、ⅡＤ３ａグリッドに跨り、黒っぽい楕円形として検出された。火山灰の堆積も見られた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が1.99×0.92m、底部が1.72×0.46m、深さ122cm。

（長軸方向）Ｎ－49°－Ｗ

（堆積土状況）上位に灰白色火山灰が堆積する。黒色～黒褐色土を主とし、黄褐色土粒及びブロックを含む。最下層は褐色土である。

（壁）ややオーバーハングして立ち上がった後、中位から長軸方向はわずかに、短軸方向は約20cm外反する。

（底面）ほぼ平坦。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれに近い時期に属すると思われる。（吉田）

50号土坑（陥し穴）（第31図、写真図版25）

（位置、検出状況）北区東、中央からわずかに南東側のⅡＤ４ｂグリッドに位置する。８号溝の北側にある。黄褐色土粒を含む黒っぽい溝状のプランが確認できた。

（平面形、規模）平面形は溝状。規模は開口部が0.30×3.41m、底部が0.17×3.40m、深さは80cm前後と思われる。

（長軸方位）Ｎ－24°－Ｅ

（堆積土状況）上層に黒色土、中層に黒褐色土、それ以下は薄い地山崩落土を挟み黒色土が堆積する。

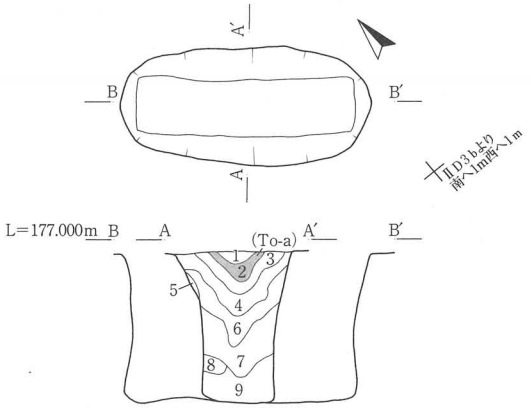
（壁）長軸の壁は直立して立ち上がる。短軸側も同様である。

（底面）全体に平坦である。

（遺物、重複等特記事項）遺物は出土していない。遺構の南側で８号溝と重複するが本遺構が旧い。

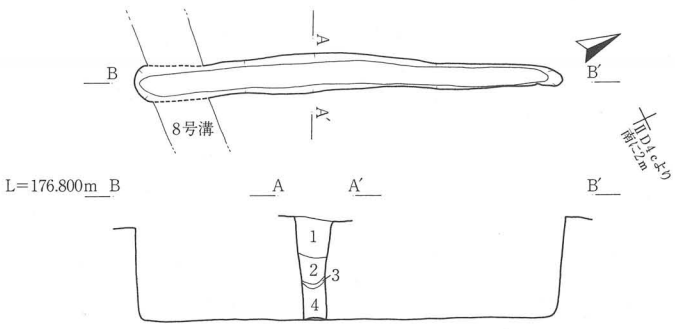
（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

49号土坑（陥し穴）



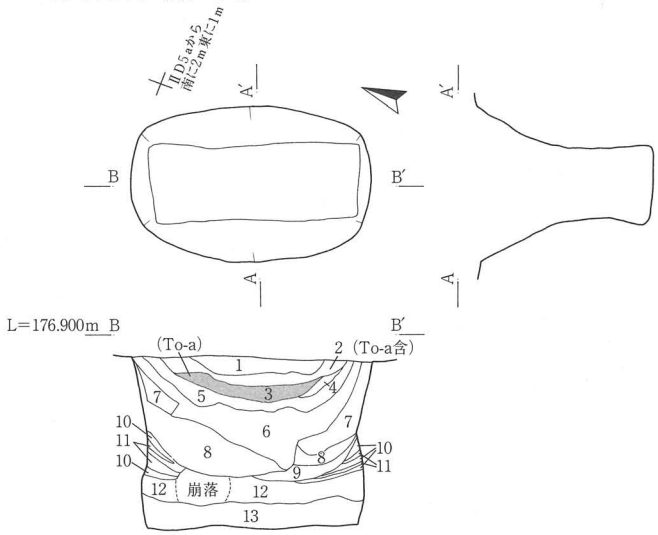
49号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黒褐色土粒を下部を中心に25％含む
2　10YR7/6　明黄褐色火山灰　十和田ａテフラ
3　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を７％含む
4　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土を30％含む
5　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒褐色土を50％含む
6　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を５％含む
7　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を20％含む
8　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　崩落土ブロック　上部に黒色土を10％含む
9　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黒色土を縞状に30％含む

50号土坑（陥し穴）



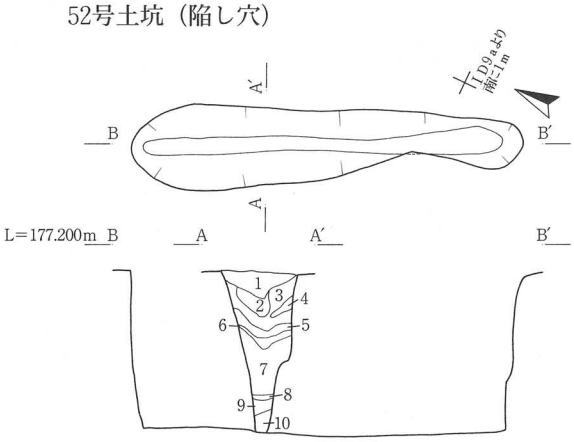
50号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を１％含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を５％前後含みやわらかい
3　10YR4/4　褐色粘土質シルト　地山崩落土との混合土
4　10YR2/1　黒色シルト

51号土坑（陥し穴）



51号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　十和田ａテフラのブロックを部分的に含む
3　10YR6/6　明黄褐色火山灰　十和田ａテフラ
4　10YR3/2　黒褐色シルト　十和田ａをわずかに含む
5　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を含む
6　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を全体に20％含む
7　10YR2/1　黒色粘土質シルト　黄褐色土粒を含む
8　10YR2/1　黒色粘土質シルト　黄褐色土粒を10％含む
9　10YR2/1　黒色粘土質シルト　黄褐色土粒をまばらに含む
10　10YR4/4　褐色粘土質シルト
11　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト
12　10YR2/1　黒色粘土質シルト　黄褐色土粒をまばらに含む
13　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　酸化鉄を含む

52号土坑（陥し穴）



52号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　明黄褐色土粒を１％含む
2　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黒褐色土と黄褐色土の混合土
3　10YR4/4　褐色粘土質シルト　褐色土粒を含む地山崩落土
4　10YR5/6　黄褐色シルト　地山崩落ブロック
5　10YR6/6　明黄褐色　地山崩落ブロック
6　10YR4/4　褐色シルト　黒褐色土粒を全体に含む
7　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
8　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土粒をまばらに含む
9　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
10　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土ブロック含む

0　1：60　3m

第31図　49～52号土坑

51号土坑（陥し穴）（第31図、写真図版25）

（位置、検出状況）北区東ⅡＤ５ａグリッドにて、黒っぽい楕円形のプランで検出された。火山灰の混入が見られた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。開口部1.90×1.24m、底部1.64×0.60m、深さ137cm。

（長軸方向）Ｎ－20°－Ｗ

（堆積土状況）上層から中層までは黒色～暗褐色土が堆積し、その中に灰白色火山灰を含む。下層には黒褐色土と褐色土が交互に薄く堆積する。最下層には酸化鉄を含む粘土が堆積しており、比較的長い期間、この部分が水と関係していたと考えられる。

（壁）ややオーバーハングして立ち上がった後、中位から長軸方向はわずかに、短軸方向は30cmほど外反する。

（底面）ほぼ平坦。ただし湧水が激しく、底面を正しく精査できなかった可能性もある。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれに近い時期に属すると思われる。（吉田）

52号土坑（陥し穴）（第31図、写真図版25）

（位置、検出状況）北区東、中央部北側のＩＣ８ｊ・ＩＣ９ｊグリッドに跨る。黒っぽい溝状のプランで確認した。

（平面形、規模）平面形は溝状。規模は開口部が0.32～0.63×3.09m、底部が0.09～0.23×2.84m、深さは128cm。

（長軸方位）Ｎ－25°－Ｗ

（堆積土状況）上層は黒褐色土と地山崩落土である黄褐色土、中層も明黄褐色土や黄褐色土などの崩落土主体、下層は崩落土と最下部に黒色土が堆積する。自然堆積かと思われる。

（壁）長軸の壁は直立気味に立ち上がる。短軸側は外傾している。

（底面）全体に平坦であるが、わずかに傾斜する。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

53号土坑（第32図、写真図版26）

（位置、検出状況）北区東ＩＤ８ｄグリッドにて、黒褐色の円形に検出された。

（平面形、規模）平面形は円形状。規模は開口部が1.36×1.24m、底部が1.33×1.16m、深さ50cm。

（堆積土状況）黄褐色土を含む黒褐色土と主とし、部分的に地山崩落土と思われる黄褐色ブロックを含む。自然堆積と思われる。

（壁）ほぼ垂直に立ち上がるが、一度オーバーハングし、中位から外反する様子がわずかに見られる。

（底面）概ね平坦である。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。（吉田）

54号土坑（陥し穴）（第32図、写真図版26）

（位置、検出状況）北区東ⅡＣ７ｅグリッドにて黒褐色の楕円形で検出され、中央部には火山灰の混入が見られた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が1.89×1.09m、底部が1.64×0.47m、深さ109cm。

（長軸方向）Ｎ－９°－Ｗ

（堆積土状況）検出面の黒褐色土に火山灰を含む。上層から中層は黒色～黒褐色土を主とするが、下層は褐色土が堆積する。

（壁）ほぼ垂直に立ち上がり、中位から長軸方向は約15cm、短軸方向は約25cm程度外反する。

（底面）わずかに中央部が低いが、ほぼ平坦である。なお、湧水が激しかったため底面の精査は不完全だった可能性もある。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれに近い時期に属すると思われる。（吉田）

55号土坑（陥し穴）（第32図、写真図版26）

（位置、検出状況）北区東ⅡＣ３ｅグリッドにて、黒褐色の楕円形のプランが確認できた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が2.45×1.15m、底部が2.60×0.67m、深さ79cm。

（長軸方向）Ｎ－87°－Ｗ

（堆積土状況）上層から中層は、黒褐色土･暗褐色土･褐色土が黄褐色土粒や灰白色火山灰の小ブロックなどを含みながら堆積している。中層より下位には黒褐色～暗褐色土と黄褐色土が交互に堆積し、その中には灰白色火山灰が５cm弱の厚さで観察される。このことから、本遺構は人為的に埋め戻された可能性がある。

（壁）長軸方向は約100°の傾斜でオーバーハングする。短軸方向はほぼ垂直に立ち上がった後、中位から約20cm外反する。

（底面）中央から長軸の両端に向かって低くなるように傾斜する。西端の左右には、逆茂木痕と思われる２個の副穴があり、上部の中央方向に向かって開口している。

（遺物、重複等特記事項）底面直上（十和田ａテフラより下層）から鉄製の紡錘車が１点出土した。

（時期）遺物及び堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれ以降の近い時期に属すると思われる。（吉田）

56号土坑（陥し穴）（第32図、写真図版26）

（位置、検出状況）北区東ⅠＣ２ｅグリッドにて、黒褐色の細長い楕円形として検出された。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が2.70×0.36m、底部が2.46×0.16m、深さ80cm。

（長軸方向）Ｎ－22°－Ｗ

（堆積土状況）上層に黒褐色土、下層に黄褐色土が堆積する。２層の黒褐色土には黄褐色土を、３層の黄褐色土には黒褐色土をそれぞれ含む。自然堆積と思われる。

（壁）両端の壁は凹凸しながら開口部に向けて広がる。長軸の壁は底から中間点までゆるやかに外傾する。その上はほぼ垂直に立ち上がる。

（底面）掘りすぎたため詳細は不明だが、ほぼ平坦と思われる。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がないので特定はできないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（菊池）

57号土坑（陥し穴）（第32図、写真図版27）

（位置、検出状況）北区東ⅡＣ１ｆ、ⅡＣ２ｆグリッドに跨り、黒褐色の溝状に検出された。

（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が4.88×0.37m、底部が4.74×0.19m、深さ85cm。

（長軸方向）Ｎ－15°－Ｗ

（堆積土状況）上層は黒褐色土、中層から下位は褐色土が堆積しているが、褐色土の中には黒色土の縞状の混入が見られる。自然堆積と思われる。

（壁）長軸の北側は一度外傾した後中位より、南側は底からオーバーハングする。短軸方向はわずかに外傾する。

（底面）長軸の中央がわずかに低くなるようになだらかに傾斜する。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（吉田）

58号土坑（陥し穴）（第33図、写真図版27）

（位置、検出状況）北区東、中央からわずかに西側のⅡＣ３ｇグリッドに位置する。黒っぽく細長いプランで確認した。

（平面形、規模）平面形は溝状。規模は開口部が0.35～0.45×2.72m、底部が0.07～0.18×2.47m、深さは100cm。

（長軸方位）Ｎ－17°－Ｅ

（堆積土状況）上層は黒褐色土、以下は黄褐色の崩落土が主体となる。自然堆積と思われる。

（壁）長軸の壁は直立気味に外形して立ち上がる。短軸側は上部で外反気味となる。

（底面）中央がわずかに高く、長軸側の両端部は低い。

（遺物、重複等特記事項）遺物は出土していない。

（時期）出土遺物がなく時期は特定できないが、形状等から縄文時代の遺構と推測される。（濱田）

59号土坑（陥し穴）（第33図、写真図版27）

（位置、検出状況）北区東ⅡＣ４ｆ、ⅡＣ５ｆグリッドにまたがり、黄褐色土をわずかに含む黒っぽい楕円形として検出された。中央には明黄褐色の火山灰の堆積が見られた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が1.73×0.87m、底部が1.57×0.44m、深さ120cm。

（長軸方向）Ｎ－17°－Ｗ

（堆積土状況）検出面及び上層に灰白色火山灰が混入する。黄褐色土を含む黒色～黒褐色土と地山崩落土と思われる黄褐色～褐色土が交互に堆積する。自然堆積と思われる。

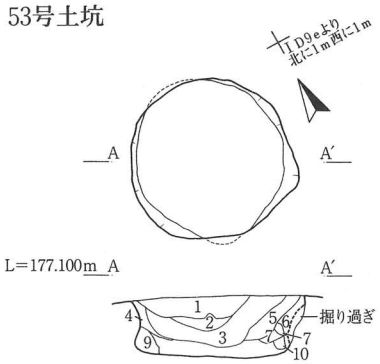
（壁）長軸はわずかに外傾する。短軸はほぼ垂直に立ち上がった後、中位から約20cm外反する。

（底面）ほぼ平坦だが、長軸の南側のみ10cm深くなるように傾斜する。

（遺物、重複等特記事項）特になし

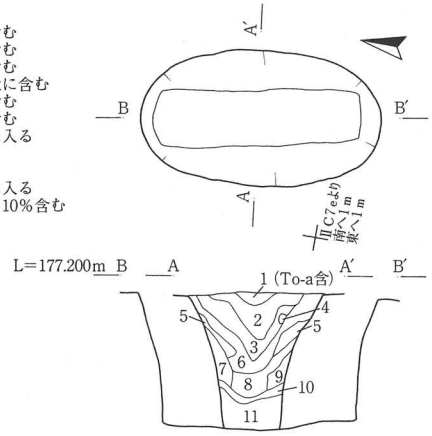
（時期）堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれに近い時期に属すると思われる。　（吉田）

53号土坑



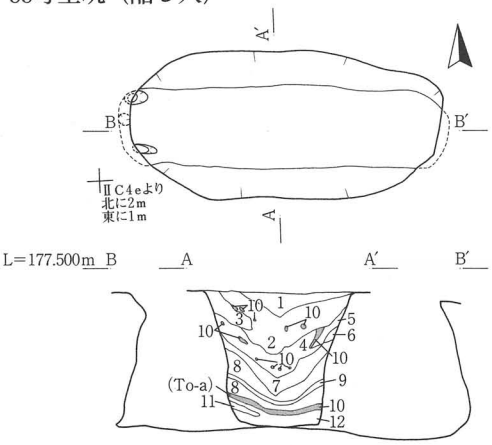
53号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を10%含む
2　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を15%含む
3　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を15%含む
4　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土を15%斑状に含む
5　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を５%含む
6　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を20%含む
7　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　ブロック状に入る
8　10YR3/2　黒褐色シルト
9　10YR4/4　褐色シルト
10　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　ブロック状に入る
11　10YR2/3　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を10%含む

54号土坑（陥し穴）



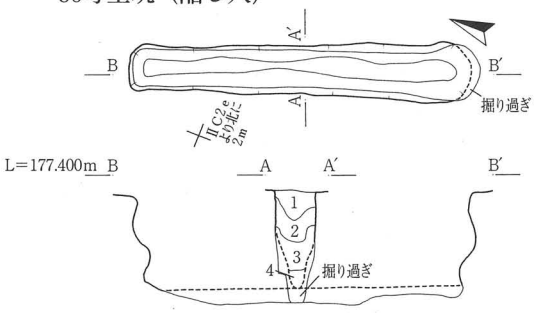
54号土坑
1　10YR3/2　黒褐色シルト　十和田ａテフラを15%斑状に含む
2　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を10%含む
3　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黒色土小ブロック、褐色土粒を30%含む
4　10YR2/1　黒褐色シルト　ブロック状
5　10YR2/2　黒褐色シルト　黒色土を50%中央部を中心に含む
6　10YR3/2　黒色シルト　褐色土粒を15%含む
7　10YR4/6　褐色粘土質シルト　３層と同質の土を50%含む
8　10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土粒を20%含む
9　10YR2/3　黒褐色シルト　褐色土粒を東側を中心に斑状に含む
10　10YR1.7/1　黒色シルト　褐色土粒を20%含む
11　10YR4/6　褐色粘土質シルト

55号土坑（陥し穴）



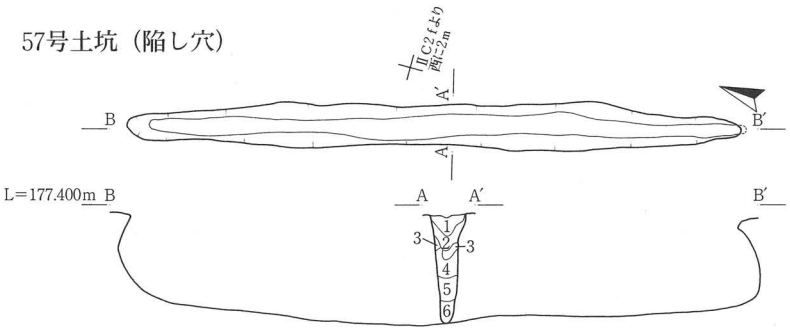
55号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を20%、黒色土を25%含む
3　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土粒を30%含む
4　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土粒を40%含む
5　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を20%含む
6　10YR5/6　黄褐色シルト　地山崩落土
7　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を５%含む
8　10YR5/8　黄褐色シルト
9　10YR3/4　暗褐色シルト
10　10YR5/4　にぶい黄褐色火山灰　十和田ａテフラ
11　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト
12　10YR6/8　明黄褐色シルト

56号土坑（陥し穴）



56号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト
2　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土を斑状に20%含む
3　10YR5/6　黄褐色シルト　黒褐色土を斑状に30%含む
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト

57号土坑（陥し穴）



57号土坑
1　10YR2/2　黒褐色シルト
2　10YR2/2　褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を斑状に10%含む
3　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト
4　10YR4/4　褐色シルト　黄褐色土を斑状に30%含む
5　10YR5/6　黄褐色シルト　黒褐色土を縞状に20%含む
6　10YR5/6　黄褐色シルト　地山崩落土

0　1：60　3m

第32図　53～57号土坑

60号土坑（陥し穴）（第33図、写真図版27）

（位置、検出状況）北区東ⅡＣ６ｉ、ⅡＣ７ｉグリッドに跨り、実際の開口部より細い楕円形で検出された。堆積土は暗褐色土が主だが、火山灰や黄褐色土のブロックを含んでいた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が2.01×1.14m、底部が2.02×0.55m、深さ112cm。

（長軸方向）Ｎ－15°－Ｗ

（堆積土状況）検出面に灰白色火山灰が混入する。黄褐色土を含む黒色～暗褐色土と主とし、部分的に地山崩落土と思われる黄褐色ブロックを含む。自然堆積と思われる。

（壁）長軸方向はほぼ垂直に立ち上がるが、北側上位にわずかにオーバーハングする様子が見られる。短軸方向の東側は約20cm外傾し、西側は中位より約30cm外反する。

（底面）中央付近にやや低い部分はあるがほぼ平坦である。なお、湧水が激しかったため、底面の確認が不十分だった可能性がある。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれに近い時期に属すると思われる。（吉田）

61号土坑（陥し穴）（第33図、写真図版28）

（位置、検出状況）北区東ＩＤ０ｃグリッドにて、黒褐色の楕円形として検出された。堆積土には黄褐色土の混入が見られた。

（平面形、規模）平面形は楕円形状。規模は開口部が2.20×1.23m、底部が2.38×0.73m、深さ106cm。

（長軸方向）Ｎ－22°－Ｗ

（堆積土状況）上層から中層までは黒色～暗褐色土の堆積があり、その中に黄褐色土粒及びブロックを含む。中層より下位は、黒褐色土と褐色土が薄い縞状に交互に堆積する。その下には灰白色火山灰が７cm前後の層を成して堆積し、最下部には褐色土が堆積する。

（壁）長軸方向は開口部に向かってわずかにオーバーハングする。短軸方向は約30cm外傾するが、わずかに中位で狭まる様子が見られる。

（底面）ほぼ平坦。形状は長方形でその四角に逆茂木痕と思われる副穴があり、それぞれの孔は開口部の中央方向を向いている。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）堆積土中に十和田ａテフラと思われる火山灰を含んでいることから、平安時代またはそれに近い時期に属すると思われる。（吉田）

62号土坑（陥し穴）（第33図、写真図版28）

（位置、検出状況）北区東ＩＣ５ｉ、ＩＣ６ｉグリッドに跨り、暗褐色の溝状に検出された。

（平面形、規模）平面形は細長い溝状で、規模は開口部が2.96×0.26m、底部が2.74×0.09m、深さ54cm。

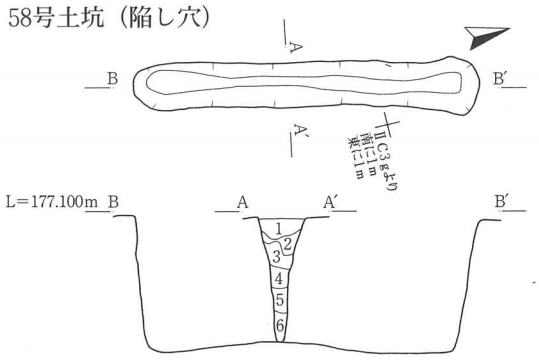
（長軸方向）Ｎ－15°－Ｗ

（堆積土状況）上層のみ暗褐色で、中層以下は地山崩落土と思われる黄褐色～褐色土である。自然堆積と思われる。

（壁）やや外傾するが、開口部付近でわずかに外反する。

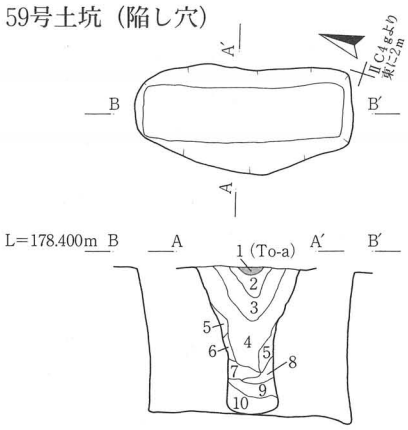
（底面）南東側より70cm北西部分を最高位とし、両側になだらかに傾斜する。

58号土坑（陥し穴）



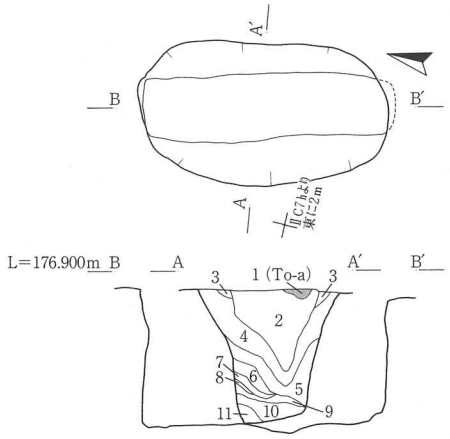
58号土坑
1　10YR2/3　黒褐色シルト
2　10YR2/3　黒褐色シルト　地山崩落ブロック含む
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土
4　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　褐色土小ブロック含む
5　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落土と黒褐色土の混合土
6　10YR4/4　黄褐色粘土質シルト　５層に似るが、黒褐色土含まず

59号土坑（陥し穴）



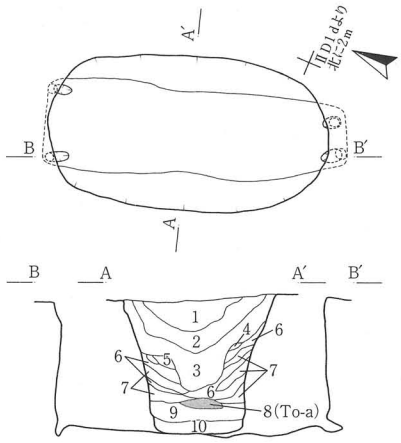
59号土坑
1　10YR6/6　明黄褐色火山灰　十和田ａテフラ
2　10YR3/2　黒褐色シルト　十和田ａテフラをわずかに含む
3　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を全体に含む
4　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を10％含む
5　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土ブロックを全体に含む
6　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
7　10YR4/4　褐色シルト　地山崩落ブロックを含む。
8　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色ブロックとの混合土
9　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック
10　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を全体に含む

60号土坑（陥し穴）



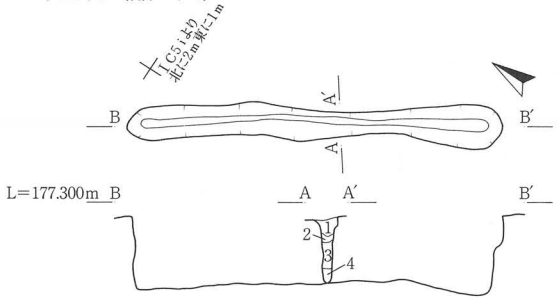
60号土坑
1　10YR7/4　にぶい黄燈色火山灰　十和田ａテフラ
2　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を１％含む
3　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト　粒子細かい
4　10YR2/1　黒色シルト　明黄褐色土粒を全体に含む
5　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土ブロックを含む
6　10YR2/2　黒褐色シルト
7　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト 地山崩落ブロック
8　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒をまばらに含む
9　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト
10　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　黄褐色土ブロック含む
11　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　地山崩落ブロック

61号土坑（陥し穴）



61号土坑
1　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土粒を５％含む
2　10YR3/3　暗褐色シルト　黄褐色土粒を10％含む
3　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を10％含む
4　10YR4/6　褐色シルト
5　10YR4/9　褐色シルト
6　10YR2/3　黒褐色シルト
7　10YR5/6　黄褐色シルト
8　10YR5/4　にぶい黄褐色火山灰　十和田ａテフラ
9　10YR4/4　褐色粘土質シルト
10　10YR5/6　褐色シルト　軽石含む

62号土坑（陥し穴）



62号土坑
1　10YR3/3　暗褐色シルト
2　10YR5/6　黄褐色シルト
3　10YR4/4　褐色シルト
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト

0　1：60　3m

第33図　58～62号土坑

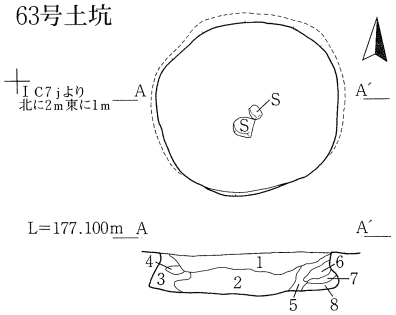
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（吉田）

63号土坑（第34図、写真図版28）
（位置、検出状況）北区東ＩＣ６ｊグリッドにて、暗褐色の円形で検出された。
（平面形、規模）平面形は略円形。規模は開口部が1.41×1.38m、底部が1.51×1.42m、深さ44cm。
（堆積土状況）壁際に地山崩落土と思われる黄褐色～褐色土が堆積する。他は黒～黒褐色土の堆積を主とするが、多くの割合で黄褐色土粒が混入しており、人為的に埋め戻しされたと考えられる。
（壁）底面よりオーバーハングし、開口部付近でわずかに外傾する。
（底面）中央部がわずかに低く周囲からなだらかに傾斜する。人為的に置かれた可能性がある礫が２個中央部にある。
（遺物、重複等特記事項）遺構の上部が削られたフラスコ状の土坑、あるいは底面近くに礫が置かれた状況から、墓壙となる可能性がある。
（時期）遺物がないため特定できないが、堆積土の状況などから縄文時代の遺構と思われる。（吉田）

64号土坑（第34図、写真図版28）
（位置、検出状況）北区東の南東側、ⅡＤ７ｇグリッドに位置する。不整な円形プランで検出した。
（平面形、規模）平面形は不整円形。規模は開口部1.37×1.48m、底部0.87×0.93m、深さは99cm。
（堆積土状況）上層は小礫を含む黒褐色土と明黄褐色土、中層以下は黒褐色土、黄褐色土粒を含む黒色土、暗褐色土、明黄褐色土などが堆積する。人為的に埋め戻された可能性がある。
（壁）いずれも外反気味に立ち上がる。
（底面）ほぼ平坦である。
（遺物、重複等特記事項）遺物は出土していない。形状からは副穴がない陥し穴状遺構と思われるが、人為的に埋め戻されている可能性があり、それとは全く異なる性格をもつものかもしれない。
（時期）出土遺物がなく時期は特定できない。堆積土の状況から縄文時代の遺構としておく。（濱田）

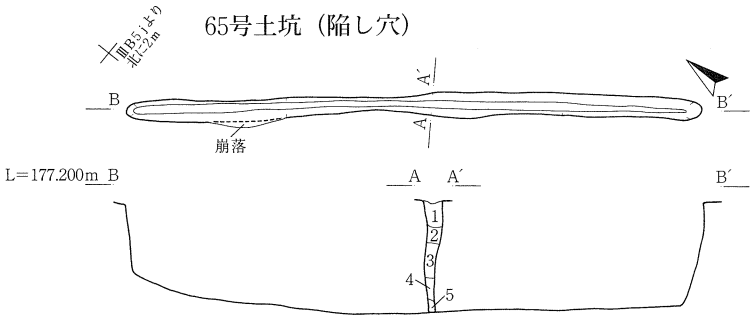
65号土坑（陥し穴）（第34図、写真図版29）
（位置、検出状況）中央区ⅢＢ４ｉ、４ｊ、５ｉ、５ｊグリッドに跨り、黒い溝状に検出された。
（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が4.52×0.21m、底部が4.33×0.07m、深さ88cm。
（長軸方向）Ｎ－36°－Ｗ
（堆積土状況）黒色及び黒褐色土が堆積しているが、部分的に黄褐色土粒の混入が見られる。自然堆積と思われる。
（壁）両端の壁、長軸の壁いずれもわずかに外傾する。
（底面）中央部がわずかに低く、長軸両端よりなだらかに傾斜する。
（遺物、重複等特記事項）特になし
（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。なお66号土坑が真横にあり、位置関係や形状からこの二つはほぼ同じ時期に使われた可能性が高い。　（吉田）

63号土坑



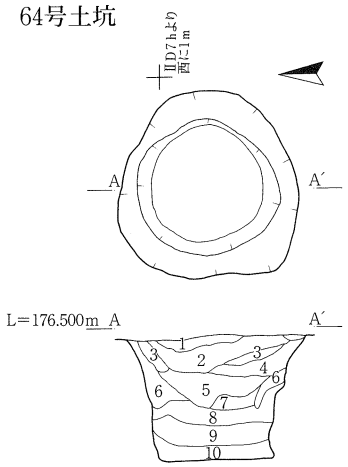
63号土坑
1　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土粒を40%含む
2　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土粒を50%含む
3　10YR4/6　褐色シルト
4　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト　ブロック状に入る
5　10YR4/4　褐色シルト
6　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト
7　10YR4/6　褐色粘土質シルト
8　10YR5/6　黄褐色粘土質シルト

65号土坑（陥し穴）



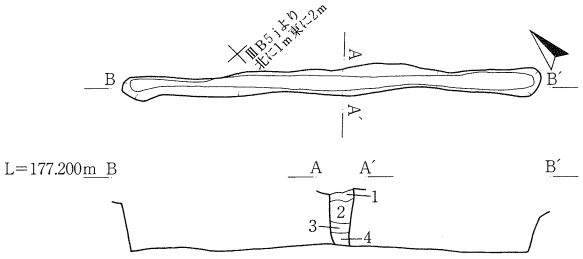
65号土坑
1　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を２%含む
2　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を下部を中心に30%含む
3　10YR2/2　黒褐色シルト
4　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を20%含む
5　10YR1.7/1　黒色シルト

64号土坑



64号土坑
1　10YR3/2　黒褐色シルト　小礫をわずかに含む
2　10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト　にぶい黄橙色土と黒色土の混合土
3　10YR2/1　黒色シルト
4　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土小ブロックと黒色土の混合土
5　10YR3/2　黒褐色シルト　明黄褐色土と黒色土のブロックを含む
6　10YR2/1　黒色シルト　地山崩落ブロックを含む
7　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　暗褐色土ブロックを含む
8　10YR2/1　黒色シルト　明黄褐色土粒をまばらに含む
9　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土ブロックとの混合土で堅く締まる
10　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト　黒色土を数%含む

66号土坑（陥し穴）



66号土坑
1　10YR2/1　黒色粘土質シルト　褐色土粒を２%含む
2　10YR4/6　褐色粘土質シルト
3　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　褐色土を10%周囲を中心に含む
4　10YR4/6　褐色粘土質シルト　黄褐色土粒を40%含む

0　1：60　3m

第34図　63～66号土坑

66号土坑（陥し穴）（第34図、写真図版29）

（位置、検出状況）中央区ⅢＢ４ｊ・ⅢＢ５ｊグリッドに跨り、黒い溝状に検出された。

（平面形、規模）平面形は細長い溝状。規模は開口部が3.27×0.24m、底部が3.15×0.11m、深さ51cm。

（長軸方向）Ｎ－48°－Ｗ

（堆積土状況）黒っぽい土層と地山崩落土と思われる褐色土が交互に堆積し、黒色土にも褐色土粒の混入が見られる。自然堆積と思われる。

（壁）両端の壁、長軸の壁いずれもわずかに外傾する。

（底面）中央部がわずかに高く、長軸両端へなだらかに傾斜する。

（遺物、重複等特記事項）特になし

（時期）出土遺物がないため特定できないが、形状から縄文時代のものと推測される。　（吉田）

（３）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、調査区を東西に走る農道を挟んで北区東と中央区北寄りで１棟ずつ検出した。ともにこれに付属するかと思われる井戸跡も数基見つかったが、いずれも湧水がひどくとても底面までは精査できなかった。

１号掘立柱建物跡（第35図、写真図版29）

（位置）北区東の南西側、ⅡＣ９ｄ・９ｅ・10ｄ・10ｅなどのグリッドに位置する。

（検出状況・重複）この周辺には本遺構で使用した柱穴以外のそれは確認されず、他の遺構との重複も認められない。

（平面形式、規模）桁行３間、梁間１間の掘立柱建物跡で、８個の柱穴を使用する。桁行は6.08m、梁間は4.11m、面積はおよそ25m²（7.6坪）である。

（棟方向）桁行の方向はＮ－71°－Ｗである。

（柱間寸法）桁行は180cm（６尺）と212cm（７尺）を使用している。

（柱痕跡）Ｐ43以外の７個で観察された。

（遺物）出土していない。

（時期）出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、平面形式と柱間寸法から近世に所属すると思われる。隣接する井戸跡がこの建物と同時に使用されたものとすれば、出土した陶磁器の年代から、17～18世紀ごろとの予測もできる。　（濱田）

２号掘立柱建物跡（第35図、写真図版30）

（位置）中央区の中央北寄りにあり、ⅢＣ６ｂ・７ｂ・６ｃ・７ｃなどのグリッドに跨っている。

（検出状況・重複）この周辺で30個あまりの柱穴が検出され、うち12個を使用した。35号土坑（陥し穴）と重複するが本遺構のほうが新しい。Ｐ29とは直接切り合わない。

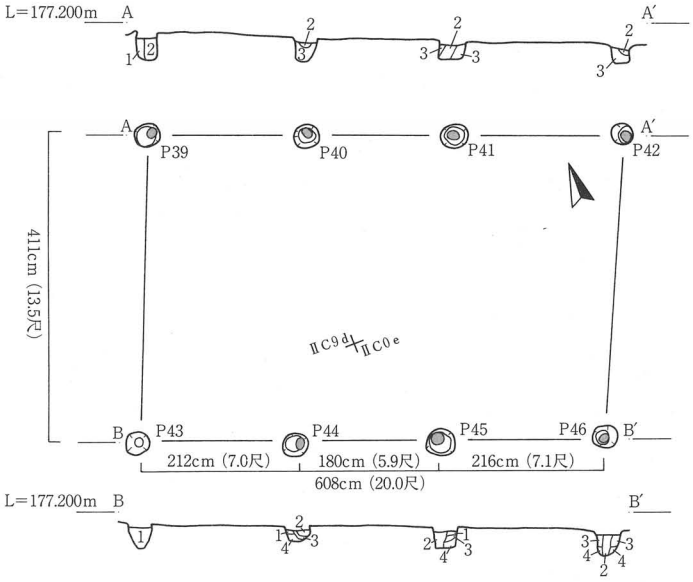
（平面形式、規模）桁行４間、梁間３間の掘立柱建物跡である。桁行は8.52m、梁間は4.80m、面積はおよそ40.8m²（12.4坪）である。

（棟方向）桁行の方向はＮ－11°－Ｅである。

（柱間寸法）桁行は190cm（6.3尺）～237cm（7.8尺）、梁間は153cm（５尺）～175cm（5.8尺）。

（柱痕跡）Ｐ33にのみ確認できた。

１号掘立柱建物跡

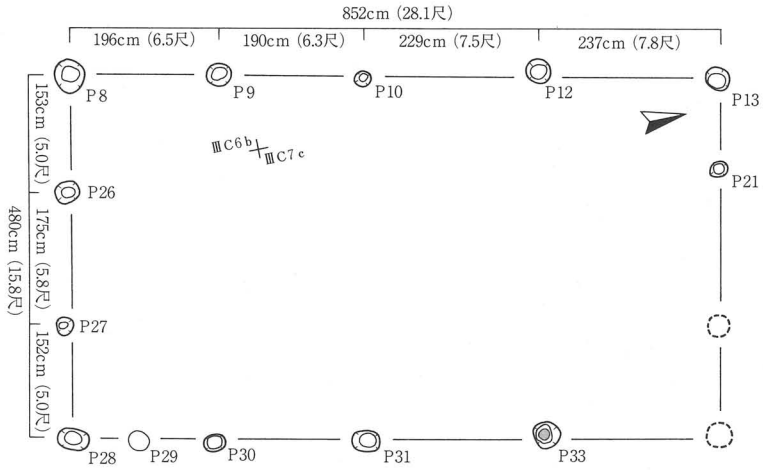


柱穴観察表

柱穴No.	径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備　考
39	34×30	37.4	176.697	１号掘立柱建物跡
40	35×30	30.1	176.698	１号掘立柱建物跡
41	36×35	21.5	176.737	１号掘立柱建物跡
42	28×30	27.2	176.915	１号掘立柱建物跡
43	33×33	34.1	176.711	１号掘立柱建物跡
44	34×34	20.2	176.800	１号掘立柱建物跡
45	38×39	27.8	176.720	１号堀立柱建物跡
46	35×31	34.9	176.603	１号掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡
1　10YR1.7/1　黒色シルト　黄褐色土粒をまばらに含む
2　10YR1.7/1　黒色シルト　黒褐色土を含む
3　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　黒色土粒を全体に含む
4　10YR5/8　黄褐色粘土質シルト

２号掘立柱建物跡



柱穴観察表

柱穴No.	径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備　考
8	40×46	26.8	176.640	２号掘立柱建物跡
9	32×38	42.5	176.481	２号掘立柱建物跡
10	22×24	20.9	176.665	２号掘立柱建物跡
12	38×38	32.3	176.542	２号掘立柱建物跡
13	36×36	18.7	176.643	２号掘立柱建物跡
21	22×24	18.1	176.650	２号掘立柱建物跡
26	32×38	25.9	176.655	２号掘立柱建物跡
27	24×24	31.7	176.604	２号掘立柱建物跡
28	32×40	37.9	176.520	２号掘立柱建物跡
30	24×28	38.9	176.510	２号掘立柱津物跡
31	30×38	31.5	176.562	２号掘立柱建物跡
33	38×38	28.9	176.578	２号堀立柱建物跡

0　1：100　5m

第35図　１・２号掘立柱建物跡

（遺物）出土していない。
（時期）出土遺物がなく時期は不明であるが、平面形式と柱間寸法から近世に所属すると思われる。1号掘立柱建物跡同様、17～18世紀ごろとの予測もできる。（濱田）

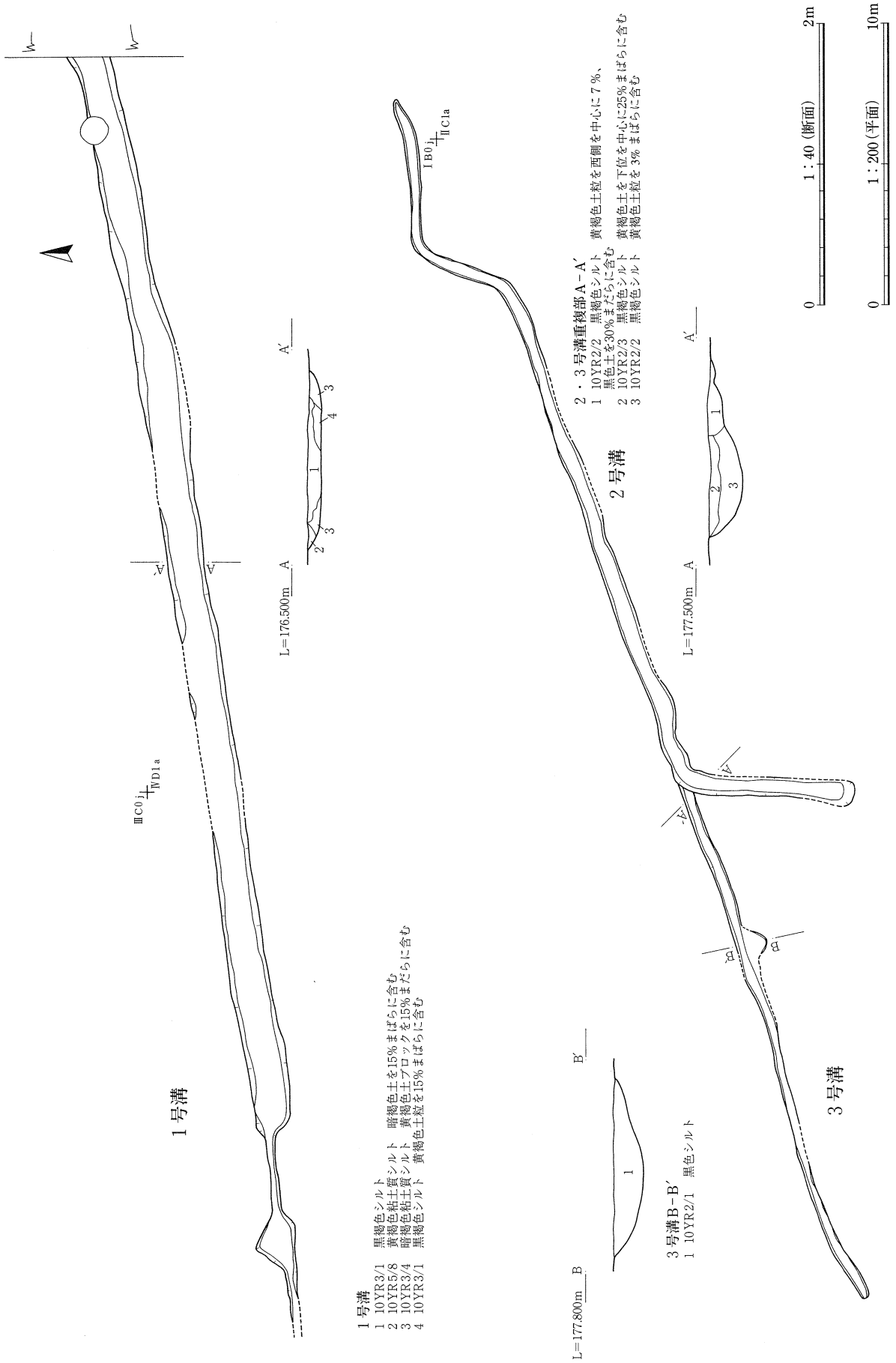
（4）溝　　跡

溝跡は8条を登録し精査したが、ここに4条を報告する。これ以外の溝跡は、堆積土の状態などからごく最近の新しい時期のものと判断した。

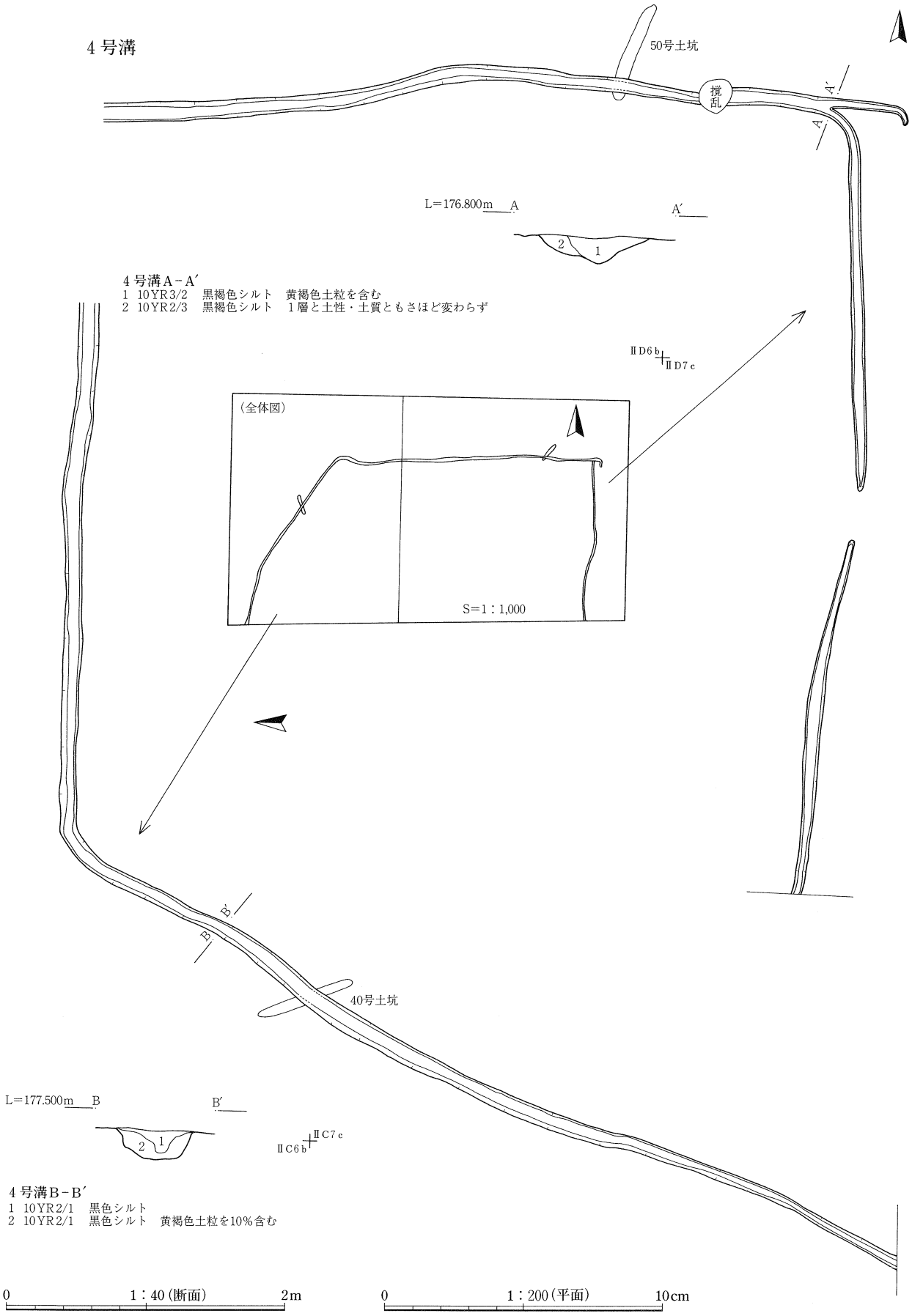
1号溝跡（第36図、写真図版30）
（位置）中央区中央から東寄りにかけて、東西に走る溝である。両端とも突然途切れるが、開田の際に削られたものと思われる。ⅣＣ２ｇグリッド～ⅣＤ１ｆグリッドにかけて延びている。
（検出状況・重複）黒褐色の溝状の広がりで確認した。24号土坑と重複するが本遺構が新しい。
（規模）総長45.0m、上幅0.22～1.25m、下幅0.18～1.05m
（深さ）10cm前後　（断面形）皿状
（堆積土状況）黒褐色土が主体であるが、壁際に黄褐色土と暗褐色土が入る。
（遺構の性格）開田前の水の引き込み溝か。
（遺物）手持ち砥石（７）と環状の鉄製品（16）が出土した。
（時期）詳細な時期は不明であるが、近世以降と思われる溝である。（濱田）

2号溝跡（第36図、写真図版31）
（位置）中央区の中央から南西方向に緩く蛇行しながら延びる。ⅣＣ１ａグリッド～ⅣＢ４ｆグリッドにかけて位置する。
（検出状況・重複）黒褐色の溝状のプランで確認した。本遺構はⅣＢ３ｆグリッド付近で南側に折れ、重複する3号溝跡と分岐する。3号溝跡はそのまま西側に直線状に延びている。重複部分の断面観察から、本遺構のほうが新しいと判断できた。
（規模）総長30.8m、上幅0.30～0.92m、下幅0.27～0.60m
（深さ）23cm　（断面形）皿状
（堆積土状況）黄褐色土粒を含む黒褐色土2層からなる。
（遺構の性格）開田前の水の引き込み溝か。
（遺物）出土していない。
（時期）詳細な時期は不明であるが、近世以降と思われる溝である。（濱田）

3号溝跡（第36図、写真図版31）
（位置）重複する2号溝跡から南西方向に直線状に延びる。ⅣＢ３ｆグリッド～ⅣＢ４ｂグリッドにかけて位置する。
（検出状況・重複）黒色のプランで2号溝跡とともに検出した。重複関係は前述のとおりである。
（規模）総長19.2m、上幅0.28～0.40m、下幅0.21～0.30m
（深さ）20cm　（断面形）皿状　（堆積土状況）黒色土の単層である。
（遺構の性格）開田前の水の引き込み溝か。
（遺物）置き砥石（８・９・10）が3点出土した。


1号溝
1 10YR3/1　黒褐色シルト
2 10YR5/8　黄褐色粘土質シルト　暗褐色土を15%まばらに含む
3 10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土ブロックを15%まだらに含む
4 10YR3/1　黒褐色シルト　黄褐色土粒を15%まばらに含む
L=176.500m　A　A′
ⅢC0j　ⅣD1a
2号溝
2・3号溝重複部A－A′
1 10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を西側を中心に7%、黒色土を30%まだらに含む
2 10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色土を下位を中心に25%まばらに含む
3 10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を3%まばらに含む
L=177.500m　A　A′
ⅠB0j　ⅡC1a
3号溝
3号溝B－B′
1 10YR2/1　黒色シルト
L=177.800m　B　B′
1：40（断面）　0　2m
1：200（平面）　0　10m

第36図　１～３号溝跡


4号溝
50号土坑
撹乱
A
A′
L=176.800m
2
1
4号溝A－A′
1　10YR3/2　黒褐色シルト　黄褐色土粒を含む
2　10YR2/3　黒褐色シルト　1層と土性・土質ともさほど変わらず
ⅡD6b
ⅡD7c
（全体図）
S=1：1,000
B
B′
40号土坑
L=177.500m
B
B′
ⅡC7c
ⅡC6b
4号溝B－B′
1　10YR2/1　黒色シルト
2　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色土粒を10％含む
0
1：40（断面）
2m
0
1：200（平面）
10cm

第37図　4号溝跡

柱穴観察表

柱穴No.	径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	備　考	柱穴No.	径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	備　考
1	32×28	37.8	176.715	柱痕跡	19	32×34	9.3	176.828	柱痕跡
2	30×28	10.1	176.970	柱痕跡	20	28×28	27.5	176.548	
3	26×32	15.0	176.891	柱痕跡	22	24×24	11.0	176.721	
4	36×40	19.4	176.890	柱痕跡	23	34×32	18.2	176.650	
5	24×24	38.6	176.700	柱痕跡	24	38×38	39.5	176.495	柱痕跡
6	46×36	33.2	176.752	柱痕跡	25	22×24	13.3	176.769	
7	30×30	32.2	176.774	柱痕跡	29	30×28	23.6	176.659	柱痕跡
11	28×26	19.1	176.683		32	30×26	26.7	176.590	
14	34×36	10.0	176.673		34	28×26	34.3	176.367	
15	28×30	18.2	176.615		35	32×32	26.6	176.553	
16	32×32	30.1	176.581		36	28×28	11.7	176.688	
17	28×28	13.6	176.809		37	24×26	15.8	176.642	
18	30×44	27.4	176.591	柱痕跡	38	24×26	40.7	176.418	

第38図　柱 穴 群

（時期）詳細な時期は不明であるが、近世以降と思われる溝である。（濱田）

4号溝跡（第37図、写真図版31）

（位置）重複する2号溝跡から南西方向に直線状に延びる。ⅣＢ３ｆグリッド～ⅣＢ４ｂグリッドにかけて位置する。

（検出状況・重複）黒色のプランで2号溝跡とともに検出した。重複関係は前述のとおりである。

（規模）総長約108.0m、上幅0.28～0.80m、下幅0.11～0.43m

（深さ）21㎝　（断面形）皿状　（堆積土状況）2層の黒色土からなる。一方には黄褐色土粒を含む。

（遺構の性格）不明である。

（遺物）在地産の現代陶器（17）が数破片まとまって出土している。

（時期）近・現代の区画溝と思われる。（濱田）

（5）柱　穴　群（第38図）

中央区中央北寄りに集中する柱穴群である。掘立柱建物跡を構成するものではないが、柱穴痕を残すものも多数見受けられる。柱穴相互の重複は認められない。

詳細は第38図中にある一覧表を参照のこと。（濱田）

（6）出 土 遺 物（第39・40図、写真図版32・33）

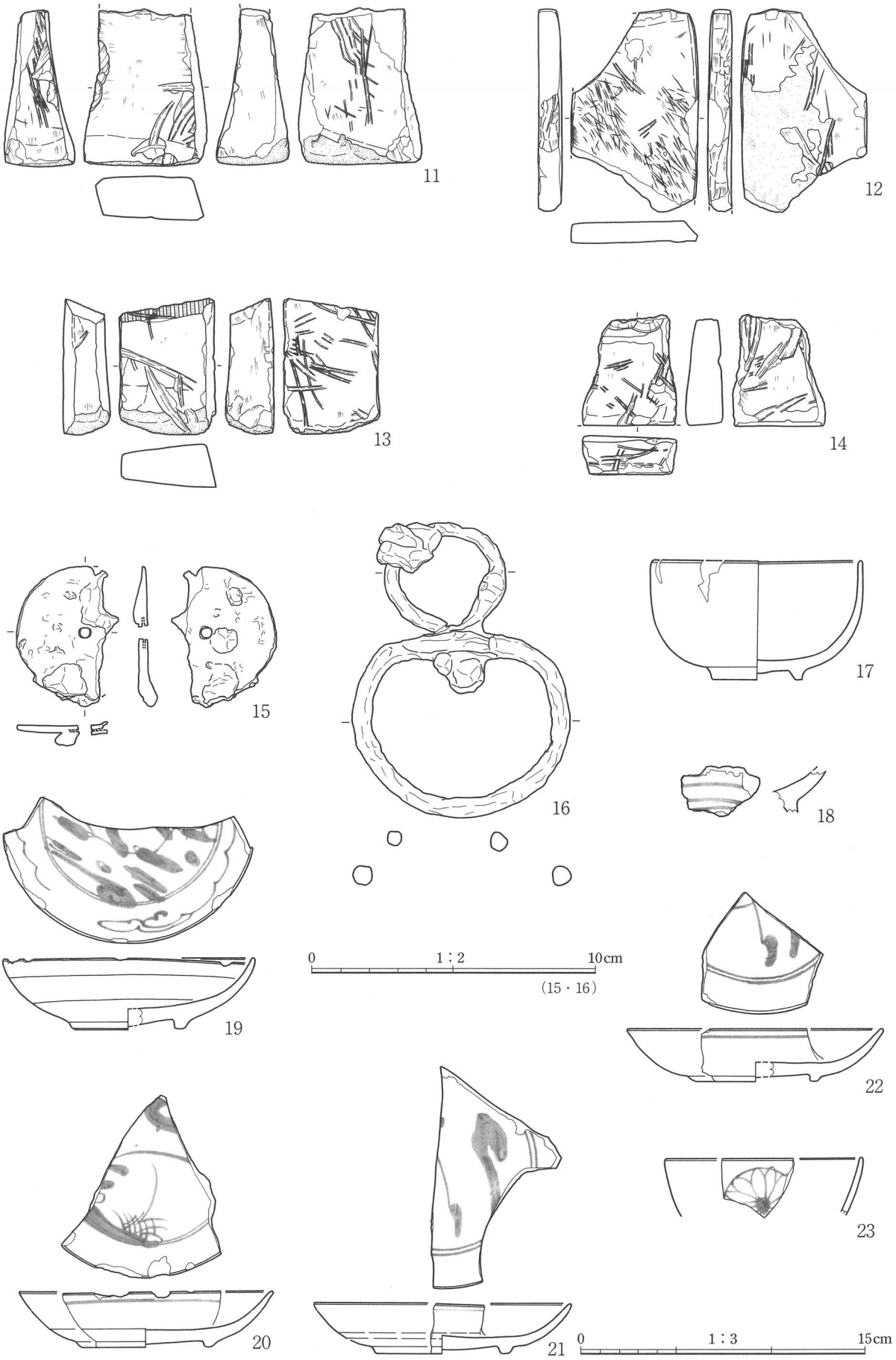
今回の調査で出土した遺物は、当センター収納用小コンテナ（容量14㍑）1箱に過ぎない。内訳は、縄文土器数十点（578.5g）、土師器1点（69.7g）石器類（4,704.7g）、近世以降の陶磁器（932.7g）、鉄製品2点（55.6 g）である。

ここに掲載した遺物は、遺構内出土10点（詳細未報告の井戸跡出土のものも含む）、遺構外出土13点の計23点である。これらは、遺構の内外を問わず遺物の種類ごとに掲載した。以下に詳細を記す。

1は20号土坑上部から出土した縄文土器の口縁部破片で、内面がわずかに肥厚する。地文はＬＲ縄文で、時期は後期初頭かと思われるもの。2は3号溝の検出面で出土したいわゆる赤焼き土器の坏の底部である。厚手の破片で、外面には回転糸切り痕を残す。詳細な時期は不明である。3は41号土坑出土の撥形の石篦で、剥離調整が全周するもの。4は黒曜石製の剥片、5・6はホルンフェルス製の打製石斧である。7～14は砥石である。7は1号溝、8～10は3号溝、11は2号井戸、12は3号井戸から、13・14は遺構外から出土した。いずれも3面以上が使用面となっている。いずれも近世以降のものと判断した。15は55号陥し穴状遺構の灰白色火山灰下、底面直上から出土した鉄製紡錘車の円盤部で、中央と思われる部分に2㎜程度の孔をもつ。陥し穴状遺構からの出土遺物としては希有な例と思われる。16は環状製品としたが用途はわからない。

17～23は近世以降の陶磁器である。17は大堀・相馬産（19世紀代）の陶器碗で見込みに目跡があるもの。18は肥前産磁器碗の底部か。19は肥前産の染付皿で大橋編年Ⅱ期かⅢ期はじめ頃のもの。20～22は大橋編年Ⅲ期、23は菊花唐草文の磁器碗で大橋Ⅳ期に属するものと思われる。（濱田）

第39図　出土遺物（1）



第40図　出土遺物（2）

第８表　遺物観察表

（　）は現存値

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	部位	文様・調整・法量（cm・g）・年代など	石質	産地
1	20号土坑	1　層	縄文土器	深鉢	口縁	ＬＲ縄文、口縁部内面肥厚		
2	３号溝周辺	検出面	土師器	坏	底部	赤焼き、回転糸切り痕、厚手、底径6.3cm		
3	41号土坑	埋土上位	石器	石篦		長さ　6.7　幅 3.5　厚さ 1.1　重量　25.6g	頁　岩	新生代新第三紀・奥羽山脈
4	北区東	表土直下	石器	剥片		長さ　5.2　幅 3.4　厚さ 1.3　重量　21.4g	黒曜石	産地不明
5	29号土坑そば	表　土	石器	打製石斧		長さ　9.1　幅 4.3　厚さ 2.3　重量　69.6g	ホルンフェルス	中生代白亜紀に変成・奥羽山脈基盤
6	Ⅳ Ａ 区	検出面	石器	打製石斧		長さ 10.0　幅 4.5　厚さ 2.1　重量 111.7g	ホルンフェルス	中生代白亜紀に変成・奥羽山脈基盤
7	１号溝西側	埋　土	石器	砥石		長さ（7.7）幅(4.5）厚さ 3.5　重量　81.7g	デイサイト	新生代新第三紀・奥羽山脈
8	３号溝	埋　土	石器	砥石		長さ 11.3　幅 6.8　厚さ 3.5　重量 245.5g	デイサイト	新生代新第三紀・奥羽山脈
9	３号溝	埋　土	石器	砥石		長さ（6.5）幅 4.3　厚さ 2.8　重量 108.9g	デイサイト	新生代新第三紀・奥羽山脈
10	３号溝	埋　土	石器	砥石		長さ 21.6　幅 7.9　厚さ 5.6　重量 1568.3g	デイサイト	新生代新第三紀・奥羽山脈
11	２号井戸	埋　土	石器	砥石		長さ（8.3）幅 6.4　厚さ 3.7　重量 216.3g	デイサイト	新生代新第三紀・奥羽山脈
12	３号井戸	埋　土	石器	砥石		長さ(10.7）幅(6.6）厚さ 1.2　重量　99.1g	デイサイト	新生代新第三紀・奥羽山脈
13	ⅢＣ８ｆ	表　土	石器	砥石		長さ　7.2　幅 5.0　厚さ 2.5　重量 115.0g	デイサイト	新生代新第三紀・奥羽山脈
14	中央区東側	表　土	石器	砥石		長さ（5.8）幅(4.9）厚さ 2.1　重量　77.6g	デイサイト	新生代新第三紀・奥羽山脈
15	55号土坑	底面直上	鉄製品	紡錘車	円盤部	長さ　5.0　幅(3.6）厚さ 0.7　重量　9.8g		
16	１号溝東側	埋　土	鉄製品	環状製品	完形？	長さ 10.5　幅 7.6　厚さ 3.1　重量　45.8g		
17	８号溝	埋　土	陶磁器	陶器碗	口～底	見込みに目跡、19C		大堀・相馬
18	中央区	検出面	陶磁器	磁器碗	底部	磁器染付		肥前？
19	２号井戸	埋　土	陶磁器	磁器皿	口～底	磁器染付、草文、大橋Ⅱ～Ⅲ期（1600-1650）		肥前
20	３号井戸	埋　土	陶磁器	磁器皿	口～底	磁器染付、草文、大橋Ⅲ期（1650-1690）		肥前
21	Ⅲ Ｃ 区	表　土	陶磁器	磁器皿	口～底	磁器染付、草文、大橋Ⅲ期（1650-1690）		肥前
22	Ⅲ Ｂ 区	検出面	陶磁器	磁器皿	口～底	磁器染付、草文、大橋Ⅲ期（1650-1690）		肥前
23	中央区	表　土	陶磁器	磁器碗	口～	磁器染付、菊花唐草文、大橋Ⅳ期（1690-1740）		肥前

4　自然科学分析

宮沢原下遺跡の火山灰分析

（株）京都フィッション・トラック

1　試　料

試料は、岩手県奥州市胆沢区若柳字宮沢原地内で行われた、宮沢原下遺跡第２次調査で出土した２つの火山灰試料である。これらを識別・同定するために、以下の方法に従い分析を行った。

2　分析方法

以下に処理工程について説明を加える。

（１）色調判定

未処理試料から適宜少量を白紙上にとり、新版標準土色帳（農林水産省技術会議事務局監修、1970）を用い色調を判定し表示する。

（２）前 処 理

まず半湿状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、２リットルビーカー中で数回水替えしながら水洗し、そのうち超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を濃度１～２％程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰り

試料一覧表

No.	試料名	処理生試料乾燥重量(g)	篩別試料重量(g)			色調判定	備　考
			＞1/4 mm	1/4-1/8 mm	1/8-1/16 mm		
1	24号土坑埋土下位 To-Cu?	7.8	0.02	0.06	1.01	10YR 7/6～6/6	
2	55号土坑底面直上 To-a	3.7	0.11	0.69	0.54	10YR 8/2	

注：※(1)　表中の数字は保存試料の重量を示す。
(2)　1/8～1/16段階の保存試料は、一部岩石薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。
(3)　色調判定は、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修、1970）による。

返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、３段階の篩別(60.120.250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120－250mesh（1/8－1/16㎜）粒径試料を比重分別処理を加えることなく、封入剤（Nd＝1.54）を用いて岩石薄片を作成した。

（３）全鉱物組成分析

前述の封入薄片を用い、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の５項目について、１薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

（４）重鉱物分析

主要重鉱物であるカンラン石（Ol）・斜方輝石（Opx）・単斜輝石（Cpx）・褐色普通角閃石（BHb）・緑色普通角閃石（GHb）・不透明（鉄）鉱物（Opq）・カミングトン閃石（Cum）・ジルコン（Zr）・黒雲母（Bt）・アパタイト（Ap）を鏡下で識別し、ポイントカウンターを用いて無作為に200個体を計数して、その量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有の少ないものは、結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため、重液処理過程で除外される危険性がある。さらに風化による比重変化や粒径の違いが分析結果に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

（５）火山ガラス形態分類

前処理で作成した検鏡用薄片中に含まれる火山ガラスの形態を、吉川（1976）*1に準拠してＨ：扁平型（Ha,Hb）、Ｃ：中間型（Ca,Cb）、Ｔ：多孔質型（Ta,Tb）に分類した。またこれらの形態に属さないものを、ｌｔ：不規則型として一括し示した。なお、含有率を測定するため200個の粒子を測定した。その過程で着色したものやスコリア質のもの、および亀ノ甲型と呼ばれる特異な形態をもつ火山ガラスの有無もチェックした。さらに火山ガラスの水和現象を観察し、山下・壇原（1995）*2に基づき水和（hydration）やスーパーハイドレーション（super hydration）の程度についても可能な限り半定量的に記載した。

（６）火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120－250mesh（1/8－1/16㎜）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（ＲＩＭＳ）*3,4を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として１試料あたり50個以上の火山ガラス片を測定するが、火山ガラスの含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

温度変化型屈折率測定法*5は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算温度から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ（本稿では省略）、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（Series および Sample Name）が表示され、次に測定者名、

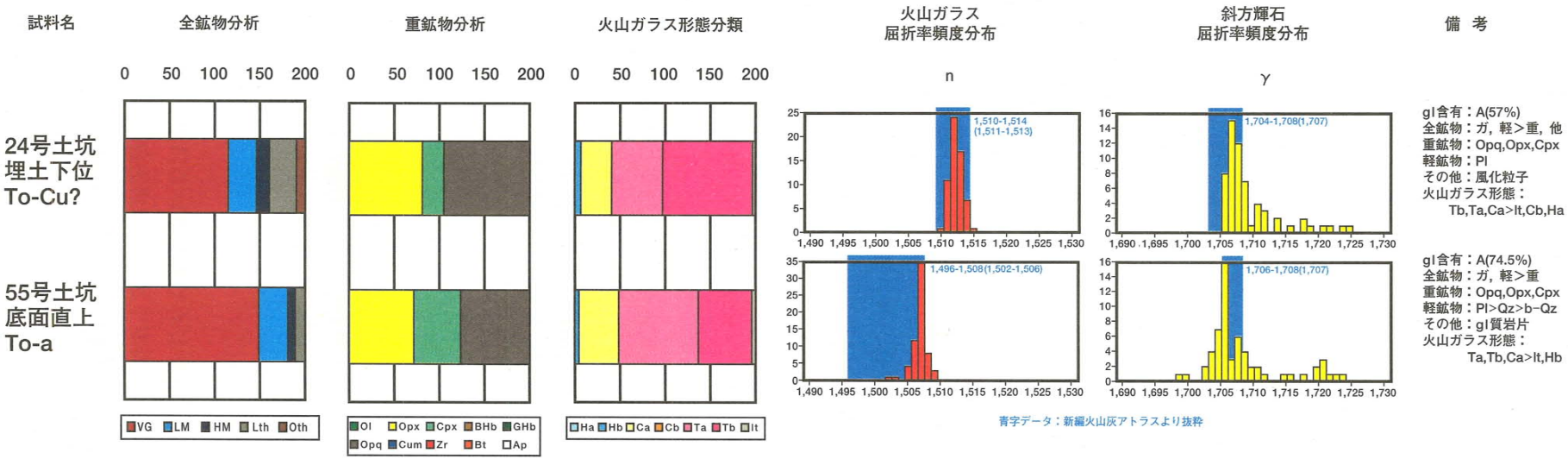


図１．宮沢原下遺跡火山灰試料の分析結果

Materialは対象鉱物名、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。カッコ内の式は、浸液温度tから浸液の屈折率を算出するのに用いたものである。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。Count, min, max, range, mean, st.dev, skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラス片の個数が表現される。＊１つが１個の火山ガラス片の測定結果を示す。

（７）鉱物の屈折率測定

基本的には火山ガラスの屈折率と同様な操作を経て測定作業を行うが、鉱物の屈折率測定は光学的方位をチェックする必要がある点で大きく異なっている。今回の測定は、屈折率値の精度を高めるため30結晶の測定を目指しているが、含有結晶量が少ない場合にはそれ以下になる場合もある。対象鉱物は斜方輝石（Opx）または角閃石（Hb）で、鎌田・壇原（1994）*6に準じ対象鉱物片の屈折率を測定した。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ（本稿では省略）、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（Series および Sample Name）が表示され、次に測定者名、Materialは対象鉱物名、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。カッコ内の式は、浸液温度tから浸液の屈折率を算出するのに用いたものである。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。Count, min, max, range, mean, st.dev, skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラス片の個数が表現される。＊１つが１個の火山ガラス片の測定結果を示す。

（８）顕微鏡写真撮影

前処理で作成された岩石薄片を用い、顕微鏡写真撮影を行った。撮影画面の設定は、分析結果を最もよく反映するように、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の粒子がバランスよく収まるよう配慮した。しかし必ずしもすべての要素を撮し込むことは困難であり、しばしば火山ガラスや重鉱物など、特定の粒子を選択して撮影せざるを得なかったことをお断りしておきたい。

なお、重鉱物のように特徴的な色や晶癖をもつものは、通常の明視野撮影のみからでも識別は容易であるが、無色透明な火山ガラスや軽鉱物結晶は識別が難しい。そのため、巻末の岩石用偏光顕微鏡を用いた記録写真では、左右２枚の写真を対照することで、火山ガラスや軽鉱物の判定を写真上で行えるよう工夫しており、その要領を以下に略記する。

一般に火山ガラスは無色透明であり、同一粒子を写真上で追うと、背景とほぼ同様な無地で赤紫（あるいは青紫）色を示す場合には、ほぼ火山ガラス（光学的等方体）と判断してよい。しかし、無色透明であっても、虹色や白・黄・青など紫以外の色調を示すものは光学的異方体であり、一般に鉱物と判断してよい。このように画面を見比べることにより、多くの火山ガラスや鉱物の認識が可能である。

３　結果と考察

今回の分析結果は、前掲の図１にまとめて表示されるほか、詳細は各試料ごとのテフラ分析結果に記載されている。また巻末には、火山ガラスおよび斜方輝石（Opx）の屈折率データ・シート（本稿では省略）と顕微鏡写真（100倍）が収められている。以下には、それらの分析結果をもとに各試料の識別を検討し、主として新編火山灰アトラス（町田・新井，2003）に準拠して対比火山灰の同定を試みる。

テフラ分析結果表

分析試料名：　1. 24号土坑 埋土下位 To-Cu?

全鉱物組成

火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	備　考
114	33	11	32	10	200	火山gl:珪長質pm型主。少量の外来結晶を含むがTo-Cuテフラ確実。　軽鉱物:pl。 重鉱物:Opq,Opx,Cpxのみ。 岩　片:gl質が主。石質も少量含む。その他：風化粒子。
57.0	16.5	5.5	16.0	5.0	100.0	

bw:バブルウォール、pm:軽石、sco.:スコリア、pl:斜長石、Qz:石英、af:アルカリ長石、Kf:カリ長石,chal:カルセドニー,Po:プラント・オパール

重鉱物分析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備　考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
−	80	24	−	−	96	−	−	−	−	200	
0.0	40.0	12.0	0.0	0.0	48.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	

Ol:カンラン石、Opx.Cpx:斜方、単斜輝石、BHb,GHb:緑色・褐色角閃石、Opq:不透明鉱物、
Cum:カミングトン閃石、Zr:ジルコン、Bt:黒雲母、Ap:アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備　考
1	7	34	1	55	100	2	200	＋	珪長質pm型主。
0.5	3.5	17.0	0.5	27.5	50.0	1.0	100.0		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:インクルージョン、devt:失透化、RI:屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
1.5104	1.5148	1.5123	61	1.512	T,C>H,It

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類 斜方輝石 Opx
1.706	1.709	1.707	42	1.707	ハイパーシン　←To-Cu
1.710	1.725	1.716	18	1.711	ハイパーシン　←外来結晶

斜方輝石：劈開片上での最大屈折率 $n_2 \fallingdotseq \gamma$、角閃石 n_2（$\beta < n_2 < \gamma$）、
斜長石：劈開片上での最小屈折率 n_1（$\alpha < n_1 < \beta$）

テフラ分析結果表

分析試料名：　2. 55号土坑 底面直上 To-a

全鉱物組成

火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	備　考
149	31	6	14	－	200	火山gl:珪長質pm,型主。少量の外来結晶を含むがTo-aテフラ確実。　軽鉱物:pl主。β-Qz微量。 重鉱物:Opq,Opx,Cpxのみ。 岩　片:gl質で火砕物起源。その他:－ 。
74.5	15.5	3.0	7.0	0.0	100.0	

bw:バブルウォール、pm:軽石、sco.:スコリア、pl:斜長石、Qz:石英、af:アルカリ長石、Kf:カリ長石,chal:カルセドニー,Po:プラント・オパール

重鉱物分析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備　考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
－	72	51	－	－	77	－	－	－	－	200	
0.0	36.0	25.5	0.0	0.0	38.5	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	

Ol:カンラン石、Opx.Cpx:斜方、単斜輝石、BHb,GHb:緑色・褐色角閃石、Opq:不透明鉱物、
Cum:カミングトン閃石、Zr:ジルコン、Bt:黒雲母、Ap:アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備　考
－	4	46	－	88	58	4	200	＋	珪長質pm型主。It型はobsidian片。 濃い色付glを10～20%含む。
0.0	2.0	23.0	0.0	44.0	29.0	2.0	100.0		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:インクルージョン、devt:失透化、RI:屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
1.5017	1.5033	1.5025	2	－	It
1.5045	1.5087	1.5068	61	1.507	T,C>It,H　←To-a

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range) 最小	屈折率範囲 (range) 最大	屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類 斜方輝石 Opx
1.699	1.700	1.700	2	－	ブロンザイト～ハイパーシン
1.703	1.712	1.707	47	1.706	ハイパーシン　←To-a
1.715	1.724	1.720	11	1.721	ハイパーシン

斜方輝石：劈開片上での最大屈折率 $n_2 \fallingdotseq \gamma$、角閃石 n_2（$\beta < n_2 < \gamma$）、
斜長石：劈開片上での最小屈折率 n_1（$\alpha < n_1 < \beta$）

24号土坑下位　To-Cu？

本試料は、24号土坑の埋土下位から採取された、明黄褐色（10YR 7/6～6/6）の軽石質細粒火山灰である。#120－250（1/8－1/16㎜）径粒試料の全鉱物組成は、主として軽石型の無色透明の火山ガラスが57％を占め、軽鉱物として斜長石が16.5％、重鉱物は不透明鉄鉱物（Opq）・斜方輝石（Opx）・単斜輝石（Cpx）の３種類のみから構成され５％を占める。これらガラス・鉱物以外には、ガラス質の岩片が16％含まれ、その他として風化粒子を５％含む。屈折率測定の結果は、火山ガラスがｎ＝1.5104－1.5148（モード1.512）と高い値を示し、斜方輝石（Opx）はγ＝1.706－1.709に70％が集中するが、より高いγ＝1.710－1.725付近にも約30％が尾を引くように分布する。本火山灰試料の年代は、考古学的編年から縄文時代と推定され、このことは火山ガラスの水和層厚が１～３μm程度と薄いこととも矛盾しない。以上の特徴をもとに、新編火山灰アトラスと対照して類似テフラを検討すると、十和田中掫（To-cu，6000年前）のみが該当する。従って本試料は、野外調査時の推定通り十和田中掫テフラに対比される。

55号土坑下位　底面直上　To-a

本試料は、55号土坑の底面直上層準から採取された、灰白色（10YR 8/2）の軽石質細粒火山灰である。#120－250粒試料の全鉱物組成は以下の特徴をもつ。まず、主として軽石型で少量の黒曜石(Ob)片を含む火山ガラスが74.5％を占め、その中には淡～濃紫褐色の着色ガラスが少量だが特徴的に含まれる。軽鉱物は15.5％含まれ、斜長石（pl）が主で少量の石英と高温石英（β－Qz）も含む。重鉱物は３％と他の成分に比較して含有は少なく、不透明鉄鉱物（Opq）・斜方輝石（Opx）・単斜輝石(Cpx）から構成される。これら以外にはガラス質の岩片が７％含まれる。屈折率測定の結果は、火山ガラスがｎ＝1.5045－1.5087（モード1.507）と比較的高い値を示し、一方斜方輝石（Opx）は３つのグループの混在が明瞭に看取される。このうち、γ＝1.703－1.712のものが最も多く全体の80％弱を占めるほか、γ＝1.715－1.724と1.699－1.700のものの存在が認められる。本火山灰試料の年代は、考古学的編年から平安時代と推定される。このことは火山ガラスの水和層厚が１～５μm程度と薄いこととも矛盾しない。以上の特徴をもとに、新編火山灰アトラスで類似テフラを検討すると、十和田ａ(To-a，ＡＤ915年）のみが該当する。従って本試料は、野外調査時の推定通り十和田ａテフラに対比される。

参考文献

*1　吉川周作（1976）：大阪層群中の火山灰層について。地質学雑誌.82(8)、479-515.

*2　山下透・壇原徹（1995）：火山ガラスのhydrationとsuper hydration －日本の広域テフラについて－.ﾌｨｯｼｮﾝ・ﾄﾗｯｸﾆｭｰｽﾚﾀｰ第８号、41-46.

*3　横山卓雄・壇原徹・山下透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究.25(1)、21-30

*4　Danhara T.,Yamashita T.,Iwano H. and Kasuya M.(1992):An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method.
Quaternary International. 13/14,89-91

*5　壇原徹（1993）：温度変化型屈折率測定法.日本第四紀学会編.第四紀試料分析法2.研究対象別分析法.149-157.東京大学出版会

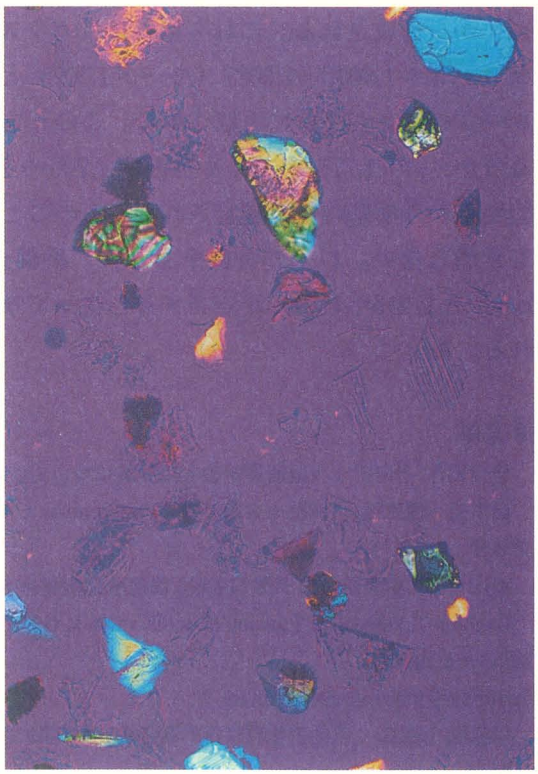
*6　鎌田浩毅・壇原徹・林田明・星住英夫・山下透（1994）：中部九州の今市火砕流堆積物と類似火砕流堆積物の対比および噴出起源の推定.地質学雑誌.100(4)、279-291

なお、温度変化型屈折率測定装置ＲＩＭＳ™と測定方法は、PAT.1803336,1888831で特許登録および商標登録されています。

24号土坑　埋土下位 To-Cu?

同　　左

55号土坑　底面直上 To-a



同　　左

５　ま　と　め

（１）土坑について

本遺跡からは陥し穴状遺構を含む土坑が多く検出されたので、その考察を中心にまとめとする。

まず、土坑を陥し穴と、それ以外の用途と思われる土坑に分類した。第９表に（陥し穴）としたものはＡ：溝形　Ｂ：楕円形のもの　Ｃ：円形　Ｄ：長方形で副穴のあるものである。円形、長方形で副穴のないものは土坑という表規をした。例外として13号土坑は楕円形だが、規模から「土坑」、43号土坑は長方形だが、堆積土の様相と深さから平安時代の「陥し穴」に分類した。

次に土坑の規模、長軸方向の向き、平面や断面の形状、副穴の有無、火山灰の有無と種類について、表にまとめた。（表９）Ａの溝形については形状のバリエーションがあったので、（形状については表９下を参照）平面形を二つ、長軸の断面形を二つ、短軸の断面形を三つに分類した。なお円形のものについては正方形に近い形状のものもあったが、絶対数が少ないことと、限られた場所でのみ検出されたことから一括で取り扱った。

平面形状ごとの数を集計すると、

Ａ１：溝形（細いもの）26基	Ａ２：溝形（鉄アレイ型）１基	Ａ：溝形の合計27基
Ｂ１：楕円形（副穴なし）18基	Ｂ２：楕円形（副穴あり）６基	Ｂ：楕円形の合計24基
Ｃ：円形８基　Ｄ：長方形７基		

となり、溝形と楕円形が多い。溝形の平面形、断面形との関連を見ると、特に多く見られた組み合わせは（１）Ａ１、Ｅ１、Ｆ１の７基、（２）Ａ１、Ｅ１、Ｆ２の７基であった。底面がオーバーハングせず、短軸断面が底部に向けて狭くなる形が多いと言える。

規模は、開口部の長径に着目すると大きさが理解できる。溝形は一番短いもので2.70ｍ、一番長いもので4.59ｍと、2.11ｍもの差がある。楕円形も長軸の長さが一番短いもので1.37ｍ、一番長いもので2.60ｍと、1.23ｍの差がある。形状にはほぼ一貫性が認められるものの、それぞれの形状の中では、規模に強い一貫性はないと言える。その他の形に極端な差はなかった。

長軸方向の向きにも傾向が見られる。溝形、楕円形の傾向として言えるのは、長軸が北西に傾いているものが多いということである。溝形の27基中20基が北西に傾いている。さらにそのうち北北西に傾いているものが17基ある。溝状の陥し穴の約63％が北北西を向いていることになる。また、楕円形の土坑も北北西に傾いているものが18基あり、楕円形の土坑の75％を占める。

まずＣ：円形の土坑から考察を進める。円形の23～26号土坑からは、埋土の下層から十和田中掫テフラが検出された。これは今からおよそ5,500年～6,000年前の降下とされており、したがってこれらの土坑はその時点（縄文時代前期中葉）で開口していたことになる。同テフラが降った後で土坑が掘られ、その後それを含んだ土が崩落土として入った、ということも考えられるが、テフラの堆積状況はいずれも水平に近いことから、崩落土に混入した可能性は低いと考えられる。なお、宮沢原下遺跡から約４㎞西に離れた大清水上遺跡では、同じような形状の土坑が縄文時代前期後葉と見られる住居跡と重複して検出され、新旧関係からその土坑が住居跡よりも古いとされた。（佐藤2006）また、24号土坑から40ｍほど離れた所に同じような形状の39号土坑がある。ここからは十和田中掫テフラは検出されなかったが、大きさや形状が23～26号土坑とほぼ同じで、中心部に副穴が確認されており、同時期のものと推定される。いずれも陥し穴として使われたのではないかと思われる。

円形の土坑の分布状況を見ると、それらは中央区の東側に見られ（第41図）、その他の区域にはな

第９表　土坑観察表

遺構名	位置	規模（単位はすべてｍ）					長軸方向	平面形	断面形状（溝型のみ）		火山灰の有無 To-Cu ● To-a ○
		開口部		底部		深さ			長軸	短軸	
		長径	短径	長径	短径						
１号土坑（陥し穴）	ⅡＡ１ｅ	4.20	0.42	4.48	0.12	1.10	N-10°-W	Ａ１	Ｅ２	Ｆ２	
２号土坑（陥し穴）	ⅡＡ０ｅ	2.22	1.28	2.00	0.52	1.06	N-9°-W	Ｂ２			○
３号土坑（陥し穴）	ⅡＡ０ｄ	3.36	0.32	3.22	0.22	1.00	N-27°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ３	
４号土坑（陥し穴）	ⅣＡ３ｅ	3.78	0.46	3.74	0.20	0.98	N-25°-E	Ａ１	Ｅ１	Ｆ２	
５号土坑（陥し穴）	ⅣＡ１ｆ	2.00	0.68	1.86	0.42	0.92	N-9°-W	Ｂ１			○
６号土坑（陥し穴）	ⅢＡ７ｆ	2.10	0.94	1.78	0.50	0.94	N-5°-W	Ｂ２			○
７号土坑（陥し穴）	ⅢＡ７ｇ	1.94	1.16	1.56	0.52	1.08	N-5°-W	Ｂ１			○
８号土坑（陥し穴）	ⅢＡ５ｈ	1.76	1.08	1.46	0.52	0.84	N-68°-W	Ｂ１			
９号土坑	ⅢＡ４ｊ	1.84	0.66	1.70	0.42	0.62	N-88°-W	Ｄ１			
10号土坑（陥し穴）	ⅢＡ８ｊ	1.94	0.92	1.76	0.36	1.18	N-61°-W	Ｂ１			○
11号土坑（陥し穴）	Ⅲｂ４ｆ	3.92	0.40	3.92	0.10	0.84	N-4°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ２	
12号土坑	ⅡＣ１ａ	1.58	0.80	1.52	0.70	0.58	N-70°-E	Ｄ１			
13号土坑	ⅠＢ９ｊ	1.57	0.72	1.54	0.16	0.32	N-8°-W	Ｂ１			
14号土坑（陥し穴）	ⅡＢ４ｊ	3.22	0.30	3.56	0.18	0.80	N-31°-E	Ａ１	Ｅ２	Ｆ３	
15号土坑（陥し穴）	ⅠＤ３ｂ	3.35	0.56	3.25	0.16	0.80	N-29°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ１	
16号土坑（陥し穴）	ⅣＤ５ｃ	3.12	0.44	2.75	0.06	1.07	N-32°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ１	
17号土坑（陥し穴）	ⅣＤ４ｃ	3.37	0.36	3.09	0.06	1.12	N-26°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ１	
18号土坑（陥し穴）	ⅣＤ４ｃ	3.37	0.53	3.23	0.25	0.74	N-18°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ３	
19号土坑（陥し穴）	ⅢＣ４ｊ	3.17	0.28	3.17	0.24	0.60	N-16°-W	Ａ１	Ｅ２	Ｆ３	
20号土坑（陥し穴）	ⅡＣ３ａ	2.99	0.40	2.52	0.10	1.10	N-18°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ２	
21号土坑（陥し穴）	ⅣＤ２ｇ	2.10	0.90	1.78	0.48	0.96	N-71°-E	Ｂ１			
22号土坑（陥し穴）	ⅢＤ０ｇ	1.48	0.62	1.38	0.54	0.56	N-71°-E	Ｄ２			
23号土坑（陥し穴）	ⅣＤ１ｆ	1.06	1.08	0.86	1.00	0.78	—	Ｃ２			●
24号土坑（陥し穴）	ⅢＤ０ｅ	0.98	1.00	0.86	0.78	0.68	—	Ｃ２			●
25号土坑（陥し穴）	ⅢＤ７ｅ	1.06	0.94	0.80	0.66	0.90	—	Ｃ２			●
26号土坑（陥し穴）	ⅢＤ７ｆ	0.86	0.92	0.62	0.72	0.82	—	Ｃ２			●
27号土坑（陥し穴）	ⅢＢ４ｉ	1.70	0.84	1.58	0.50	1.06	N-30°-W	Ｂ１			○
28号土坑（陥し穴）	ⅡＣ４ｂ	2.34	1.22	2.26	0.60	1.00	N-1°-W	Ｂ１			○
29号土坑（陥し穴）	ⅡＣ７ｂ	2.18	1.32	1.86	0.62	1.16	N-13°-W	Ｂ１			○
30号土坑（陥し穴）	ⅢＢ４ｈ	4.06	0.36	4.26	0.18	0.82	N-36°-W	Ａ１	Ｅ２	Ｆ１	
31号土坑（陥し穴）	ⅣＤ１ｃ	1.68	0.98	1.36	0.50	0.86	N-40°-W	Ｄ２			
32号土坑（陥し穴）	ⅢＣ７ａ	3.95	0.33	3.82	0.11	0.72	N-24°-E	Ａ２	Ｅ１	Ｆ２	
33号土坑（陥し穴）	ⅣＢ４ｉ	2.98	0.52	2.90	0.10	1.08	N-6°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ１	
34号土坑（陥し穴）	ⅢＣ７ｃ	3.78	0.44	3.77	0.17	0.95	N-54°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ１	
35号土坑（陥し穴）	ⅢＣ６ｂ	3.22	0.39	3.06	0.08	0.79	N-69°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ２	
36号土坑（陥し穴）	ⅡＣ４ｂ	1.90	0.78	1.62	0.38	1.12	N-17°-W	Ｂ１			○
37号土坑（陥し穴）	ⅡＣ４ｄ	2.60	1.08	2.47	0.63	0.96	N-7°-W	Ｂ１			○
38号土坑（陥し穴）	ⅣＢ４ｆ	2.18	1.24	1.94	1.01	0.67	N-69°-W	Ｄ２			
39号土坑（陥し穴）	ⅢＣ８ｇ	0.69	0.45	0.74	0.45	0.55	—	Ｃ２			
40号土坑（陥し穴）	ⅡＣ６ｄ	3.50	0.26	3.36	0.14	0.80	N-19°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ１	
41号土坑（陥し穴）	ⅠＣ７ｃ	1.80	0.76	1.74	0.70	0.36	N-6°-W	Ｄ２			
42号土坑（陥し穴）	ⅠＤ５ｆ	1.57	0.88	1.70	0.57	1.14	N-43°-E	Ｂ２			○
43号土坑（陥し穴）	ⅡＤ２ｅ	1.82	0.72	1.68	0.46	1.00	N-18°-E	Ｄ１			○
44号土坑（陥し穴）	ⅡＤ１ｄ	1.65	1.20	1.31	0.64	1.16	N-31°-W	Ｂ１			○
45号土坑（陥し穴）	ⅡＤ４ｄ	4.59	0.47	5.10	0.15	0.97	N-18°-E	Ａ１	Ｆ２	Ｆ１	
46号土坑（陥し穴）	ⅡＤ４ｄ	2.22	1.42	1.64	0.46	1.39	N-27°-W	Ｂ１			○
47号土坑（陥し穴）	ⅡＤ１ｃ	2.06	0.98	1.94	0.55	1.22	N-1°-W	Ｂ１			○
48号土坑（陥し穴）	ⅡＤ１ｃ	3.43	0.24	3.18	不明	0.60	N-17°-E	Ａ１	Ｅ１	Ｆ３	
49号土坑（陥し穴）	ⅡＤ２ａ	1.99	0.92	1.72	0.46	1.22	N-49°-W	Ｂ１			○
50号土坑（陥し穴）	ⅡＤ４ｂ	3.41	0.30	3.40	0.17	0.80	N-24°-E	Ａ１	Ｅ１	Ｆ３	
51号土坑（陥し穴）	ⅡＤ５ａ	1.90	1.24	1.64	0.60	1.37	N-20°-W	Ｂ１			○
52号土坑（陥し穴）	ⅠＣ８ｊ	3.09	0.63	2.84	0.23	1.28	N-25°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ２	
53号土坑	ⅠＤ８ｄ	1.36	1.24	1.33	1.16	0.50	—	Ｃ１			
54号土坑（陥し穴）	ⅡＣ７ｅ	1.89	1.09	1.64	0.47	1.09	N-9°-W	Ｂ１			○
55号土坑（陥し穴）	ⅡＣ３ｅ	2.45	1.15	2.60	0.67	0.79	N-87°-W	Ｂ２			○
56号土坑（陥し穴）	ⅠＣ２ｅ	2.70	0.36	2.46	0.16	0.80	N-22°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ２	
57号土坑（陥し穴）	ⅡＣ１ｆ	4.88	0.37	4.74	0.19	0.85	N-15°-W	Ａ１	Ｅ２	Ｆ２	
58号土坑（陥し穴）	ⅡＣ３ｇ	2.72	0.45	2.47	0.18	1.00	N-17°-E	Ａ１	Ｅ１	Ｆ１	
59号土坑（陥し穴）	ⅡＣ４ｆ	1.37	0.87	1.57	0.44	1.20	N-17°-W	Ｂ１			○
60号土坑（陥し穴）	ⅡＣ６ｉ	2.01	1.14	2.02	0.55	1.12	N-15°-W	Ｂ２			○
61号土坑（陥し穴）	ⅠＤ０ｃ	2.20	1.23	2.38	0.73	1.06	N-22°-W	Ｂ２			○
62号土坑（陥し穴）	ⅠＣ５ｉ	2.96	0.26	2.74	0.09	0.54	N-15°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ１	
63号土坑	ⅠＣ６ｊ	1.41	1.38	1.51	1.42	0.44	—	Ｃ１			
64号土坑	ⅡＤ７ｇ	1.37	1.48	0.87	0.93	0.99	—	Ｃ１			
65号土坑（陥し穴）	ⅢＢ４ｉ	4.52	0.21	4.33	0.07	0.88	N-36°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ３	
66号土坑（陥し穴）	ⅢＢ４ｊ	3.27	0.24	3.15	0.11	0.51	N-48°-W	Ａ１	Ｅ１	Ｆ３	

平面形分類

Ａ１：溝形

Ａ２：溝形

Ｂ：楕円形　表のＢ１は副穴のないもの、Ｂ２は副穴のあるもの

Ｃ：円形　表のＣ１は副穴のないもの、Ｃ２は副穴のあるもの

Ｄ：長方形　表のＤ１は副穴のないもの、Ｄ２は副穴のあるもの

断面形分類（溝形のみ）

長軸Ｅ１

長軸Ｅ２

短軸Ｆ１

短軸Ｆ２

短軸Ｆ３

い。円形の土坑は北区にも３基確認されているが、大きさや深さが異なり、副穴も確認されていないことから、陥し穴ではなく用途が異なるものと考えられ、また時期も違う可能性もある。

次にＡ：溝形の陥し穴であるが、堆積土から十和田中掫テフラは検出されていない。したがって、それ以後に作られたものであり、円形の土坑よりも新しいと考えられる。20号土坑からは縄文時代後期後葉と見られる土器が出土しており、その時期に溝形の陥し穴があったことは推定される。ただし、十和田中掫テフラが降下した時期から縄文時代後期後葉まではおよそ2,000年～2,500年の間隔があり、その間陥し穴が全くないと考えるのも不自然なことと、溝形の陥し穴の作られた時期は縄文時代中期末からと考えられている（戸根2007）ことから、推論ではあるが、宮沢原下遺跡でも縄文時代後期後葉より古い時期から作られた可能性は考えられる。

溝形の陥し穴の分布状況に規則性はあまり見られない。ただし（１）15～18号土坑と、（２）30、65、66号土坑の２つのグループは、３基が並んで位置すること、平面形状、堆積土、長軸の向きもほぼ同じであることから、それぞれ同時期である可能性が高いと思われる。ただし、どちらのグループも土器や火山灰等の出土がないので時期特定には至らない。溝形の陥し穴が複数基並ぶように検出された例は今までもいくつか報告されている。けもの道に沿って動物を効率的に捕獲するためと考えられている。また、前述したように約63％のものが北北西を向いているということは、偶然とは言えないだろう。けもの道に対して、効率的に獲物を捕獲できるようにしたのではないだろうか。

次にＤ：長方形の土坑であるが、12号土坑から縄文時代後期と思われる土器が出土したことから、およそこの時期に作られたものと思われる。検出例の少ないものだが、奥州市水沢区の大曽根遺跡にも似たような形状のものが報告されており、それも縄文時代のものと推定されている。（高橋1982）。また、十和田ａテフラを含まないことや堆積土の様相から、楕円形の土坑よりは古いものと思われる。溝形の陥し穴との新旧関係はわからない。

上面検出時点では楕円形の土坑に似ていたが、精査で平面形が長方形であること、壁の立ち上がりが急であること、浅いこと、といった点が違うことが確認された。楕円形の土坑の深さの平均が109㎝であるのに対し、長方形のものは57㎝である。また９、22、41号土坑は開口部、底部ともにほぼ長方形で、整然とした形状をしている。また、副穴があるものが４基、ないものが３基である。副穴があるものは陥し穴と推測される。（なお43号土坑に副穴はないが、異なる時期の陥し穴と推測される。）分布状況に規則性は見られない。

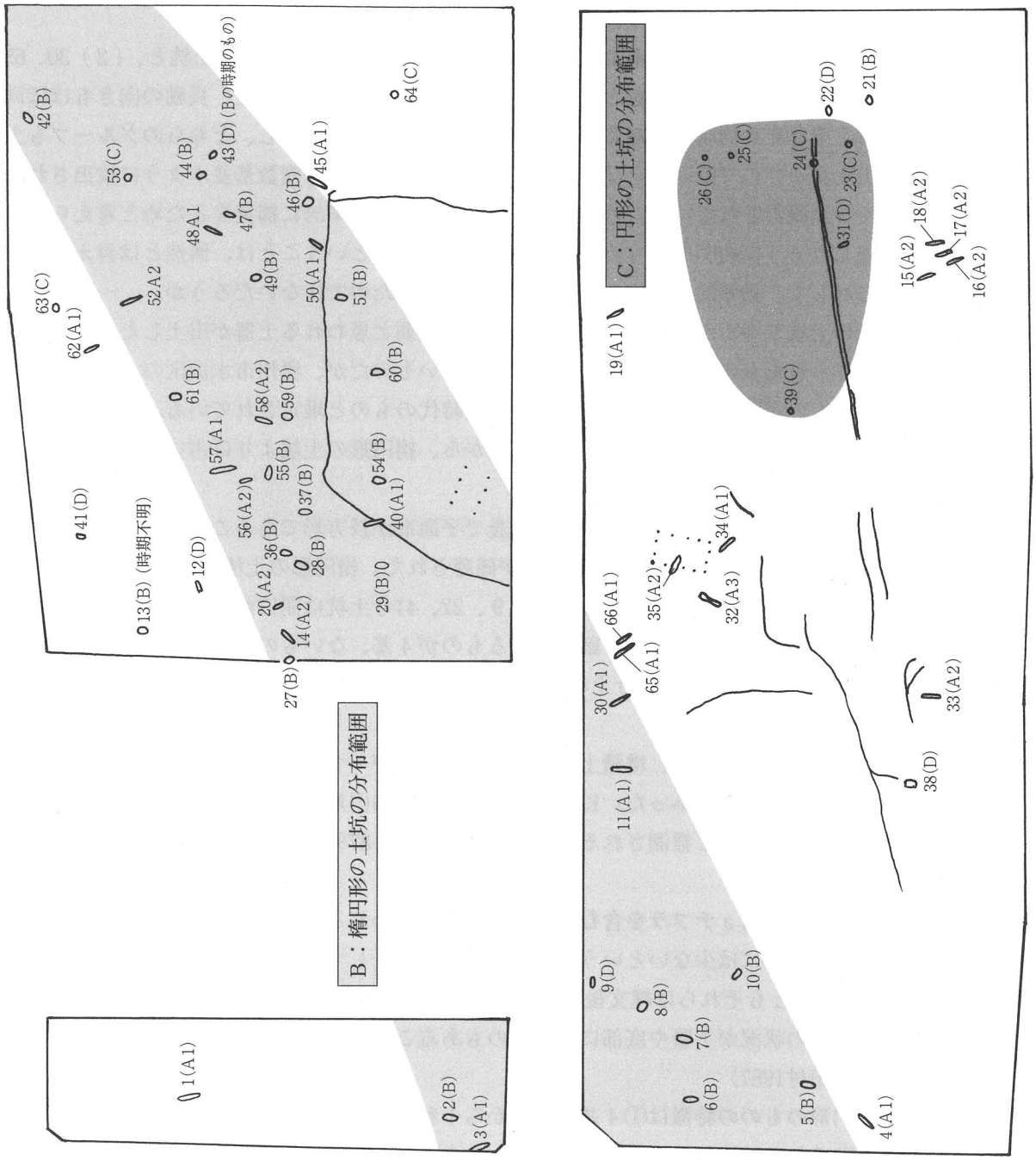
最後にＢ：楕円形の土坑であるが、堆積土に十和田ａテフラが一つの層を成すか、または一つの層に大量に含まれていたものが20基あった。13号土坑の平面形は楕円形だが、堆積土の様相と深さから他のものとは異なる時期のものと推測されるため、それを除くと87％のものに火山灰が含まれていたことになる。

楕円形状で堆積土に十和田ａテフラを含む土坑（陥し穴と思われる）は、岩手県内でも確認されており、県北部に多く県南部には少ないという傾向が見られる。そして、縄文後期の土器が出土した例があることから、少なくともそれらは縄文後期ごろのものとされている。（菊池など水上遺跡1985、他数例）ただテフラ堆積の状況が下層や底部になるものもあることから、下限は平安時代前半になると推測されている。（田村1987）

今回検出した楕円形のものの特徴は①４基は下層から十和田ａテフラが確認されたこと。つまり、同テフラが降った時それらは開口していたと考えられること。②55号土坑の下層から、平安時代のものと思われる鉄製の紡錘車が出土したことの２点である。したがって、この遺跡での下限は平安時代前半と推測される。

形状の特徴は、短軸の断面のほとんどが漏斗状で、底部が長方形になることである。また、副穴があるものが5基ある。円形や長方形の土坑にも副穴はあったが、いずれも中央部であった。楕円形状の土坑のものは、底面の長軸両端にあるのが特徴である。それらの副穴は中央部に向けて斜めになっていることから、杭を中心部に向けて刺していたものと思われる。

楕円形の土坑の分布状況では、北区と、中央区の西側に集中する傾向が見られる。位置関係が不規則ではあるが、中央区東の21号土坑を除き、北東から南西にかけて分布している傾向があると言える。（第41図参照）南東部の標高の低い区域にはない。その当時のけもの道に沿っていたのかもしれない。



第41図　土坑分布図

また、長軸方向が北北西を向いているものが75％を占める。これも溝形の陥し穴同様、効率的に獲物を捕獲するためだったと思われる。

では、この地域になぜ平安時代前半まで陥し穴があったのだろうか。

陥し穴があったということは、平安時代前半は農耕が行われていた時代ではあるが、少なくともこの一帯はまだ田畑になっていなかったと言えるだろう。原野のままで、動物がいた可能性も高い。狩りに適した場所だったと思われる。また「日本書紀」「続日本紀」等の古文献にも陥し穴が古代に存在していた記録が残っているという。(戸根2007) 胆沢地方でも、平安時代前半まで陥し穴が狩猟の手段として行われていたとしても不思議ではないと思われる。

802年に胆沢城が造営され、この地域も律令制に組み入れられたという時代背景を考えれば、「租」として米を上納することに苦しんだ農民が、食料を求めて狩りをしていたということも考えられるのではないか。住居跡が発見されなかったため、当時の生活との関連については推論にとどまるが、今後の研究に期待したい。　（菊地）

（２）その他の遺構について

最後に、これまでに報告していない井戸跡、アク焼きの野焼き跡、溝跡について記述する。

まず、井戸跡であるが、北区で２基、中央区で６基検出された。いずれも直径は１～1.5mほどの素掘りの井戸で、深さ１ｍに達する前にひどい湧水に見舞われた。これらのうち、今回２棟確認できた掘立柱建物跡と位置的に関わりが想定されるものが数基存在した。その時期を推定する材料とすべく、本来きちんと精査するべきものであったが、あまりにひどい湧水と時間的な制約もあって、このような報告となってしまった。

これら８基の井戸跡は、遺構配置図中にその位置を示した。また、中央区の２号・３号井戸から出土した砥石（11・12）や磁器皿（19・20）は実測図を掲載した。それらから判断して、遺構の時期は17～18世紀ごろと判断されよう。

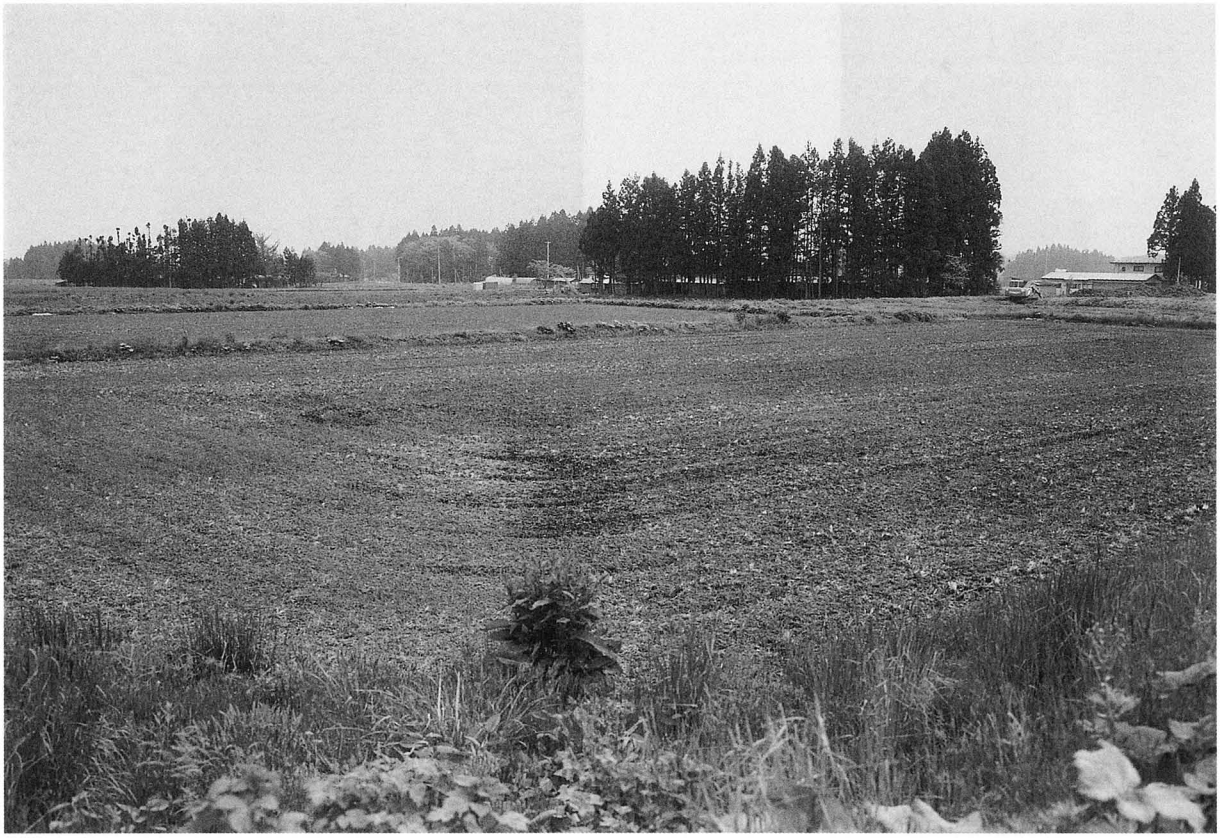
次に、中央区北東部、１号溝跡の北側で見つかった野焼き跡は、当初炭窯として精査していたものである。直径約10m、深さ10～30㎝ほどの馬蹄形状をなす溝が２条重複し、その中央部には焼けの良くない焼土が１基形成されていた。調査途中、この遺構はアワやヒエを植える際の肥料（灰）をつくる現代の野焼き跡と知った。地元ではアク焼き（灰焼き）と呼ばれているらしい。これは第１次調査の際にも見つかっているという。

溝跡は都合８条確認している。前述のとおり開田の際に遺構上部が削られ、単独で存在する溝なのか否かがわからなかったものは報告の対象から外した（４条）が、それらの位置も遺構配置図内に示している。なお、報告した中央区の３条の溝跡（１～３号溝跡）の特徴として、砥石が多く出土していることが挙げられる。農作業用の鎌などを研いだものであろうか。これらの時期はいずれも近世以降とみている。　（濱田）

引用・参考文献

今村啓爾　1976「縄文時代の陥し穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化　考古学民俗学研究』物質文化研究会 1−12頁
小田野哲憲ほか　1992『林崎館遺跡発掘調査報告書』岩埋文第163集（財）岩文振
小田野哲憲ほか　1992『本郷遺跡発掘調査報告書』岩埋文第164集（財）岩文振
菊池利和ほか　1985『水上遺跡発掘調査報告書』岩埋文第96集（財）岩文振
坂本真弓ほか　1997「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要第２号』青森県埋蔵文化財調査センター　70−80頁
佐藤淳一ほか　2006『大清水上遺跡発掘調査報告書』岩埋文第475集（財）岩文振
瀬川司男　1979「陥し穴状遺構について」『岩手県埋蔵文化財センター紀要Ⅰ』（財）岩埋文　1−16頁
田村壮一　1987「陥し穴状遺構の形態と時期について」『（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅶ』（財）岩文振　25−44頁
栃澤満郎ほか　1985『海上Ⅰ、海上Ⅱ、大久保Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第90集（財）岩文振
戸根貴之ほか　2007『宮沢原下遺跡発掘調査報告書』岩埋文第495集（財）岩文振
中川重紀ほか　1982『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ（水沢市竈、東大畑、大曽根遺跡）』岩埋文第44集（財）岩埋文
楢崎彰一ほか　1974『古代史発掘10　都とむらのくらし（歴史時代２）』講談社
濱田　宏　2001『稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第348集（財）岩文振
細井　計ほか　1999『岩手県の歴史』山川出版
丸山浩二、丸山直美、西沢正晴　2004「十和田ａテフラ（To-a）堆積確認遺跡の集成(1)岩手県北部地域における様相」『（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要ＸＸⅢ』（財）岩文振　113−128頁
丸山浩二、丸山直美、西沢正晴　2005「十和田ａテフラ（To-a）堆積確認遺跡の集成(2)岩手県央、南部地域における様相」『（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要ＸＸⅣ』（財）岩文振　67−82頁
四井謙吉ほか　1981『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書（安代町荒屋Ⅰ、荒屋Ⅱ、越戸Ⅱ遺跡）』岩埋文第21集（財）岩埋文

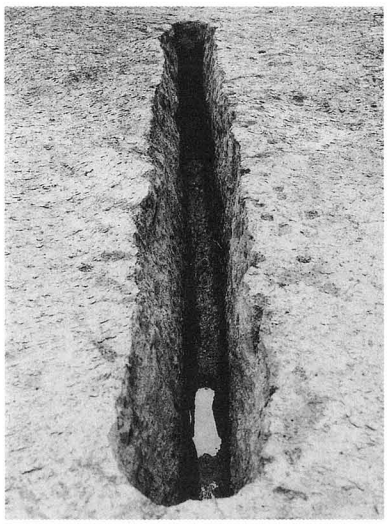
写　真　図　版



調査前の状況（中央区を北西から撮影）

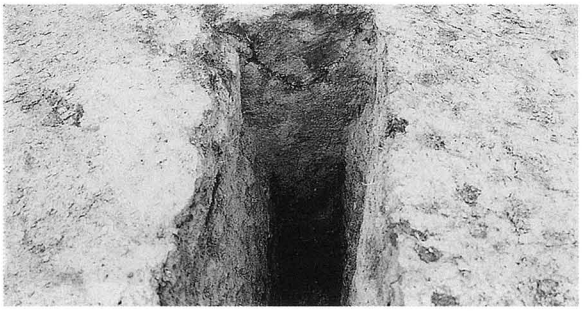
基本層序

写真図版12　調査前の状況と基本層序

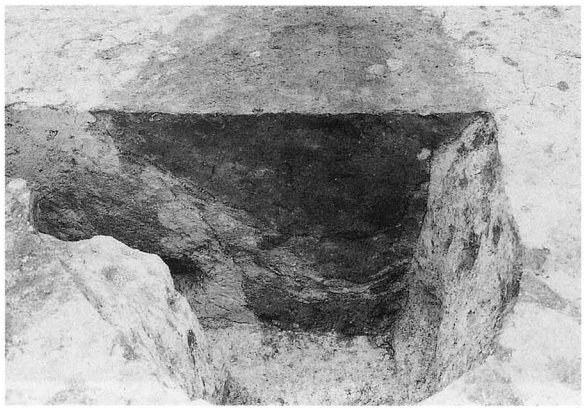


1号土坑（陥し穴）

2号土坑（陥し穴）

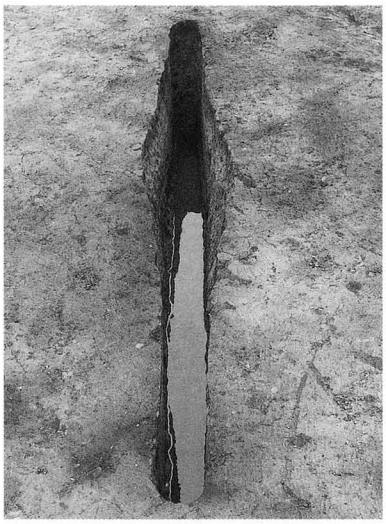


断　面



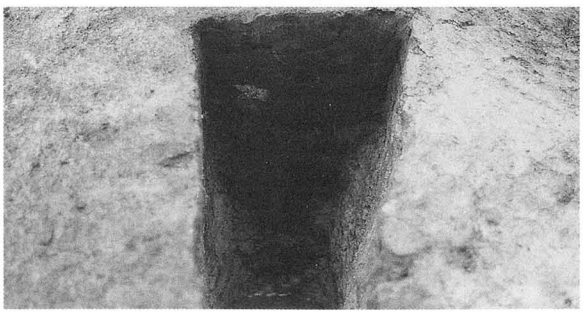
断　面

3号土坑（陥し穴）



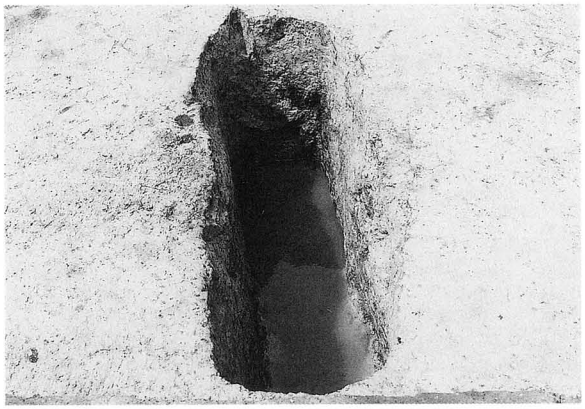
4号土坑（陥し穴）

断　面

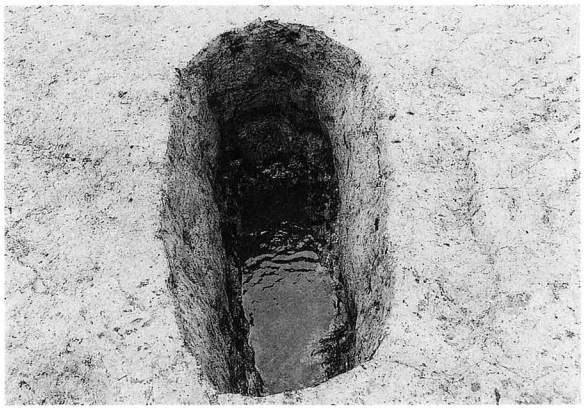


断　面

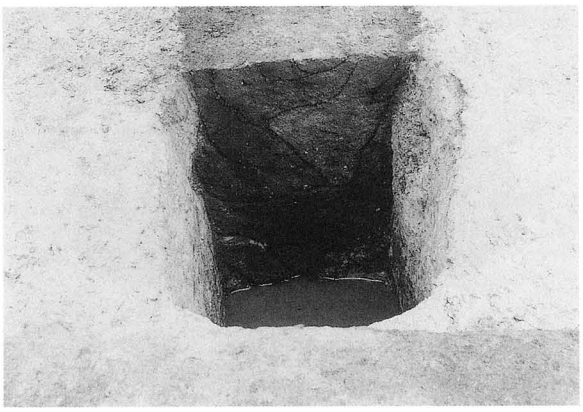
写真図版13　1～4号土坑



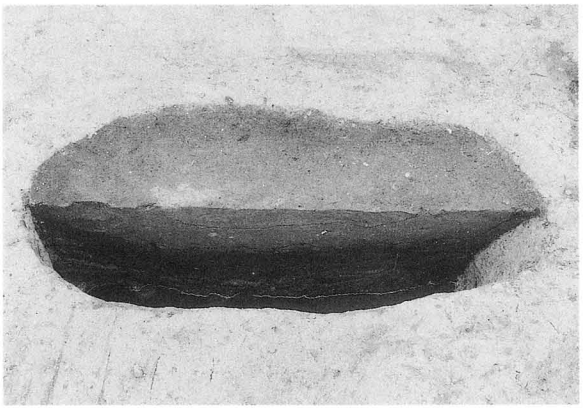
5号土坑（陥し穴）



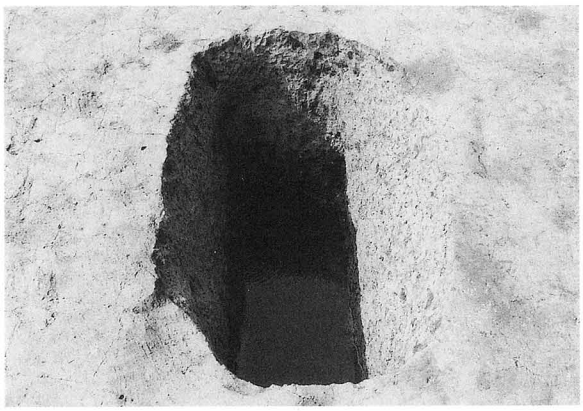
6号土坑（陥し穴）



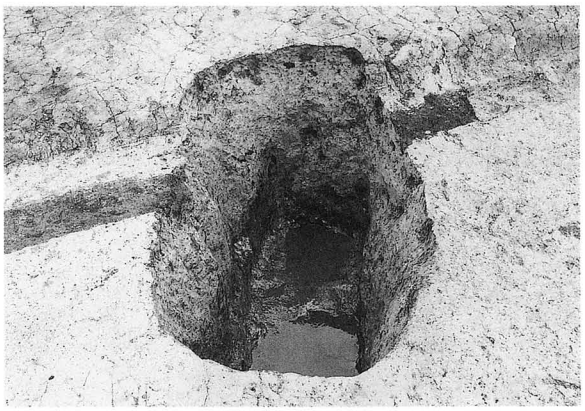
断　面



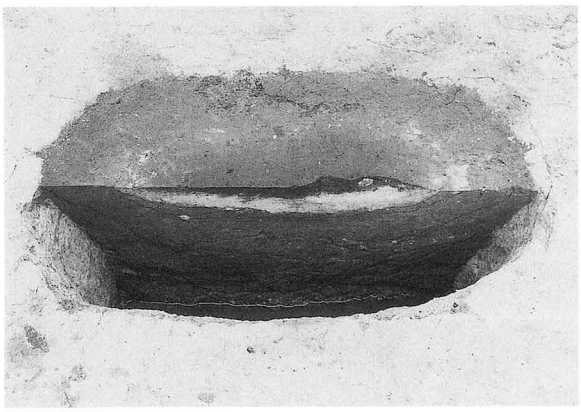
断　面



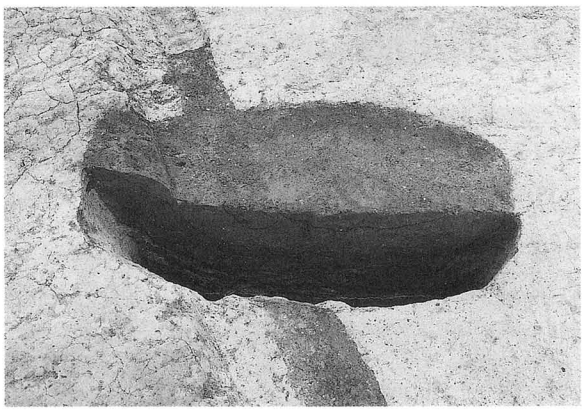
7号土坑（陥し穴）



8号土坑（陥し穴）

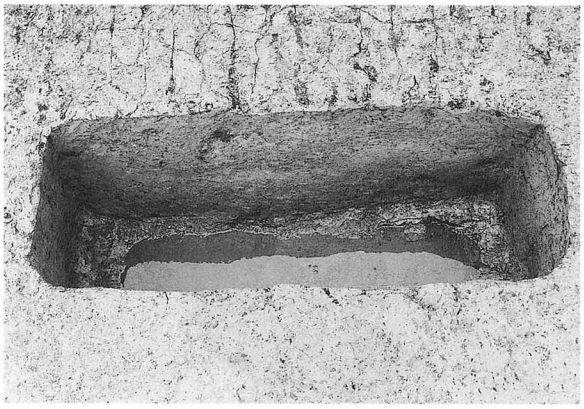


断　面

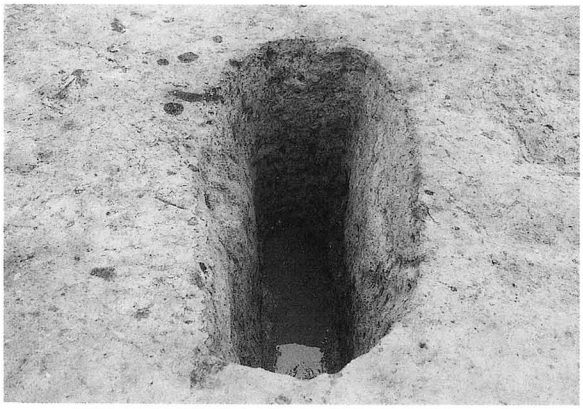


断　面

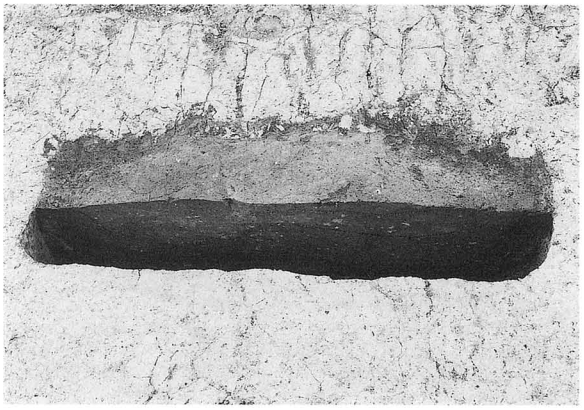
写真図版14　5～8号土坑



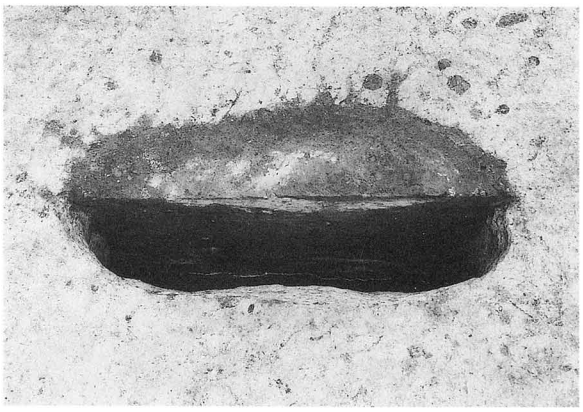
9号土坑



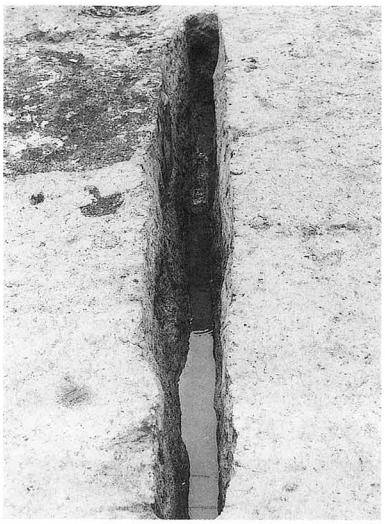
10号土坑（陥し穴）



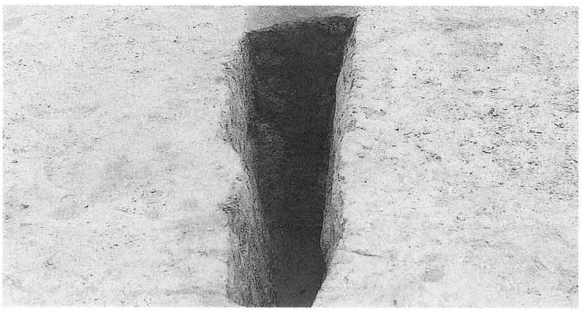
断　面



断　面

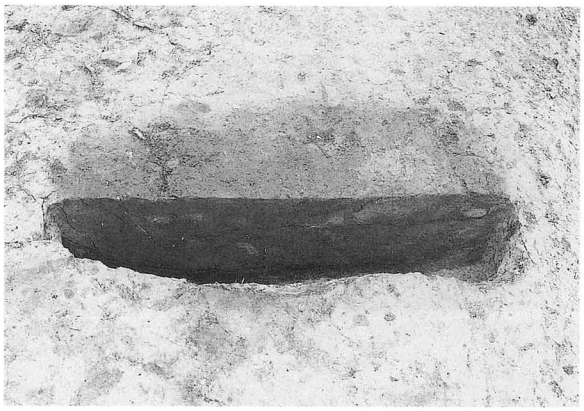


11号土坑（陥し穴）



断　面

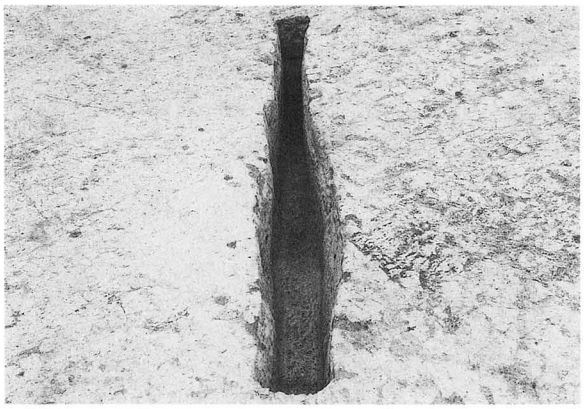
12号土坑



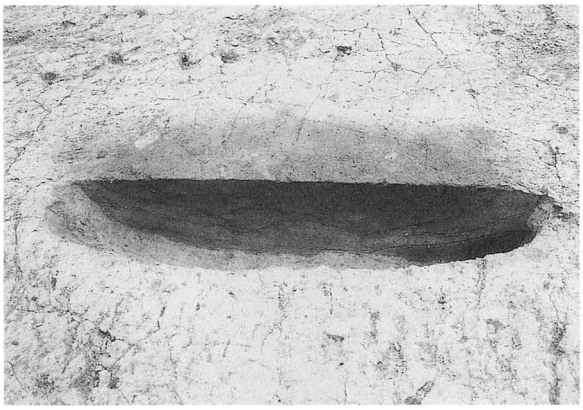
断　面

写真図版15　9～12号土坑

13号土坑

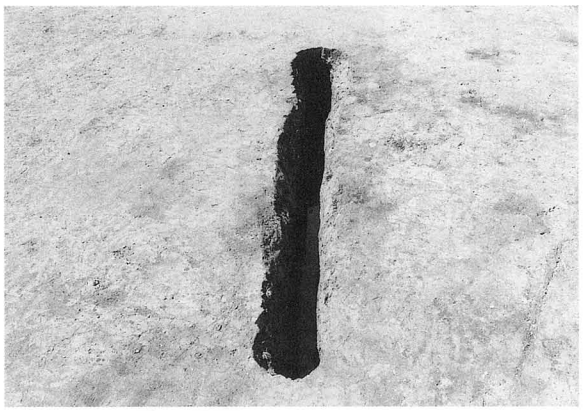


14号土坑（陥し穴）

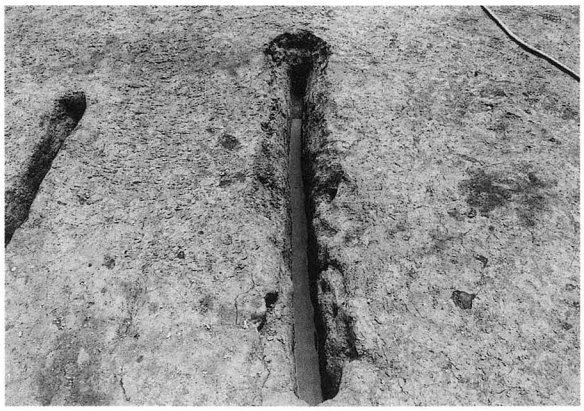


断　面

断　面



15号土坑（陥し穴）

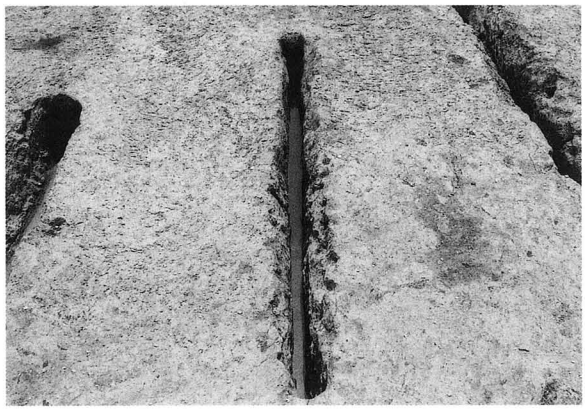


16号土坑（陥し穴）

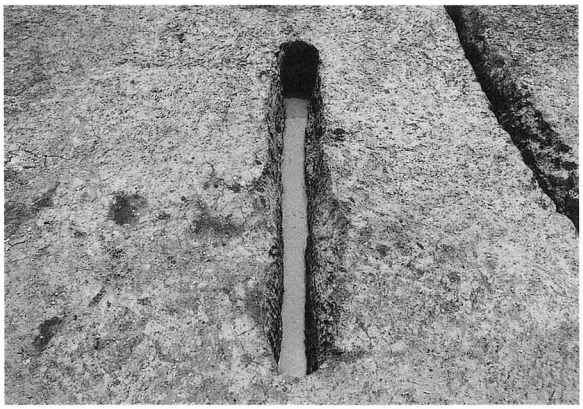
断　面

断　面

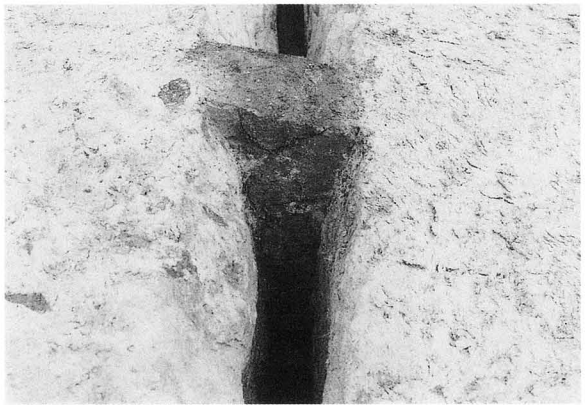
写真図版16　13～16号土坑



17号土坑（陥し穴）

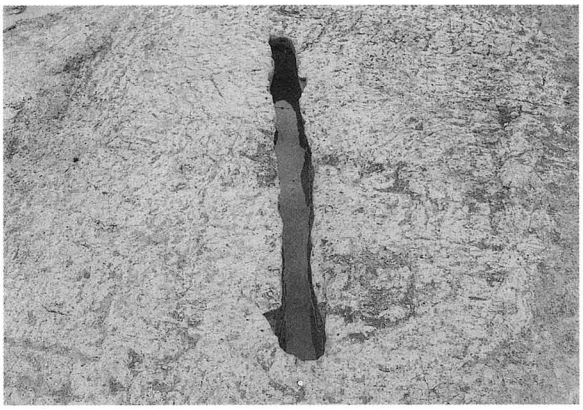


18号土坑（陥し穴）



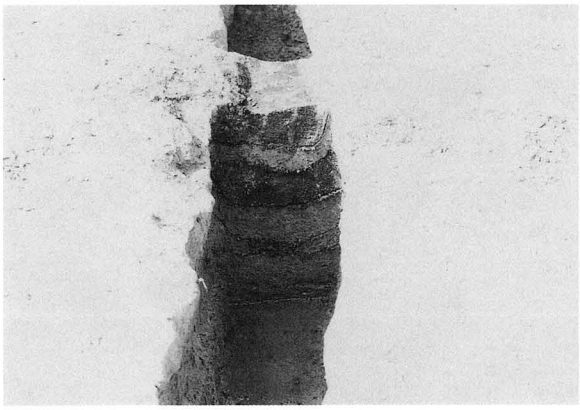
断　面

断　面



19号土坑（陥し穴）

20号土坑（陥し穴）

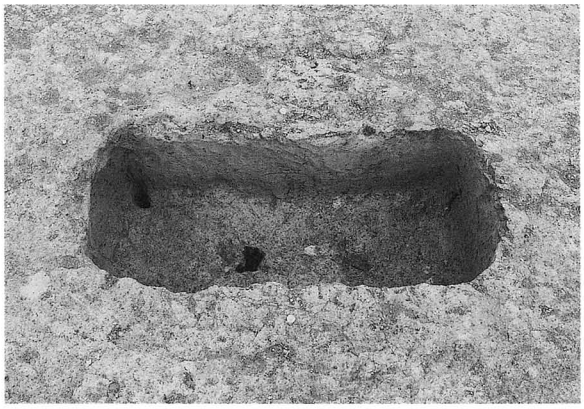


断　面

断　面

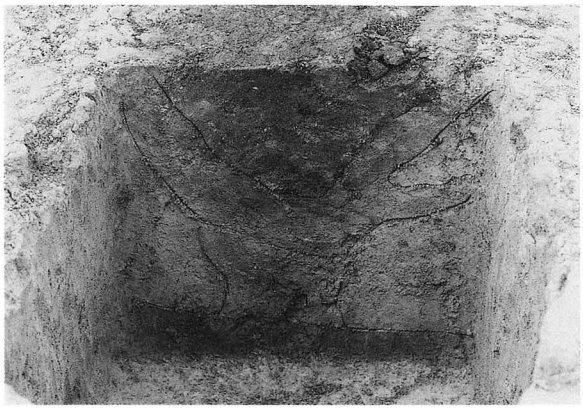
写真図版17　17～20号土坑

21号土坑（陥し穴）

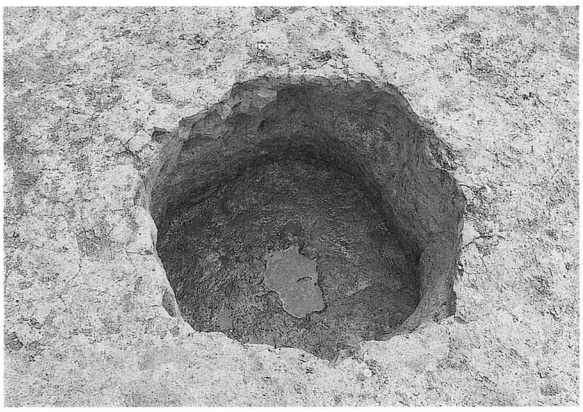


22号土坑（陥し穴）

断　　面



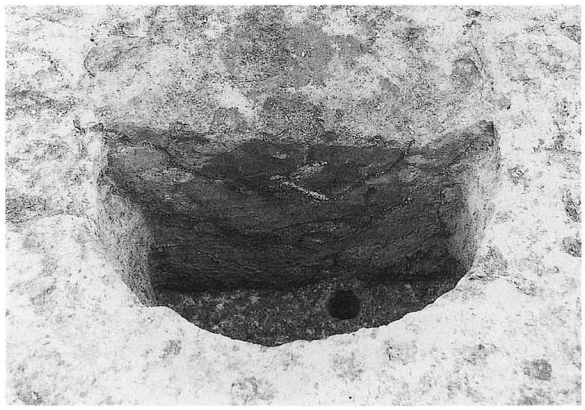
断　　面



23号土坑（陥し穴）

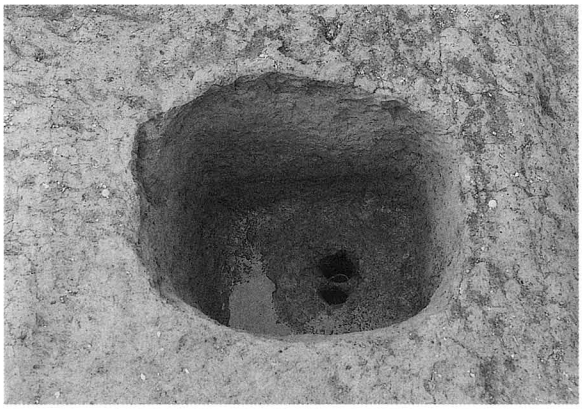
24号土坑（陥し穴）

断　　面



断　　面

写真図版18　21～24号土坑

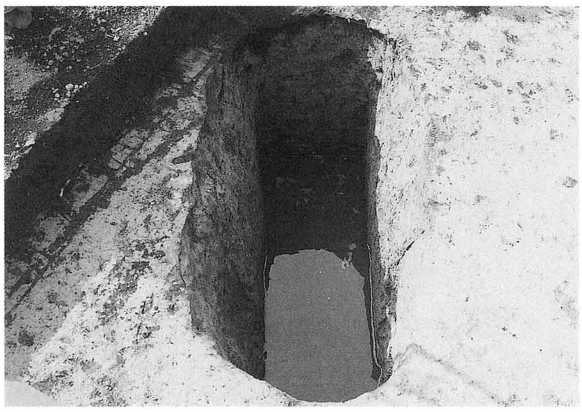


25号土坑（陥し穴）

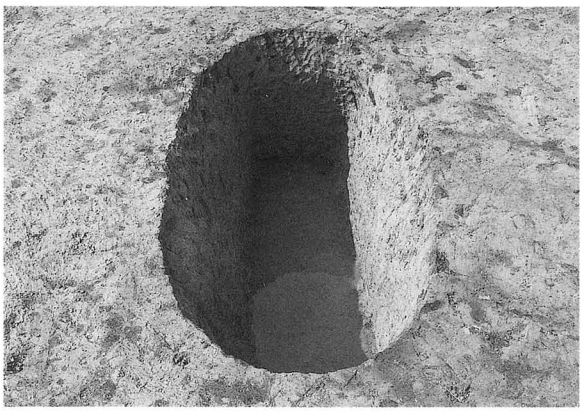
26号土坑（陥し穴）

断　面

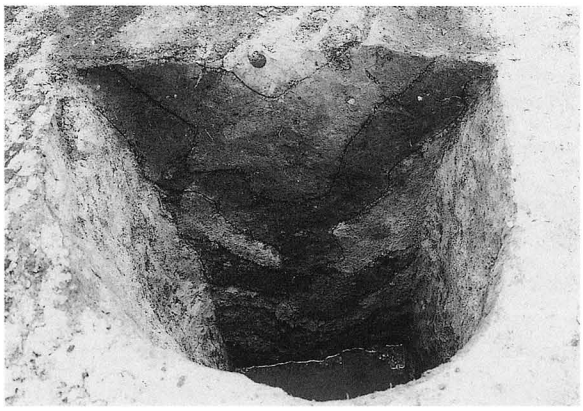
断　面



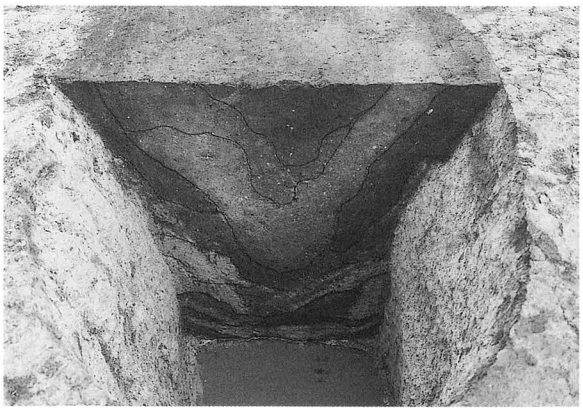
27号土坑（陥し穴）



28号土坑（陥し穴）

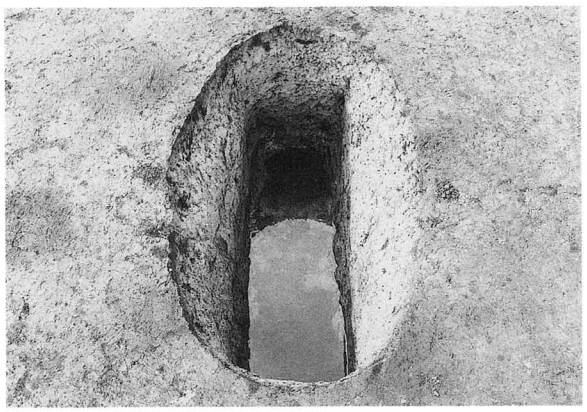


断　面

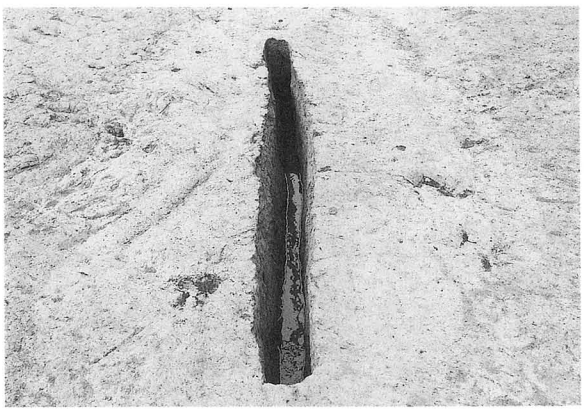


断　面

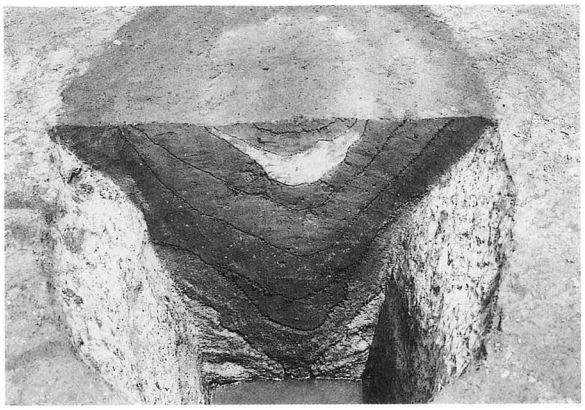
写真図版19　25～28号土坑



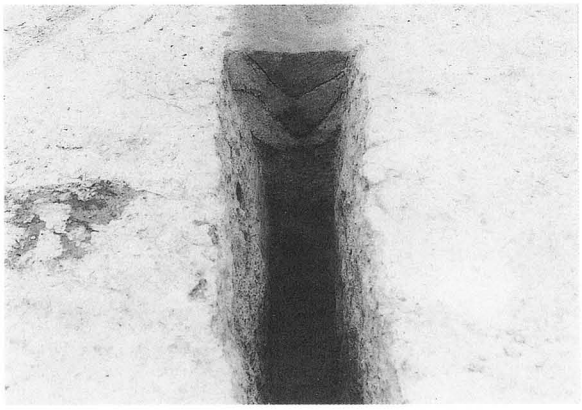
29号土坑（陷し穴）



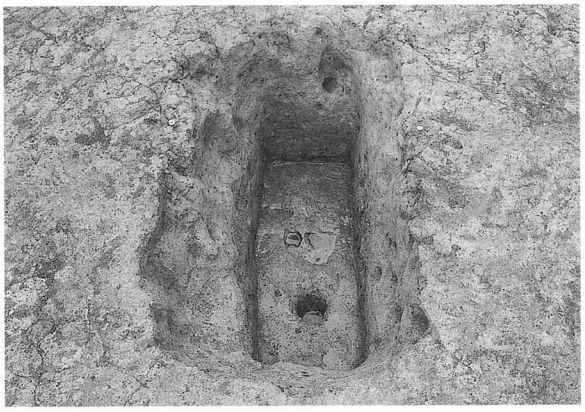
30号土坑（陷し穴）



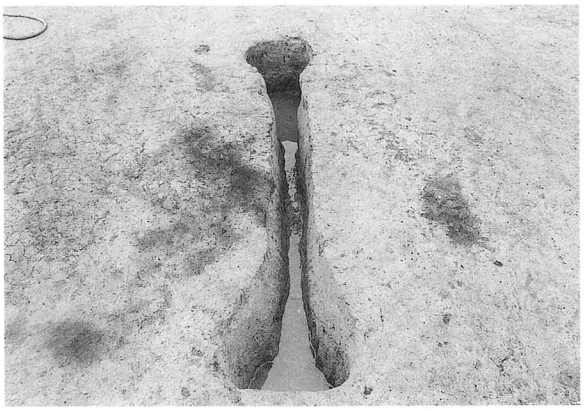
断　面



断　面

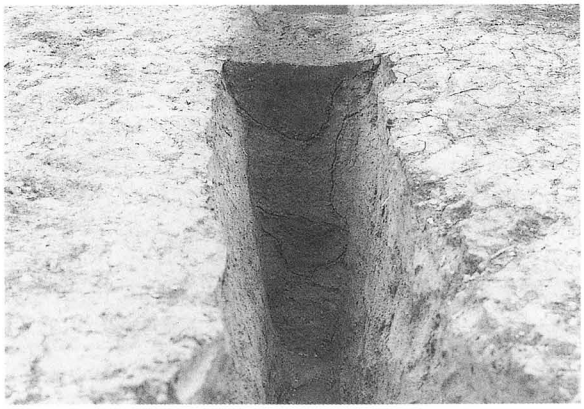


31号土坑（陷し穴）



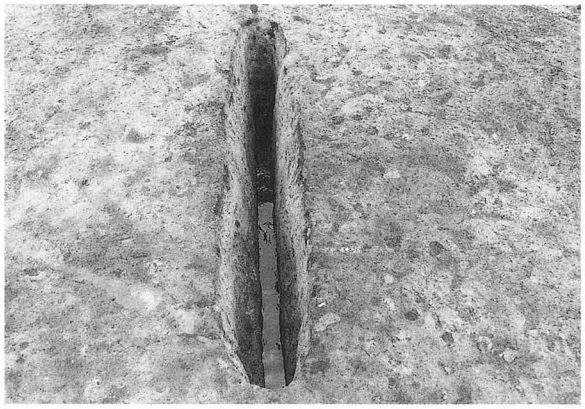
32号土坑（陷し穴）

断　面

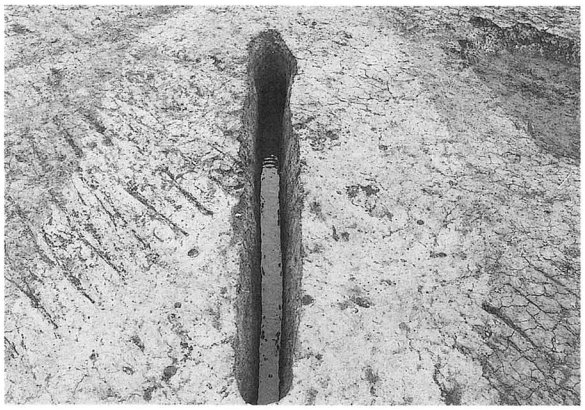


断　面

写真図版20　29～32号土坑

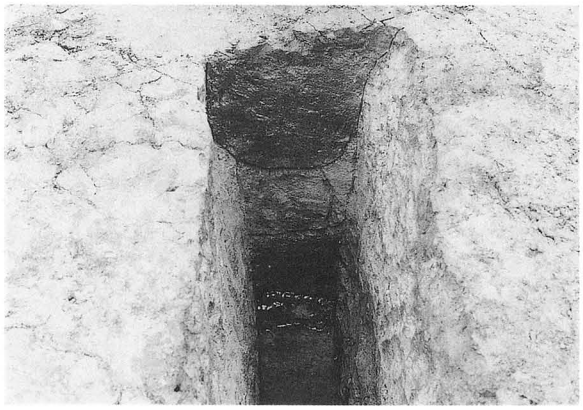


33号土坑（陥し穴）

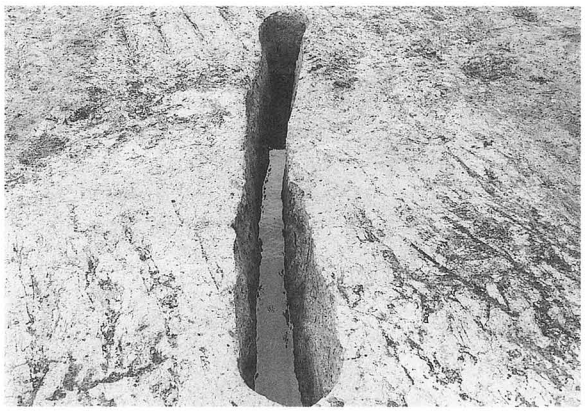


34号土坑（陥し穴）

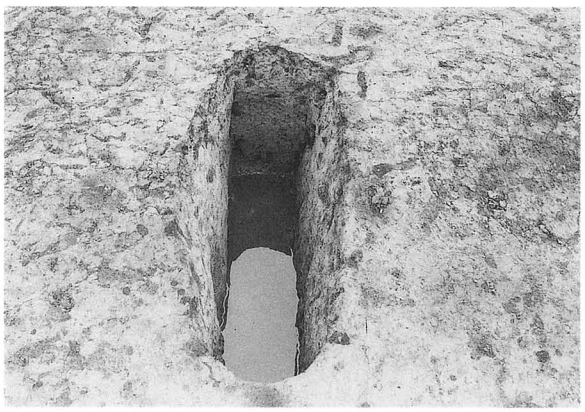
断　面



断　面



35号土坑（陥し穴）

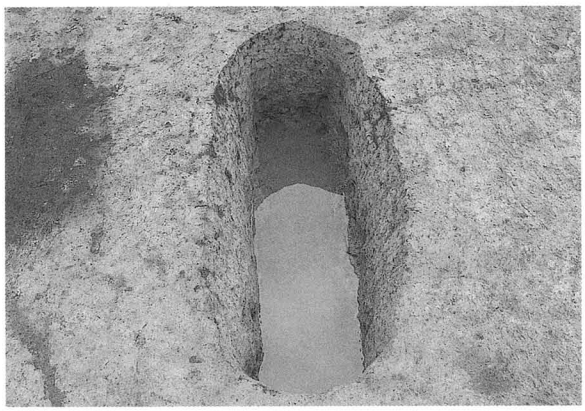


36号土坑（陥し穴）

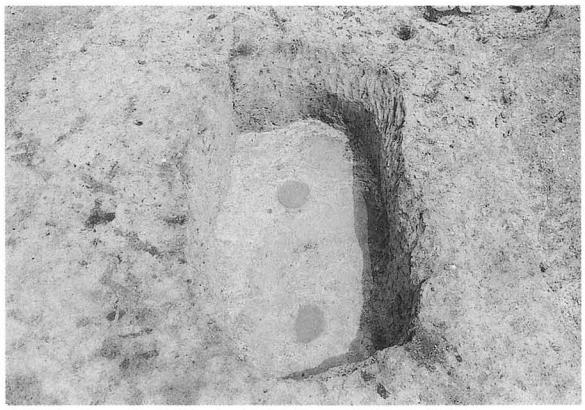
断　面

断　面

写真図版21　33～36号土坑

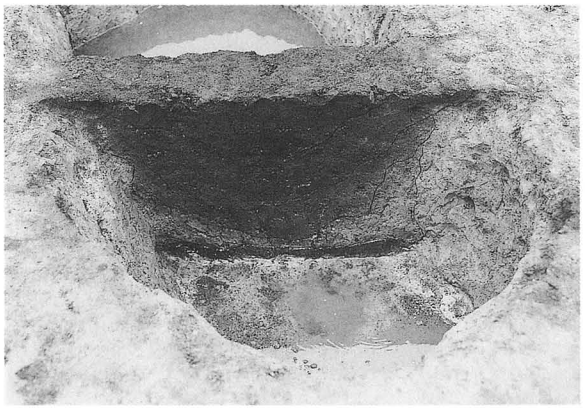


37号土坑（陥し穴）



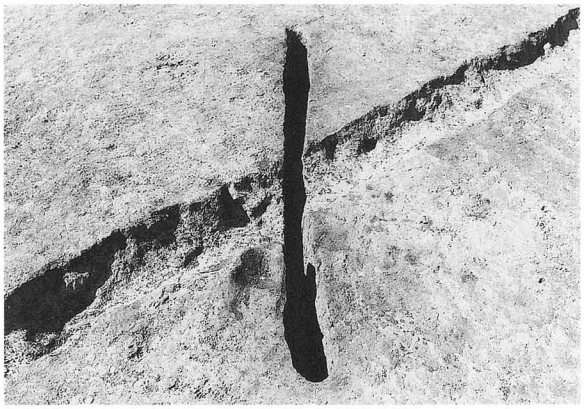
38号土坑（陥し穴）

断　面

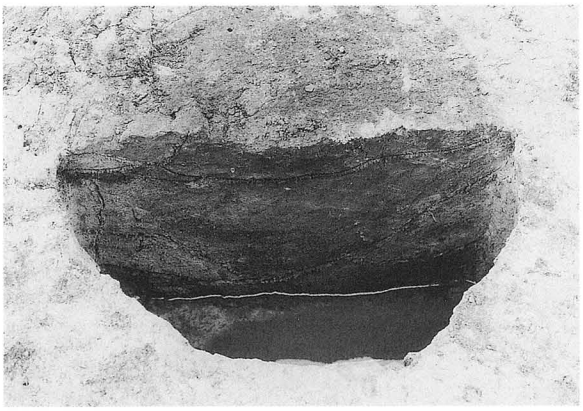


断　面

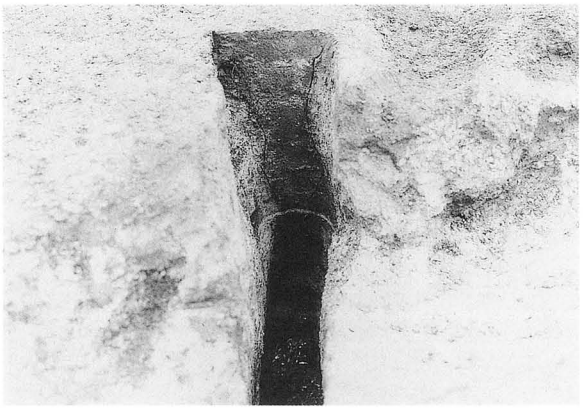
39号土坑（陥し穴）



40号土坑（陥し穴）

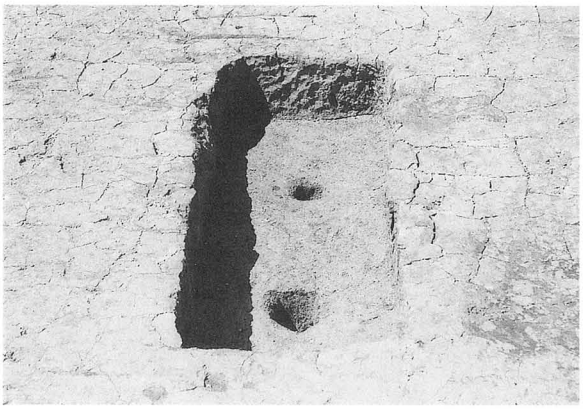


断　面



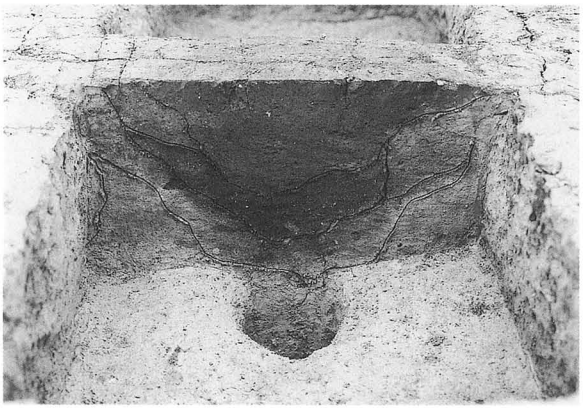
断　面

写真図版22　37～40号土坑

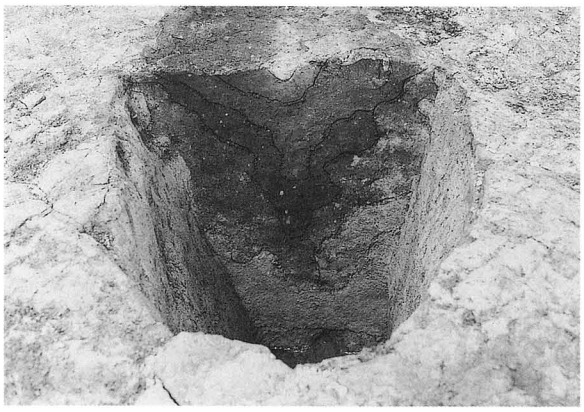


41号土坑（陥し穴）

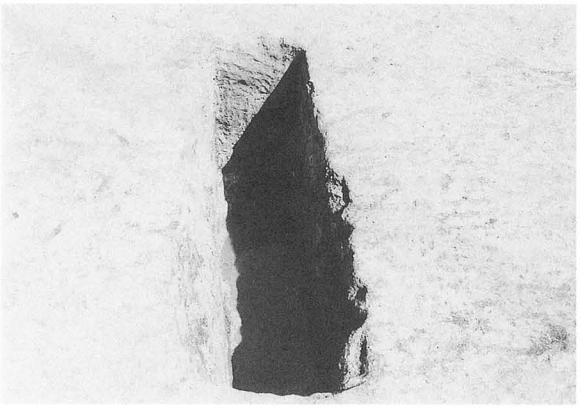
42号土坑（陥し穴）



断　面

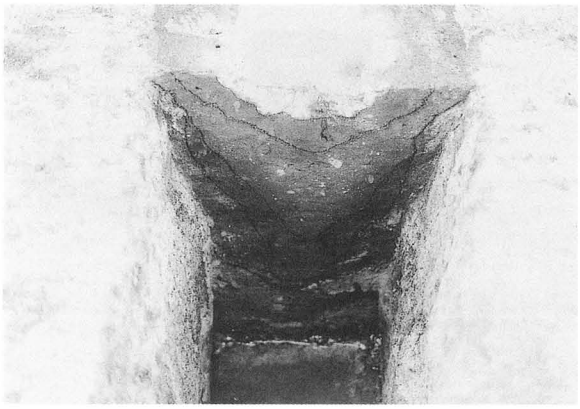


断　面

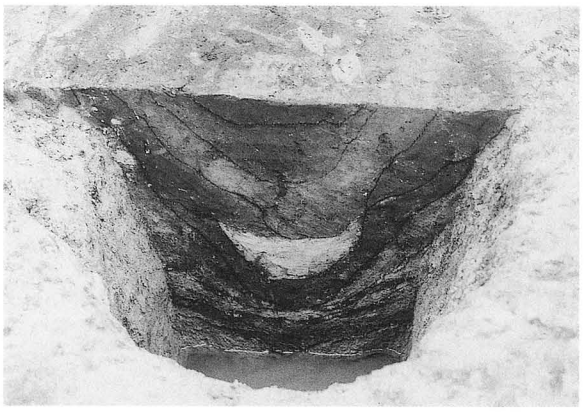


43号土坑（陥し穴）

44号土坑（陥し穴）

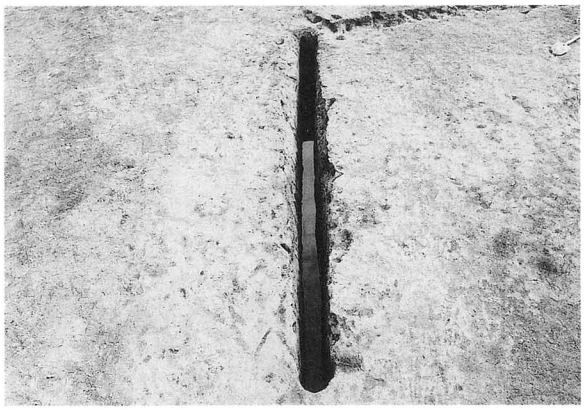


断　面

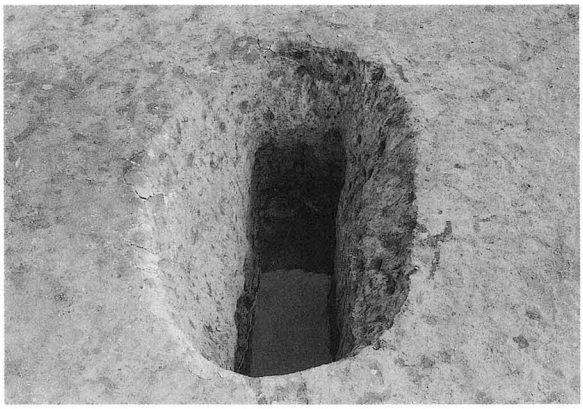


断　面

写真図版23　41～44号土坑

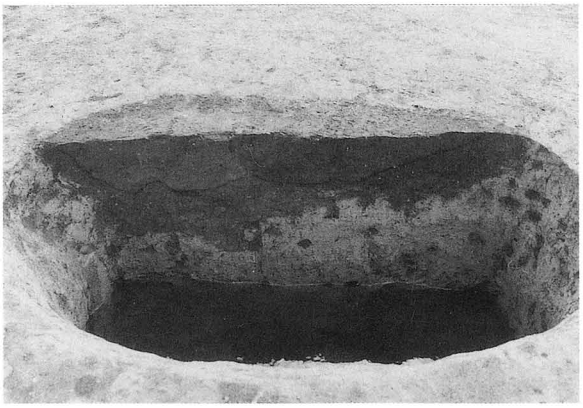


45号土坑（陥し穴）



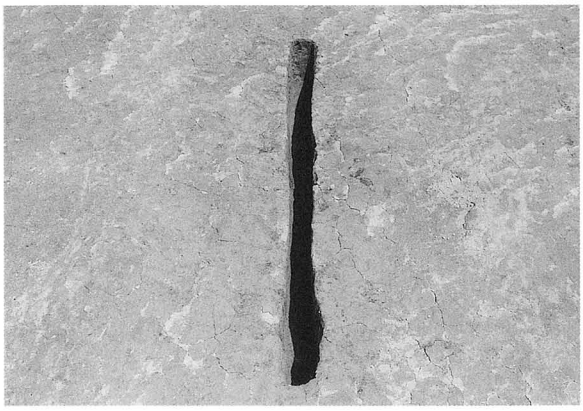
46号土坑（陥し穴）

断　面

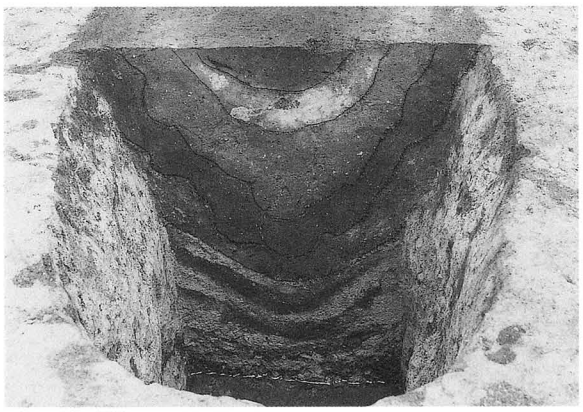


断　面

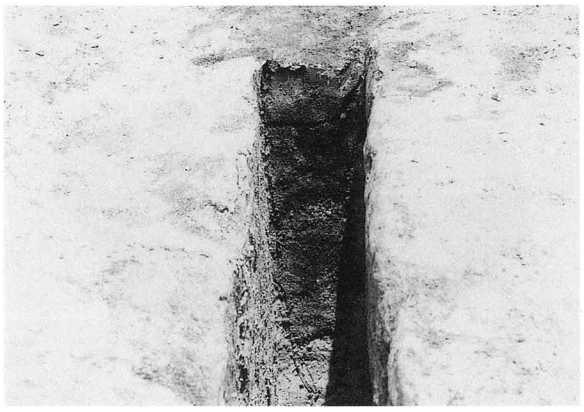
47号土坑（陥し穴）



48号土坑（陥し穴）

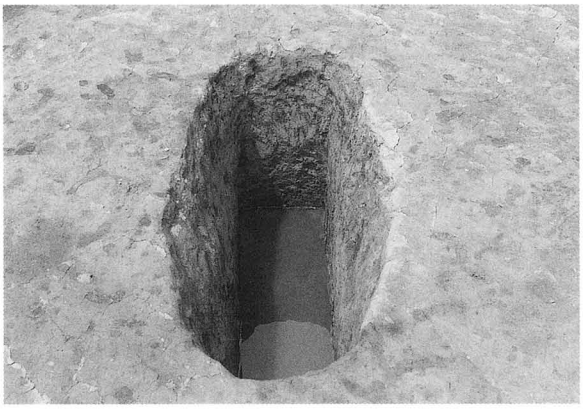


断　面

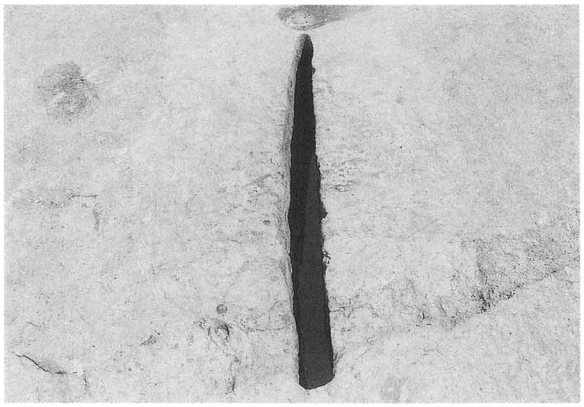


断　面

写真図版24　45～48号土坑

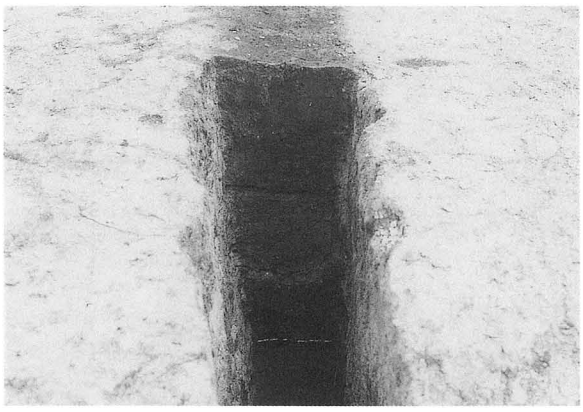


49号土坑（陥し穴）

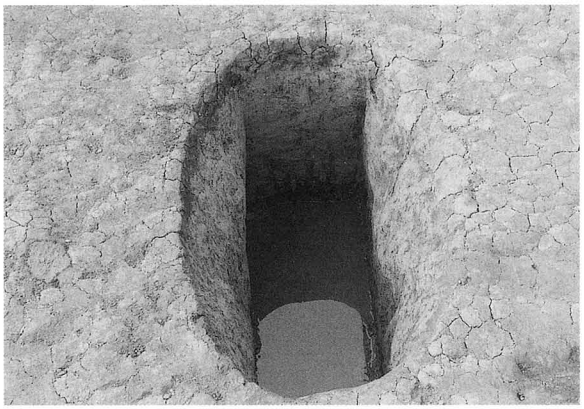


50号土坑（陥し穴）

断　面

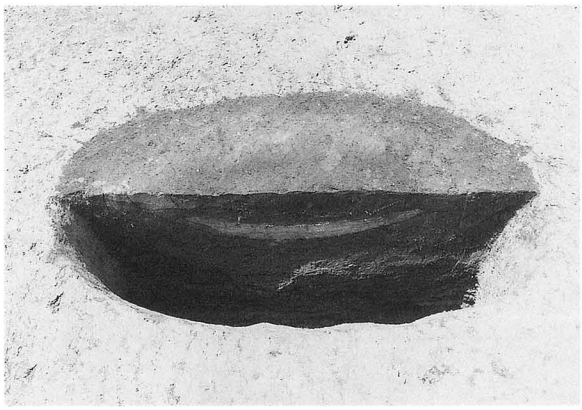


断　面

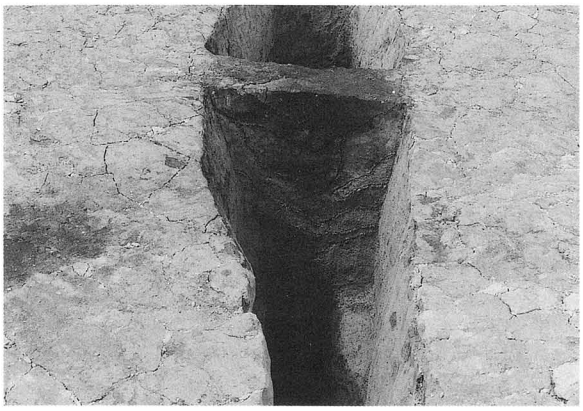


51号土坑（陥し穴）

52号土坑（陥し穴）

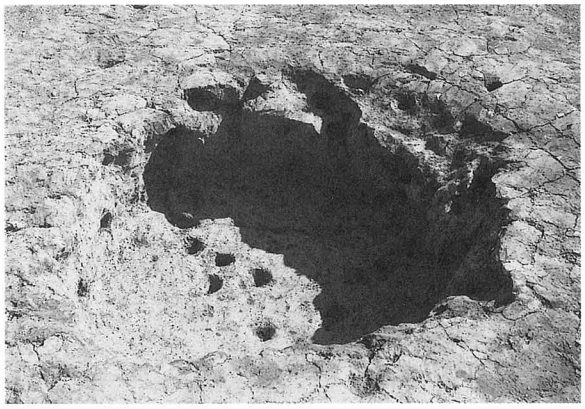


断　面



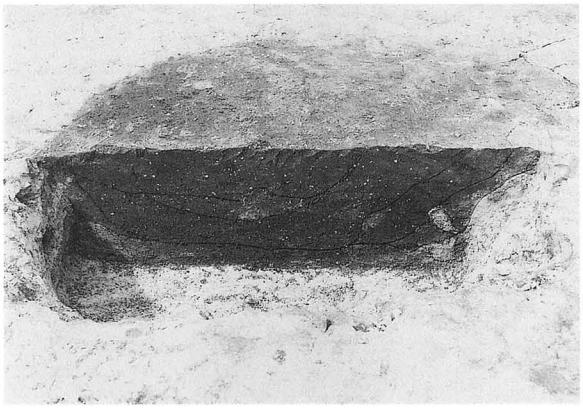
断　面

写真図版25　49～52号土坑

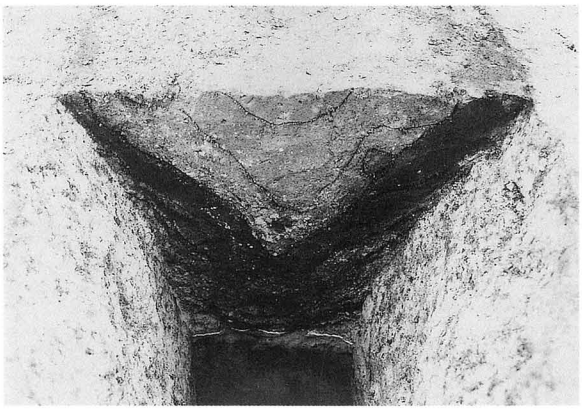


53号土坑

54号土坑（陥し穴）

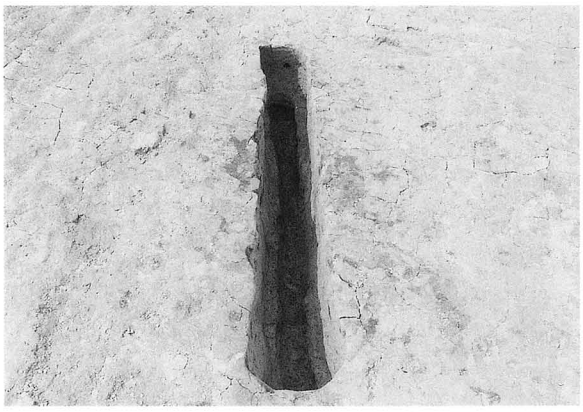


断　　面



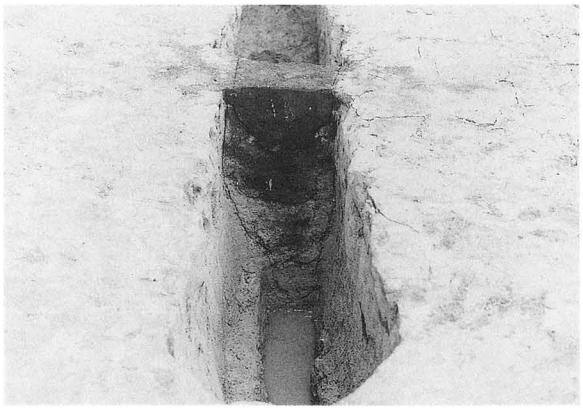
断　　面

55号土坑（陥し穴）



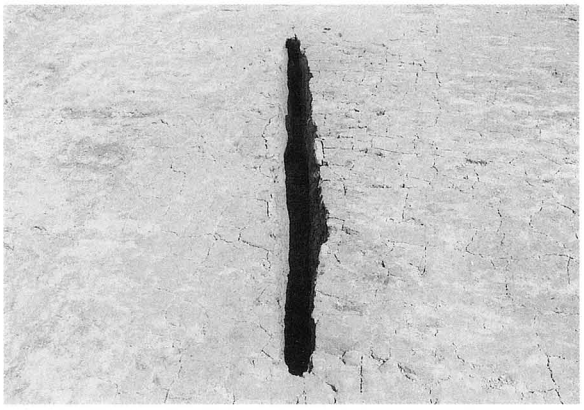
56号土坑（陥し穴）

断　　面

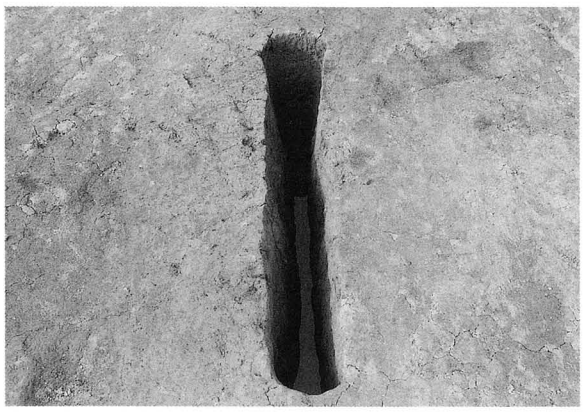


断　　面

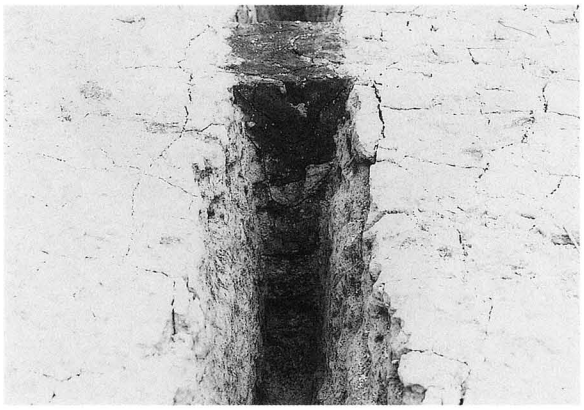
写真図版26　53～56号土坑



57号土坑（陥し穴）

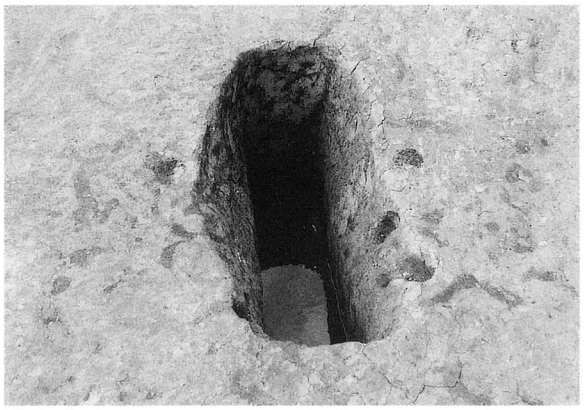


58号土坑（陥し穴）

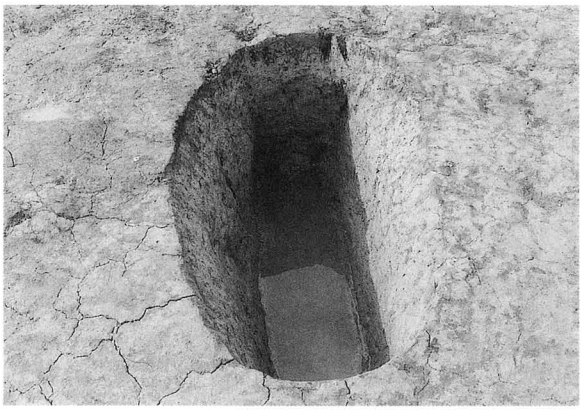


断　面

断　面

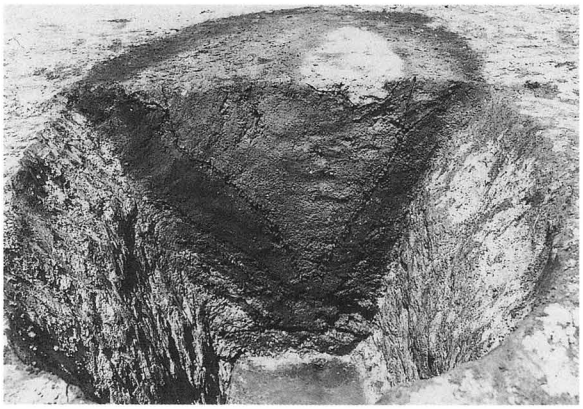


59号土坑（陥し穴）



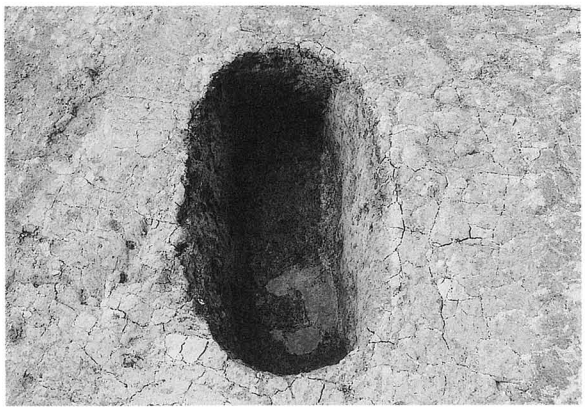
60号土坑（陥し穴）

断　面



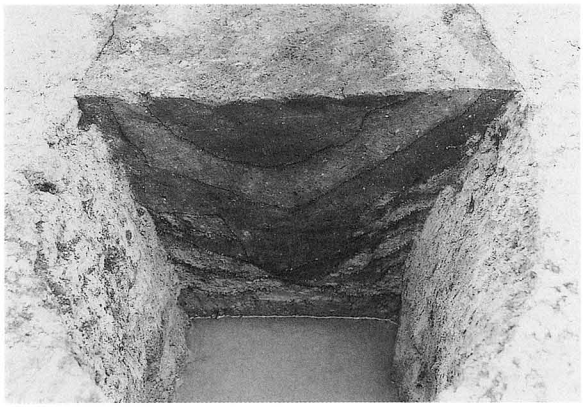
断　面

写真図版27　57～60号土坑

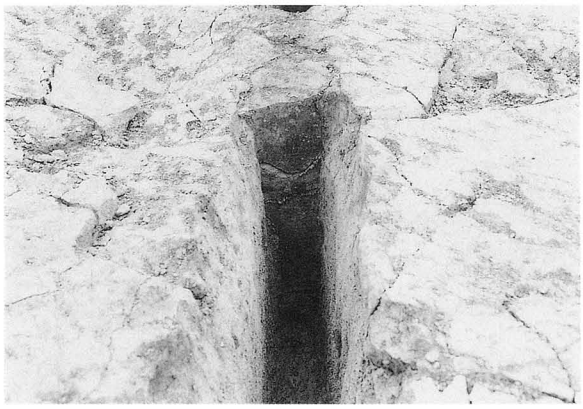


61号土坑（陥し穴）

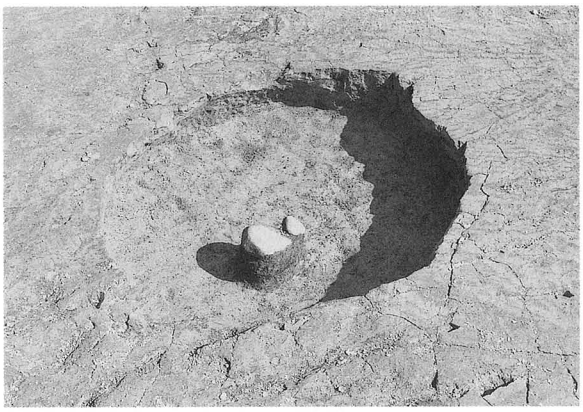
62号土坑（陥し穴）



断　面

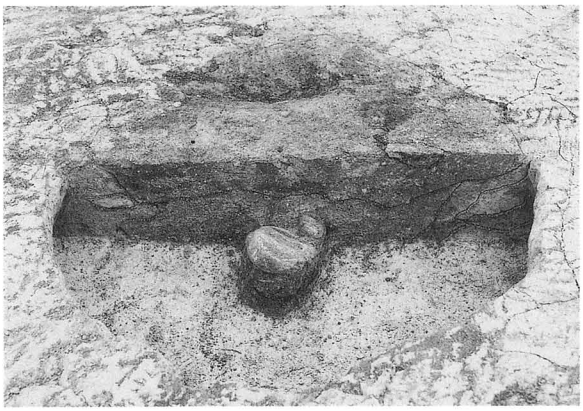


断　面

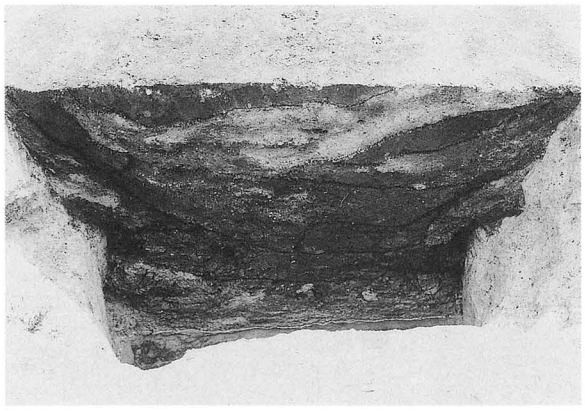


63号土坑

64号土坑

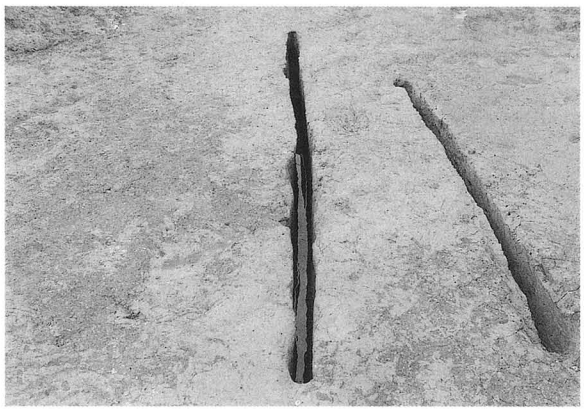


断　面



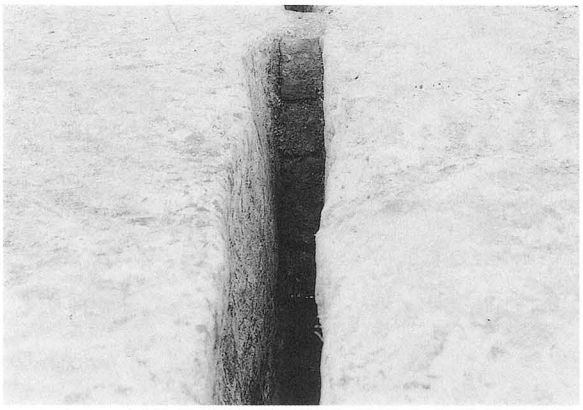
断　面

写真図版28　61～64号土坑

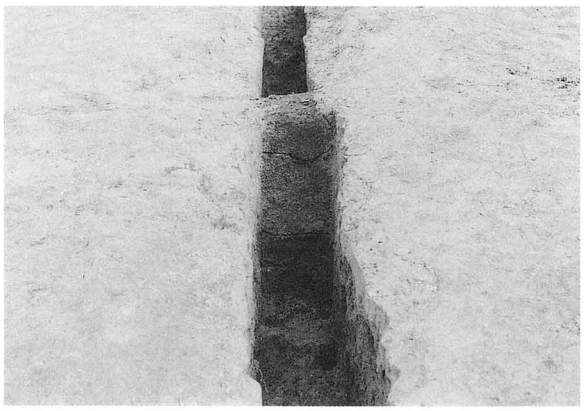


65号土坑（陥し穴）

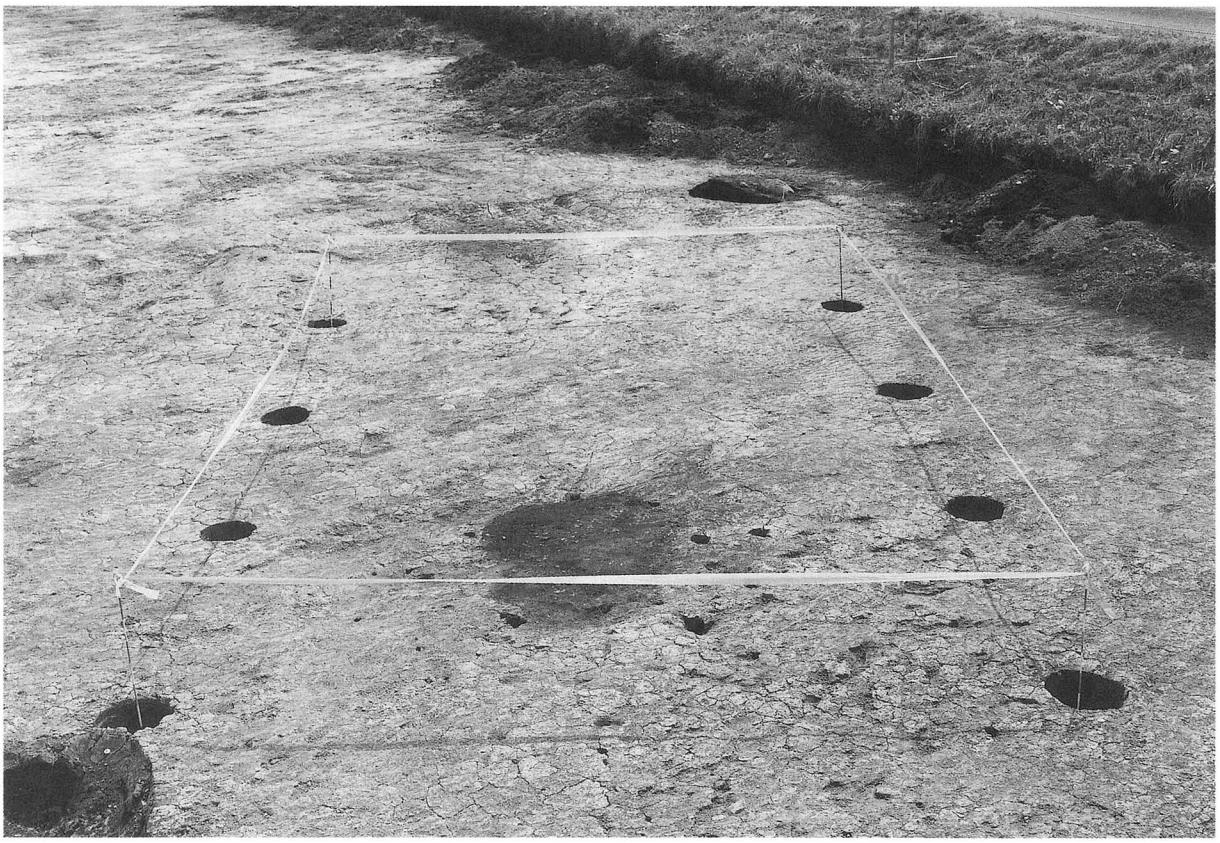
66号土坑（陥し穴）



断　面



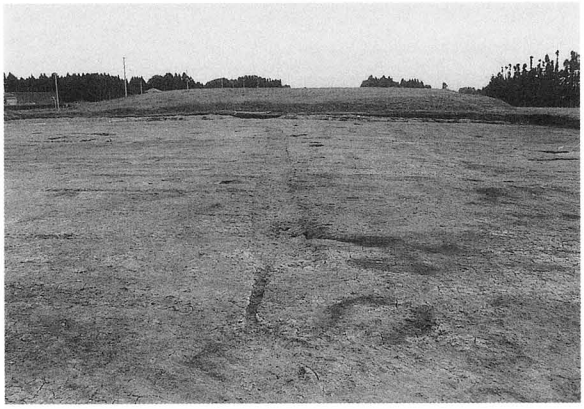
断　面



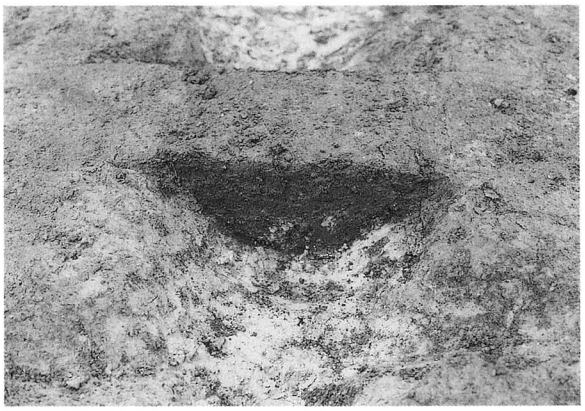
1号掘立柱建物跡

写真図版29　65・66号土坑・1号掘立柱建物跡

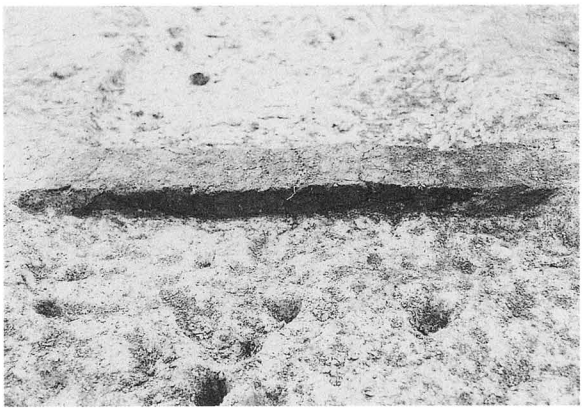
2号掘立柱建物跡



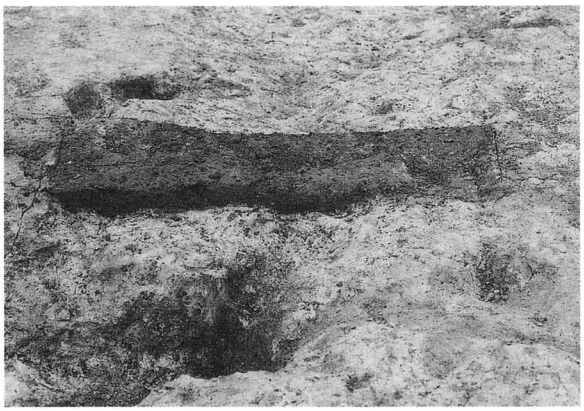
1号溝跡



断 面 ②



断 面 ①

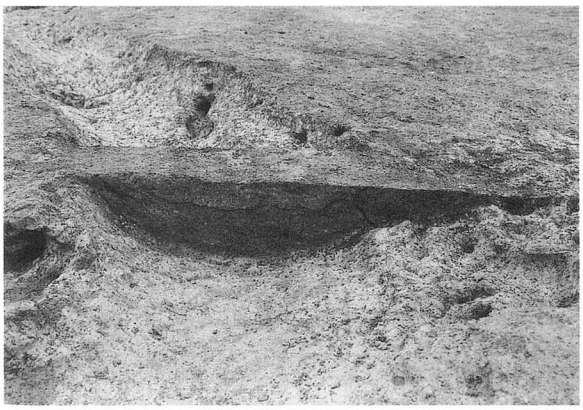


断 面 ③

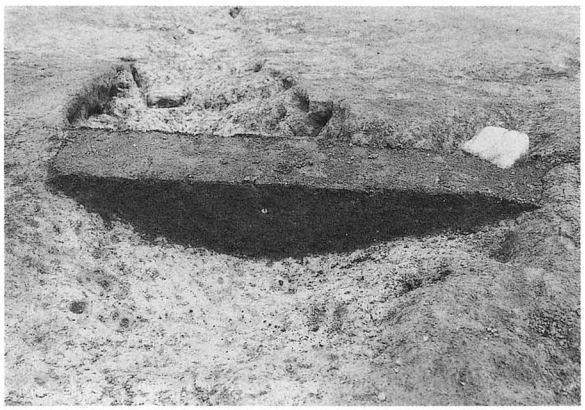
写真図版30　2号掘立柱建物跡・1号溝跡

2・3号溝跡

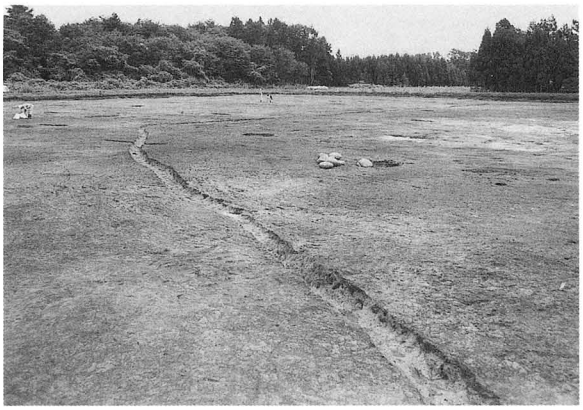
3号溝跡 砥石出土状況



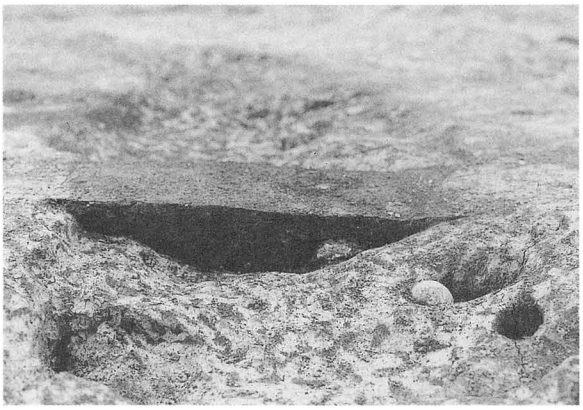
断 面 ①（重複部）



3号溝跡 断面



4号溝跡（南西から）



断 面 ①（西側）

4号溝跡（南から）

断 面 ②（東側）

写真図版31　2～4号溝跡

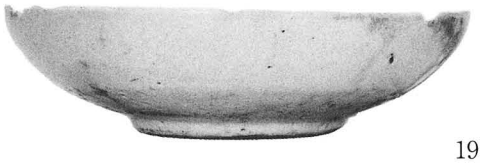
写真図版32　出土遺物(1)

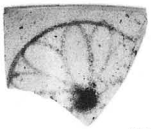
15

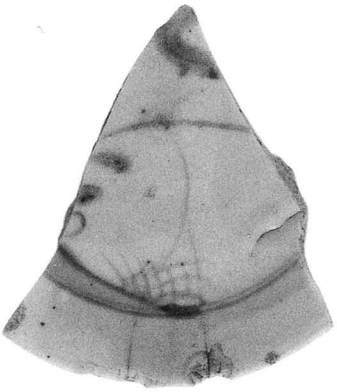
17

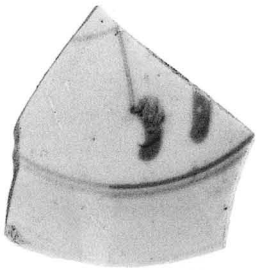
18

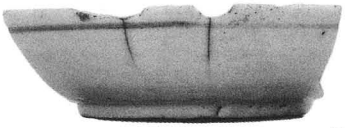
16

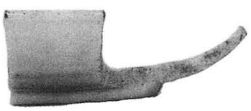

19

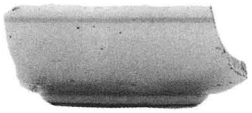

23






20


21


22

写真図版33　出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	やまのかみいせきみやざわはらしたいせきだいにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	山の神遺跡・宮沢原下遺跡第２次発掘調査報告書
副書名	国営いさわ南部農地整備事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第512集
編著者名	濱田　宏・吉田泰治・菊池昌彦
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL (019) 638－9001
発行年月日	2008年２月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
山の神遺跡	奥州市胆沢区 若柳字山の神	03215	NE24-2137	39度 06分 58秒	141度 01分 56秒	2006.04.07 ～ 2006.06.12	39,169㎡	国営いさわ南部農地整備事業関連遺跡発掘調査
宮沢原下遺跡 第２次調査	奥州市胆沢区 若柳字宮沢原	03215	NE23-2347	39度 06分 54秒	141度 00分 45秒	2006.05.24 ～ 2006.08.24	36,855㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山の神遺跡	散布地	縄文	陥し穴状遺構　21基 土坑　9基 焼土遺構　1基	縄文土器・石器	特になし
宮沢原下遺跡 第２次調査	散布地	縄文	陥し穴状遺構　62基 土坑　2基 溝跡　4条 掘立柱建物跡　2棟	縄文土器・石器 陶磁器（近世）	平安時代に属する陥し穴が23基確認された。うち１基の堆積土中からは、鉄製の紡錘車が出土した。

要約	いずれも陥し穴状遺構を主体とする遺跡である。宮沢原下遺跡では、縄文時代と平安時代の陥し穴が重複することなく分布する。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第512集

山の神遺跡・宮沢原下遺跡第２次
発掘調査報告書

国営いさわ南部農地整備事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成20年２月25日
発　行　平成20年２月29日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001
FAX（019）638－8563

印　刷　株式会社長内印刷
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ三丁目３－28
電話（019）643－5343

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008